松山市文化財調査報告書25

松山市道後城北遺跡群

祝谷アイリ遺跡

1992

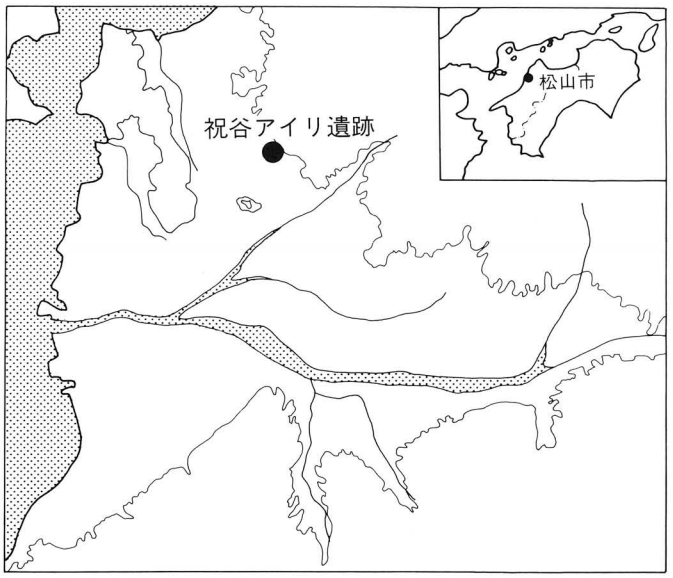
㈶松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

松山市文化財調査報告書25

松山市道後城北遺跡群

祝谷アイリ遺跡



1992

㈶松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

巻頭図版１　ＳＫ15出土遺物

序

この報告書は、医療法人聖愛会が病院建設するにともない、松山市教育委員会が委託を受け発掘調査を実施し、その結果をまとめたものです。

松山平野北東部の丘陵斜面に位置する本調査地「祝谷アイリ遺跡」は、県下でも弥生遺跡の密集する重要地域として知られるところにあります。道後城北遺跡群と称されるこの一帯には、文京遺跡、道後城北ＲＮＢ遺跡、松山大学構内遺跡などをはじめ、本調査地西方に近接する祝谷六丁目遺跡、また南西方には、平形銅剣が出土した祝谷六丁場遺跡が散在しています。

今回の調査では、丘陵地での弥生期の竪穴式住居址、古墳期の掘立柱建物跡などを確認しましたが、丘陵地での竪穴式住居址検出例は、松山平野では数少なく住居址立地を研究するうえで好資料となるものです。

最後に、医療法人聖愛会の埋蔵文化財に対するご理解と、ご協力を賜り、また、調査及び出土物分析等についてご指導いただいた諸先生方に対し厚くお礼申し上げる次第であります。

本報告書が、学術・教育文化の向上、文化財保護、さらには今後の調査研究の一助になれば幸甚です。

平成４年３月31日

財団法人　松山市生涯学習振興財団
理事長　田　中　誠　一

例　言

1．本書は、松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センターが平成二年11月～三年３月に松山市祝谷６丁目1277番地他で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．遺構の実測は、梅木謙一の責任のもと、武正良浩が中心に行い、愛媛大学の学生他の援助を受けた。遺構の撮影は、梅木謙一、武正良浩、大西朋子が行った。

3．遺構は、呼称を略号で記述した。竪穴式住居址：ＳＢ、溝：ＳＤ、土壙：ＳＫ、掘立柱建物：掘立、柱穴：ＳＰ、性格不明遺構：ＳＸである。

4．遺物の実測・製図、遺構の製図は、梅木謙一、宮内慎一、武正良浩を中心に、高橋恒、水口あをい、山之内志郎、白石聖子、瀬戸恭子、藤井宏枝、森田晶子、山下満佐子、好光明日香、兵頭千恵、松山桂子、三木和代、大西陽子、野口幸恵、加島次郎が行った。

5．写真図版は、調査担当者の指示のもと、遺物の撮影、図版作成を大西朋子が行った。

6．遺構図、遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

7．本書に使用した方位はすべて磁北である。

8．本書にかかわる遺物・記録物は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

9．自然科学的分析は、杉山真二氏(古環境研究所)、本田光子(福岡市埋蔵文化財センター)に協力を頂き、また寄稿して頂いた。記して感謝申し上げます。

10．本書の執筆は、田城武志、梅木謙一、武正良浩が事実報告を行い、考察では宮内慎一・山之内志郎、多田仁に寄稿していただいた。

11．浄書は、梅木謙一の責任のもと、武正良浩、高橋恒が行った。

12．本書の編集は梅木謙一が行い、校正においては田城武志、宮内慎一、武正良浩、水口あをい、高橋恒の協力を得た。

本 文 目 次

I　調査に至る経緯

1　経　緯 …… (梅木謙一) …… 1

2　組　織 …… (田城武志) …… 2

II　遺跡の概要

1　遺跡の立地 …… (山之内志郎) …… 4

2　歴史的環境 …… (山之内志郎) …… 5

III　調査の概要

1　調査の経緯 …… (梅木謙一) …… 9

2　層　位 …… (梅木謙一・武正良浩) ……10

3　遺構と遺物 …… (梅木謙一・武正良浩) ……16

〔1〕竪穴式住居址

1）弥生時代

2）古墳時代

〔2〕掘立柱建物址

〔3〕土壙

〔4〕溝

〔5〕その他の遺構と遺物

〔6〕分銅形土製品

4　小　結 …… (梅木謙一) ……78

IV　自然科学分析

1　珪酸体分析 …… (杉山真二) ……83

2　樹種同定 …… (杉山真二) ……101

3　種子分析 …… (杉山真二) ……105

4　分銅形土製品付着赤色顔料分析 …… (本田光子) ……106

V　考　察

1　松山平野の石器文化 …… (多田　仁) ……108

2　道後城北地域出土の分銅形土製品 …… (山之内志郎) ……127

3　道後城北遺跡群の須恵器 …… (宮内慎一・山之内志郎) …137

VI　祝谷アイリ遺跡の調査成果と課題 …… (梅木謙一) ……153

挿図目次

第１図　祝谷アイリ出土品（縮尺１／６）…… 1
第２図　祝谷地区の地質図…… 4
第３図　松山平野の主要遺跡分布図（縮尺１／50,000）…… 7
第４図　祝谷地区の主要遺跡分布図（縮尺１／25,000）…… 8
第５図　調査地位置図（縮尺１／1,600）…… 9
第６図　南壁土層図（縮尺１／60）……11
第７図　西壁土層図（縮尺１／60）……13
第８図　遺構配置図（縮尺１／300）……15
第９図　ＳＢ５測量図（縮尺１／80）……17
第10図　ＳＢ５出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）……19
第11図　ＳＢ５出土遺物実測図 (2)（縮尺２／３・１／４）……20
第12図　ＳＢ２測量図（縮尺１／80）……23
第13図　ＳＢ２出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４・１／３）……25
第14図　ＳＢ２出土遺物実測図 (2)（縮尺２／３）……26
第15図　ＳＢ１・７測量図（縮尺１／80）……28
第16図　ＳＢ１カマド測量図（縮尺１／20）……29
第17図　ＳＢ１・７出土遺物実測図（縮尺１／４・２／３）……30
第18図　ＳＢ３測量図（縮尺１／80）……31
第19図　ＳＢ３カマド測量図（縮尺１／20）……32
第20図　ＳＢ３出土遺物実測図（縮尺１／４）……33
第21図　ＳＢ01測量図（縮尺１／80）……34
第22図　ＳＫ15測量図（縮尺１／40）……37
第23図　ＳＫ15最下部出土遺物実測図（縮尺１／４）……39
第24図　ＳＫ15最下部他出土遺物実測図（縮尺１／４）……40
第25図　ＳＫ15Ⅲ層出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）……41
第26図　ＳＫ15Ⅲ層出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）……42
第27図　ＳＫ15Ⅲ層出土遺物実測図 (3)（縮尺１／４）……43
第28図　ＳＫ15Ⅲ層出土遺物実測図 (4)（縮尺１／４）……45
第29図　ＳＫ15Ⅲ層出土遺物実測図 (5)（縮尺１／４）……46
第30図　ＳＫ15Ⅲ層出土遺物実測図 (6)（縮尺１／４）……47
第31図　ＳＫ15Ⅲ層出土遺物実測図 (7)（縮尺２／３）……48

第32図　ＳＫ15Ⅱ層出土遺物実測図 (1)　(縮尺１／４) ……50
第33図　ＳＫ15Ⅱ層出土遺物実測図 (2)　(縮尺１／４) ……51
第34図　ＳＫ15Ⅱ層出土遺物実測図 (3)　(縮尺１／４) ……52
第35図　ＳＫ４測量図（縮尺１／20）……54
第36図　ＳＸ010測量図（縮尺１／80）……55
第37図　ＳＫ４出土遺物実測図（縮尺１／４）……56
第38図　ＳＸ010出土遺物実測図（縮尺１／４）……57
第39図　ＳＸ010・ＳＫ４関連出土遺物実測図（縮尺１／４）……58
第40図　ＳＸ010出土遺物実測図（縮尺２／３）……59
第41図　ＳＫ13出土遺物実測図（縮尺１／４・２／３）……61
第42図　ＳＫ１・３・６出土遺物実測図（縮尺１／４）……62
第43図　ＳＸ07出土遺物実測図 (1)　(縮尺１／４) ……64
第44図　ＳＸ07出土遺物実測図 (2)　(縮尺２／３) ……65
第45図　ＳＸ08出土遺物実測図（縮尺１／４）……66
第46図　ＳＸ09出土遺物実測図 (1)　(縮尺１／４) ……67
第47図　ＳＸ09出土遺物実測図 (2)　(縮尺２／３) ……68
第48図　第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・ⅥＡ層出土遺物実測図（縮尺１／４）……69
第49図　第Ⅳ層出土遺物実測図（縮尺２／３）……70
第50図　第Ⅵ層出土遺物実測図（縮尺１／４・２／３）……71
第51図　第Ⅶ層出土遺物実測図（縮尺１／４）……72
第52図　表採及び層不明出土遺物実測図 (1)　(縮尺１／４) ……73
第53図　表採及び層不明出土遺物実測図 (2)　(縮尺１／４) ……74
第54図　表採及び層不明出土遺物実測図 (3)　(縮尺２／３) ……75
第55図　祝谷アイリ遺跡出土の分銅形土製品（縮尺１／２）……77
第56図　祝谷アイリ遺跡の集落動態図（縮尺１／600）……81
第57図　プラント・オパールの顕微鏡写真 (1) ……93
第58図　プラント・オパールの顕微鏡写真 (2) ……94
第59図　プラント・オパールの顕微鏡写真 (3) ……95
第60図　プラント・オパールの顕微鏡写真 (4) ……96
第61図　プラント・オパールの顕微鏡写真 (5) ……97
第62図　プラント・オパールの顕微鏡写真 (6) ……98
第63図　プラント・オパールの顕微鏡写真 (7) ……99
第64図　プラント・オパールの顕微鏡写真 (8) ……100
第65図　祝谷アイリ遺跡出土材の電子顕微鏡写真 ……103

第66図　釜ノ口遺跡（７次）出土材の電子顕微鏡写真 ……104
第67図　祝谷アイリ遺跡・釜ノ口遺跡（７次）出土の種子（縮尺１／２・１／１） ……105
第68図　赤色顔料の透過影像（約500倍）……106
第69図　松山平野における主要石器出土分布図（縮尺１／180,000）……109
第70図　祝谷丸山遺跡出土石器実測図（縮尺１／１） ……111
第71図　経石山古墳出土石器実測図（縮尺１／１・１／２） ……116
第72図　久米高畑遺跡５次調査出土石器実測図 (1)（縮尺１／１） ……119
第73図　久米高畑遺跡５次調査出土石器実測図 (2)（縮尺１／１） ……121
第74図　久米高畑遺跡５次調査出土石器実測図 (3)（縮尺１／２） ……122
第75図　祝谷丸山、経石山古墳出土石器 ……125
第76図　久米高畑遺跡５次調査出土石器 ……126
第77図　道後城北遺跡群出土の分銅形土製品分布図（縮尺１／25,000） ……128
第78図　道後城北遺跡群出土の分銅形土製品実測図 (1)（縮尺１／４） ……130
第79図　道後城北遺跡群出土の分銅形土製品実測図 (2)（縮尺１／４） ……131
第80図　道後城北遺跡の須恵器Ⅰ期 (1)（縮尺１／３） ……138
第81図　道後城北遺跡の須恵器Ⅰ期 (2)（縮尺１／３） ……139
第82図　道後城北遺跡の須恵器Ⅱ期前半 (1)（縮尺１／３） ……140
第83図　道後城北遺跡の須恵器Ⅱ期前半 (2)（縮尺１／３） ……141
第84図　道後城北遺跡の須恵器Ⅱ期後半 (1)（縮尺１／３） ……142
第85図　道後城北遺跡の須恵器Ⅱ期後半 (2)（縮尺１／３） ……143
第86図　道後城北遺跡の須恵器Ⅲ期（縮尺１／３） ……144
第87図　道後城北遺跡の須恵器Ⅳ期（縮尺１／３） ……145
第88図　道後城北地区の主要遺跡の分布図 ……148
第89図　道後城北遺跡の遺構・遺物分布図 ……149
第90図　道後城北遺跡群の須恵器（試案） ……151

図版目次

巻頭図版　1　ＳＫ15出土遺物

図版１．1　祝谷アイリ遺跡遠景（西より）

　　2　祝谷アイリ遺跡近景（西より）

図版２．1　南壁土層（北より）

　　2　西壁土層（北東より）

図版３．1　遺構検出状況〔全景〕（南東より）

　　2　遺構検出状況〔北部〕（南より）

図版４．1　完掘状況〔北部〕（南より）

　　2　完掘状況〔北西部〕（南東より）

図版５．1　ＳＢ５断面（南より）

　　2　ＳＢ５（南より）

図版６．1　ＳＢ２①（南より）

　　2　ＳＢ２②（南東より）

図版７．1　ＳＢ２炭化材検出状況（北西より）

　　2　ＳＢ２炭化材検出状況（南東より）

図版８．1　ＳＢ１（南より）

　　2　ＳＢ１カマド内遺物出土状況〔遠景〕（南より）

図版９．1　ＳＢ１カマド内遺物出土状況〔近景〕（南より）

　　2　ＳＢ１カマド（南より）

図版10．1　ＳＢ３①（南東より）

　　2　ＳＢ３②（北西より）

図版11．1　ＳＫ15礫群検出状況（北東より）

　　2　ＳＫ15断面（東より）

図版12．1　ＳＫ15遺物出土状況①（東より）

　　2　ＳＫ15遺物出土状況②（東より）

図版13．1　ＳＫ15遺物出土状況③（東より）

　　2　ＳＫ15（東より）

図版14．1　ＳＫ４〔左下〕　ＳＸ010〔下〕　ＳＢ４〔上〕（南東より）

　　2　ＳＫ４遺物出土状況（東より）

図版15．1　ＳＫ13遺物出土状況（北より）

　　2　ＳＫ13（南より）

図版16. 1　掘立１（北より）
2　掘立１　ＳＰ12断面（北より）
図版17. 1　ＳＫ２断面（南より）
2　ＳＫ２（南より）
図版18. 1　ＳＫ３断面（南より）
2　ＳＫ３（南より）
図版19. 1　ＳＢ５出土遺物
2　ＳＢ２出土遺物
図版20. 1　ＳＢ７出土遺物
図版21. 1　ＳＫ15最下部出土遺物
図版22. 1　ＳＫ15最下部他出土遺物
図版23. 1　ＳＫ15Ⅲ層出土遺物①
図版24. 1　ＳＫ15Ⅲ層出土遺物②
図版25. 1　ＳＫ15Ⅲ層出土遺物③
図版26. 1　ＳＫ15Ⅱ層出土遺物
図版27. 1　ＳＫ15最下部他出土遺物（59・63）
ＳＫ15Ⅲ層出土遺物（84・86・105）
ＳＫ15Ⅱ層出土遺物（124・126・145）
図版28. 1　ＳＫ４出土遺物
図版29. 1　ＳＸ010出土遺物
図版30. 1　ＳＫ13出土遺物（189・194・197）
ＳＸ09出土遺物（237～240・244・245・247・248）
図版31. 1　第Ⅳ層出土遺物（266・267）
第Ⅵ層出土遺物（284）
第Ⅶ層出土遺物（294）
表採及び層不明出土遺物（309・310・319・320・323）
図版32. 1　表採及び層不明出土遺物
図版33. 1　分銅形土製品

表　目　次

表１　ＳＫ15器種構成と比率……52
表２　土器胎土及び土器内土壌の植物珪酸体分析……89
表３　植物珪酸体分析……90
表４　プラント・オパール顕微鏡写真……92
表５　祝谷アイリ遺跡・釜ノ口遺跡（７次）出土材とその樹種 ……101
表６　蛍光Ｘ線スペクトル図（2θdeg）……107
表７　分銅形土製品出土地名表（道後城北地域）……134
表８　須恵器　型式分類表 ……137
表９　道後城北遺跡群の概要一覧 ……147
表10　竪穴式住居址一覧 ……155
表11　竪穴式住居址の炉・カマド一覧 ……155
表12　掘立柱建物址一覧 ……155
表13　溝一覧 ……155
表14　土壙一覧 ……156
表15　ＳＸ（不明遺構）一覧 ……156
表16　ＳＢ５出土遺物観察表（土製品）……157
表17　ＳＢ５出土遺物観察表（石製品）……157
表18　ＳＢ５出土遺物観察表（土製品）……157
表19　ＳＢ２出土遺物観察表（土製品）……158
表20　ＳＢ２出土遺物観察表（石製品）……159
表21　ＳＢ７出土遺物観察表（石製品）……159
表22　ＳＢ１出土遺物観察表（土製品）……160
表23　ＳＢ１出土遺物観察表（石製品）……160
表24　ＳＢ３出土遺物観察表（土製品）……160
表25　ＳＫ15最下部他出土遺物観察表（土製品）……161
表26　ＳＫ15Ⅲ層出土遺物観察表（土製品）……161
表27　ＳＫ15Ⅲ層出土遺物観察表（石製品）……164
表28　ＳＫ15Ⅱ層出土遺物観察表（土製品）……164
表29　ＳＫ４出土遺物観察表（土製品）……166
表30　ＳＸ010出土遺物観察表（土製品）……167
表31　ＳＫ４関連品出土遺物観察表（土製品）……168

表32　ＳＸ010出土遺物観察表（石製品）……169
表33　ＳＫ13出土遺物観察表（土製品）……169
表34　ＳＫ13出土遺物観察表（石製品）……170
表35　ＳＫ１出土遺物観察表（土製品）……170
表36　ＳＫ３出土遺物観察表（土製品）……170
表37　ＳＫ６出土遺物観察表（土製品）……170
表38　ＳＸ07出土遺物観察表（土製品）……171
表39　ＳＸ07出土遺物観察表（石製品）……171
表40　ＳＸ08出土遺物観察表（土製品）……172
表41　ＳＸ09出土遺物観察表（土製品）……172
表42　ＳＸ09出土遺物観察表（石製品）……173
表43　第Ⅲ層出土遺物観察表（土製品）……173
表44　第Ⅳ層出土遺物観察表（土製品）……174
表45　第Ⅴ層出土遺物観察表（土製品）……174
表46　第ⅥＡ層出土遺物観察表（土製品）……174
表47　第Ⅳ層出土遺物観察表（石製品）……175
表48　第Ⅵ層出土遺物観察表（土製品）……175
表49　第Ⅵ層出土遺物観察表（石製品）……176
表50　第Ⅶ層出土遺物観察表（土製品）……176
表51　表採及び層不明出土遺物観察表（土製品）……177
表52　表採及び層不明出土遺物観察表（石製品）……179

Ⅰ　調査に至る経緯

1．経　緯

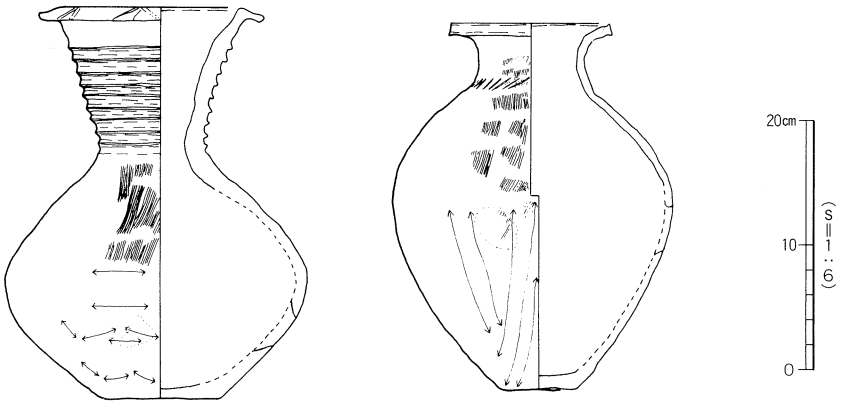
1990（平成２）年５月、医療法人聖愛会（理事長益田紀志雄）より松山市祝谷６丁目1277番地他に新設の医療施設を建設するに当たって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「51.山田池（祝谷）遺物包含地」内に当り、周知の遺跡として知られている。申請地は、字名を祝谷敢入（アイリ）といい、昭和前半代の開墾の際に弥生時代中期の壺形土器が完形品で採取されている(第１図)。その後、地元研究者による踏査の結果多数の土器片が表採され、特に中期中葉の資料は岡本健児氏によりアイリ式土器と命名され松山平野の弥生土器研究に寄与している。また、近年の周辺調査では、南西350mに位置する祝谷六丁場遺跡より平形銅剣１口（埋納状況で出土）が出土しており、祝谷地区一帯は弥生時代の松山平野において重要な集落地帯の一つであったことが明らかになってきた。

これ等のことより、申請地内に於ける埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するために、1990（平成２）年７月に文化教育課は試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、弥生土器・須恵器を含む遺物包含層（三層30～130cm）と円形土壙を検出し、当該地に弥生～古墳時代の集落関連遺跡があることを確認した。

この結果を受け、文化教育課・医療法人聖愛会二者は発掘調査についての協議を行った。発掘調査は、弥生時代および古墳時代の道後城北遺跡群祝谷地区の集落構造解明を主目的とし、松山市立埋蔵文化財センターが主体となり、医療法人聖愛会の協力のもと1990(平成２)年11月20日に調査を開始した。　　(梅木)



第１図　祝谷アイリ出土品

2．組　織

(1) 調査組織

〔調 査 地〕　松山市祝谷６丁目1277番地　他

〔遺 跡 名〕　祝谷アイリ遺跡

〔調査期間〕　野外調査　1990年11月13日～1991年３月29日

　　室内調査　1991年４月１日～1992年３月31日

〔調査面積〕　約1,400㎡　（申請面積　3,742㎡）

〔調査委託〕　医療法人　聖愛会理事長　益田紀志雄

〔調査主体〕　松山市教育委員会　教育長　池田　尚郷

〔調査総括〕　松山市教育委員会文化教育課　（前）課　長　渡部　忠平

　　（現）課　長　岩本　一夫

　　松山市立埋蔵文化財センター　（前）所　長　森脇　　將

　　〃　（現）所　長　和田祐三郎

　　〃　調査係　係　長　西尾　幸則

　　〃　〃　主　任　田城　武志

　　〃　〃　主　事　栗田　正芳

　　〃　〃　調査員　梅木　謙一

　　〃　〃　調査員補　武正　良浩

（野外調査作業員）

高橋　恒、池ノ内　昇、大久保英昭、浅海　誠、大野本英二、入江　宗輝、大地　俊彦、秋本　誠司、亀山　健一、川江　和弘、岸　武弘、亀山　泰昌、志賀　夏行、塚原　竜一、富山　寛之、田所　学夫、中野　議之、西原　聖二、中島　宏、二井田高士、原田　英則、濱本　幹男、古田　耕一、福島正太郎、扶川　博、松本　剛、村上　賢樹、松崎　英仁、宮川竜二郎、山崎　司、山本　圭、渡部　秀一、渡部　弘志、坂本　佳正、黒田　令子、上西　真弓、瀬戸　恭子、白石　聖子、西平真由美、藤井　宏枝、森田　利恵、松本美知子、森田　晶子、藤沢　真美、水口あをい、大西　朋子、岡根なおみ

社団法人松山市シルバー人材センター：井ノ口正晴、東　重勝、加藤　成、蓮田　年行、重見イセ子、上田　年子、門田　一義、秀野　幸男、松野　胤朝

（室内調査作業員）

高橋　恒、加島　次郎、森田　利恵、松本美知子、黒田　令子、水口あをい、上西　真弓、白石　聖子、瀬戸　恭子、藤井　宏枝、藤沢　真美、森田　晶子、松山　桂子、三木　和代、山下満佐子、兵頭　千恵、好光明日香、西岡　早苗、大西　陽子、野口　幸恵、内山こづえ

(2) 調査指導

〔調査指導〕　下條　信行教授（愛媛大学）
内田　俊秀助教授（京都芸術短期大学）
上原　　真主任研究員（奈良国立文化財研究所）
三辻　利一教授（奈良教育大学）
本田　光子（福岡市埋蔵文化財センター）
石川　悦雄（宮崎県埋蔵文化財センター）
吉田　　寛（大分県教育委員会）
坪根　伸也（大分市教育委員会）
宮崎　泰好（砥部町教育委員会）
乗安和二三（財.山口県埋蔵文化財センター）
吉瀬　勝康（防府市教育委員会）
岡田　敏彦（財.愛媛県埋蔵文化財調査センター）
多田　　仁（財.愛媛県埋蔵文化財調査センター）
村上　通恭（名古屋大学）
岡田　文男（財.京都市埋蔵文化財研究所）
杉山　真二（有.古環境研究所）
早田　　勉（有.古環境研究所）

〔協力機関〕　古環境研究所　　元興寺文化財研究所
徳島県立博物館　　徳島市教育委員会
㈶香川県埋蔵文化財調査センター　　㈶山口県埋蔵文化財センター
山口県防府市教育委員会　　宮崎県立博物館
宮崎県埋蔵文化財センター　　福岡市埋蔵文化財センター
愛媛県教育委員会　　㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

調査にあたっては、多くの研究者・研究機関に貴重なご指導、ご教示を頂きました。記して感謝申し上げます。

(3) 刊行組織

〔刊行主体〕　財団法人松山市生涯学習振興財団　理事長　田中　誠一
事務局長　池田　秀雄

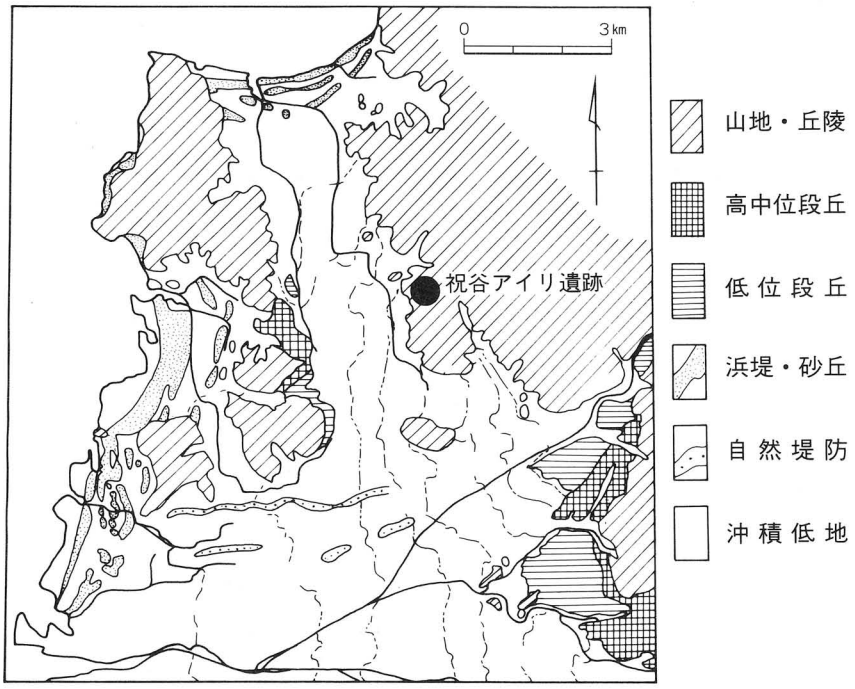
〔刊行総括〕　埋蔵文化財センター　所　　長　和田祐三郎
次　　長　田所　延行
調査係長　西尾　幸則
調査主任　田城　武志
調査主事　栗田　正芳（文化教育課職員）

II　遺跡の概要

1．地理的環境（第２・３図）

道後城北遺跡群が立地する道後城北地区は、松山平野のほぼ中央部に位置する。遺跡群は、その地理的条件や遺跡の性格などから、祝谷・城北・道後の３地区に区分される。まず、祝谷地区は、高縄山地に源を発した永谷川の両岸の丘陵部と、やがて丸山川と合流し、平野部に流れ出る付近に形成した小規模な扇状地に分けられる。次に城北地区は、愛媛大学、松山大学を中心とする平野部で、道後地区は、県民文化会館付近の平野部から東へ、やや小高くなる道後温泉にかけての丘陵部を占めている。本遺跡は祝谷地区内に所在し、永谷川左岸の標高68～71mの緩斜面上に立地している。

地質学的に高縄山地は、中世代の領家帯貫入岩類の松山型花崗閃緑岩が大部分を占めているのに対して、勝山（城山）は白亜紀の和泉層群のレキ岩に瀬戸内系火山岩類が貫入している。



第２図　祝谷地区の地質図

2．歴史的環境（第4図）

祝谷地区のうち平野部は勿論のこと、近年では丘陵部における大規模な宅地造成工事などにより、多くの遺跡が発見され、遺跡群におけるこの地域の位置付けも明かになりつつある。そこで、祝谷地区内で近年発掘調査された遺跡を中心に概説していきたい。

旧石器時代

山田池から流れ出る大川の東側にある標高50mの丘陵上で、合計13点の石器が採取されている。これらは、細石核・細石刃・掻器・台形様石器と称されているものであるが、その材質・剥離技法などに依然疑問点が残されている。この丸山遺跡出土の石器については、本書に多田氏の詳細な論考がある〔第Ⅴ－1　多田　仁〕。今後の研究に期待する。

縄文時代

小規模な扇状地上に立地した土居窪遺跡、土居の段遺跡から、少量の土器が出土している。まず、土居窪遺跡の最下層からは、後期から晩期の土器片3点が出土している。土居の段遺跡では、後期の縁帯文をもつものや、注口土器の出土が伝えられている〔松山市資料集1980〕。

弥生時代

前期の遺跡では、出土状況は不明であるが、御幸寺山東麓遺跡から綾杉文が描かれた壺が出土している。

中期では、古くから中期中葉の標式土器として知られたアイリ式土器が出土したアイリ遺跡がある。また丸山川右岸の丘陵谷間に立地する祝谷六丁場遺跡は、中期中葉を中心として後期まで続く遺跡で、分銅形土製品をはじめとして、特記すべき資料が出土している〔松山市教育委員会他　1991〕。

祝谷アイリ遺跡から、分銅形土製品が2点出土している。本県出土の41点中26点が道後城北遺跡群から出土しており、その内訳は以下の通りである。なお、遺跡群出土の分銅形土製品の詳細については第Ⅴ－2で論考する。

祝谷地区では、祝谷六丁場遺跡（12点）、御幸寺山東麓遺跡（1点）、祝谷アイリ遺跡（2点）で合計15点出土している。ちなみに城北地区で10点、道後地区で1点である。

また祝谷六丁場遺跡では、全国で初めて平形銅剣が埋納された状態で検出され、埋納方法が明らかにされたばかりではなく、平形銅剣が祭祀的な意味合いを持っていることの証明にもなった遺跡である。遺跡群内では、4ヶ所で22本発見されている。その内訳は、祝谷地区で祝谷六丁場遺跡（1本）の他、城北地区で道後一万遺跡（10本）、道後樋又遺跡（8本）、道

後地区で道後公園山麓遺跡（3本）になっている。

丸山川河岸段丘上の祝谷六丁目遺跡では、中期中葉から後期の壺棺墓群と円形竪穴式住居跡1棟が検出されている。その一つの壺棺から、歯牙とともにイモ貝製の貝釧が2点出土している。時期決定には多少問題を含むものの、型式からみると中期後半以前の段階に比定するのが妥当であるという〔下條信行　1991〕。

古墳時代

古墳時代には平野部の背後の丘陵に、数多くの古墳が分布している。それらは祝谷古墳群、御幸寺山古墳群、常行寺古墳群とよばれるが、近年の詳細な分布調査によって、30基余りの古墳が存在していることが明らかにされた〔愛媛県教育委員会　1991〕。その祝谷古墳群には、現在10数基の古墳が現存しているといわれているが、発掘調査された古墳は祝谷古墳5基である〔松山市史料集　1980〕。次に御幸寺山古墳群には、昭和21年頃に発掘調査され、方格規矩四神鏡を出土したと伝えられる横穴式石室を持つ円墳が存在していた〔愛媛県　1986〕。

この時代の集落は、道後今市遺跡第6次調査や松山大学構内遺跡で数棟ではあるが、竪穴式住居が検出され、狭少な範囲であるにもかかわらず、一定の住居の変遷が確認されたことにより、これまで明かにできなかった古墳時代の集落についての基礎資料が揃いつつある。また当遺跡群出土の須恵器についての一つの傾向がまとまりつつあり、今後地域ごとに、データの分析を進めていくことが肝要であろう（第Ⅴ－3）。

なお、道後城北遺跡群の全体的な地理的・歴史的環境については、『松山大学構内遺跡』「Ⅱ遺跡の概要」を参考にされたい。

【文献】

松山市　1980『松山市史料集』

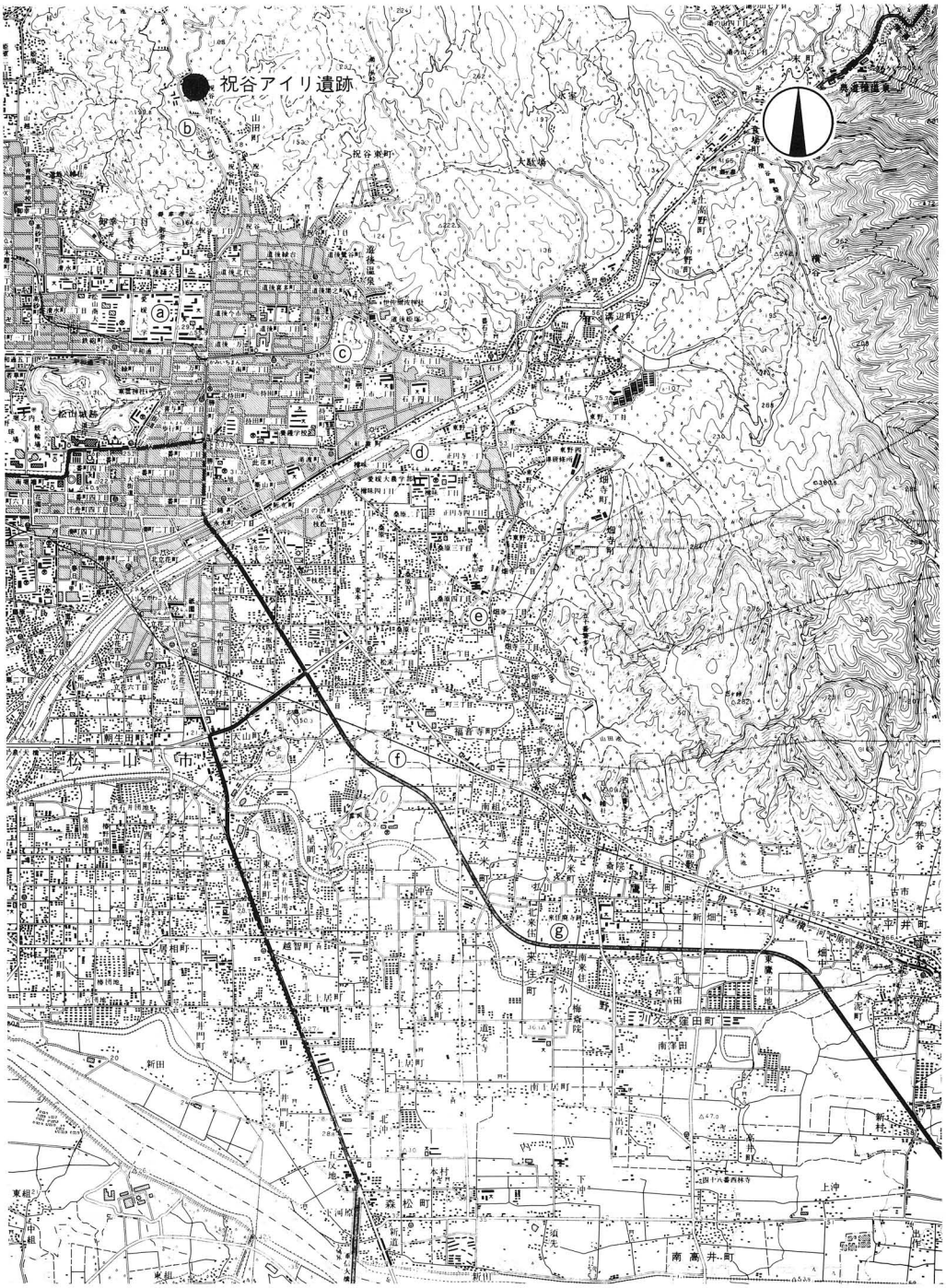
愛媛県　1986『愛媛県史　資料編　考古』

下條信行　1991「松山平野と道後城北の弥生文化―西瀬戸内の海外交流―」『松山大学構内遺跡』

愛媛県教育委員会　1991『愛媛県内古墳』

松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター　1991『祝谷六丁場遺跡』

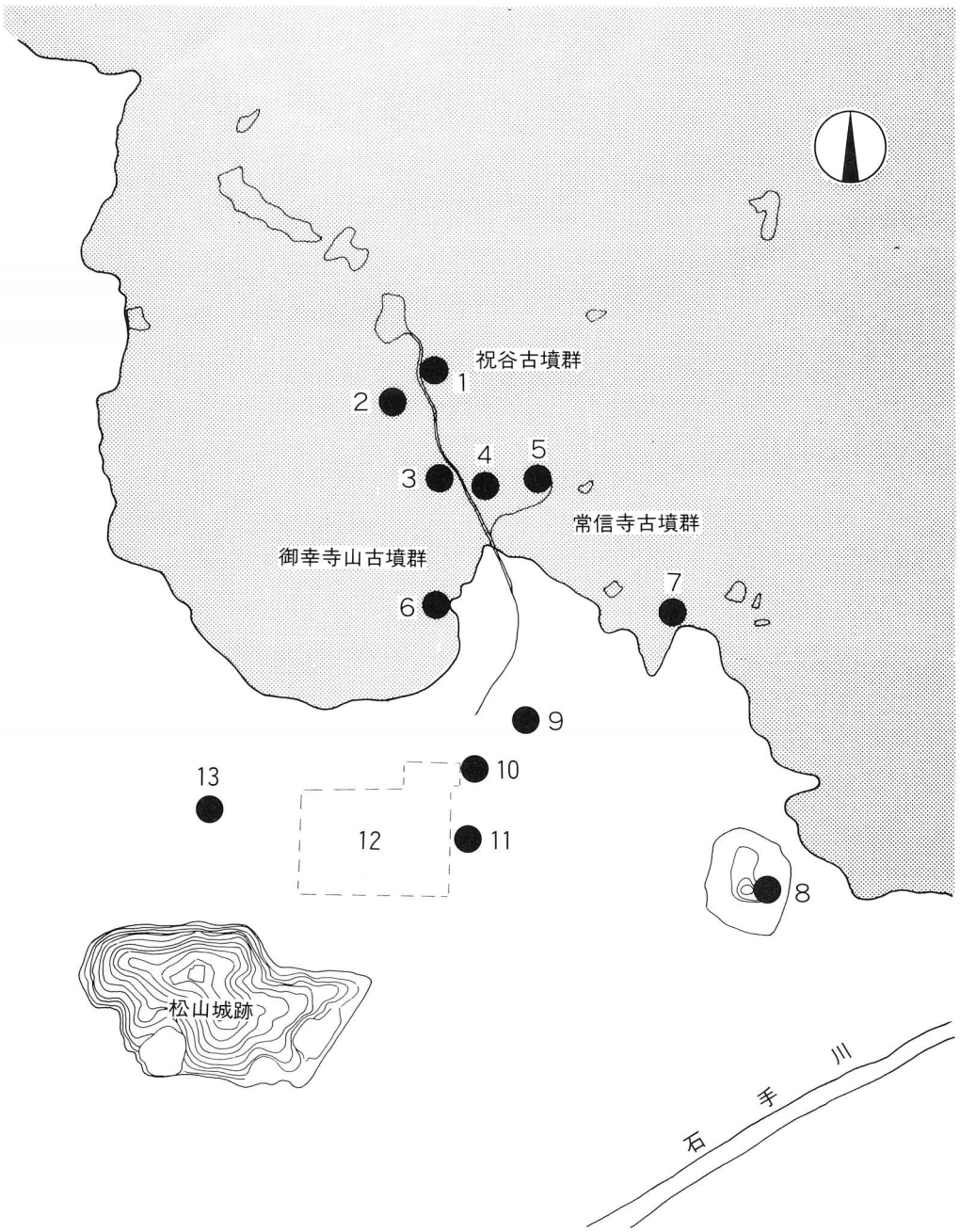
松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター　1991『松山大学構内遺跡』



ⓐ 文京遺跡(愛媛大学)　ⓑ 祝谷六丁場遺跡　ⓒ 道後湯築遺跡　ⓓ 樽味立添遺跡

ⓔ 三島神社古墳　ⓕ 福音寺遺跡　ⓖ 来住廃寺遺跡

第３図　松山平野の主要遺跡分布図　（Ｓ＝１：50,000）



1 祝谷アイリ遺跡　2 祝谷六丁目遺跡　3 祝谷六丁場遺跡　4 丸山遺跡
5 アイリ遺跡　6 御幸寺山東麓遺跡　7 土居ノ段遺跡　8 道後公園山麓遺跡
9 土居窪遺跡　10 道後樋又遺跡　11 道後一万遺跡　12 文京遺跡
13 松山大学構内遺跡

第４図　祝谷地区の主要遺跡分布図　（S＝1：25,000）

Ⅲ　調査の概要

1．調査の経緯

調査地は、松山市祝谷６丁目1,277番地である。対象面積は3,742㎡であり、調査は施設建設により遺物が失われる約1,400㎡に対して行われた。以下、調査工程を略述する。

平成２年　11月６日に調査事務所を設置する。地形測量及び準備作業。

12月　３～６日の間重機による表土及び近現代壙を際去を行う。７日以降は基本層序の確認をし、包含層を掘り下げた。

平成３年　１月　小谷部は包含層の掘り下げ、斜面西側部は遺構検出を行い、竪穴式住居址と柱穴痕を検出する。斜面部の生活関連遺構の存在を知る。

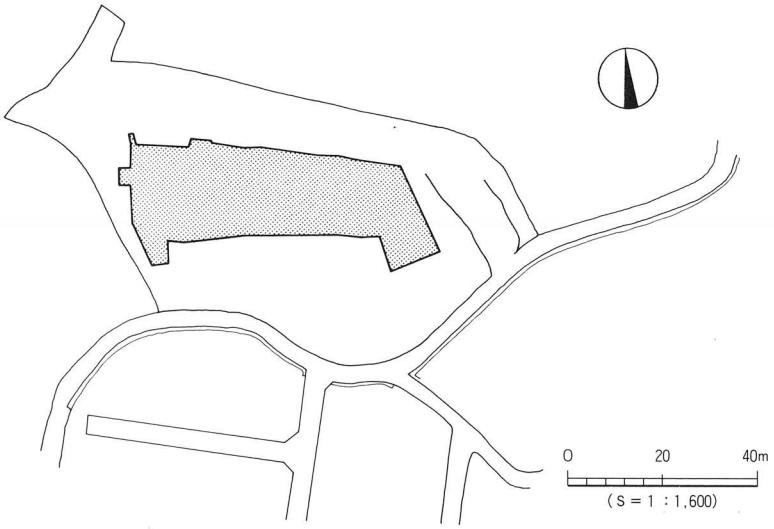
２月　斜面部を重視した調査を行う。その結果、弥生時代～古墳時代の竪穴式住居址、溝、土壙、柱穴痕を検出する。

３月　上・下旬の２回に渡り愛媛大学法文学部教授下條信行先生に調査指導を乞う。23日（土）の午後に現地説明会を行う。近隣住民や考古学ファン他約60名の見学者が訪れる。30日（土）、野外調査終了。

４～５月　４月２日より松山市立埋蔵文化財センターにて、遺構図整理を中心に室内調査を開始する。

６～11月　針田町事務所にて、洗浄～復元・実測の作業を行う。

１２～平成４年３月　トレース、執筆、調査検討会、資料調査等の報告書作成作業。



第５図　調査地位置図

2．層位（第6・7図）

本調査地の基本層位は、第Ⅰ層表土（6～84cm）、第Ⅱ層灰色シルト（5～65cm）、第Ⅲ層暗灰褐色シルト（12～110cm）、第Ⅳ層暗灰褐色シルト（12～126cm）、第Ⅴ層青灰色シルト（14～84cm）、第Ⅵ層暗青灰色シルト（8～124cm）であり、最下層は第Ⅶ層青灰色粗砂である。

第Ⅰ層―近現代の農耕による客土である。

第Ⅱ層―床土と呼ばれるものである。

第Ⅲ層―微弱な土色の差異から上部層の第Ⅲａ層暗灰褐色シルト（砂多し）、下部層の第Ⅲｂ層暗灰茶褐色シルト（砂多し）に分層される。

第Ⅳ層―第Ⅲ層と同じく上部層の第Ⅳａ層灰茶褐色シルト、下部層の第Ⅳｂ層暗灰褐色シルトに分層できる。ただし、第Ⅲ層・第Ⅳ層は共に調査地点によっては上下が逆転する場合もある。

第Ⅴ層―調査区南側の旧地形の落ち込み地点で見られる。

第Ⅵ層―一部の調査地で砂粒の包含量の違いにより第Ⅵａ層紺色シルト、第Ⅵｂ層暗灰色シルト（微砂含む）に分層される。

第Ⅶ層―調査区南側で見られ、粗砂粒の包含が多い無遺物層である。

間層・Ａ層―暗灰褐色粗砂は第Ⅲ層と第Ⅳ層の間に部分的に見られる粗砂層である。

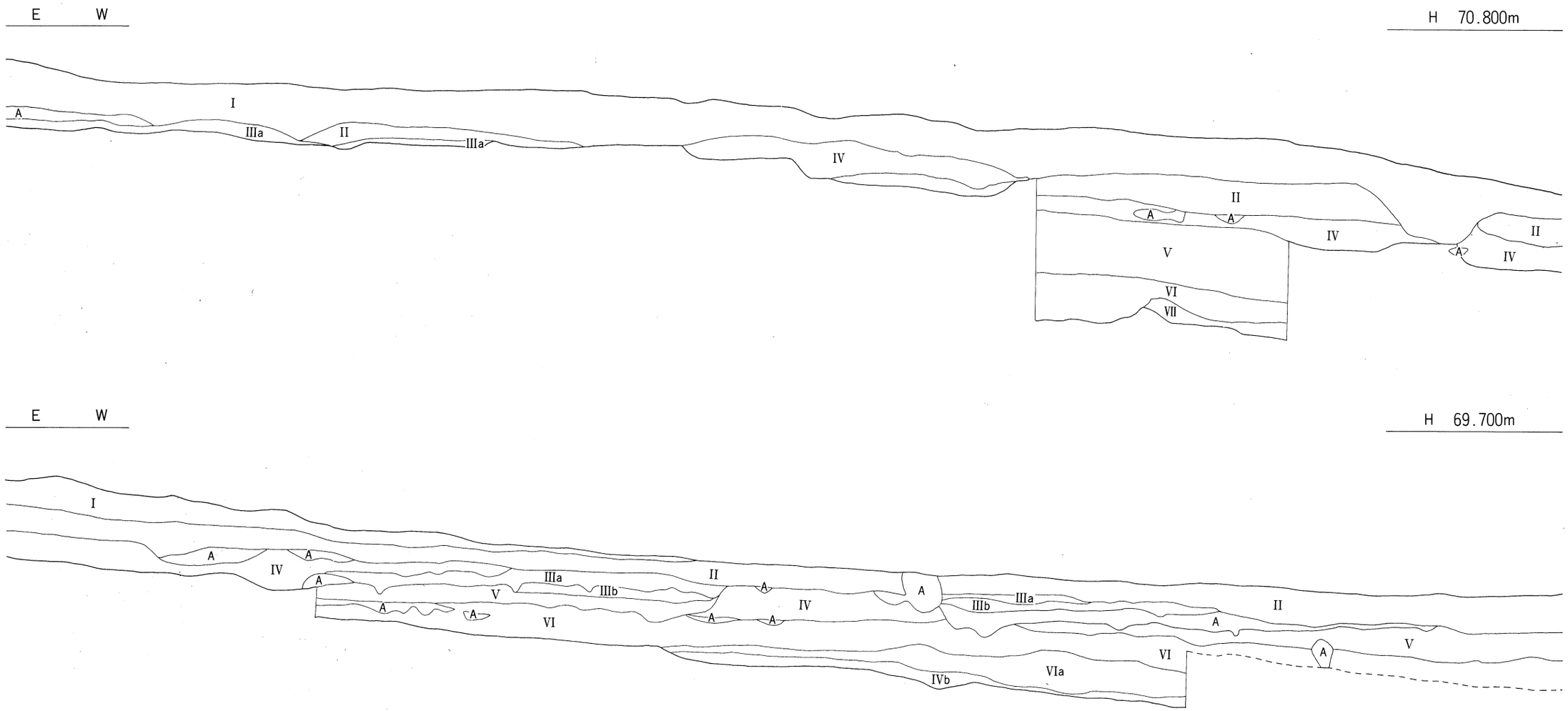
間層・Ｂ層―淡黄灰色シルト（砂多し）は第Ⅵ層と第Ⅶ層の間に限定的に（平坦な箇所及び落ち込んでいる箇所）調査区北西隅の旧地形の落ち込み地点と調査区北壁中央の際地点で検出され、堆積は10～66cmを測る。

出土遺物は第Ⅲ～Ⅵ層に弥生土器・土師器・須恵器の破片が混在し包含されている。Ｂ層は弥生土器（中期～後期）を包含している。

これ等のことより各層は出土遺物、検出遺構から判断すると、第Ⅲａ層、第Ⅲｂ層は古代、第Ⅳ～Ⅵ層は古墳時代～中世に堆積したものと判断される。

また、遺構の埋土上面に第Ⅳａ層が検出される場合もあり、当地は第Ⅳａ層堆積以前、即ち古墳時代前期以前に整備された可能性が高い。

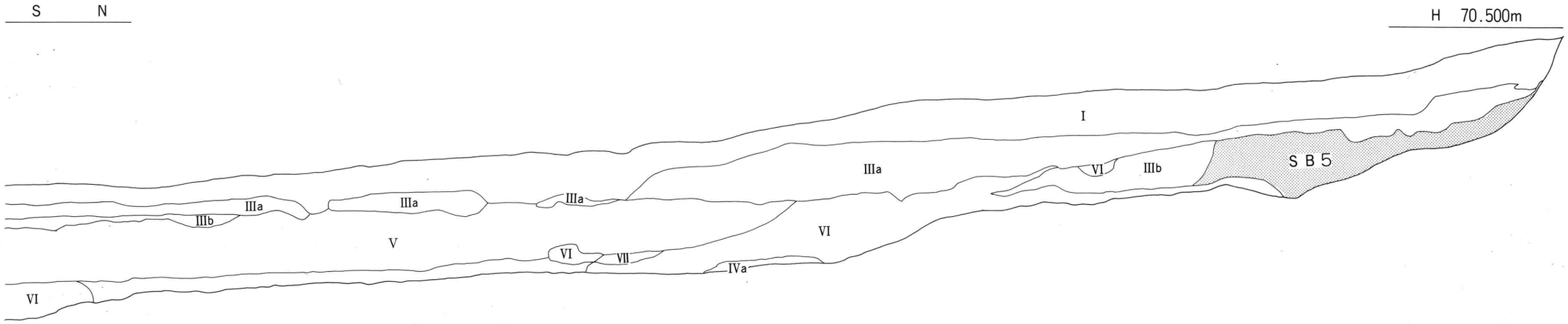
なお、調査にあたり調査地区内を８ｍ四方のグリットにわけた。

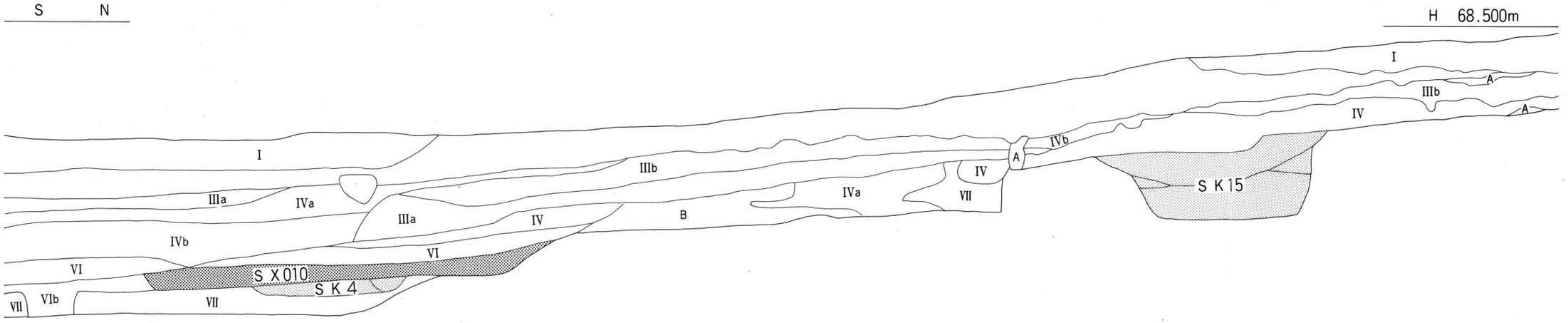


I 表土　II 灰色シルト　III 暗灰褐色シルト　IIIa 暗灰褐色シルト（砂多し）　IIIb 暗灰茶褐色シルト（砂多し）　IV 暗灰褐色シルト
IVa 灰茶褐色シルト　IVb 暗灰褐色シルト　V 青灰色シルト　VI 暗青灰色シルト　VIa 紺色シルト　VIb 暗灰色シルト（微砂含む）　VII 青灰色粗砂
A 暗灰褐色粗砂　B 淡黄灰色シルト（砂多し）

0　5m
（S＝1：60）

第6図　南 壁 土 層 図

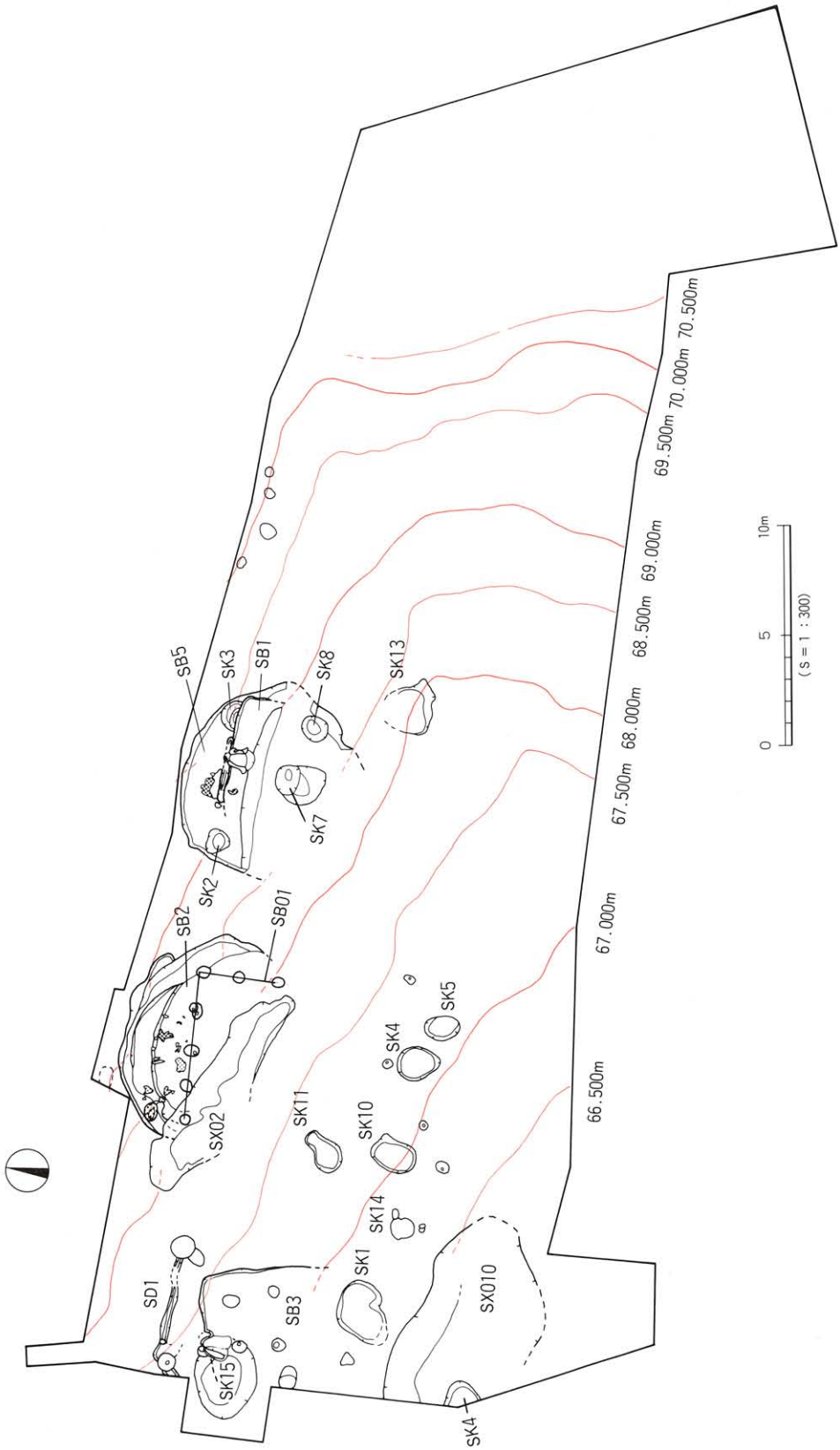




I 表土　II 灰色シルト　III 暗灰褐色シルト　IIIa 暗灰褐色シルト（砂多し）　IIIb 暗灰茶褐色シルト（砂多し）　IV 暗灰褐色シルト
IVa 灰茶褐色シルト　IVb 暗灰褐色シルト　V 青灰色シルト　VI 暗青灰色シルト　VIa 紺色シルト　VIb 暗灰色シルト（微砂含む）　VII 青灰色粗砂
A 暗灰褐色粗砂　B 淡黄灰色シルト（砂多し）

0　5m
（S＝1：60）

第７図　調査区中央ベルト土層図(上)、西壁土層図(下)


SB5
SK3
SB1
SK8
SK13
SK7
SK2
SB2
SB01
SX02
SK11
SK10
SK4
SK5
SK14
SK1
SX010
SD1
SB3
SK15
SK4
70.500m
70.000m
69.500m
69.000m
68.500m
68.000m
67.500m
67.000m
66.500m
0
5
10m
(S＝1：300)

第８図　遺跡配置図

3．遺構と遺物

〔1〕竪穴式住居址

1）弥生時代

弥生時代の住居址は2棟（ＳＢ２，５）である。いずれも地山で、調査区北部に集中して検出された。平面形は、いずれも円形であった。

ＳＢ５号住居址（第９図、図版５）

調査区北部中央やや西よりＤ６、Ｄ７、Ｅ6、Ｅ７区に位置する。ＳＢ１・７に先行し、さらに後世の削平を受けて南半分が破損している。平面形は、円形を呈するものと考える。規模は、東西8.6m、壁高1.7m（最深部）を測る。本住居址の埋土は一層で灰褐色シルトである。本住居址は、古墳時代後期の竪穴式住居址（ＳＢ１・７）に先行するものである。このことは、本住居址が遅くともＳＢ１・７構築時までに削平されていた事を示すものである。主柱穴は、未検出である。床面はやや南に傾斜し比較的軟い。

炉址は、住居址南部(やや西より)に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.15m、短軸0.79mで、深さ31cmを測る。構造は、断面形がレンズ状をなすものである。埋土は灰褐色シルト一層であるが、壁面が焼成を受けており、部分的に炭化物が検出される。

遺物の出土状況は、散在した状況である。大型破片は床面に近い地点から出土することが多い。住居址南西部（やや中央より）では、完形に近い土器が出土している。(第10図６)

また、木炭片は、いずれも床面より浮離した状況で出土している。注目すべき出土遺物として、男茎状石製品１点が床面直上から出土している（愛媛県初例)。

出土遺物（第10・11図、図版19)

甕形土器（１～５）　１・２は強く折り曲がる口縁部をもつ。１は口縁部がわずかに湾曲する。２は口縁端部がやや厚く、端面を強くヨコナデする。３～５は口縁部下に凸帯を有するものである。３は凸帯上に刻目を施さず、４は指頭、５は工具による刻目を施す。

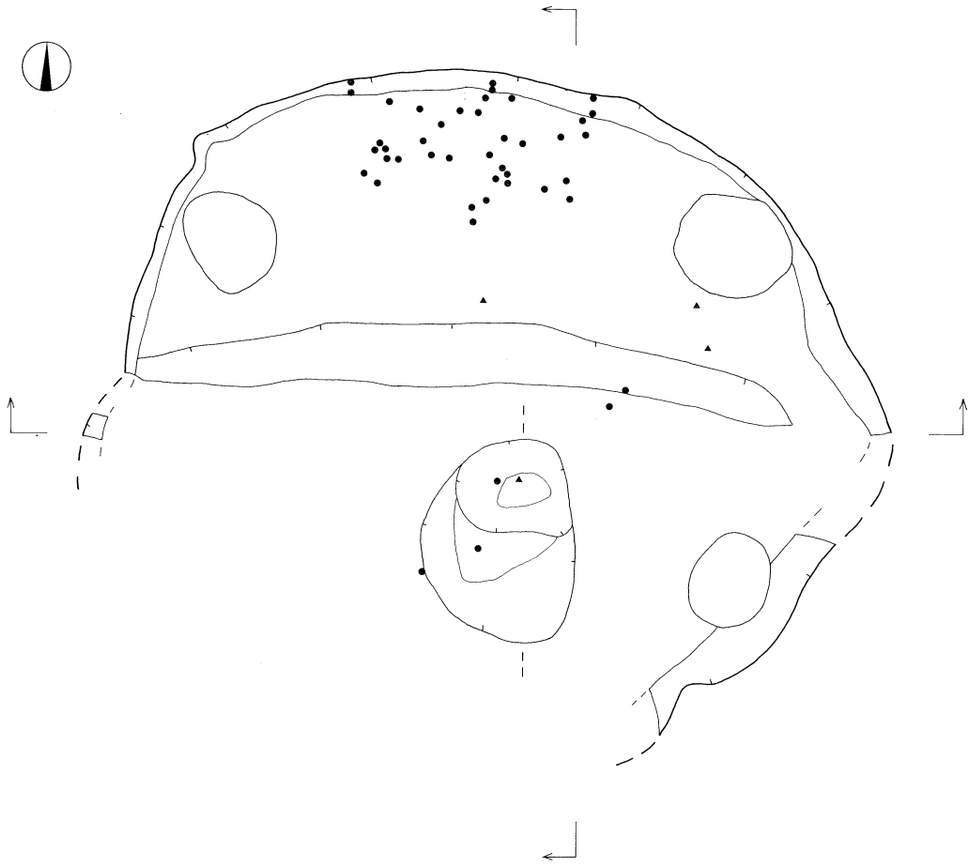
壺形土器（６）　６は短頸壺である。短く直立する頸部には、指押しされた凸帯をもつ。

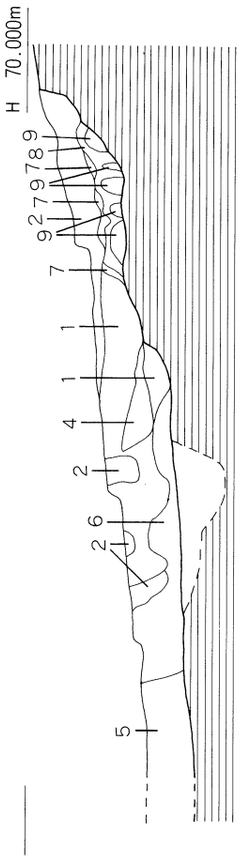
底部（７～９）　７は壺形土器の底部である。平底を呈するが、わずかに凹状となる部分がある。８・９は甕形土器の底部である。わずかにくびれ、上げ底を呈する。８は小形品、９は大形品の底部となるものである。

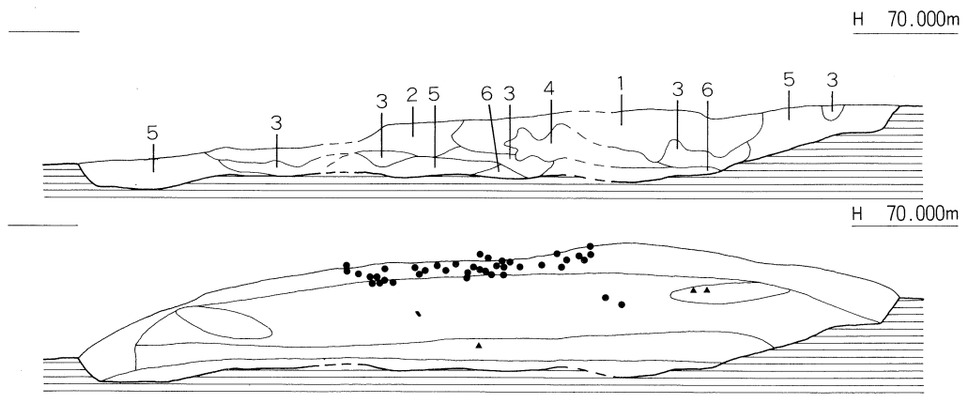
土製品(10)　10は手捏ね品である。口縁部を欠く。やや大きめの底部は、上げ底となる。器壁は薄い。

石斧（11）　11は結晶片岩製の大形の扁平片刃石斧である。

男茎状石製品（12）　12は男茎状石製品と呼ばれるものである。自然石の節理面を利用し



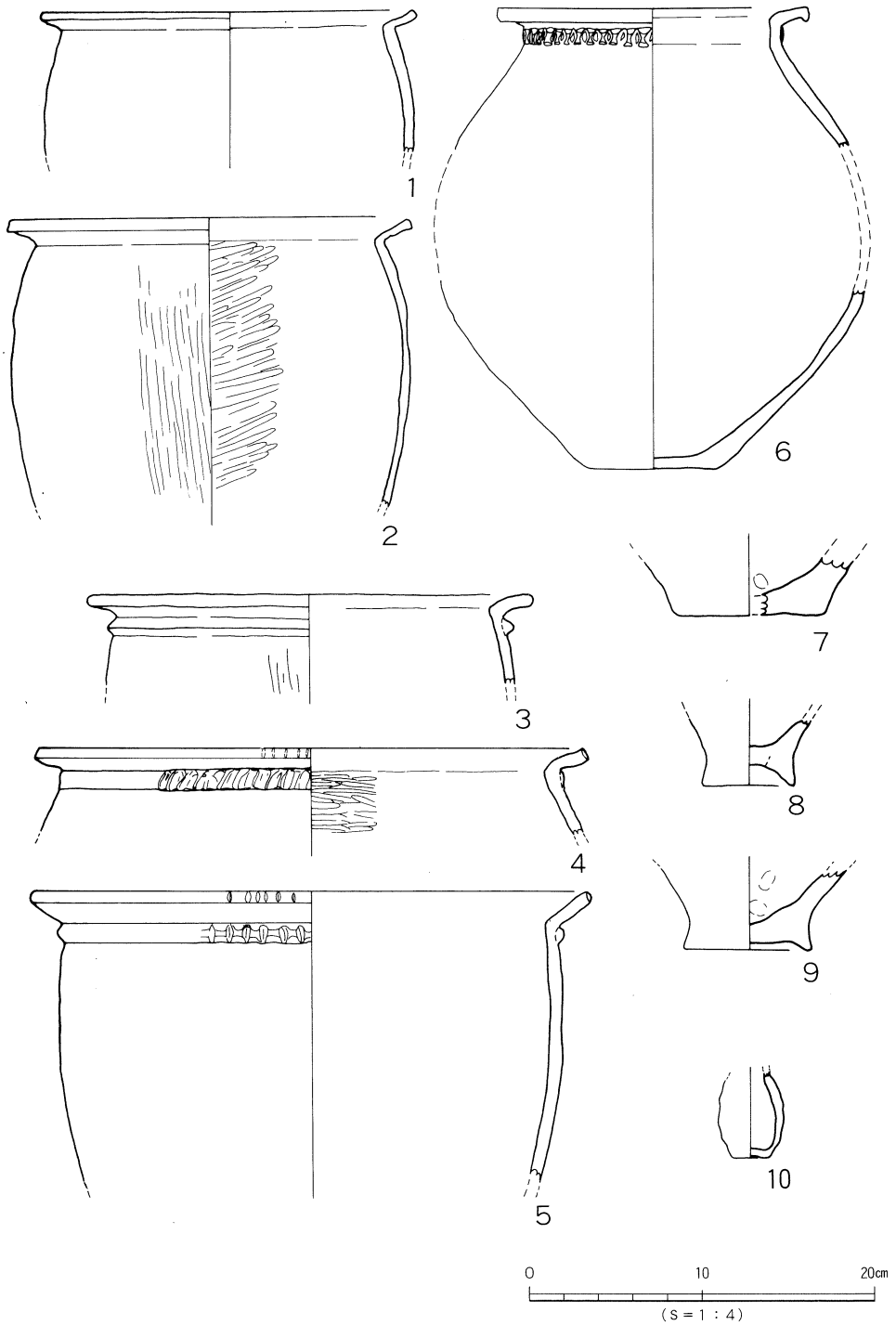




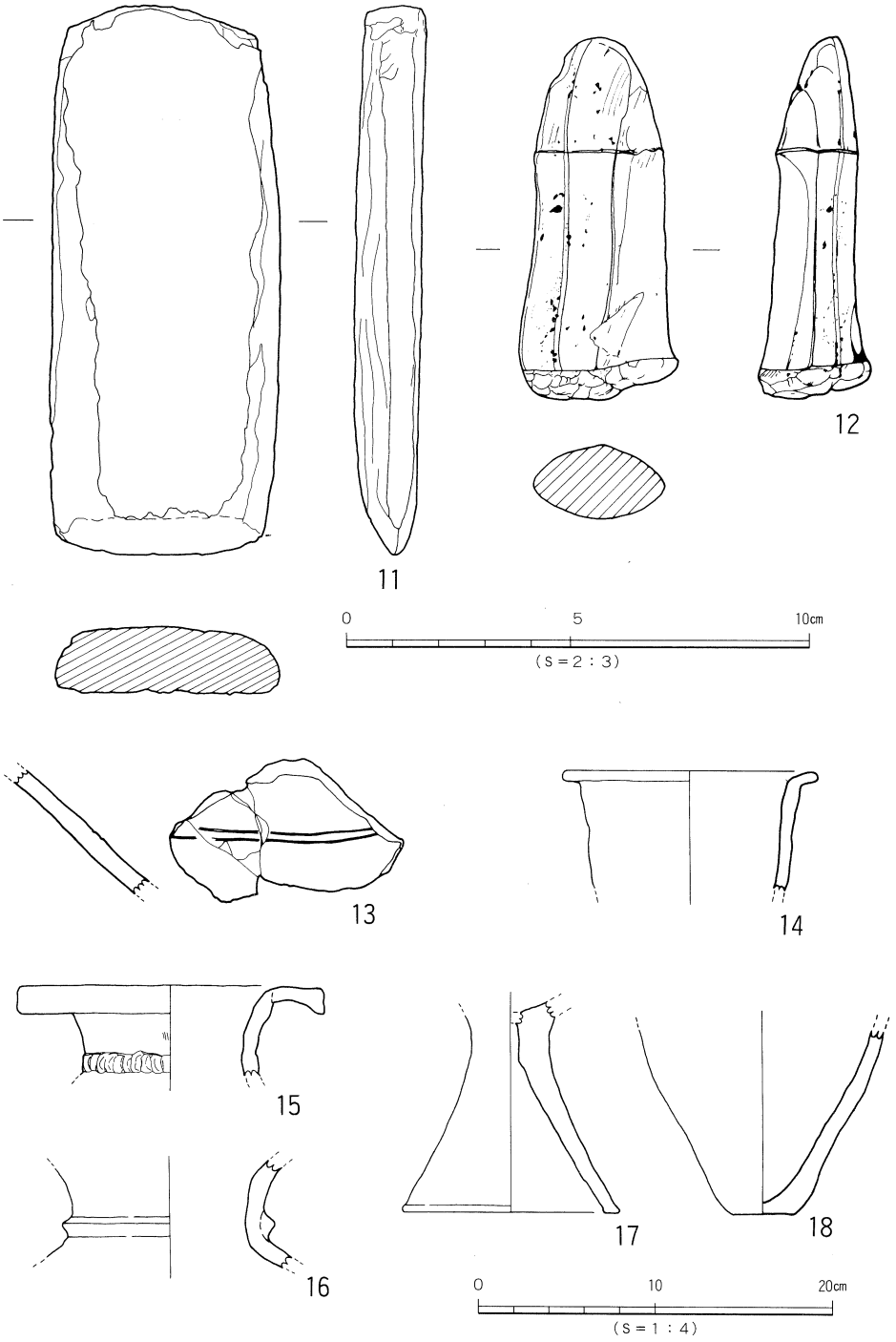
1　灰色砂
2　灰褐色シルト（砂多し）
3　灰褐色シルト
4　灰茶褐色シルト（砂多し）
5　灰色粗砂
6　灰茶色微砂
7　灰黄茶色シルト（砂多し）
8　淡黄色シルト（砂多し）
9　灰茶色シルト

0　2　4m
（S＝1：80）

第9図　ＳＢ５　測量図



第10図　ＳＢ５出土遺物実測図（Ⅰ）



第11図　ＳＢ５出土遺物実測図 (2)

ている。断面形は菱形を呈する。

炉内出土遺物（第11図13～18）

13は弥生時代前期の壺形土器肩部片である。２条のヘラ描沈線文を施す。14は甕ないし鉢形土器片である。15・16は壺形土器片である。15は頸部に指頭押圧された凸帯文を１条巡らす。17は高坏形土器脚部片である。充塡技法の可能性あり。18は器種器形とも不明である。長胴で、小さい底部をもつ。

時期：埋土中の遺物は小片少量であるが、いずれも中期中葉に比定されるものである。また、炉址内の遺物も埋土中のものと時期差がない。よって、本住居址の埋没時期は出土遺物より中期中葉に比定する。

ＳＢ２号住居址（第12図、図版６・７）

調査区北部中央やや西よりＤ７～８、Ｅ７～８区に位置する。住居址の南半部はＳＸ０２に切られ、さらに後世の削平を受けて破損している。平面形は、円形を呈するものと考える。規模は、北西―南東9.5m、壁高1.1m（北側最深部）を測る。壁体に沿って幅43～105cm、厚さ10cmの削り出しの高床部（テラス状遺構）を検出する。本住居址の埋土は大きく四つに分層でき、上から暗茶褐色シルト、黒褐色シルト、黒灰色シルト、最下層の灰褐色シルトである。主柱穴は、未検出である。床面は平坦で比較的硬い。

住居址中央部の西側の床面から炭（灰混り）が63×53cmの範囲で検出された。炭直下の床面が焼けていない事から移動させられた炭（灰）と考えられる。この炭塊の西側に接して不整楕円形状に床面が焼けている部分があり、ここに炉址が位置した可能性が高い。

遺物の出土状況は、壁体沿い、高床部直上、床面直上に散在したもので、埋土最下層からは弥生土器片、上層（暗茶褐色シルト）からは須恵器片が出土した。住居址北部中央（やや東より）の壁体沿い（最下層：灰褐色シルト）から、石庖丁が出土している。最下層出土遺物は、住居址南側が削平されている事もあるが、石庖丁を除くと土製品は小片ばかりである。

また、住居址中央部床面直上からは、住居部材に使用したと考えられる木炭片が出土している。高床部中央の落ち際にほぼ等間隔(103cm～100cm)で３個体の木炭片を検出している。中央の１個体は、落ち際に貼り付いていた。さらに２個体の延長線上にも木炭片を検出しており、木炭片は放射状を呈しており倒壊家屋の可能性もある（第Ⅳ―２参照）。

出土遺物（第13・14図、図版19）

甕形土器（19～21）　19、20は小片で、「く」の字状に外反する口縁部をもつ。21は底部片で、上げ底でわずかにくびれるものである。

壺形土器（22～26、29、30）　25、30以外は小片である。22は広口壺の口縁部である。口縁端面に４条の凹線文をもつ。口縁上端部は面をもつ。23は短頸壺の口縁部片と思われる。口縁端部はナデによりやや拡張する。24、25は長頸壺である。25は口縁端部を強くナデ面と

なす。29、30は底部片で、丸みを帯び、わずかに上がるものである。

鉢形土器（27）　27は小片で、外反する口縁部をもつ。高坏形土器の坏部である可能性もある。

高坏形土器（28、31～33）　28、31は坏部小片である。28は口縁部が直立ぎみに立ち上がり、口縁端部はナデにより面となす。31は口縁部は内傾し、外面に4条の細いヘラ描き沈線文を施す。口縁端部はマメツするも、面をもつものではない。32、33は脚部片である。32は小片であるが、柱上部に2条以上の太い沈線文を施す。柱部内面は未調整で、裾部内面はナデ調整である。33は裾部が3分の2欠ける。脚端面は丸みのある面となる。施文は施さない。

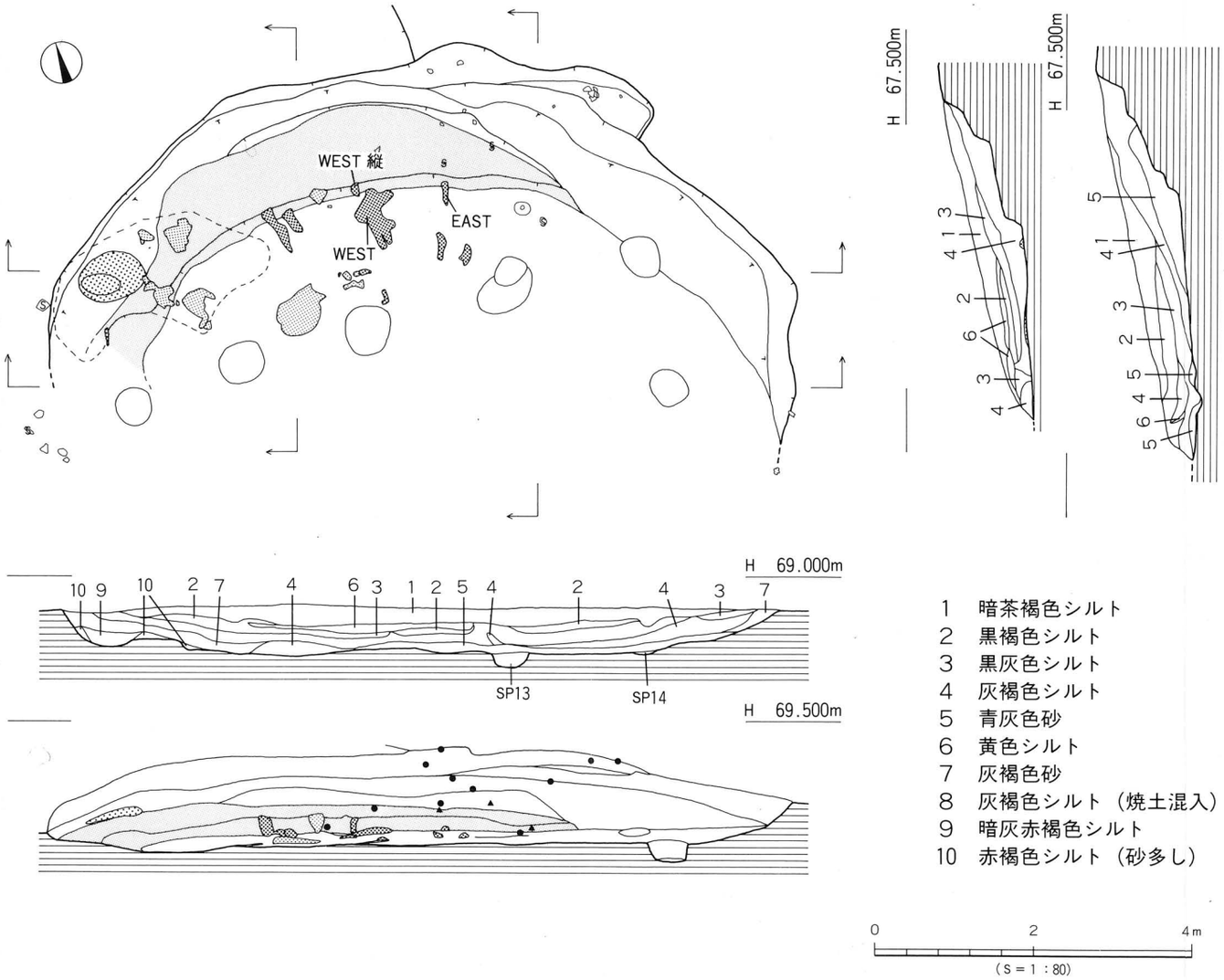
支脚形土器（34）　34は器台形土器とも呼べるものである。凹みのある面を受部としたが断定できるだけの根拠はない。調整・胎土において特別なものではなく、実用品と考える。

須恵器（35～37）　流れ込み品である。35、36は坏蓋で、口縁部の屈曲には稜はない。35は口縁部を1部欠くが完形に近いものである。37は坏身でほぼ完形品である。立ち上がりは内傾し短い。端部は細く丸い。

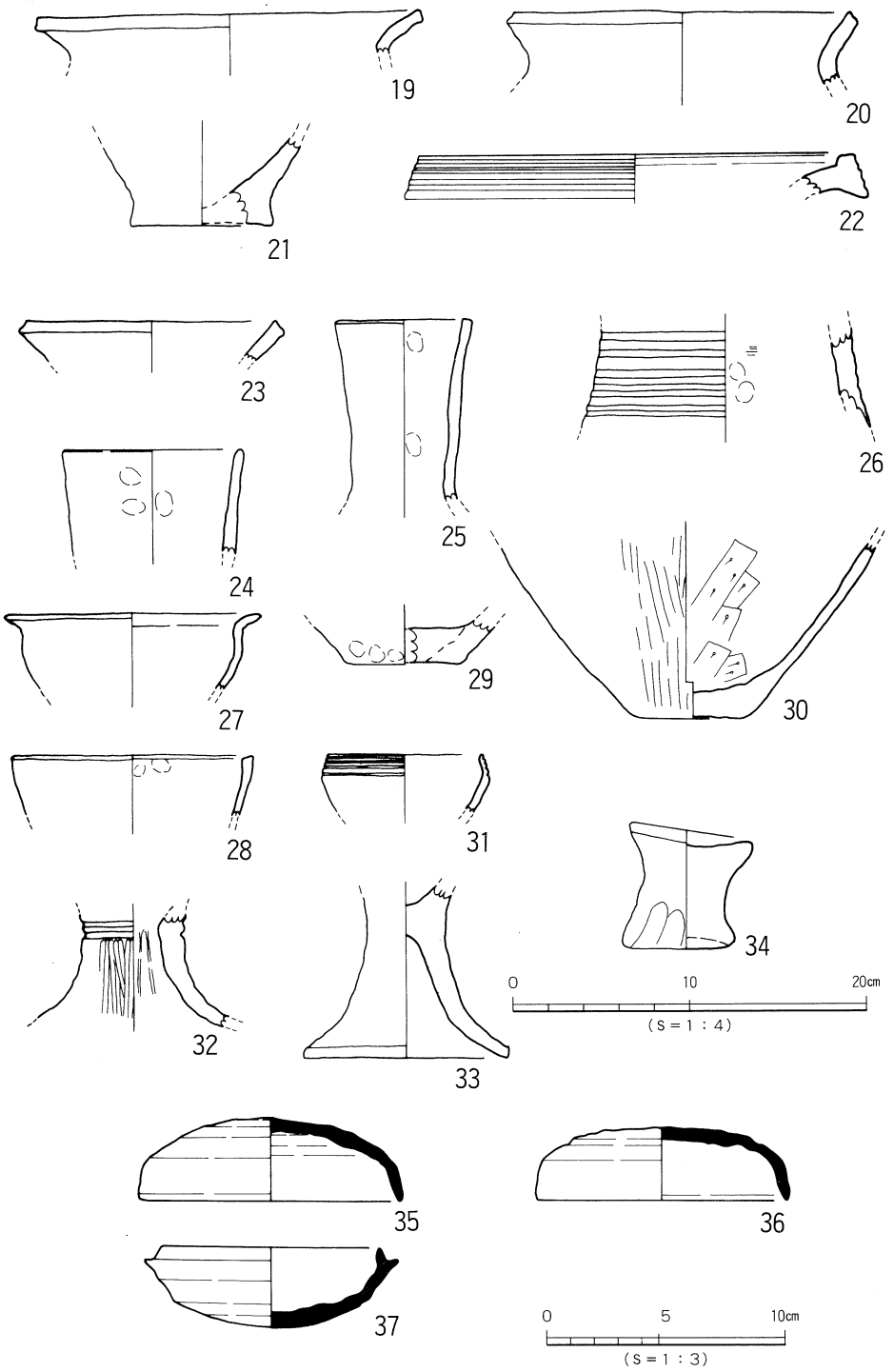
石庖丁（38～40）　38は完形品である。杏仁形を呈し、紐は小さく精練であり金属器による穿孔と考えられる。39は2分の1の残存である。石庖丁にしてはやや肉厚である。40は未製品の欠損品である。ただし、両側両部に磨きが加えられており、他刃器への転用があった可能性もある。

石斧（41）　41は大形伐採斧である。刃部と茎部を欠く。断面形はやや扁平である。

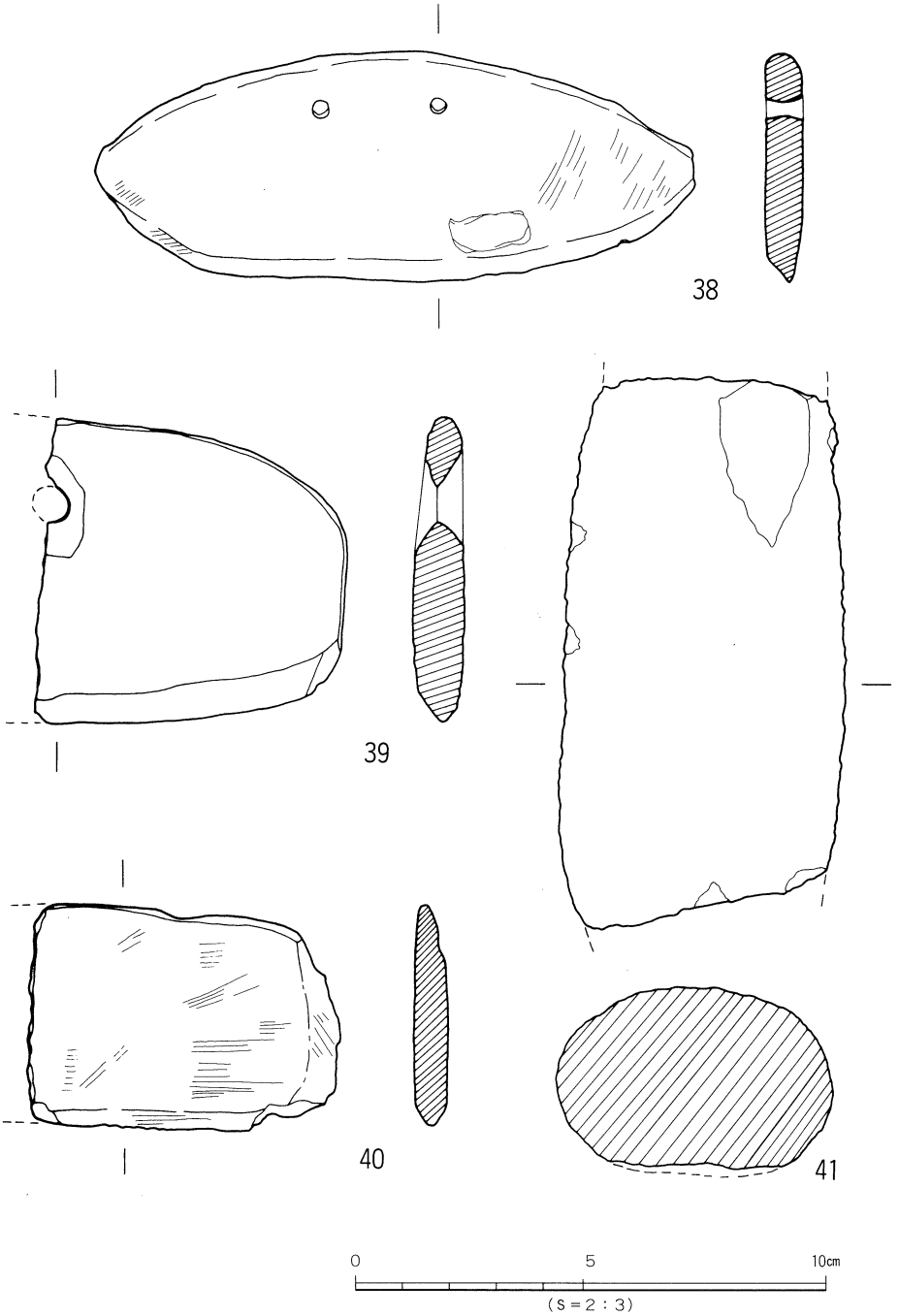
時期：遺物の残存状況は良くないものの床面に近い埋土の土器はいずれも、後期前葉に比定されるものばかりである。よって現時点では、本住居址の埋没時期は後期前葉に比定しておく。


WEST 縦
WEST
EAST
H 67.500m
H 67.500m
H 69.000m
H 69.500m
SP13
SP14
1 暗茶褐色シルト
2 黒褐色シルト
3 黒灰色シルト
4 灰褐色シルト
5 青灰色砂
6 黄色シルト
7 灰褐色砂
8 灰褐色シルト（焼土混入）
9 暗灰赤褐色シルト
10 赤褐色シルト（砂多し）
0 2 4m
(S＝1：80)

第12図　ＳＢ２　測量図



第13図　ＳＢ２出土遺物実測図（I）



第14図　ＳＢ２出土遺物実測図 (2)

2）古墳時代

古墳時代後期の住居址は3棟（ＳＢ１、3、7）である。地山で検出した。

ＳＢ１号住居址（第15図、図版８）

調査区北端中央部Ｄ６区に位置する。住居址南側半分は削平を受け破損している。平面形は方形を呈する。規模は南北２＋αm、東西5.14m、壁高15cmを測る。床面はやや軟質で平坦である。本住居址にはカマドが付設される。本住居址の壁体溝及び柱穴は未検出である。埋土は一層で暗灰褐色シルトである。また、本住居址北壁体に平行して東西2.93m、幅21cm、深さ６cmの壁体溝を検出した。よって本住居址は、建て替えられた可能性が高い（ＳＢ７）。

カマド（第16図、図版8・9）は、住居址の北壁中央で検出された。削平により上部を欠く為、天井部は未検出である。平面形は馬蹄形を呈する。カマドは、造り付けて縦・横断面の観察では、住居床面と北壁を掘り凹めた後に、黄色シルト（褐色混）により構築したことを確認した。黄色シルト（褐色混）は火を受けて赤く焼けている。また、カマド火床面中央からは坏部を下向きにした土師器の高坏形土器が出土している。器面がもろく二次焼成を受けている様相から、支脚代わりに使用された可能性が高い。

本住居址からの遺物は、床面からやや浮いた状態で、土師器破片と須恵器の坏身破片が出土している。

ＳＢ７出土遺物（第17図42・43、図版20）

石庖丁（42、43）　42、43いずれもわずかに一部を欠損するものの、形態は長方形を呈するものである。42、43とも刃部の右側の消耗が著しく、特に中央やや右が内湾する。

ＳＢ１出土遺物（第17図44～48、図版20）

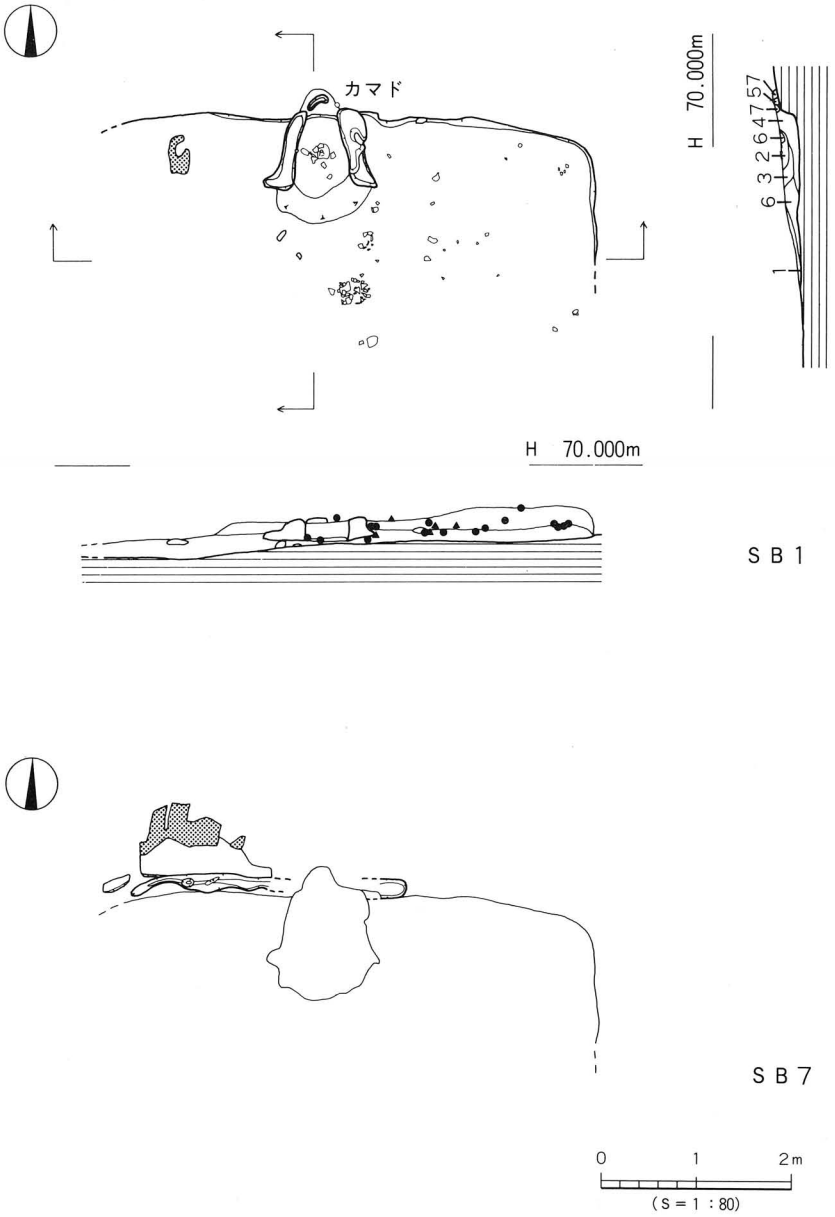
甕形土器（44、45）　44、45は小片である。44は胴部内面にケズリ痕はない。口縁内面にナデによる凹みがある。45は口縁部が外反の後、内湾して立ち上がる。44、45とも口縁端面は丸い。

高坏形土器（46）　46はカマドの支柱として転用された可能性が高いものである。坏部は浅いボール状を呈し、長い中実の柱部に、外反する裾部をもつ。器表面は磨滅している（火力によるものか？）。

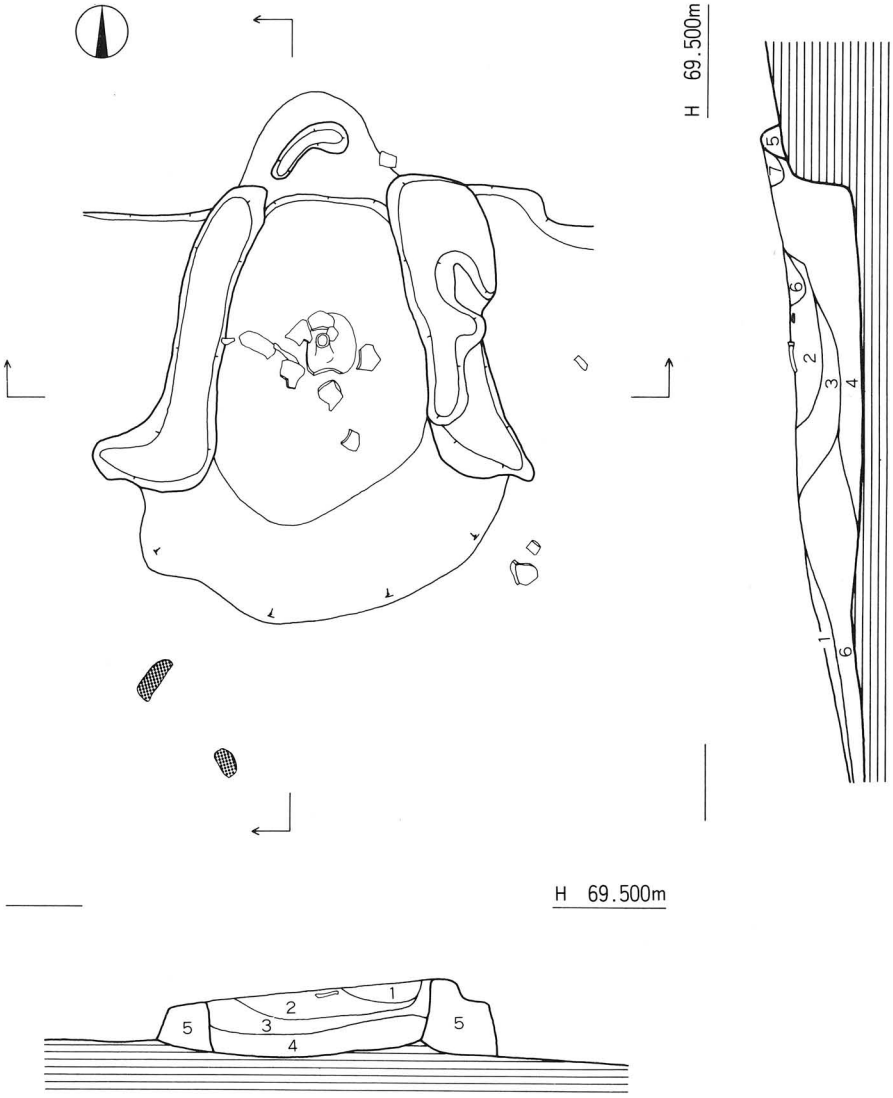
坏身（47）　47は高坏の坏身となる可能性もある。内傾する短い立ち上がりをもつ。焼成が不良である。

石鏃（48）　48は埋土中の出土品であり、流れ込みの遺物と思われる。体部に剥離面を残す、やや雑なものである。

時期：カマドより出土した高坏形土器は本住居址の廃絶期を知ることができる最良の遺物である。よって、本住居址の廃絶期を６世紀代に比定する。



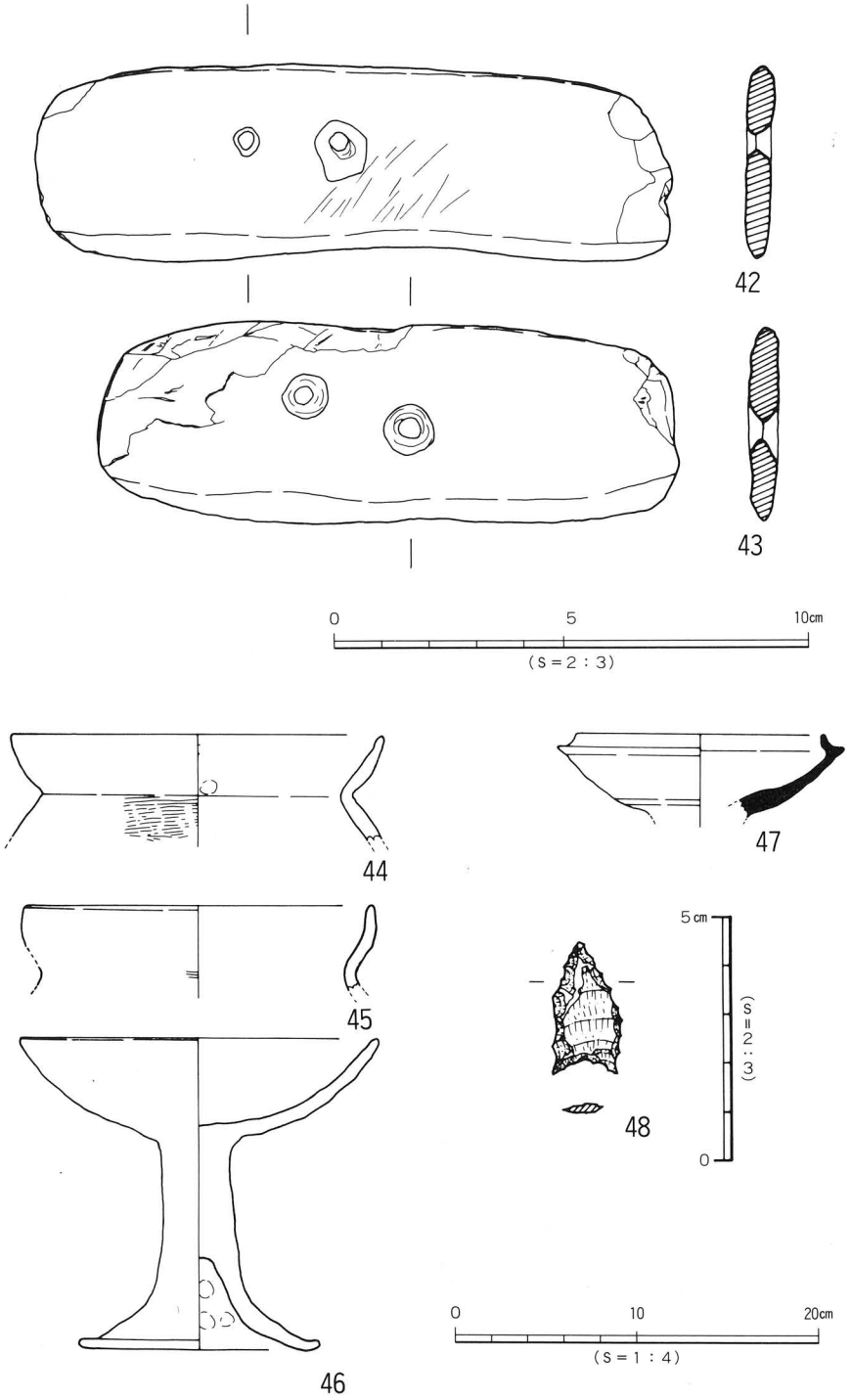
第15図　ＳＢ１・７測量図



1　暗灰褐色シルト（ＳＢ１埋土）
2　灰黄色シルト（砂多し）
3　茶褐色シルト
4　灰色シルト（炭混入）
5　黄色シルト（褐混）
6　暗灰褐色シルト
7　赤褐色シルト（焼土）

0　1m
（S＝1：20）

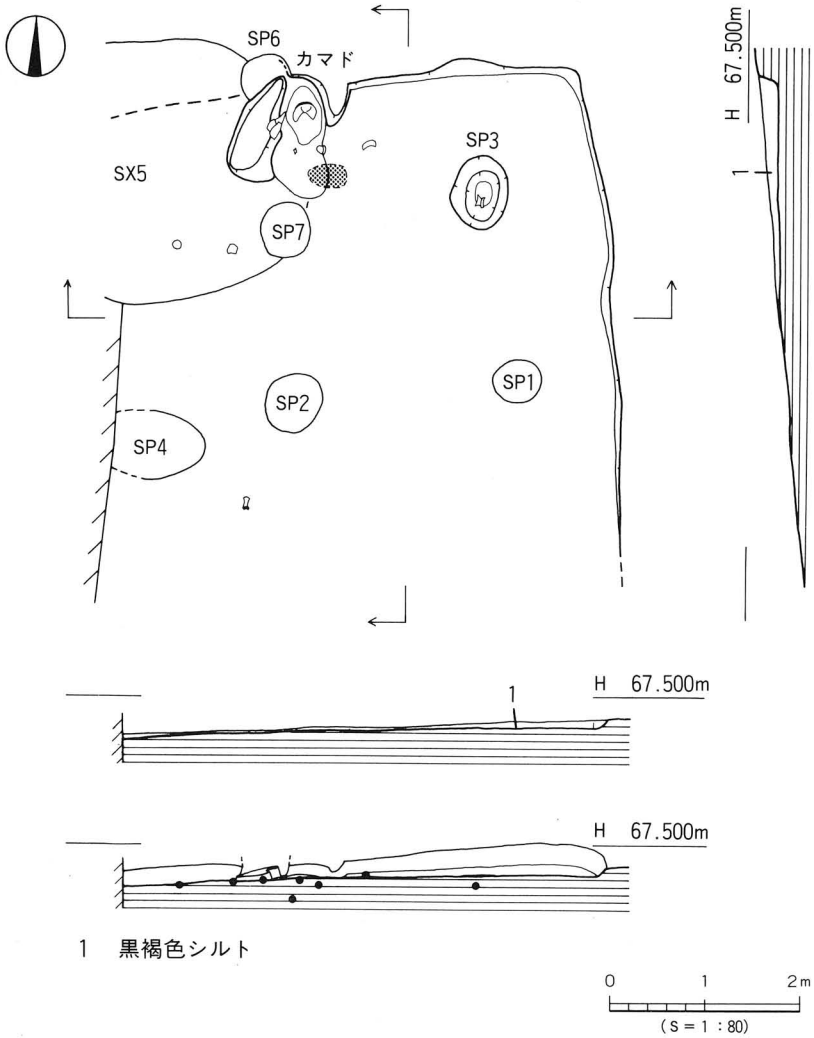
第16図　ＳＢ１カマド測量図



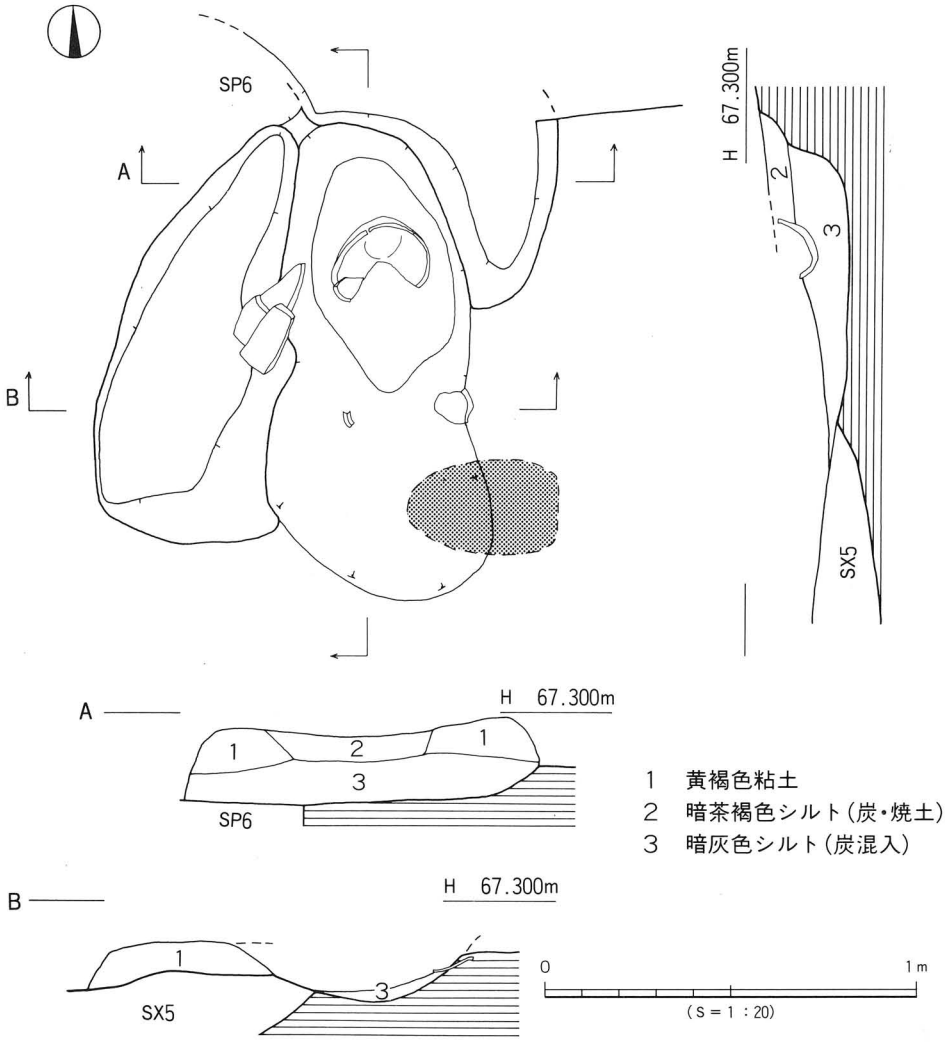
第17図　ＳＢ１・７出土遺物実測図

ＳＢ３号住居址（第18図、図版10―１）

調査区西端中央部Ｄ９区に位置する。住居址は調査区外におよぶ。南側は削平を受け破損している。平面形は方形ないし長方形を呈する。規模は南北5.3m。東西5.3＋αm、壁高20cmを測る。床面はやや軟質で平坦である。本住居址にはカマドが付設される。床面にて３基のピットを検出した。ＳＰ６，ＳＰ７は埋土が同様で、ＳＰ６はカマドの袖を除去後に検出されたことより、ＳＢ３以前のものである。ＳＰ３は埋土が住居址のものと同様であり、よって本住居址の主柱穴の１つである可能性が高い。なお、ＳＰ１，ＳＰ２，ＳＰ４は、本住居址埋土の上部から掘り込まれたものである。



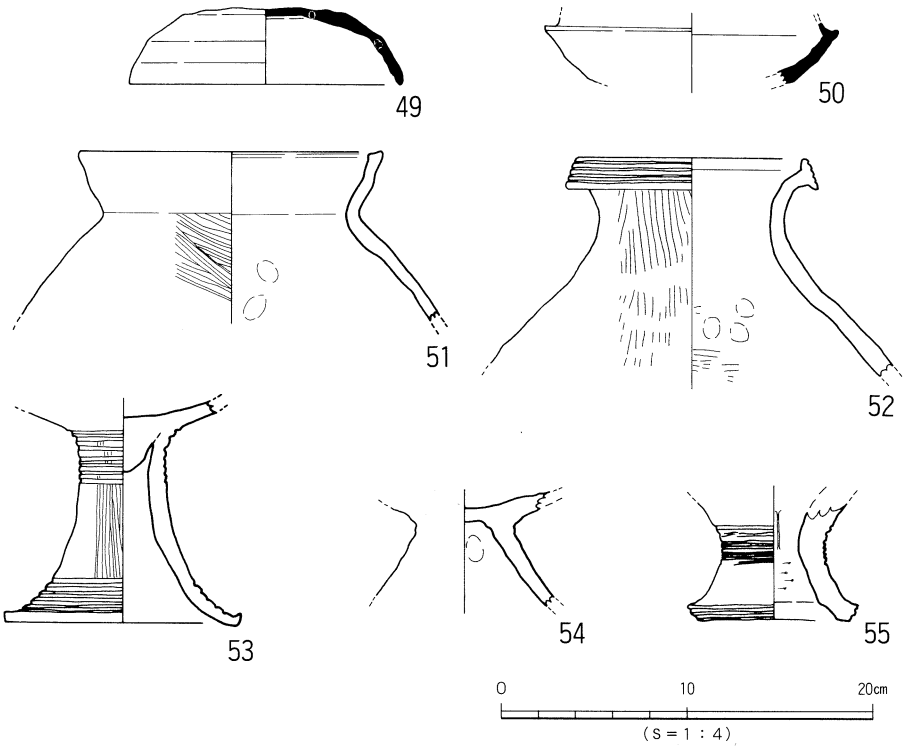
第18図　ＳＢ３測量図



第19図　ＳＢ３カマド測量図

カマド（第19図、図版10―２）は、北壁に位置する。天井部と煙路部は未検出である。また、袖部東側半部が欠損している。平面形は馬蹄形を呈する。カマドは、造り付けで縦・横断面の観察では、住居址床面と北壁を掘り凹めた後に暗灰色シルトを敷き、粘土をのせて構築したことを確認した。粘土は火を受けて赤く焼けている。火床面の前面（焚き口部）に楕円形状の炭（径41cm、厚さ２cm）を検出した。また、炭の上部からは第20図51の甕形土器の体部片が出土した。

住居址埋土は、黒褐色シルト（黄混）で上部に弥生土器片が少量混入する。床面直上からは土師器の小片数点が出土している。



第20図　ＳＢ３出土遺物実測図

出土遺物（第20図）

カマド出土遺物

土師器（51）　51はカマド内に出土した体部片と同一体の甕形土器の口縁部分である。外傾し、内湾ぎみに立ち上がる口縁部をもつ。口縁端面は内傾し、わずかに内側に突出する。

埋土出土遺物

坏蓋（49）　49は口縁部を１部欠く。口縁部屈曲部の稜はなく、口縁端は丸い。

坏身（50）　50は小片で、口縁端部を欠く。口縁部は内傾し短い。

弥生土器（52～55）　52は中期末～後期前葉の壺形土器である。口縁端部は拡張され、端面に擬凹線文(やや細い)を施す。53は高坏形土器の脚部である。坏底部は充塡技法である。柱上部と裾部に太い沈線文を施す。柱上部のものは坏部にまで施文がおよんでいる。柱部～裾部にかけては施文を施さない。54は高坏形土器である。形態は不明である。55は脚付（台付）鉢ないし小型高坏形土器になるものと思われる。４分の１の残存で、柱上部に６～７条の太い沈線文、脚端面に２条の凹線文を施す。

時期：カマド出土の甕形土器が本住居址の埋没時期を示す資料と考える。よって本住居址の埋没時期は５～６世紀前半に比定するものである。

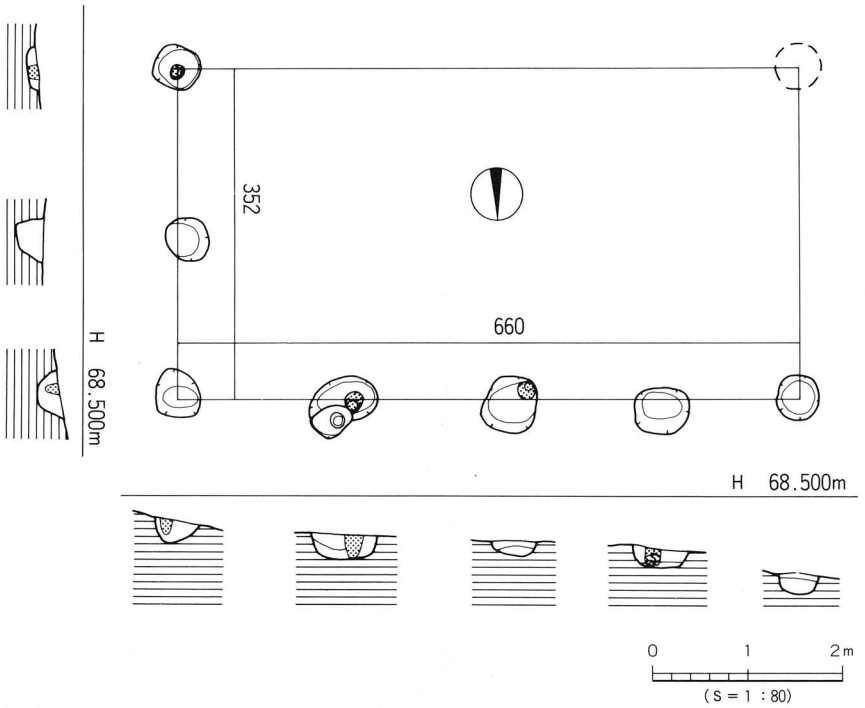
〔2〕掘立柱建物址

本調査において確認された掘立柱建物址は１棟である。

掘立柱建物址１号（第21図）

調査区北側やや西Ｄ７～Ｄ８区に位置する。ＳＢ２（弥生・円形住居址）を切り、ＳＸ02の下部で検出される。南西に位置する柱穴は削平により消滅している。建物跡は、２間×４間で桁行長7.0m、梁行長3.9mであり、柱穴間は桁行（1.8、1.78、1.2、1.33）m、梁行（1.53、1.52）mである。柱穴径43～60cm、深さ10～31＋α cm、柱痕径11cmである。埋土は灰褐色シルトである。

時期：本建物は、柱穴の掘り方が、ＳＢ２の埋土（黒褐色シルト）中であり、柱穴中より須恵器片が出土していることより、６ｃ以降の構築であると考えられる。



第21図　ＳＢ01測量図

〔3〕土　壙（P156—表14）

本調査において確認された土壙は14基である。ＳＫ５、９、10、11、14は第Ⅳｂ層上面の検出で、ＳＫ１は第Ⅵ層上面の検出、ＳＫ２、３、６、８、13、15はＢ層（間層）上面の検出で、ＳＫ４は第Ⅶ層上面の検出であった。

ＳＫ15号土壙（第22図、図版11～13）

調査区西壁沿い中央やや北寄りのＤ９区に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸3.5m、短軸2.8m、深さ１ｍを測る。壙底は、ほとんど傾斜せず平坦である。断面形は、検出面から緩やかに下り、角度を変えて落ち込む、角度変換地点の平面形は楕円形を呈し、規模は長軸2.83m、短軸2.1mを測る。埋土は、大きく三つに分層でき、上からⅠ層黒褐色シルト（黄混）、Ⅱ層黒灰褐色シルト、Ⅲ層青灰褐色シルト（砂多し）である。Ⅰ層黒褐色シルト（黄混）は、ＳＢ３の埋土である。

遺物出土状況は、Ⅱ層（黒灰褐色シルト）とⅢ層（青灰色シルト）との間、本土壙のほぼ中央部に20～30cm大の礫群が存在し、その下に折り重なるように弥生後期の土器が検出された。完形に近い大きな破片は床面に接して出土することが多い。完形品の壺56～61が出土している。

出土遺物（第23～34図、図版21～27）

最下部出土品（56～61）

長頸壺（56～60）　56は完形品である。胴部中位（最大胴径）に焼成後穿孔がある。頸部下端に板状工具の押圧による「ノ」の字状文が施される（回周する）。57は一部を欠くが、本来は完形品であったと考えられるものである。胴下部に焼成後穿孔があった可能性が高い。器表面の調整は刷毛目調整である。58は完形品である。肩部と胴下部に焼成後穿孔が各々１ケある。頸部下端に断面三角形の凸帯文を施す。器壁が薄く、焼成も良好である。59は完形品である。胴下部に焼成後穿孔がある。口縁部は、短く直立し外反（強く）する複合口縁となる。口縁外面には、ヘラ状工具による刺突文を施す。また、頸部下端にヘラ状工具による刺突文を施す。60は頸部上端以上を欠くが、体部は完存するものである。底部は短く立ち上がり、わずかに上がる上げ底を呈する。頸部下端に沈線文（擬凹線文？）３条、その下部に板状工具の木口による「ノ」の字状文を施す（回周する）。

短頸壺（61）　61は体部の一部を欠くが、本来完形品であったと考えられるものである。口縁端部はナデによりわずかに拡張され、端面は凹む。頸部下端にヘラ状工具による押圧の「ノ」の字状文を二段施す（回周する）。

最下部関連品（62・63）

短頸壺（62）　62は体部の一部を欠くが、完形品であった可能性が高いものである。口縁部はナデにより面をもつ。口縁下端にヘラ状工具の押圧による「ノ」の字状文を施す（回周する）。

複合口縁壺(63)　63は肩部以上が完存するものである。口縁部は内傾する拡張部をもち、拡張部上端はナデによる面をもち、外方にわずかに突出する。拡張部上面には上部より櫛状工具による横方向の沈線文（２条）と波状文（２条）を施す。また、頸部下端に板状工具木口の押圧による「ノ」の字状文を施す（回周する）。

埋土Ⅲ層出土品（64～114）

甕形土器（64～82）

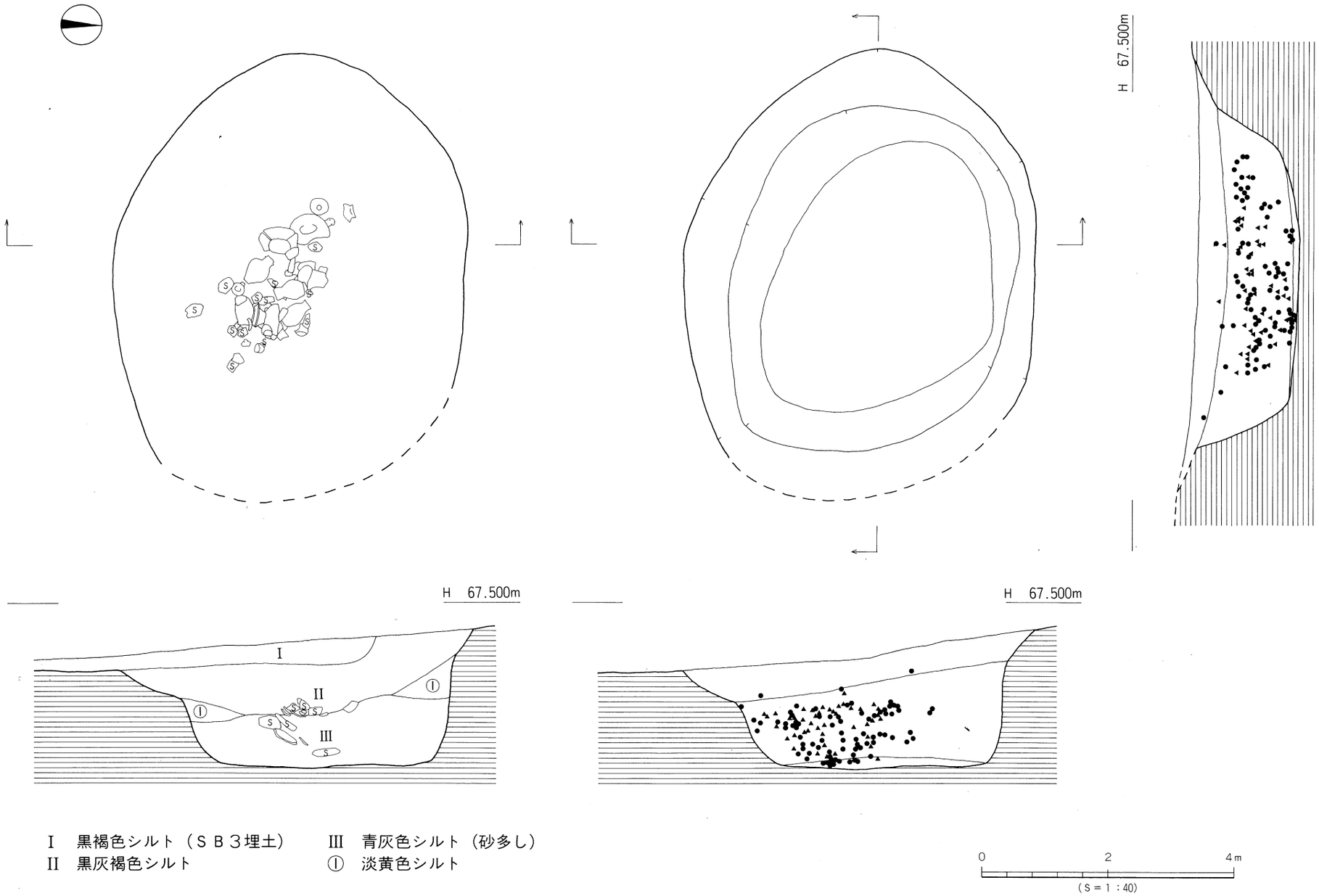
大形品（64～67）　64～67は口径が22cm以上の大形品である。64、65は最大径が胴中位と肩部の中間値に位置するもので、肩部の張りがさほど強くないものである。64は長い口縁部をもつ。65はやや厚めで、短く外反する口縁部をもつものである。頸部下端にヘラ状工具の押圧による「ノ」の字状文を施す。66・67は64・65に比べ肩部の張る形態をもつものである。口頸部は短く外反し口縁端部はナデによりわずかに拡張される。67は口縁端面はナデ凹み、頸部下端にヘラ状工具の押圧による「ノ」の字状文を施す（回周する）。

中形品（68～79）　68～79は口径が14～20cm、器高が24～29cm以上の中形品である。最大径と胴部・口縁部形態により三分類できる。68～70は、最大径が胴中位にあり、肩部の張りが弱いものである。70は口縁部がやや厚く、口縁端面はナデにより面をもつ。71～74は肩部が強く張り、最大径が肩部の下端にあるものである。口縁部は短く、口縁端部をやや拡張する傾向にある。71は口縁端面に２条の沈線文（擬凹線文）と頸部下にヘラ状工具の押圧による「ノ」の字状文がある。72は口縁端面がナデ凹む。75は中形品のなかでもやや小型のものである。肩部の張りが強く、肩部下端以下をヘラ削りする。76、77は最大径が口縁部ないし肩部の両方に求められるものである。胴部は肩部以下をヘラ削りする。77は胴上位の外面調整がヨコ刷毛目調整となる。78、79は胴部以下の破片である。78は肩部が強く張る形態のものに、79は口径と胴部径との両方に最大径が求められる形態のものの体部片である。

小形品（80～82）　80は２分の１の残存である。底部がくびれの上げ底である。胴部以上は、中形品の口径と胴部径の両方に最大径が求められる形態のものと同じ形状をとる。最大胴径以下はヘラ削り痕が看取される。81は肩部が張る中形品71～74の形態の小型品である。82の胴下半部内面は、指による強いナデ上げが看取される。

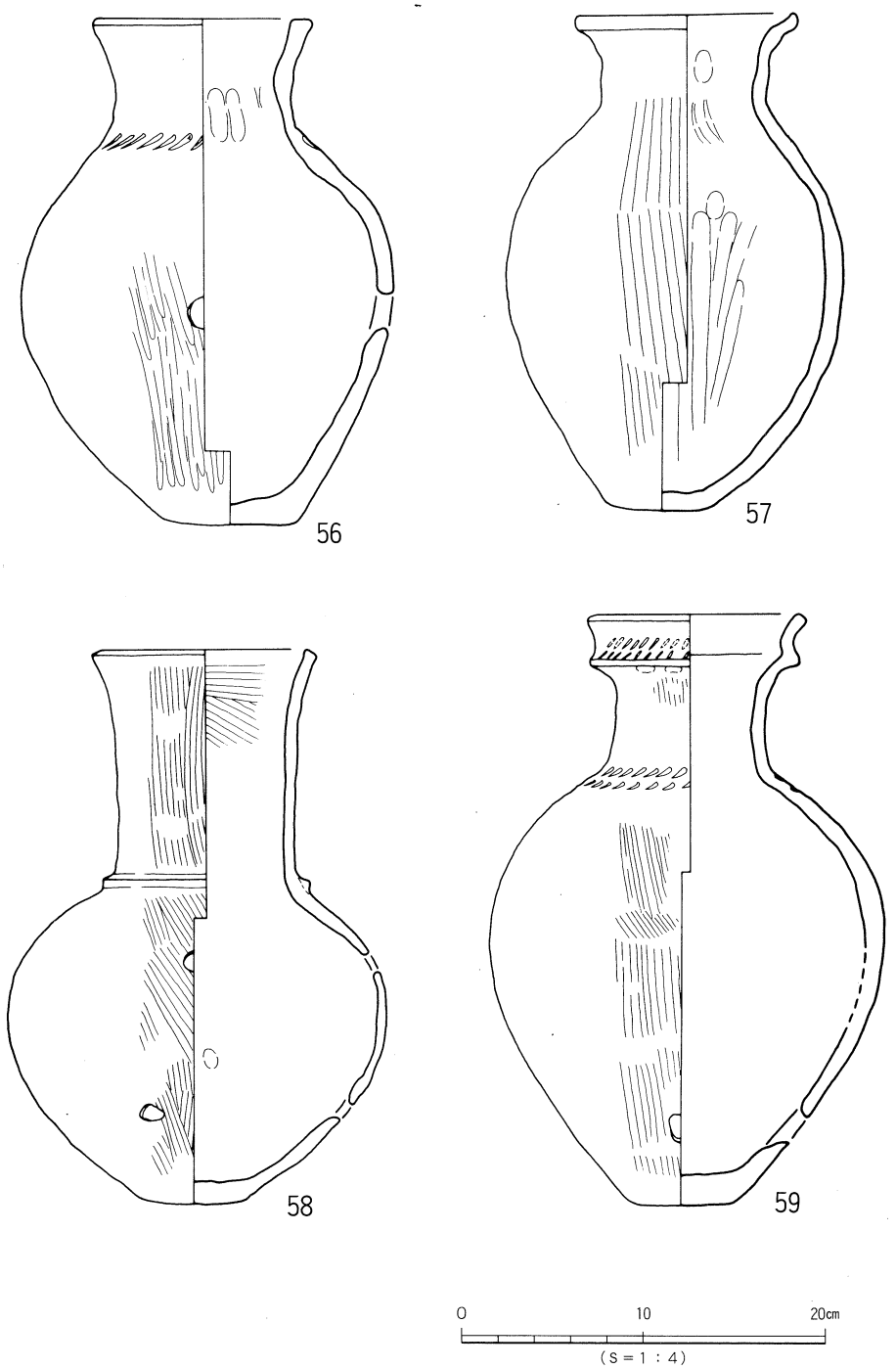
壺形土器（83～98）　複合口縁壺、短頸壺、長頸壺がある。

複合口縁壺（83～86）　83は複合口縁接合部が「コ」字状に仕上げられるものである。接合部には擬口縁が看取され、複合口縁部の製作技法が知れる。口縁端部は外方にわずかに突出し、端面はナデ後、沈線文（擬凹線文）２条が施される。口縁部外面には４条の沈線文（櫛状工具）と櫛状工具による山形文（４条一組）が施され、口縁接合部外面にも２条の沈線文（擬凹線文？）が施される。また、頸部にも８条の擬凹線文とヘラ状工具による列点文が施される。84は複合口縁接合部が「く」の字状を呈すものである。口縁部外面と口縁部端面に擬凹線文を施す。口縁端部はわずかに内・外方に突出する。85、86は複合口縁壺の頸～胴部

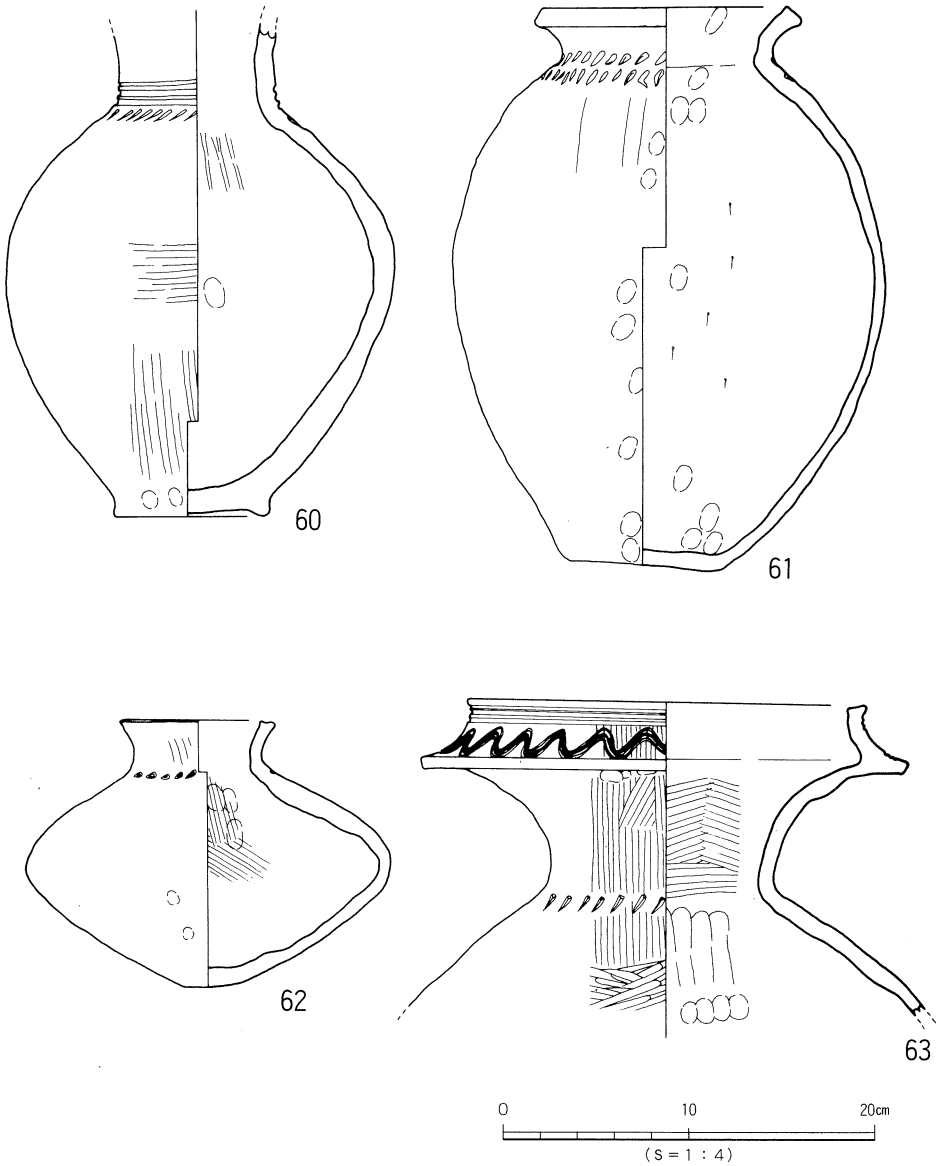


I　黒褐色シルト（ＳＢ３埋土）　　III　青灰色シルト（砂多し）
II　黒灰褐色シルト　　①　淡黄色シルト

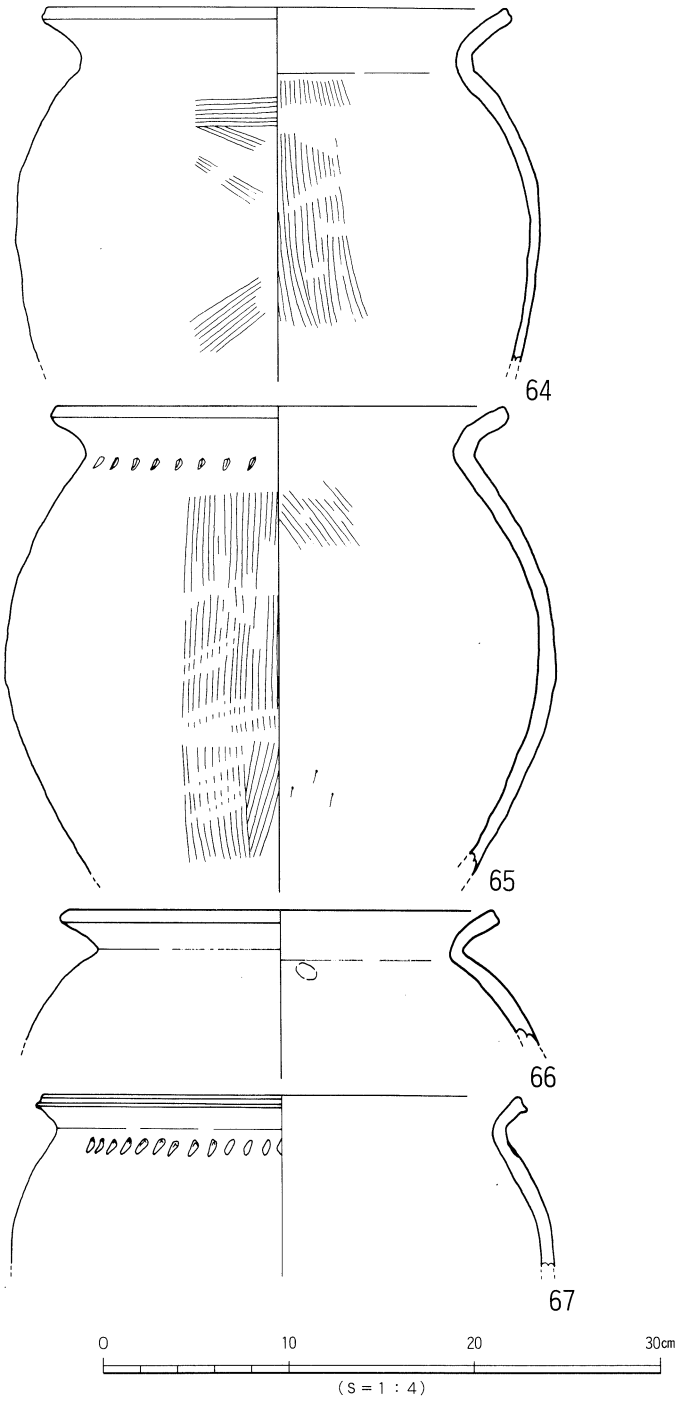
第22図　ＳＫ15　測量図



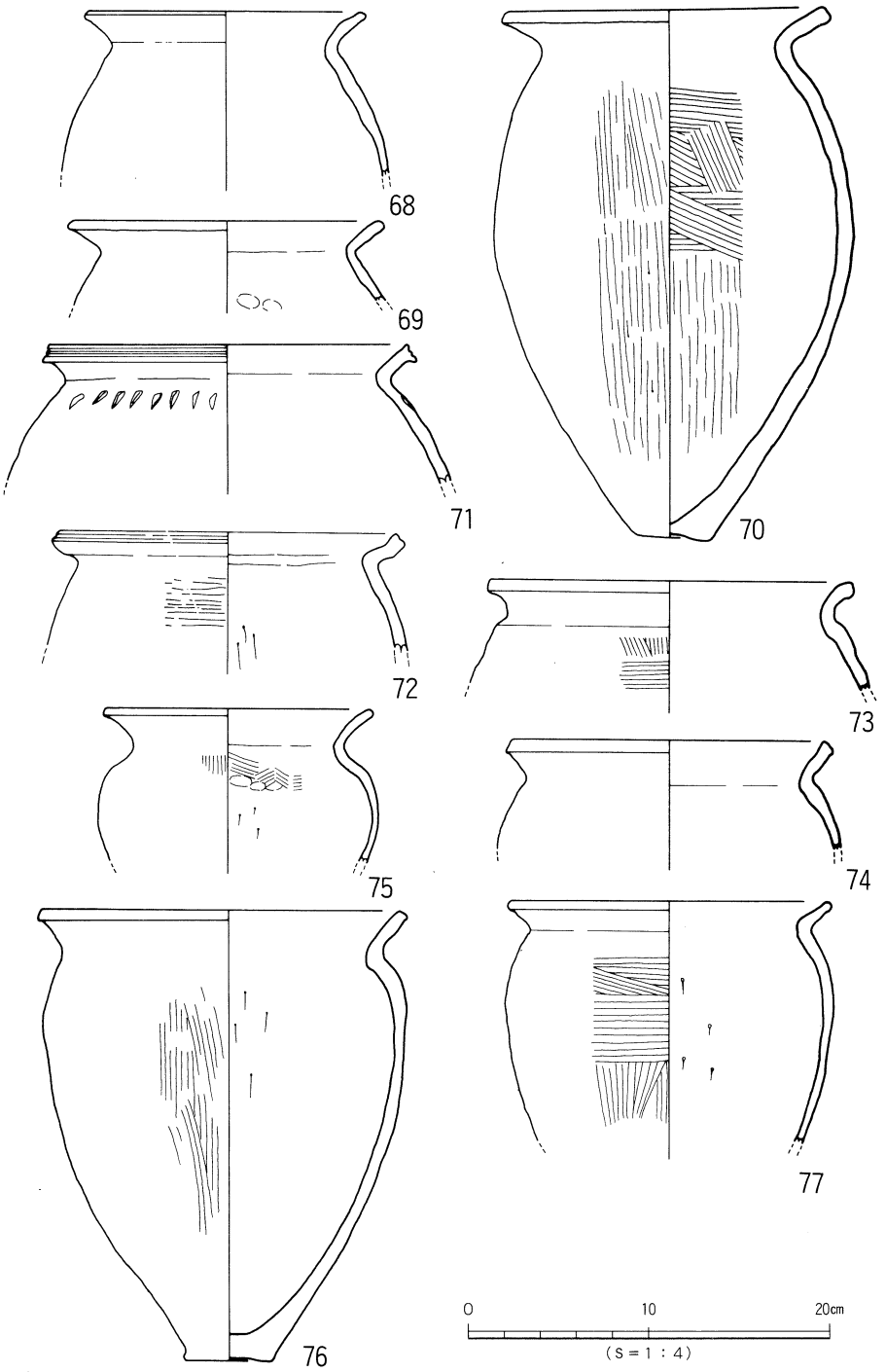
第23図　ＳＫ15最下部出土遺物実測図



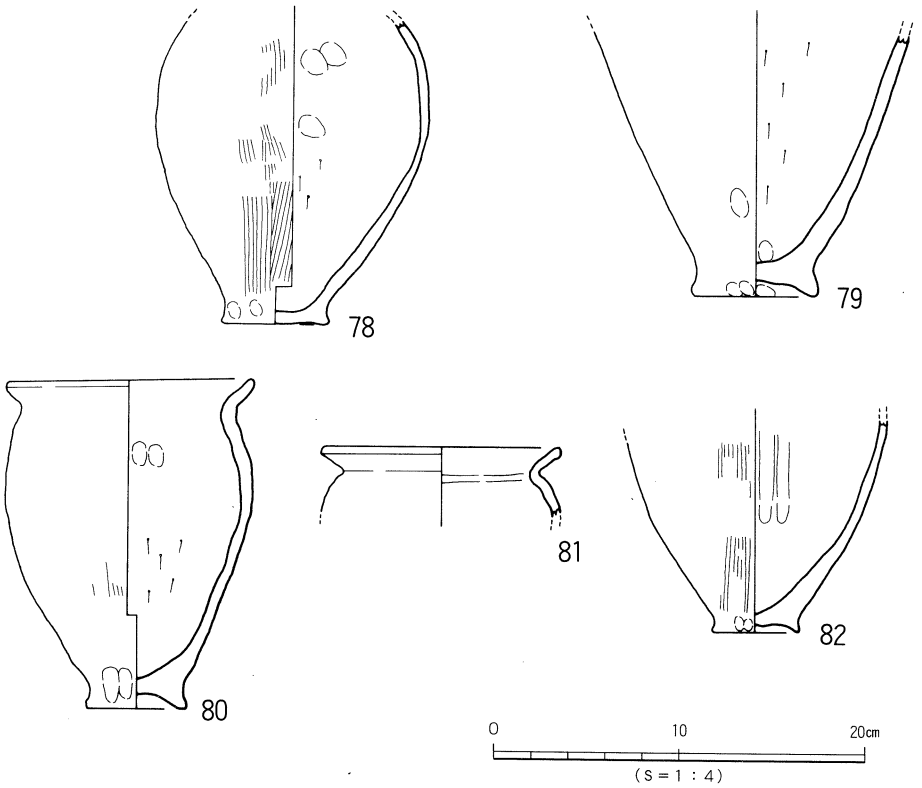
第24図　ＳＫ15最下部他出土遺物実測図



第25図　ＳＫ15Ⅲ層出土遺物実測図（1）



第26図　ＳＫ15Ⅲ層出土遺物実測図 (2)



第27図　ＳＫ15Ⅲ層出土遺物実測図 (3)

の破片と考えられるものである。85は頸部に断面三角形の貼り付け凸帯とヘラ状工具による刺突文がある。86は83と同形態を示す複合口縁壺の頸～胴部片の完存品である。頸部に7条の凹線文と板状工具の木口による列点文を施す。

短頸壺（87～89）　短く外反する口縁部を有する短頸壺である。87は肩部が強く張る。口縁端部はナデにより凹む。88は磨滅が著しい。口縁端部は丸みを帯びており、端面下端が下方に小さく突出する。89は小片で87と同形態を示す。口縁端面はナデ凹みである。

長頸壺（90～94）　90、91は筒状の頸部に短く外面する口縁部をもつ。90は小片である。91は2分の1の残存である。外面は頸部下をタテ刷毛目調整を行う。口縁端は丸く仕上げる。92～94は比較的長い頸部を有するものである。92は維存状況が良い。やや扁平な胴部に、細く長い頸部をもつ。頸部下端には、やや扁平な凸帯を貼り付け、凸帯はヘラ状工具により刻目が施される。93は口縁部を欠くものである。肩部が張り、頸部下端にヘラ状工具による列点文を施す。94は頸部下端にヘラ状工具による大きめの列点文を施す。

壺形土器底部（95～98）　95、96は突出するやや丸みのある平底の底部である。95はナデにより内面が大きく凹む。97、98は上げ底の底部である。

高坏形土器坏部（99）　99は小片である。内湾して立ち上がるものである。ナデ調整がされる。器壁はやや薄い。

高坏形土器脚部（100～107）　101～107は内傾ないし直立ぎみの柱部に短く外反する裾部を有するものである。101～104、106は充塡技法を看取した。105も充塡技法によるものと考えられる。100は充塡かと思われるが確かでない。101は脚端面が拡張され、端面に2条の擬凹線文を施す。柱―裾部間に円孔を施す。102は器壁が厚く、長脚で異形である。104、105は柱部が太く短いものである。脚端面は拡張され2条の擬凹線文を施す。105は柱上部に2条以上の擬凹線文を施す。106は柱上部内面の観察により充塡技法が行われた可能性が高いと考えられるものである。脚端面はナデによりわずかに拡張される。107は小形品である。

鉢形土器（108～110）　108はやや大きい中形品の鉢形土器である。底部はやや不安定な平底である。口縁端部はナデによりやや拡張され、端面はナデ凹みとなる。109、110は鉢形土器に付く脚部片である。109はくびれの上げ底を呈する。110は器壁が厚いくびれの平底を呈する。

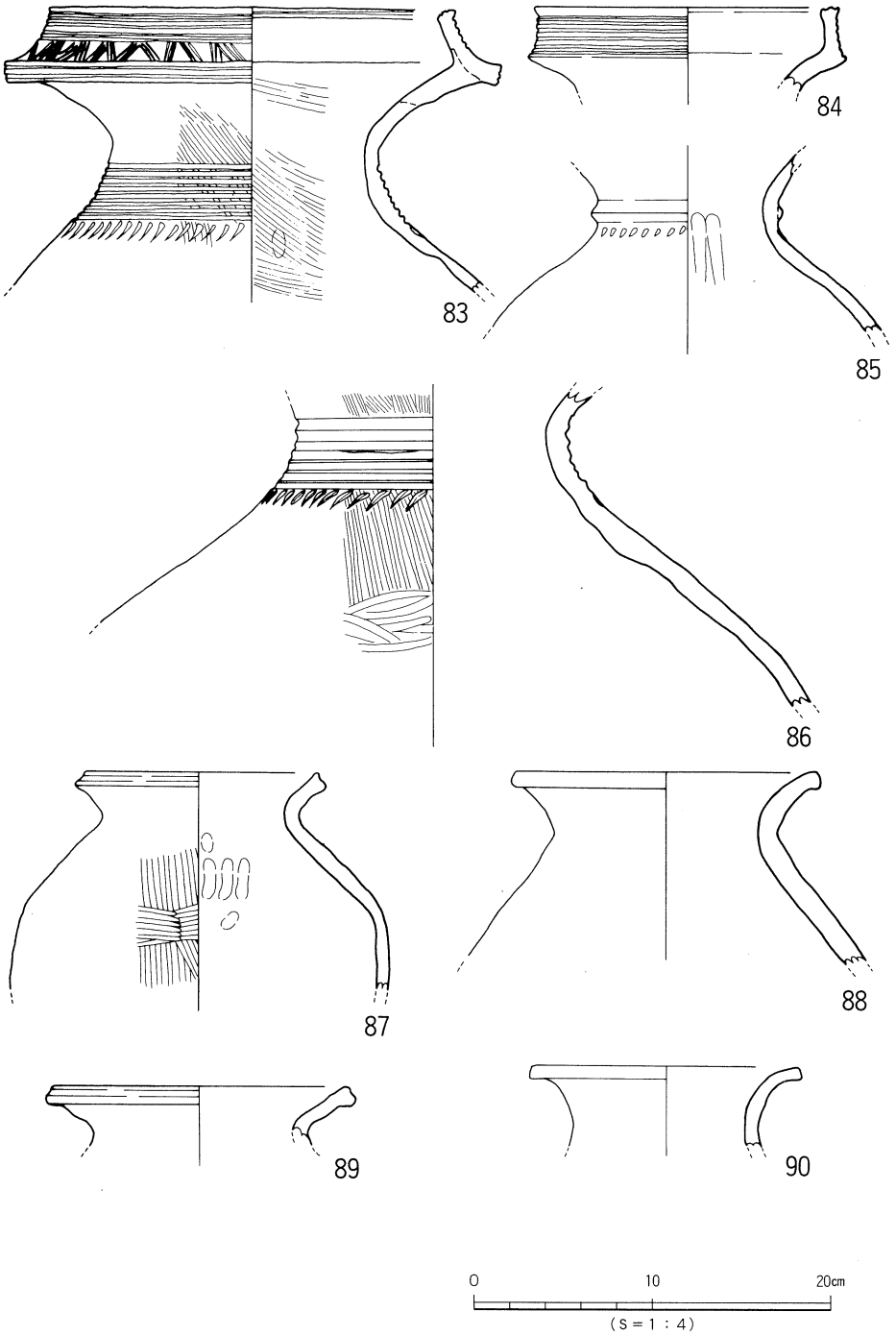
ミニチュア土器（111）　111は甕ないし鉢形土器のミニチュア土器である。くびれの上げ底をもつ。ナデによる仕上げを行う。

石器　3点が出土している。

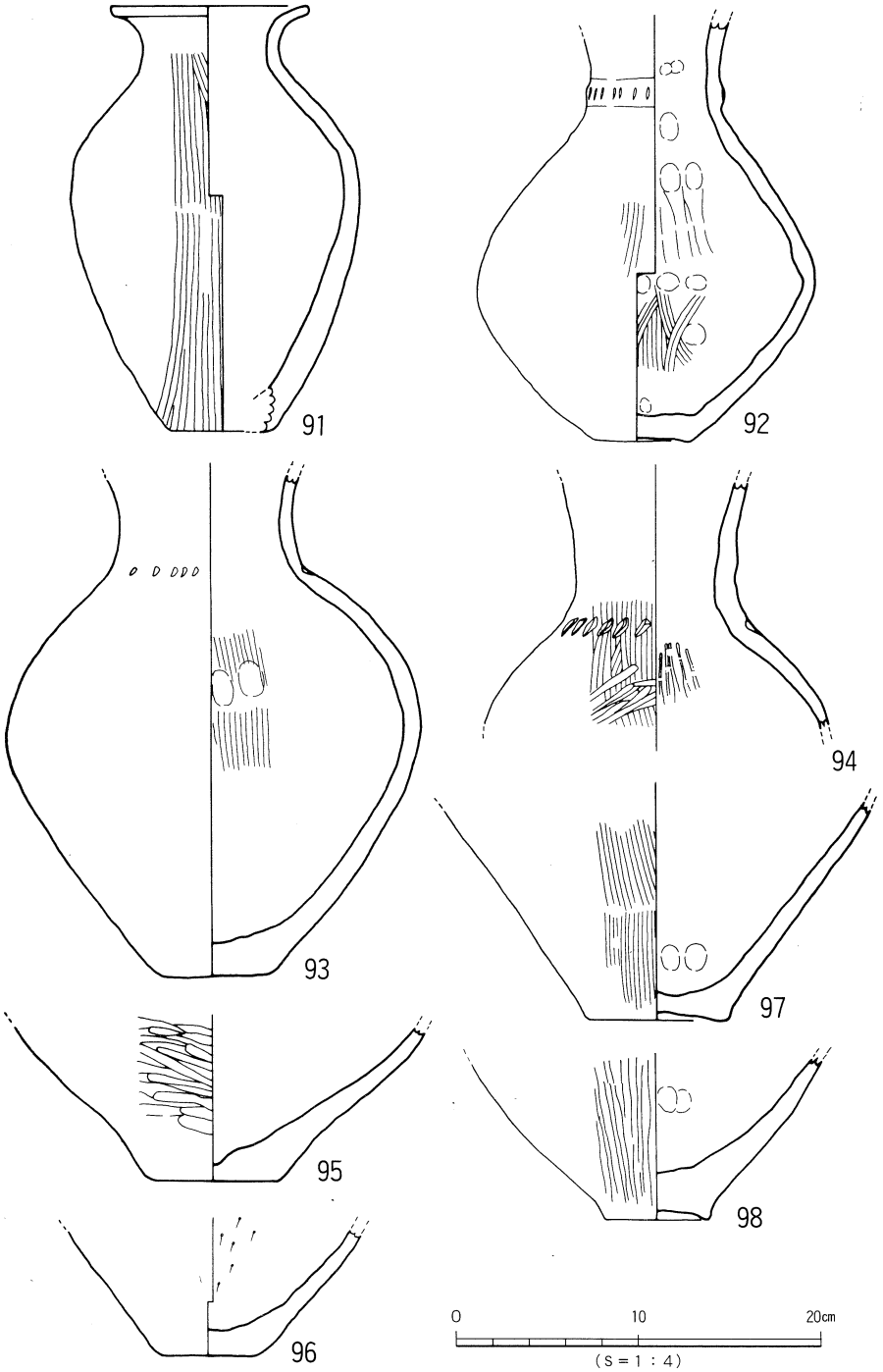
石斧（112）　112は柱状片刃石斧である。刃部と基部を欠く。稜があまい仕上げである。234.3gである。

石錘（113）　113は有溝石錘の完形品である。溝は「V」字状である。245.5gである。

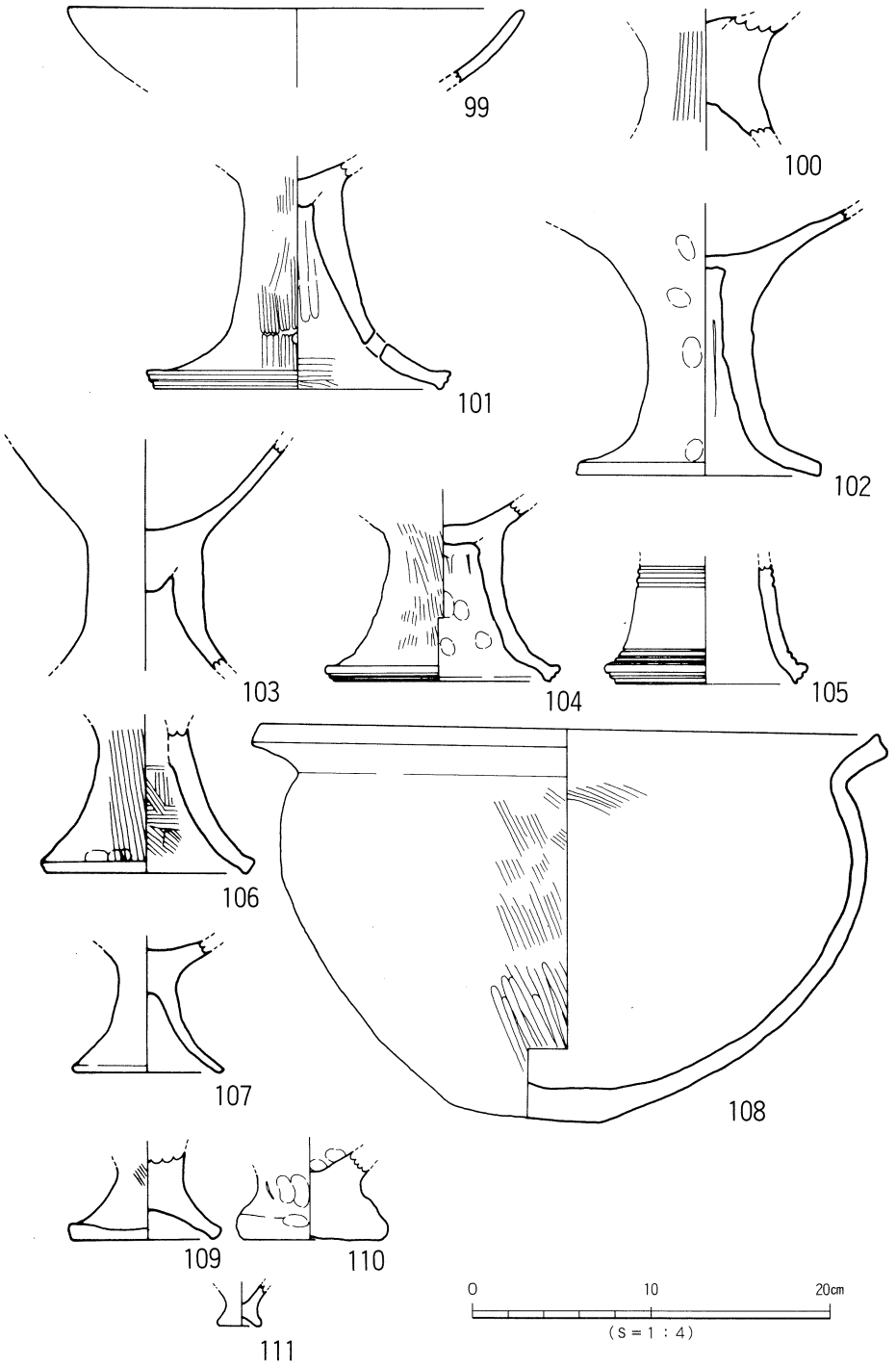
磨き石（114）　114はやや扁平の磨き石である。554.0gである。



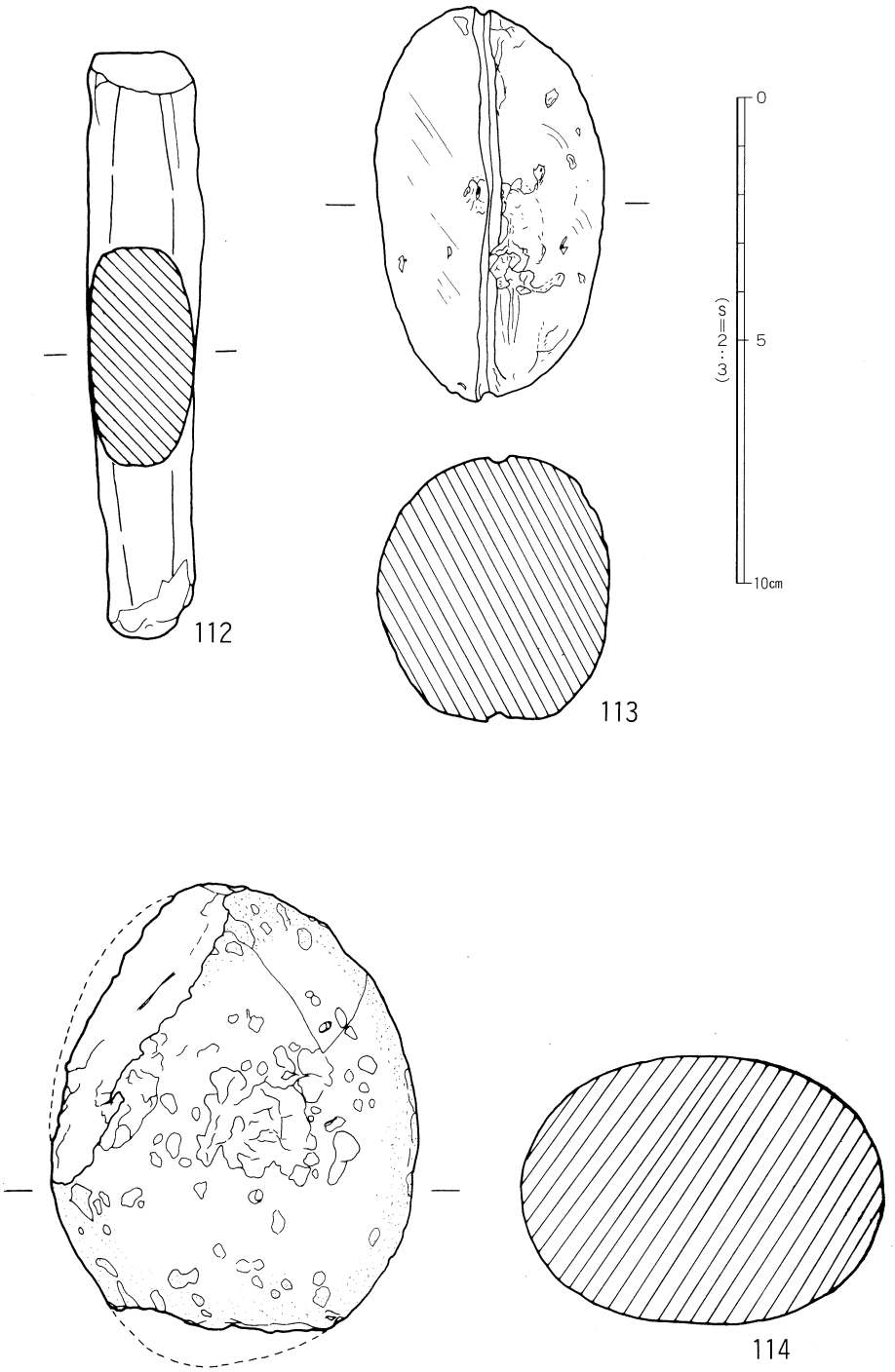
第28図　ＳＫ15Ⅲ層出土遺物実測図 (4)



第29図　ＳＫ15Ⅲ層出土遺物実測図 (5)



第30図　ＳＫ15Ⅲ層出土遺物実測図 (6)



第31図　ＳＫ15Ⅲ層出土遺物実測図 (7)

埋土II層出土遺物（115～148）

甕形土器（115～118）　115、116は口縁部小片である。「く」の字状口縁で、頸部内面に弱い稜をもつ。117、118は底部片である。117はくびれの平底で、118は上げ底を呈する。

壺形土器（119～127）　119、120は短頸壺である。119は頸部に指頭圧痕の貼り付け凸帯をもつ。口縁端部は、外下方に拡張され、端面にはヘラ状工具（2本一組）による山形文を施す（磨滅しており口縁下端面は不明）。120は器壁がやや厚い口縁部をもつ。121、122はやや長めの頸部をもつものである。121は口縁端部はわずかに拡張され、端面に2条の擬凹線文を施す。頸部下端には、板状工具（木口）の押圧による列点文が施される。122は外傾する口頸部をもつ。口縁端部はナデにより拡張され、端面はナデ凹む。123～125は広口壺である。123は頸部にヘラ状工具による沈線文4～5条と刺突文を施す。口縁端部上面はナデくぼむ（複合口縁壺になる可能性は低い）。124は口縁端部が拡張される。口縁端面と頸部に竹管状工具による刺突文が施される。126は胴部片である。頸部に凸帯文を貼り付け、上面は刻目が施される。また、凸帯下部に板状工具の木口による大きめの列点文が施される。127は底部片で、わずかに上げ底となる。

高坏形土器坏部（128～132）　128、129は小片で、外傾しわずかに外反するものである。130は外傾し、大きく水平に開く口縁部を呈する。刷毛目調整が著しい。131、132は直立する口縁部を呈するものである。131は弱い稜をもつ。

高坏形土器脚部（133～141）　133～136は長脚のものである。133は脚端部がわずかに拡張され、ナデによる凹みをもつ。135は円孔が施されていることを看取した。136は中実の柱部をもつ。円孔を2ケ穿つ。137～141は低脚のもので、138、140は脚付鉢の脚部である可能性もある。137は脚端面は拡張されない。138は脚端面が内側に拡張され、内面に稜をもつ。137、138とも円孔が穿たれる。139は脚端部がナデによりわずかに拡張され、端面にナデ凹みをもつ。140は柱上・下部に二段4ケの小円孔を穿つ。141は小形品の小片である。柱上部に細沈線文を12条と下部にタテ方向の沈線文（矢羽根透かしの一部か）を施す。

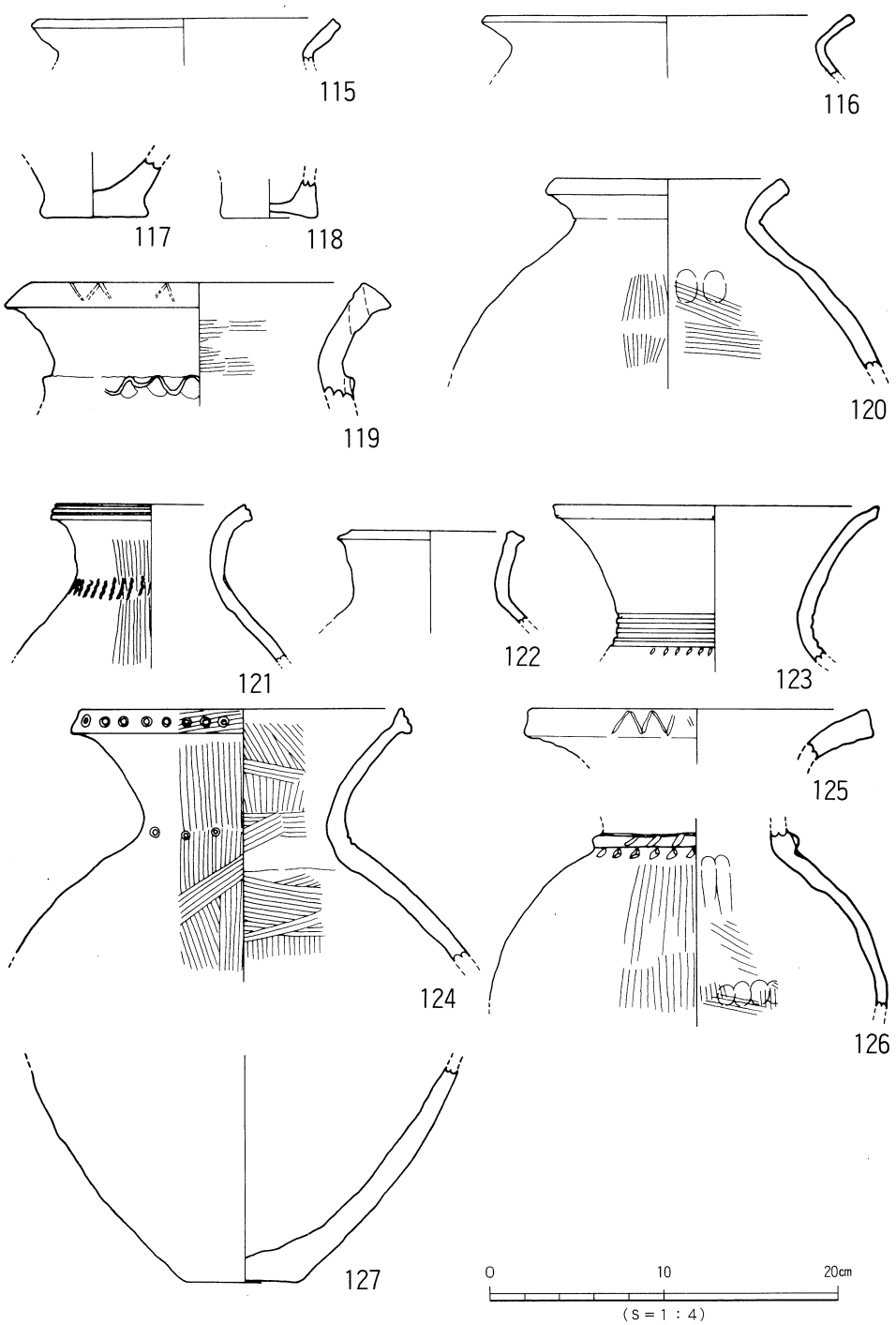
鉢形土器（142、143）　142、143はくびれの上げ底をもつ胴下半部以下の破片である。

器台形土器（144、145）　144は器壁が厚くやや大形の器台形土器の破片と考えられるものである。端部は下方に拡張され、端面に2条の擬凹線文が施される。145は器壁が薄いものである。受部上面に櫛状工具による（4本歯）による細い波状文が施される。

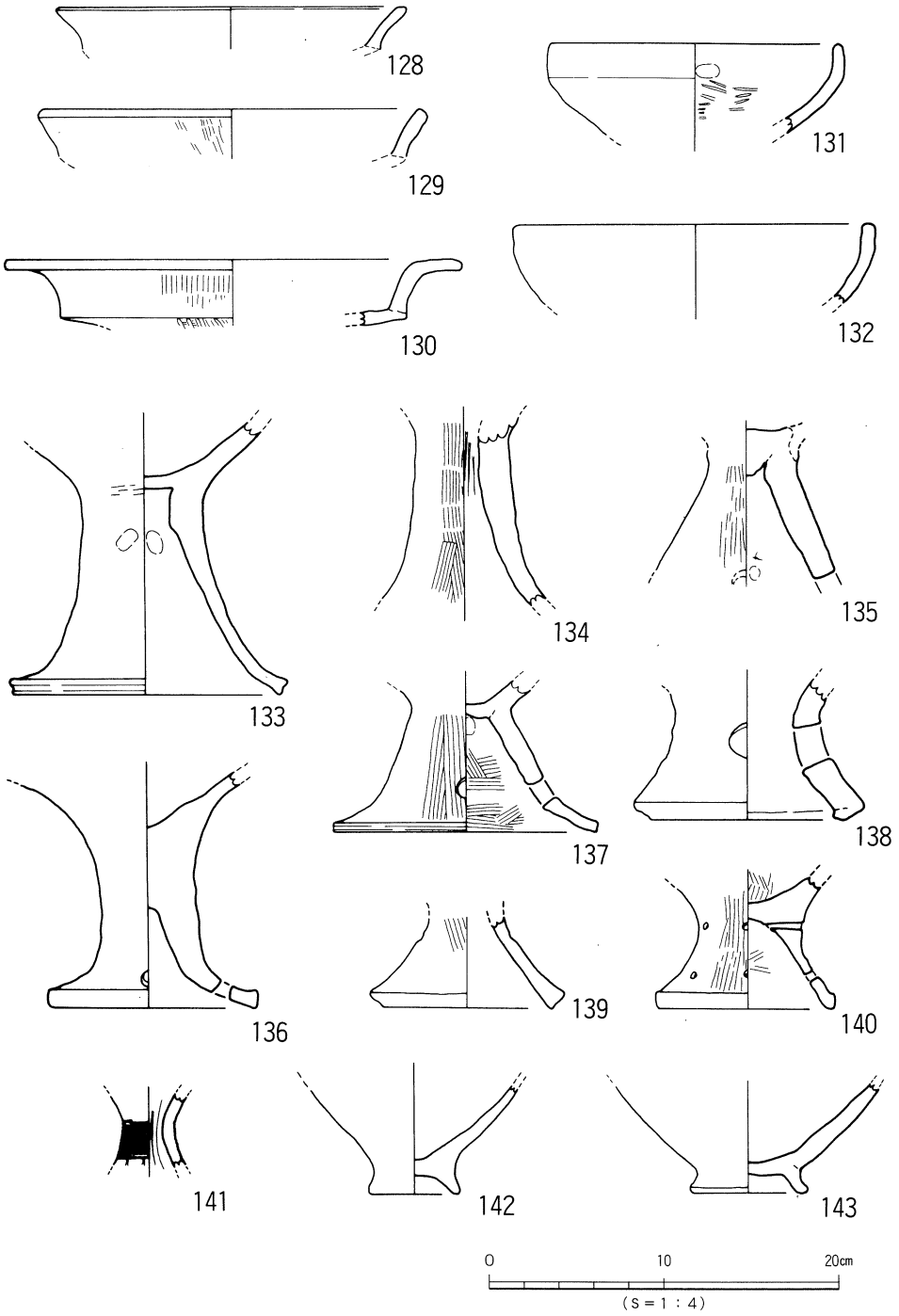
支脚形土器（146）　146は受部が傾斜し、中空の支脚形土器である。

ミニチュア土器（147）　147は甕形土器のミニチュア品と考えられるものである。

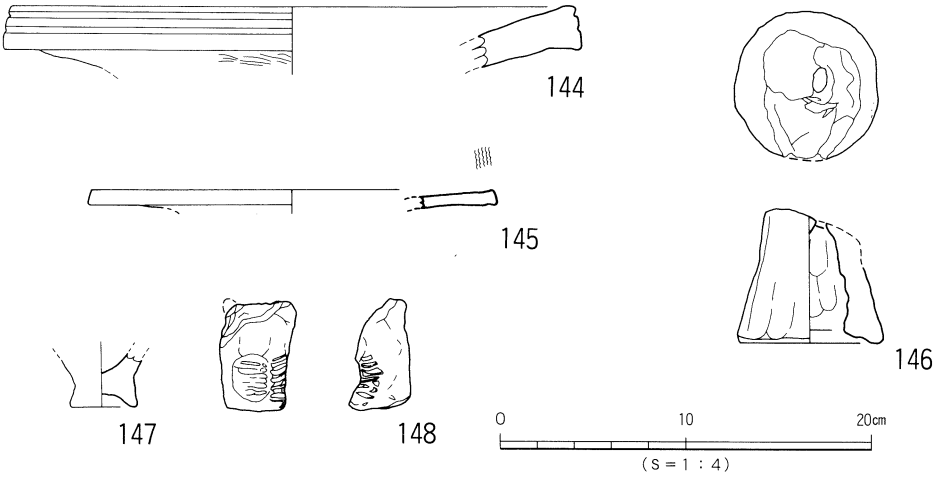
土製品（148）　148は器種器形不明の土製品である。擬口縁部を看取しており、何かの部分品であることが知れる。側面に刻目（6～7条二組）が施される。



第32図　ＳＫ15Ⅱ層出土遺物実測図（Ⅰ）



第33図　ＳＫ15Ⅱ層出土遺物実測図 (2)



第34図　ＳＫ15II層出土遺物実測図 (3)

表１　ＳＫ15器種構成と比率

	II　層	III　層	計	比 率 (%)
壺	37 (9)	40 (24)	77	35.6
甕	50 (4)	45 (19)	95	44.0
鉢		6 (3)	6	2.8
高　坏	21 (16)	9 (9)	30	13.9
器　台	2 (2)		2	0.9
支　脚	1 (1)		1	0.5
ジョッキ形	1	1	2	0.9
ミニチュア		1 (1)	1	0.5
不 明 品	1 (1)		1	0.5
計	114 (33)	102 (57)	216	99.6

〔注〕　1．個体認定は、口縁部及び底部片を対象として行った。
　　2．数量は、報告書未掲載品を含めたものである。
　　3．( )は、報告書掲載分である。

ＳＫ４号土壙（第35図、図版14）

調査区西壁沿い南寄りのＣ９区に位置する。遺構は調査区外に至る。ＳＸ010を切る。平面形は、円形ないし楕円形を呈すると思われ長軸172cm、短軸96cm、深さ20cmである。埋土は一層で黒灰褐色シルトである。遺物は、弥生後期の小形壺（完形品）、高坏（完形品）、壺の破片などが出土している。また、本遺構の性格については詳細は不明であるが、形状及び出土遺物がＳＫ15号土壙と近似しており、両方が同様の目的で掘られたものである可能性は高い。なお、ＳＸ010は、ＳＫ４の上部層になる。ＳＸ010の平面形は不整形な楕円形を呈し、埋土は大きく四層に分層ができる。上層から暗青灰色シルト層、中層黒灰色シルト層、下層黒色シルト層で、最下層がＳＫ４の埋土になる。

遺物は、上層と中層の間に20～30cm大の礫群が存在し、その礫群の下から弥生土器片が出土している。さらに下層からは、ＳＫ４を中心とした周囲から完形品（153、162、179）を含む弥生土器が出土している。

出土遺物（第37図、図版28）

甕形土器（149～152）　149は肩部の張りが弱く、最大径は口縁にあるものである。150は「く」の字状口縁部を有するもので、胴部最大径は胴部中位やや上にあり、口径を凌ぐものである。151は口縁端部に擬凹線文（？）が施されている。152は底部片である。わずかに上げ底を呈するものである。

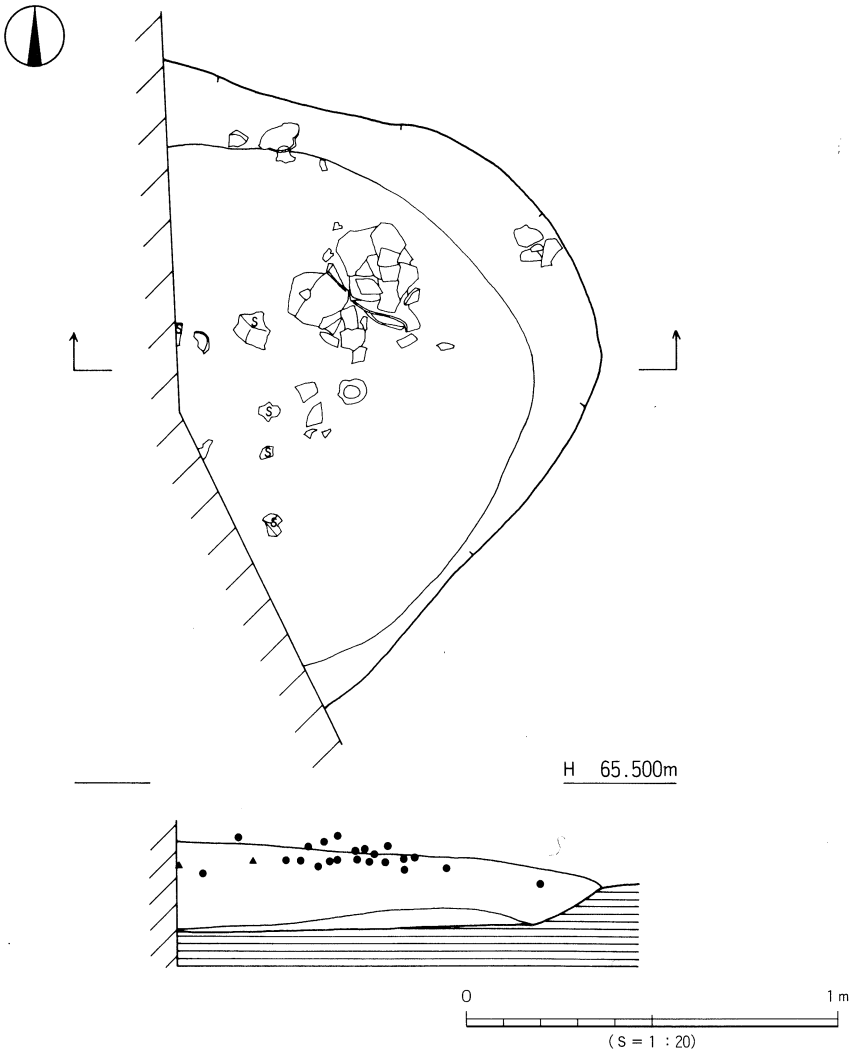
壺形土器（153～157）　短頸壺、広口壺がある。

短頸壺153は肩の張った体部に強く外反する口縁部をもつ。口縁端面には擬凹線文２条が施される。外面刷毛目、内面胴下半にはヘラケズリ調整が見られる。155はくびれて短く、やや外傾する口縁部がつくものである。また、口縁接合部が「く」の字状を呈すものであり、稜が鈍く丸みのあるものである。157は小形品のほぼ完形品である。鋭く外反する短い口縁部をもち、頸部には小円孔を２個２対穿っている。また口縁端面にはナデ調整による凹みが看取できる。広口壺156は中形品の破片である。口縁端部がわずかに肥厚され、端面は強いヨコナデが施される。

高坏形土器（158）　158は直口口縁の坏部に低い脚部をつけたものである。脚部端面は強いヨコナデにより稜が形成される。

ＳＸ010出土遺物（第38・39図、図版29）

甕形土器（159～161、165）　「く」の字状口縁部を有する甕形土器群である。159は肩部の張りが弱く、胴部最大径は口径とほぼ同じである。若干口縁部を欠くものの、ほぼ完形品である。外面刷毛目、内面ヘラズリ調整が看取される。底部はくびれの上げ底である。160、161は底部片である。共にくびれの上げ底を呈する。165は口縁部片である。外反する口縁端部にわずかに面をもつものである。



第35図　ＳＫ４測量図

壺形土器（162～164、166～171）　複合口縁壺、長頸壺、短頸壺がある。

短頸壺162は、短く内傾する頸部に外反する口縁部がつくものである。口縁端面が短く直立するものである。外面刷毛目、内面胴部中位刷毛目、胴部下位へラズリ調整が看取できる。広口壺163は大形品の破片である。口縁端部がわずかに肥厚され、端面には擬凹線文３条が施される。

複合口縁壺164は外反後、内傾する複合口縁をもつ。166は口縁拡張部の破片である。斜格子目文が施されている。

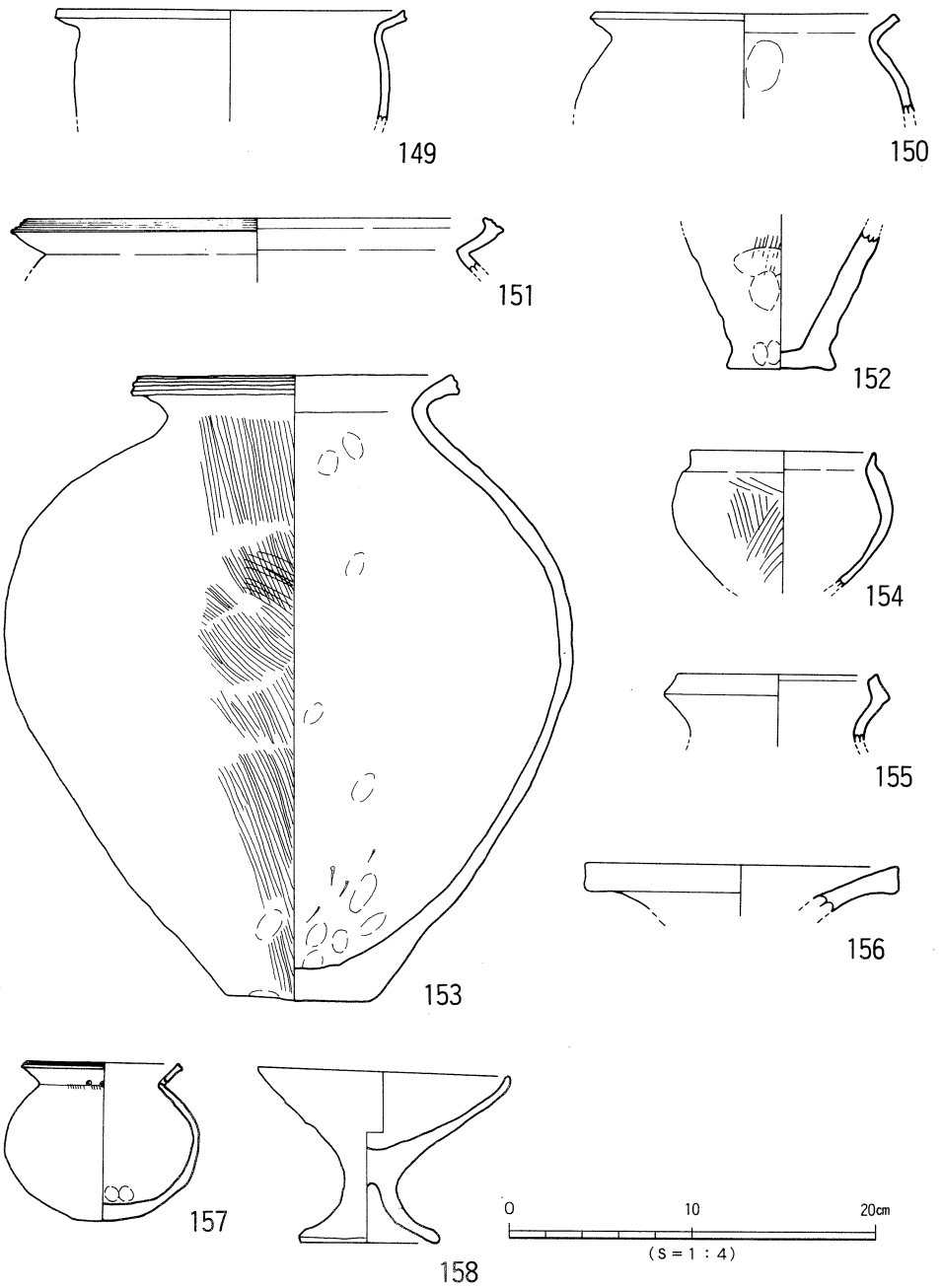
長頸壺169は頸部にへラ描沈線文５条が看取できる。167、168、170は胴部片である。161は胴中位やや下に屈接部をもつ。164は頸部に沈線文１条とへラ状工具による刺突文をもつ。

1 暗青灰色シルト(白色砂粒含む) 2 黒灰色シルト 3 黒色シルト
4 暗青灰色シルト

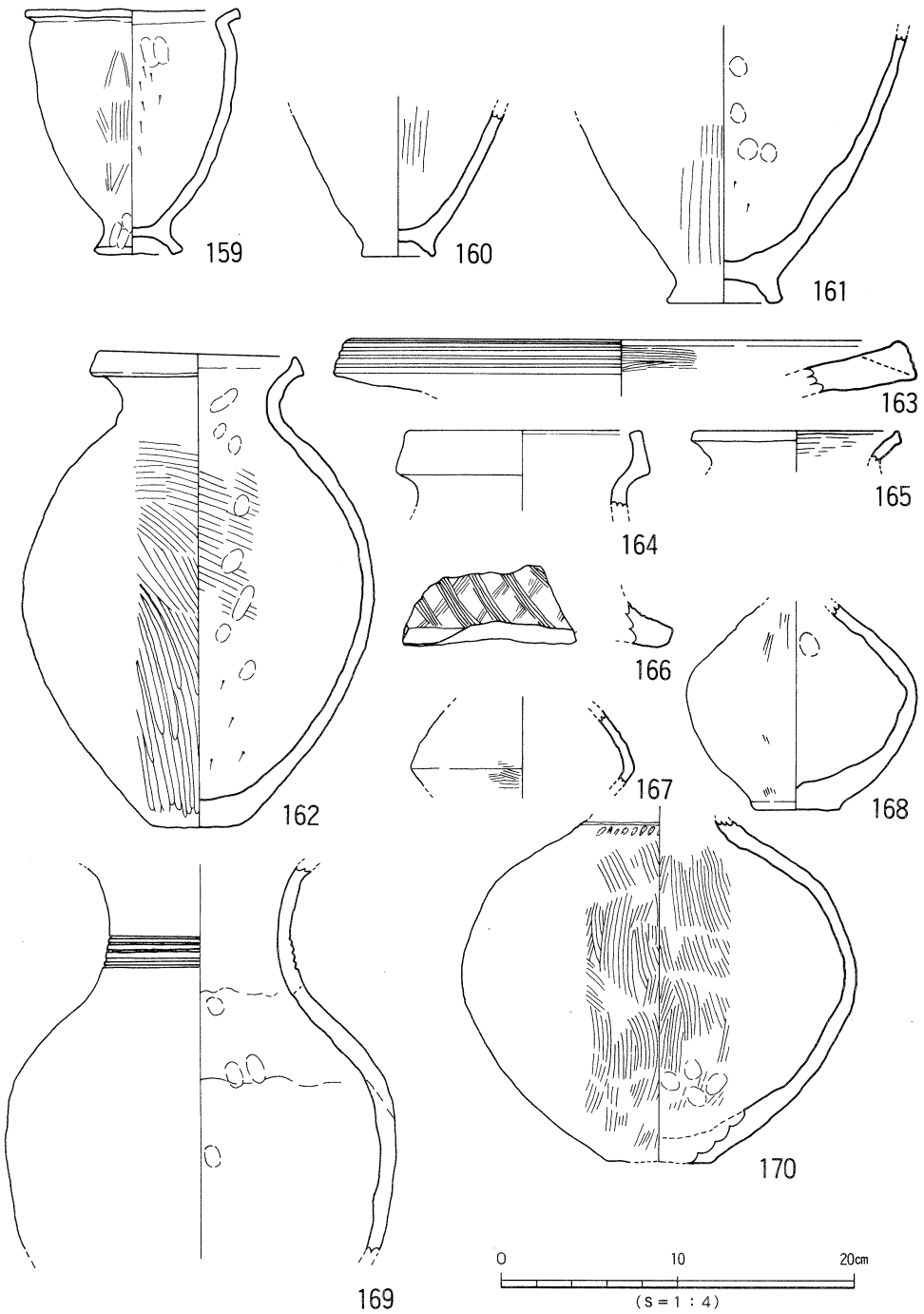
第36図 S X010測量図

底部(171) 171は中形品の壺形土器の底部片である。やや大きめの平底でわずかにくびれ、丸みをもって突出するものである。

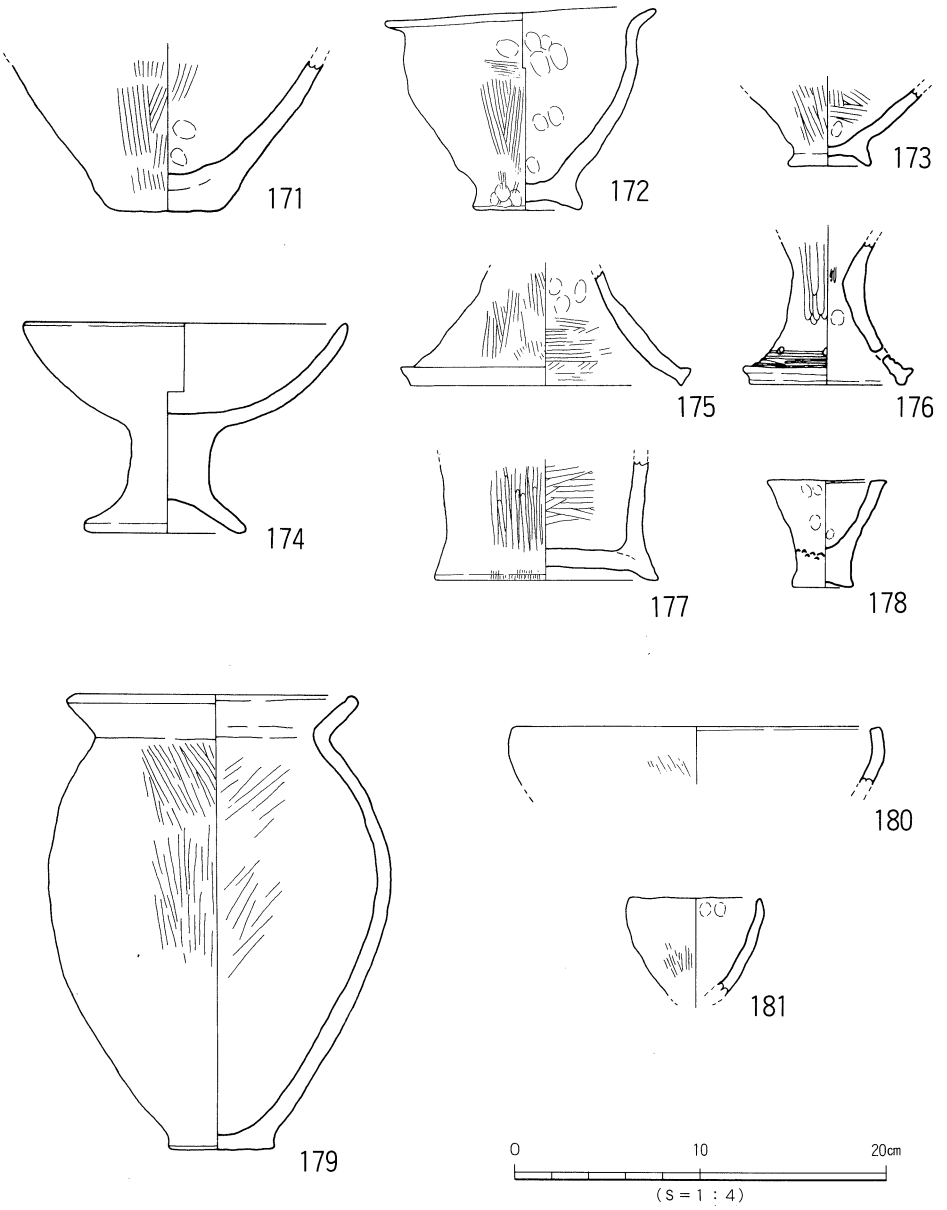
鉢形土器(172、173) 172は器高値が口径値に迫るものである。外傾して立ち上がる口縁部をもつものである。口縁端部は先細りして丸くおさまる。173は小形品の底部片である。くびれの上げ底を呈する。



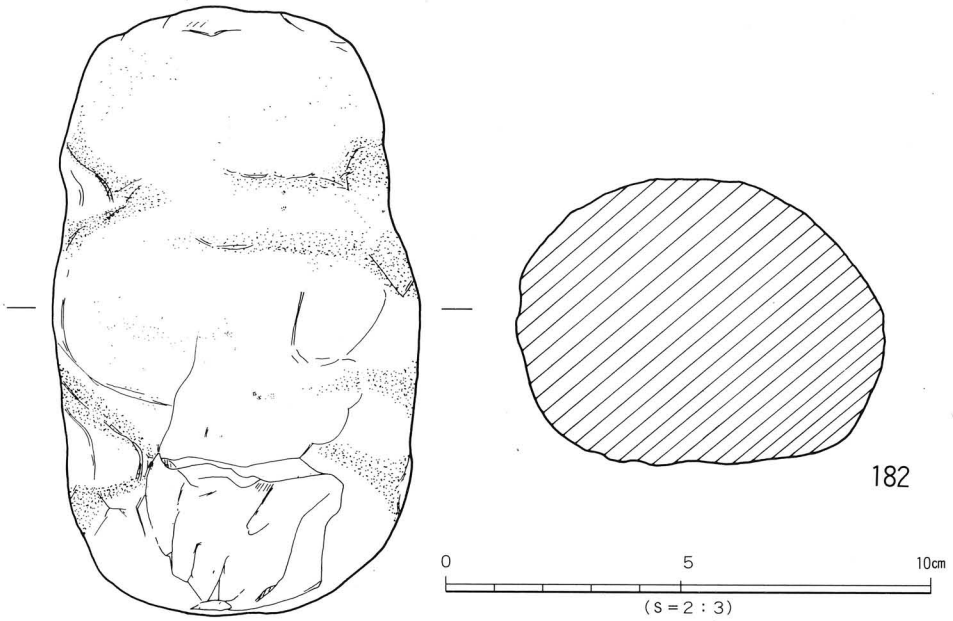
第37図　ＳＫ４出土遺物実測図



第38図　ＳＸ010出土遺物実測図



第39図　ＳＸ010・ＳＫ４関連出土遺物実測図



第40図　ＳＸ010出土遺物実測図

高坏形土器（174～176）　174は直口口縁の坏部に低い脚部をつけたものである。口径値は器高値を上回るものである。口縁端部は丸い。175は柱部が傾斜するもので、脚部端面は強いヨコナデをおこなう。内外面共に刷毛目調整が看取される。176は裾部下方に小円孔が穿されている。小円孔の下には擬凹線文４条が施される。また脚部端面には凹線文が施されている。

ジョッキ形土器（177）　177は底部から逆「ハ」字状に立ち上がるものである。底部はやや上げ底を呈する。

ミニチュア形土器（178）　178は直口口縁に、厚く上げ底を呈する底部をもつ。

ＳＫ４関連出土遺物（第39図）

甕形土器（179）　179は「く」の字状口縁部を有し、肩部の張りが弱く、胴部最大径は胴部中位やや上にあり、わずかに口径を凌ぐものである。底部は平底を呈する。調整は内外共に刷毛目調整である。

高坏形土器（180）　180は口縁部の破片である。口縁端面はやや内傾し、端面にはヨコナデが施されている。

鉢形土器（181）　181は底部を欠く破片である。直立する口縁部をもつ。

ＳＫ13号土壙（第８図）

調査区中央Ｃ６区に位置する。Ｂ層上面で検出した。平面形は円形ないし楕円形を呈すると思われ、規模は長軸300＋α cm、短軸200＋α cm、深さ50cmを測る。断面形はレンズ状を呈し、埋土は茶褐色シルトである。

遺物の出土状況は、散在し流れ込み的様相が強い。弥生後期の土器片数点と有茎石鏃１点が出土している。

出土遺物（第41図・図版30）

甕形土器(183～188)　183～185は口縁端部を拡張しないものである。183な胴部が張らず、内外面ヨコヘラ磨きである。186は口縁端部を拡張するものである。端面に２条の擬凹線文が施される。187、188は胴下半～底部片で、いずれもくびれの上げ底を呈する。

壺形土器(189、190)　189は完形品に近いものである。短頸壺で、口縁部は短くやや厚い。190は、189と同形態の短頸壺小片である。口縁端部はナデによりわずかに拡張される。

高坏形土器（191）　191は高坏形土器坏部片である。内湾する口縁部をもつ。口縁端部は欠ける。

鉢形土器（192、193）　192は直立し、外傾する口縁部をもつ。口縁部下に列点文を施す。193は、広口でやや浅い器形を呈す。口縁端部はナデにより拡張される。

ジョッキ形土器（194）　194はジョッキ形土器の口縁部と考えられるものである。口縁部下を強くナデるために、口縁部下に浅い凹みをもつ。

底部（195、196）　195、196は上げ底の底部片である。器形器種とも特定できない。

石鏃（197）　197は有茎鏃である。茎部下端は欠損する。1.8gである。

時期：出土遺物より弥生時代後期前葉に比定する。

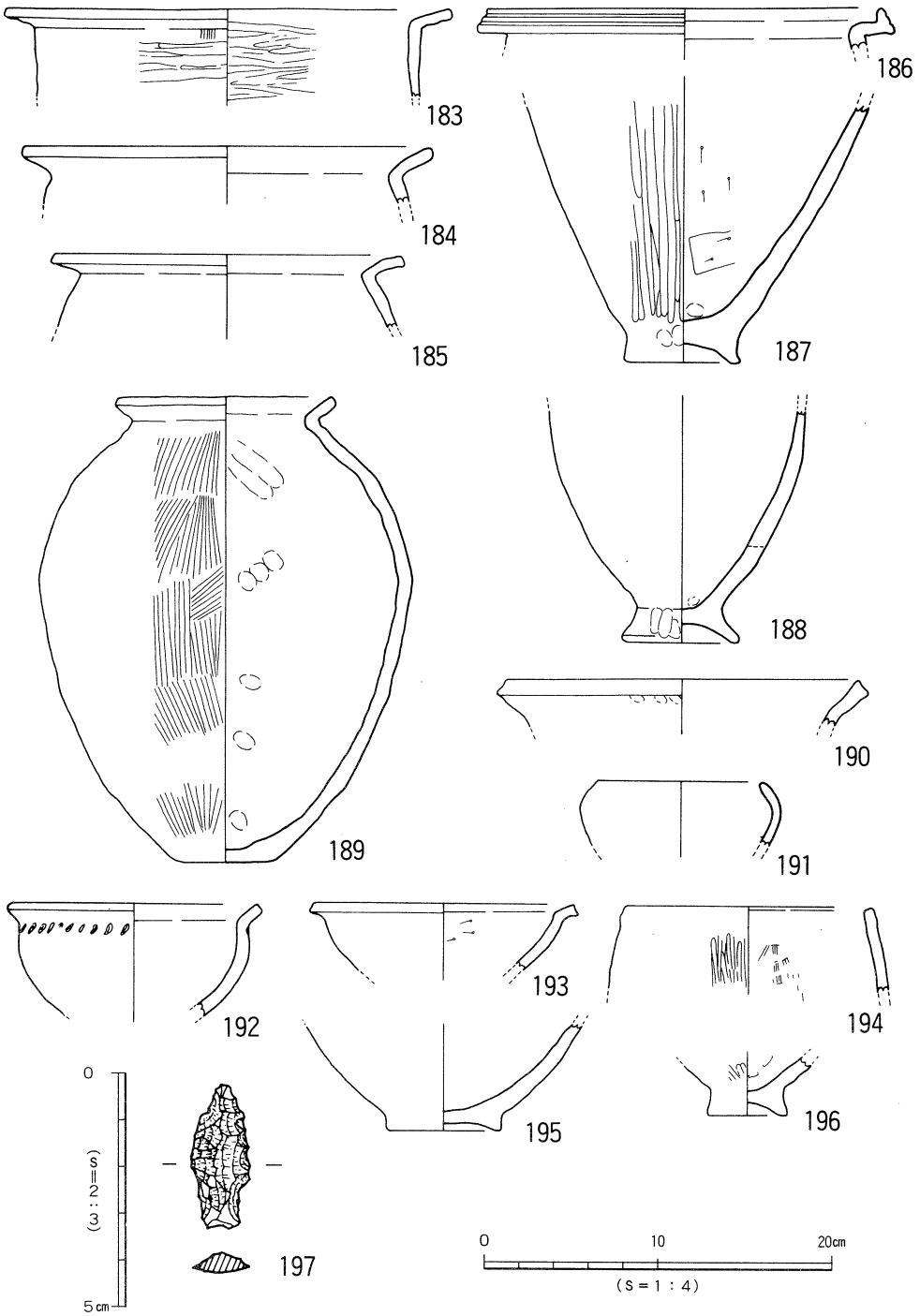
ＳＫ１号土壙（第８図）

調査区西側、ＳＢ３の南側Ｃ９区に位置する。平面形は、不整楕円形を呈し、長軸３＋αm、短軸1.9m、深さ７cmである。壙底は平坦である。埋土は一層で灰褐色シルト（砂多し）である。遺物は弥生土器片があるが、外部からの流れ込み的様相が強い。

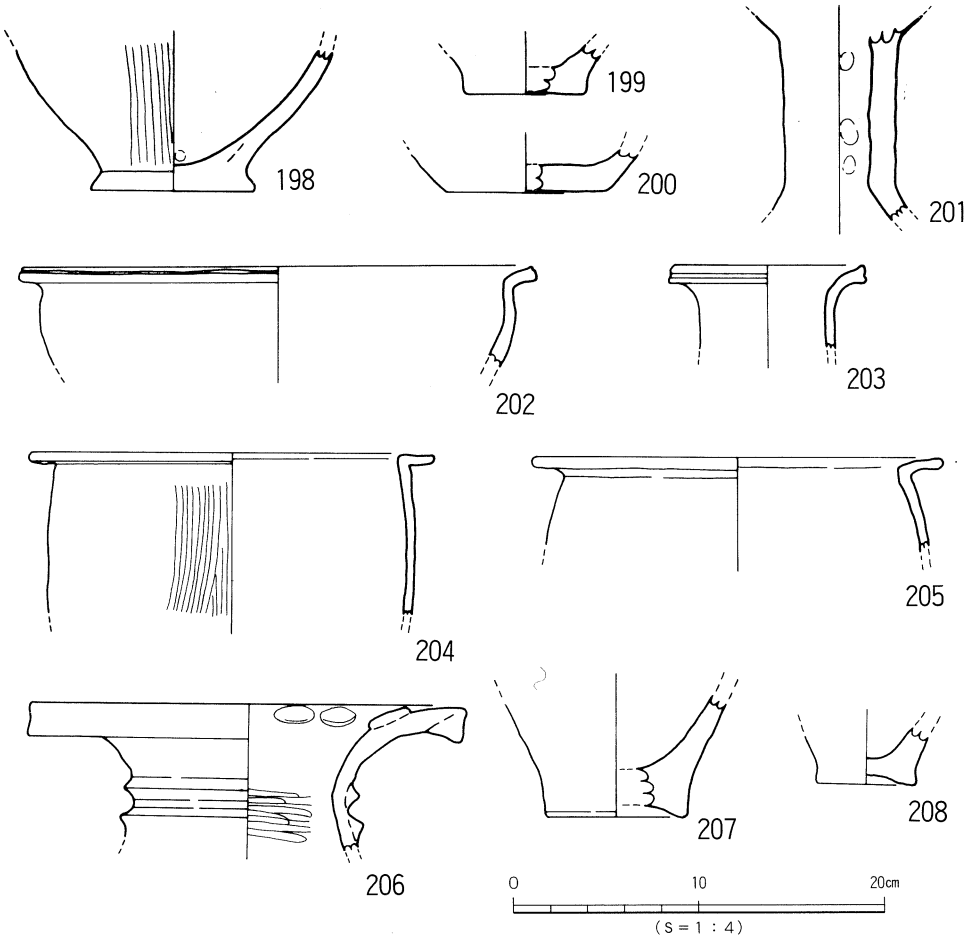
出土遺物（第42図198～201）

198～200は壺形土器の底部片である。201は高坏形土器の柱部片である。

時期：弥生時代後期。



第41図　ＳＫ13出土遺物実測図



第42図　ＳＫ１・３・６出土遺物実測図

その他の土壙

ＳＫ３出土遺物（第42図202、203）　202は鉢形土器片である。口縁端面はナデ凹む。203は長頸壺片である。端部は丸みを帯びており、端面には１条の擬凹線文を施す。

時期：弥生時代後期前葉

ＳＫ６出土遺物（第42図204～208）　204、205は甕形土器口縁部片である。206は壺形土器片である。頸部に２条の凸帯を貼り付ける。口縁部上面には２ケ１組の円形浮文を施す。207、208は、甕形土器底部片である。

時期：弥生時代中期中葉。

〔4〕溝

本調査において確認された溝は1条である。

ＳＤＩ（第8図）

調査区北西部に位置する。西から東へ走る溝であり、Ｂ層上面で検出したが、上部層からの掘り込みの可能性が高い。断面は舟底状を呈し、上場幅30cm、深さ5＋αcm、検出長5.3mを測る。埋土は灰褐色シルトである。出土遺物は、須恵器・土師器の小片が少量出土した。
時期：出土遺物より、古墳時代後期（6ｃ）以降に比定する。

〔5〕その他の遺構と遺物

本調査において確認されたピットは27基である。第Ⅳｂ層上面と第Ⅶ層上面で検出した。ピット中からの遺物の出土はほとんどなかった。

ＳＸ07

調査区北壁西端付近で検出された遺物集中出土部分である。遺物検出範囲は長軸4＋αm、短軸3＋αmで不整楕円状を呈するものである。掘り込み及び明確な壙底も確認できなかった。遺物は、弥生土器片、石斧1点が出土している。
出土遺物（第43・44図）

甕形土器（209～214）　209～213は「く」字状を呈する甕形土器片である。209は口縁端面に刻目を施す。211～213は口縁部下に指頭押圧された凸帯を1条貼り付ける。214は甕形土器の底部を焼成後に穿孔し、コシキとして転用使用したものである。

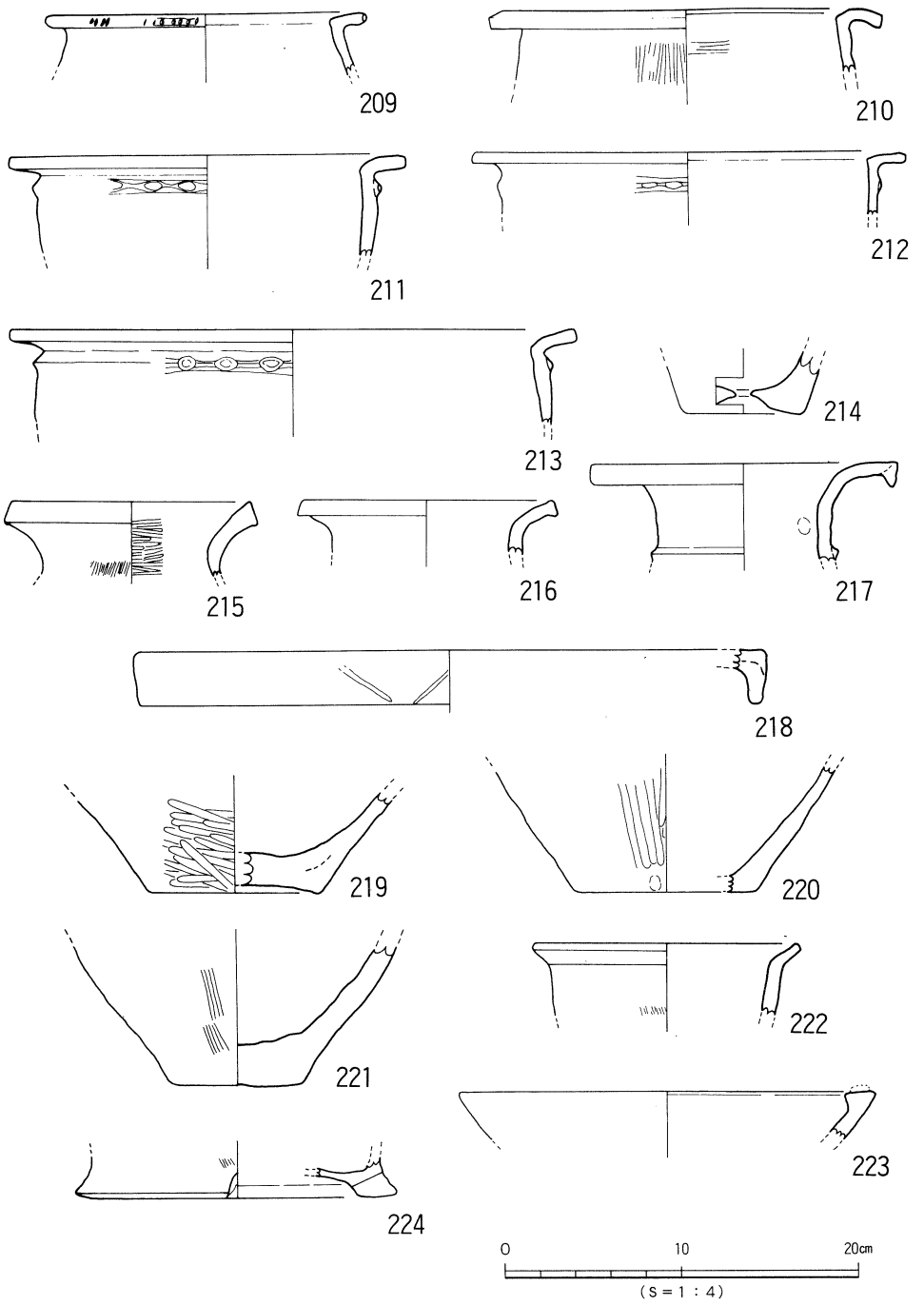
壺形土器(215～221)　215～218は口縁部片である。217は頸部に1条の凸帯文を施す。218は下垂した口縁端面にヘラ描きの山形文を施す。219～221は底部片である。

鉢形土器（222）　222は鉢形土器口縁部片である。

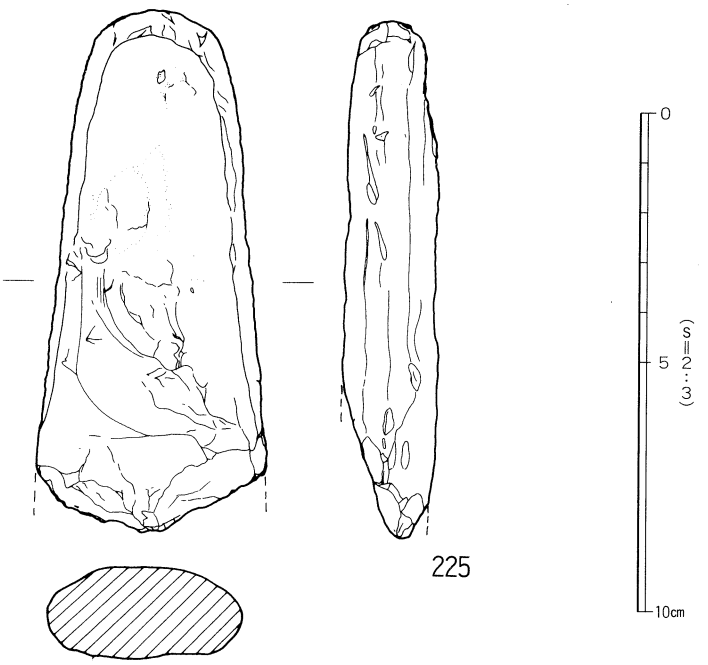
高坏形土器（223）　223は高坏形土器坏部片である。口縁部内側への拡張が著しい。

土製品（224）　224は器種器形が不明なものである。下部に三角形の透かしが施される。

石斧（225）　225は伐採斧片である。刃部を欠く。扁平で、三角形を呈する。131.1gである。
時期：出土遺物より、弥生時代中期中葉に比定する。



第43図　ＳＸ07出土遺物実測図(Ⅰ)



第44図　ＳＸ07出土遺物実測図(2)

ＳＸ08（第８図）

ＳＢ２（弥生・円形住居址）の北側やや西で検出された土器溜りで、遺物検出範囲は長軸130cm、短軸35cmで楕円状を呈するものであった。掘り込みは確認できず、遺物のみの検出であった。遺物は弥生土器片でいずれも小片である。

出土遺物（第45図）

甕形土器（226～229、231～233）　226、227は「く」字状を呈する口縁部片である。228、229は、くびれの上げ底を呈する。231は「く」の字状を呈するものである。口縁部上面を強くヨコナデされる。232は口縁端部がわずかに拡張され、端面に２条の擬凹線文が施される。233は小さい上げ底の底部片である。

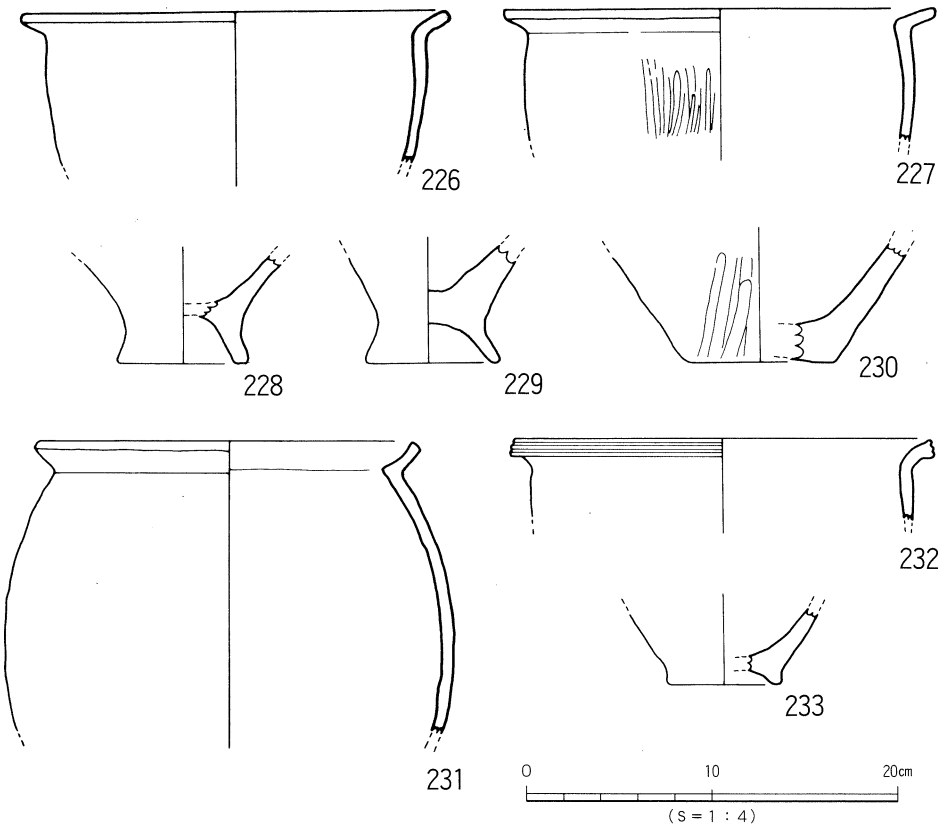
壺形土器（230）　230はわずかに上がる上げ底の底部片である。

時期：226～230は弥生時代中期中葉、231～233は弥生時代後期前葉である。

ＳＸ09（第8図）

調査区中央やや東寄りのＣ５区で検出された。調査段階では南側に広がる住居址であろうと考えていたが、プランが曖昧で、床面が平坦でないこと等より、特定の判断をさける。規模は、長軸3.8m 以上、短軸3.15m 以上、深さ37cmを測る。

遺物は、弥生土器片、石庖丁３点（うち未製品２点）が出土している。



第45図　ＳＸ08出土遺物実測図

出土遺物（第46・47図）

甕形土器（234、235）　235は口縁端部をわずかに上下拡張する。

壺形土器（236～241）　236は口縁端部に１条の擬凹線文を施す。237は口縁部を上下拡張し、端面にヘラ状工具による波状文（１条）を施す。238は口縁端部に円形浮文（２ケ１組）を貼り付け、浮文上に竹管文を施す。239は端面に３条の擬凹線文と刺突文をもつ円形浮文（２ケ１組）を施す。240は複合口縁壺で、口縁接合部を欠く。口縁外面に５～６条の沈線文を施す。241は頸部に凸帯を貼り付けるものである。凸帯文上と凸帯文下に刻目を施す。

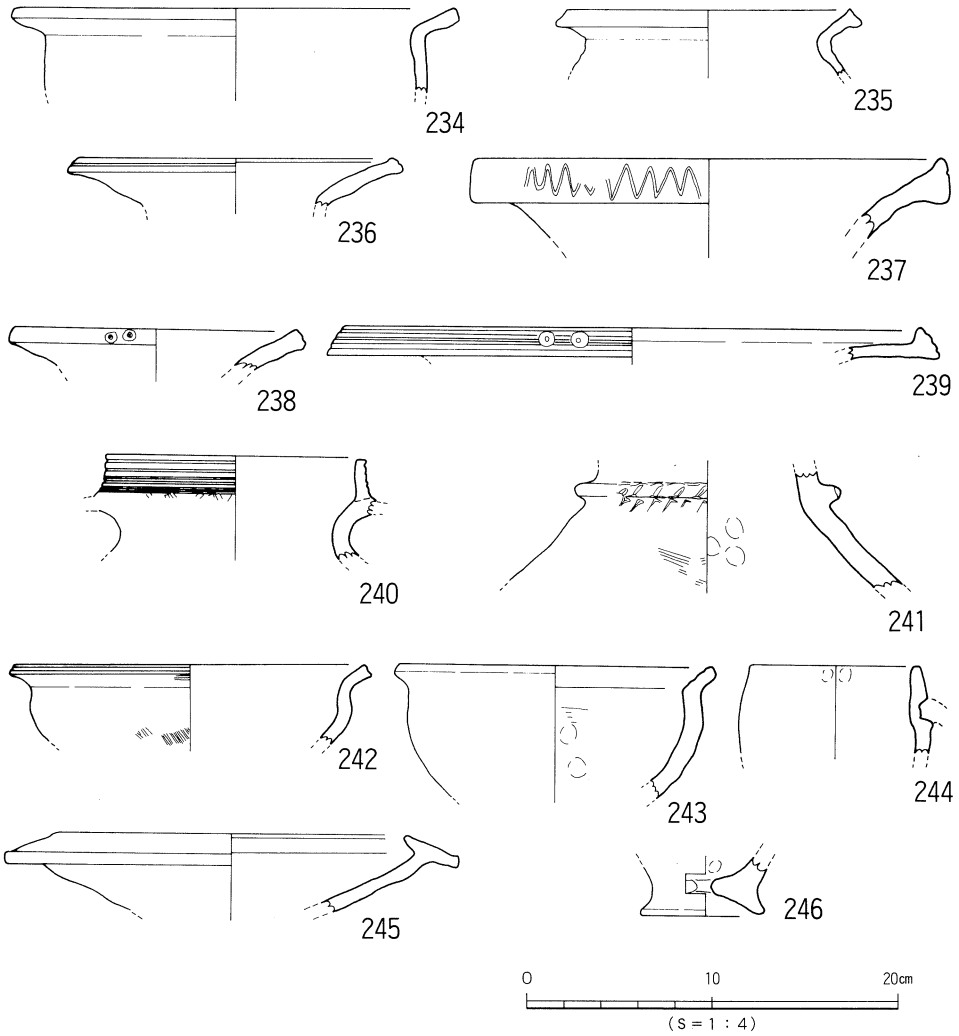
鉢形土器（242、243）　242は口縁端部がナデにより凹む。243は頸部内面に稜をもつ。

ジョッキ形土器(244)　244は把手部の成形が差し込み技法であることが知れるものである。

高坏形土器（245）　245は高坏形土器坏部片である。所謂「鋤先」状の口縁部である。

甑形土器（246）　246は甕形土器に穿孔し、甑形土器に転用されたものである。

時期：235～243は弥生時代後期前葉に比定される。



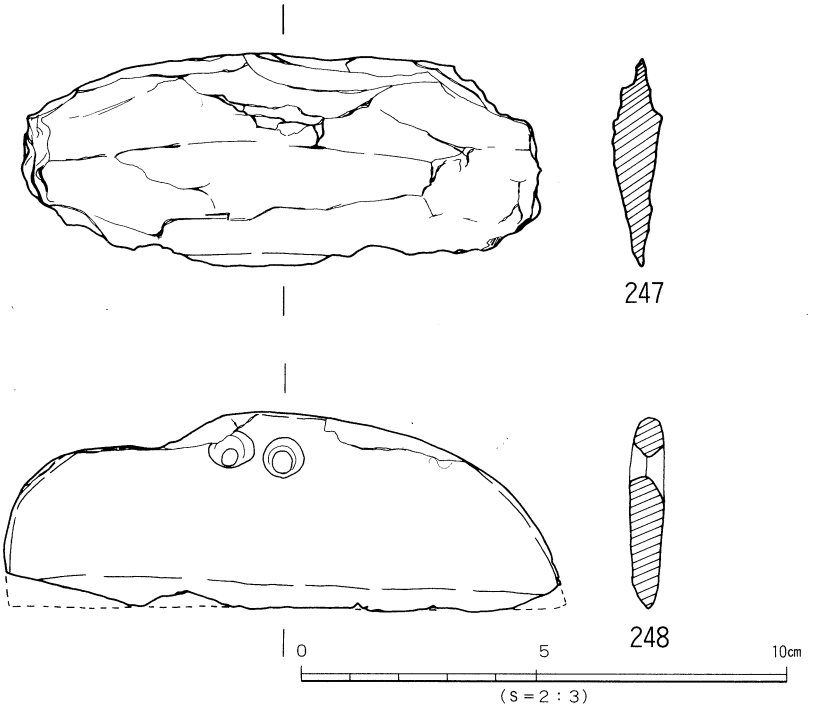
第46図　ＳＸ09出土遺物実測図(I)

包含層出土遺物

Ⅲ章２節「層位」(Ｐ10) で述べたように、本調査地の第Ⅲ～Ⅶ層は遺物包含層となる。以下、特徴的遺物を選択し略記する。

第Ⅲ層出土遺物（第48図249～253)

249～251は弥生土器、252は土師器、253は須恵器である。249は壺形土器口縁部片で口縁端面に沈線文を４条施す。251は高坏形土器の口縁部片である。



第47図　ＳＸ09出土遺物実測図(2)

第Ⅳ層出土遺物（第48・49図254～260、266～268）

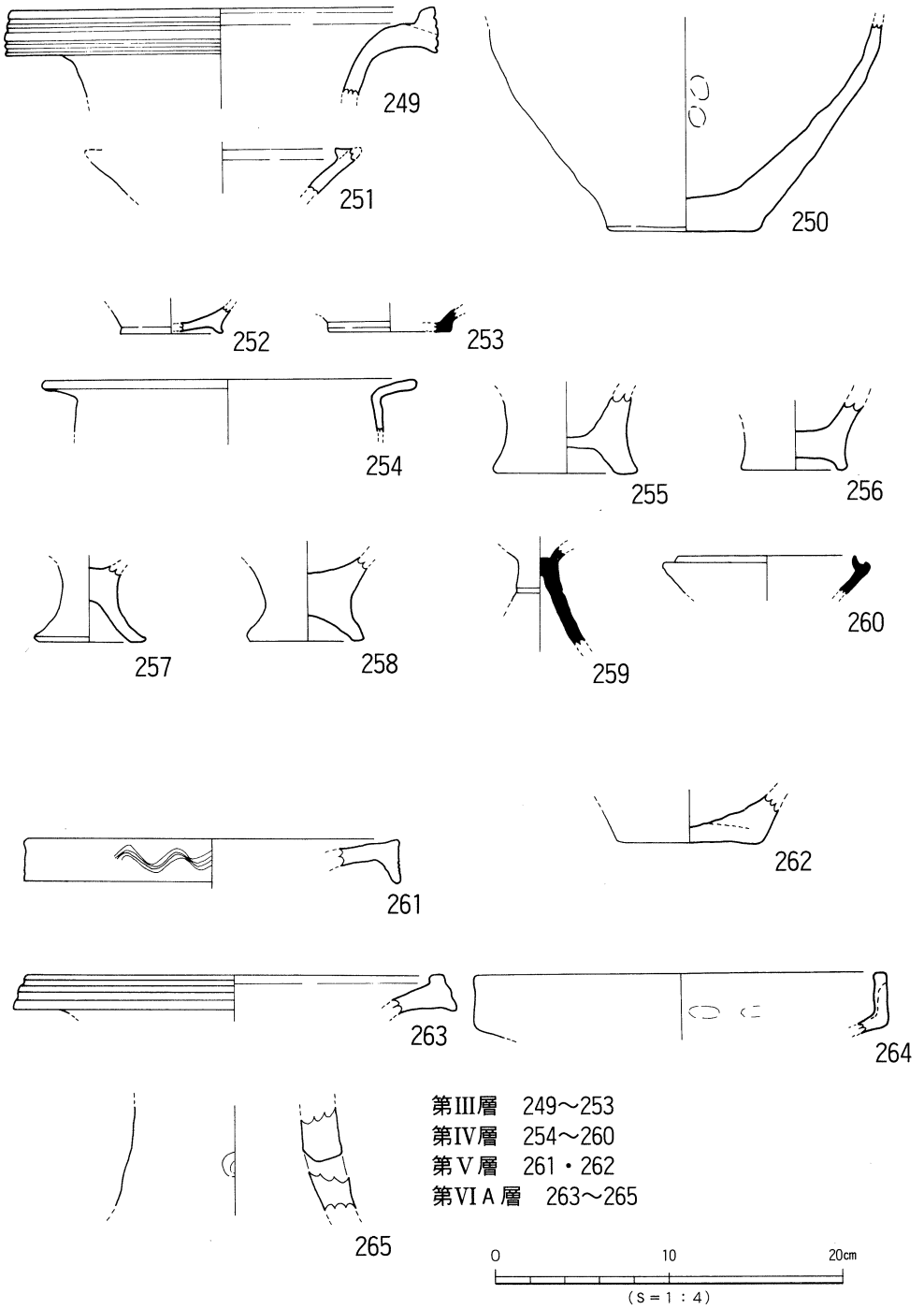
254～258は弥生土器、259、260は須恵器である。257は小形の高坏形土器脚部片で、256は脚(台)付鉢の脚部片である。266～268は石器である。266は磨き石で使用痕を看取する。533.4gである。267は伐採斧である。やや扁平な形状で、基部を欠く。395.5gである。268は打製石鏃である。凹基式のもので、基部と鋒部を欠く。2.2gである。

第Ⅴ層出土遺物（第48図261・262）

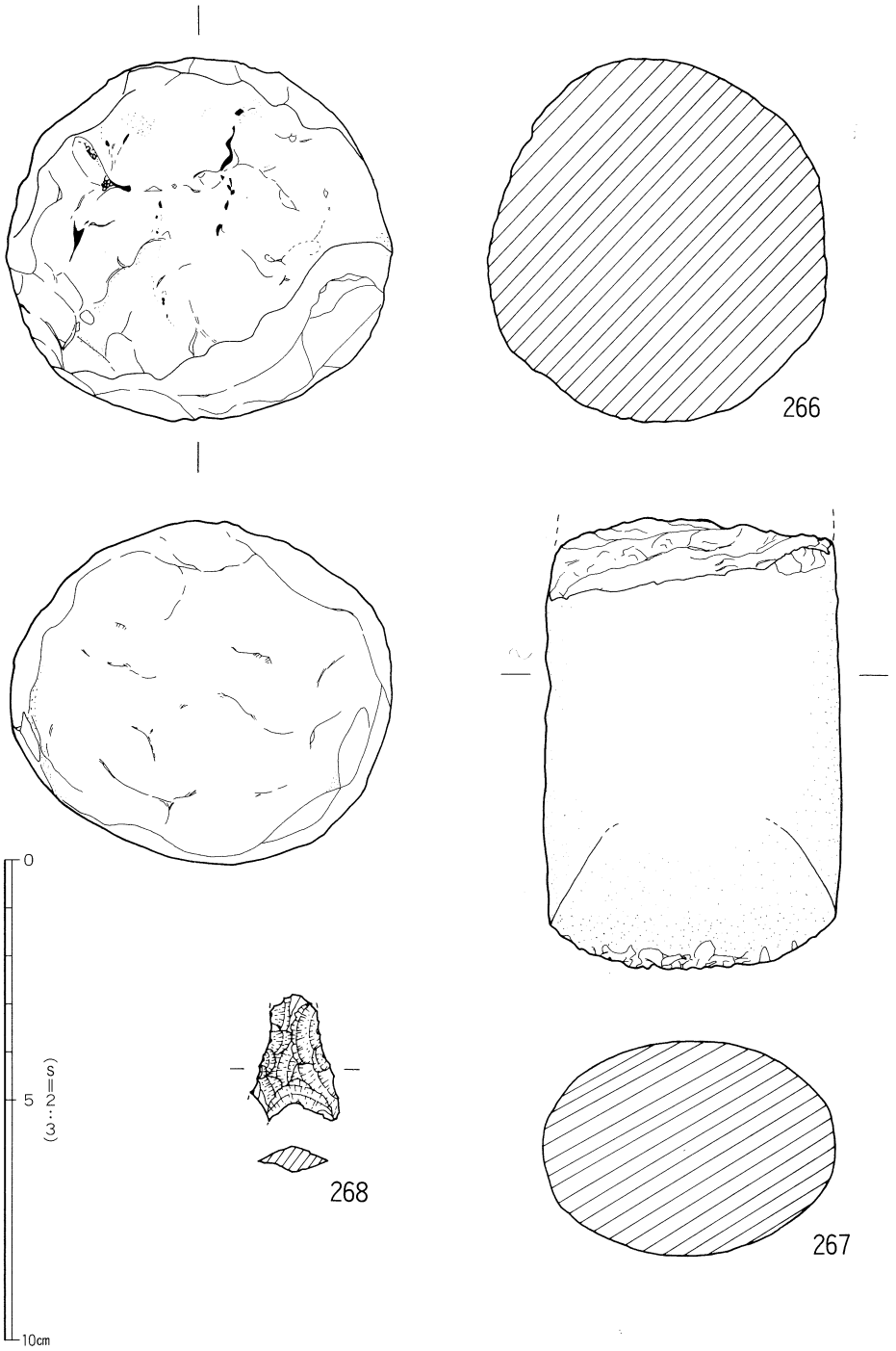
261、262は弥生土器である。261は壺形土器片で、口縁端面と口縁部上面に櫛描き波状文を施す。

第Ⅵ層出土遺物（第48・50図263～265、269～284）

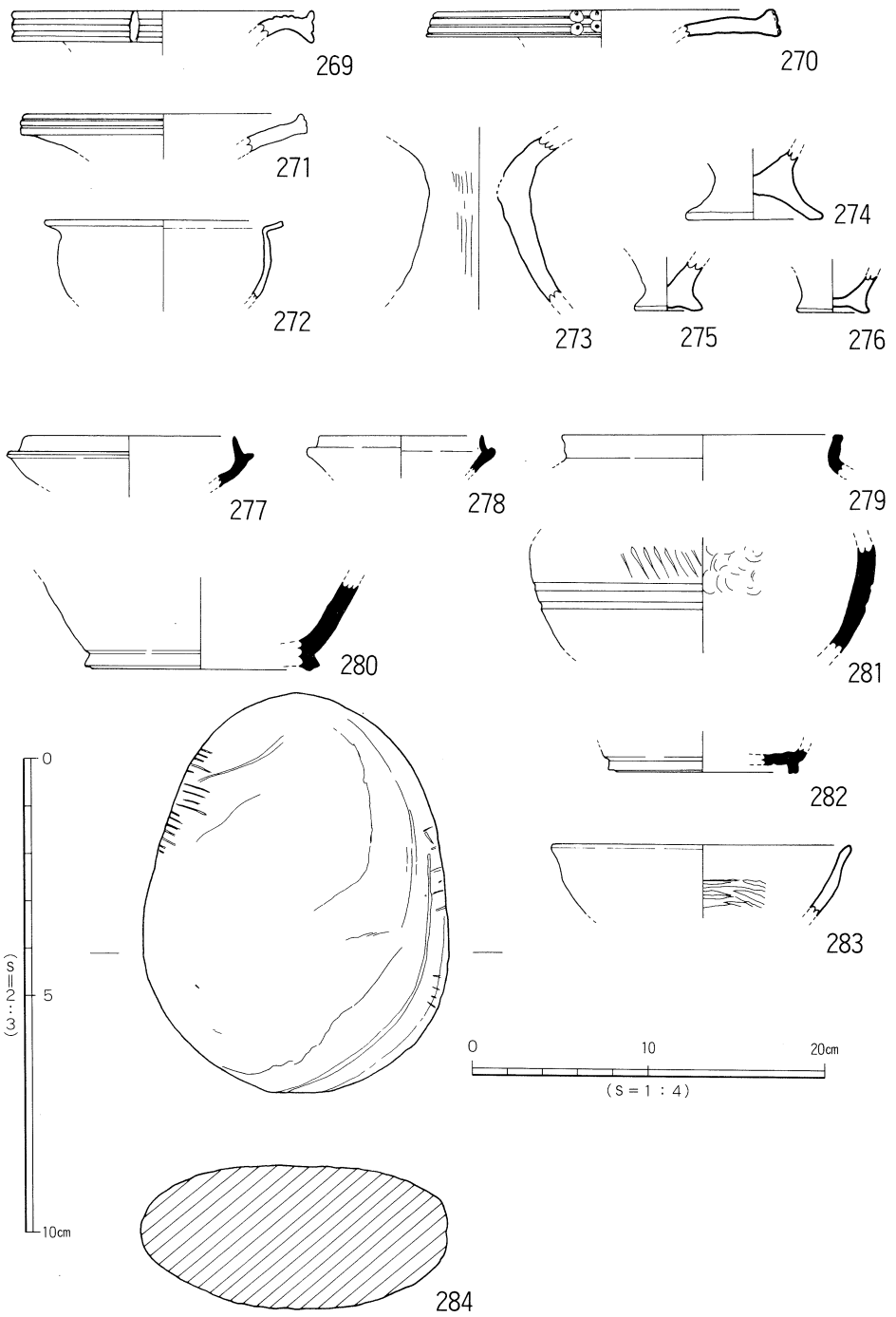
263～265はⅥ層上部で出土したものである。263～265は弥生土器片である。264は高坏形土器の坏部片である。265は器台形土器の脚部片で、円孔を施す。269～284はⅥ層出土遺物である。269～276は弥生土器、277～282は須恵器、283は瓦器椀、284は石器である。269は壺形土器の口縁部片である。口縁端面に凹線文２条と棒状の浮文を１ケ施す。270は壺形土器の口縁部片である。口縁端部に擬凹線文２条以上と刺突文をもつ円形浮文（４ケ１組）を施す。272は鉢形土器の口縁部片である。275・276はミニチュア土器である。277・278は坏身、279は短頸壺、280、281は長頸壺、282は高台付坏である。284は磨き石である。271.1gである。



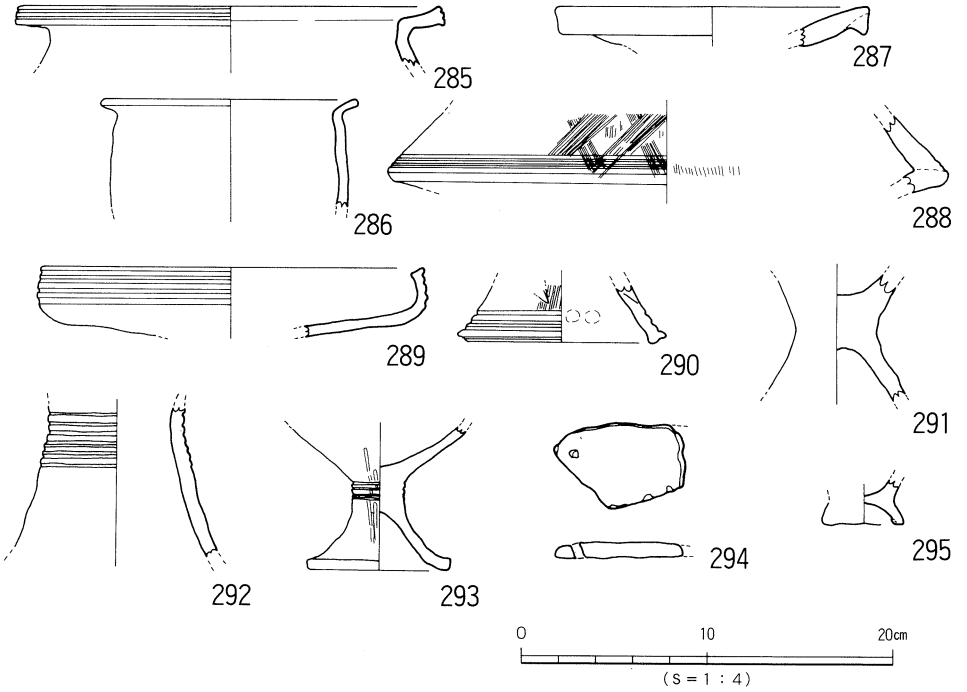
第48図　第III・IV・V・VIA層出土遺物実測図



第49図　第Ⅳ層出土遺物実測図



第50図　第VI層出土遺物実測図



第51図　第VII層出土遺物実測図

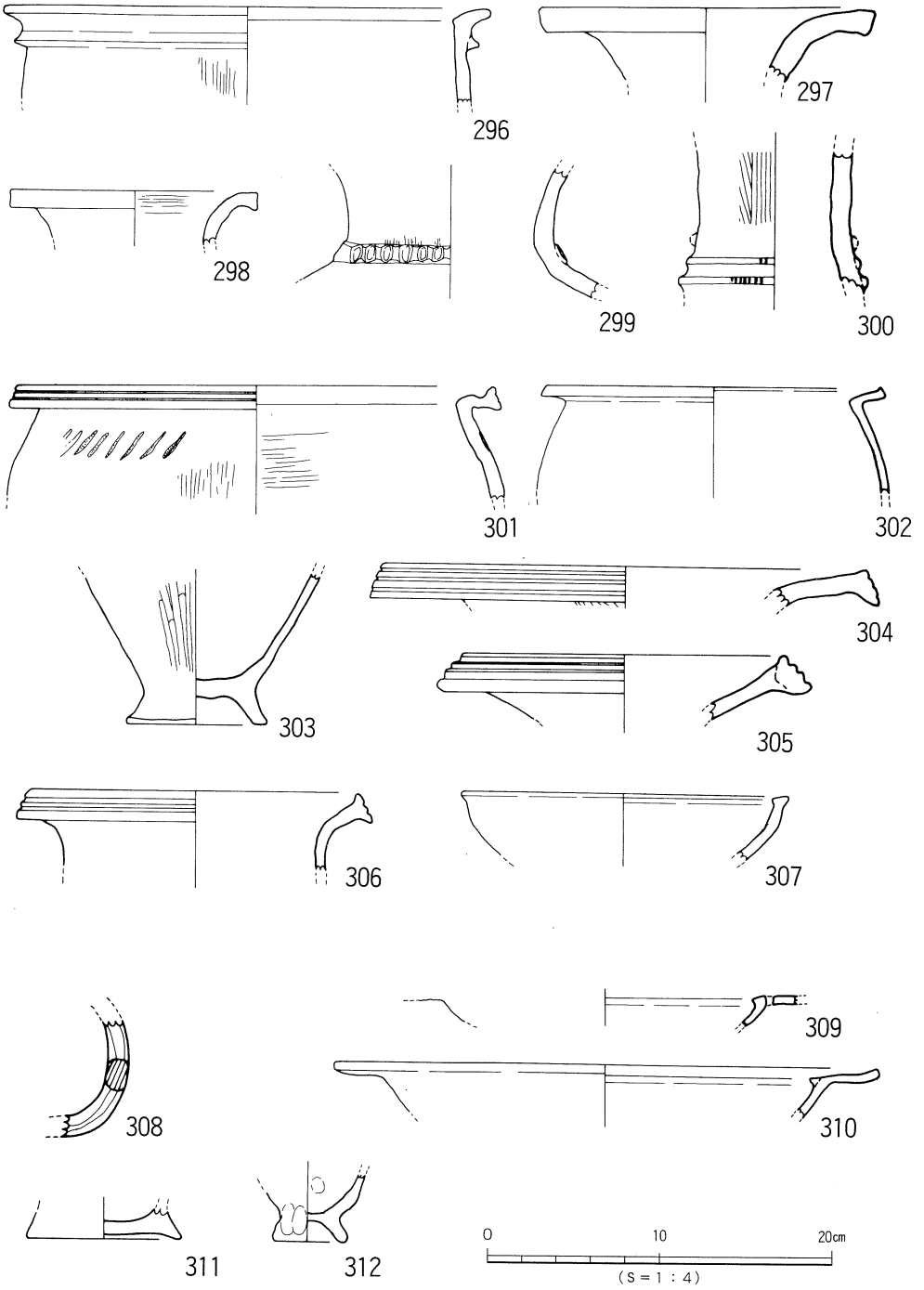
第VII層出土遺物（第51図285～295）

285～295は弥生土器である。288は複合口縁部片である。櫛状工具による（6本歯）斜格子目文とヨコ方向の沈線文（4条）を施す。294は器種器形不明品である。小円孔が貫通する。

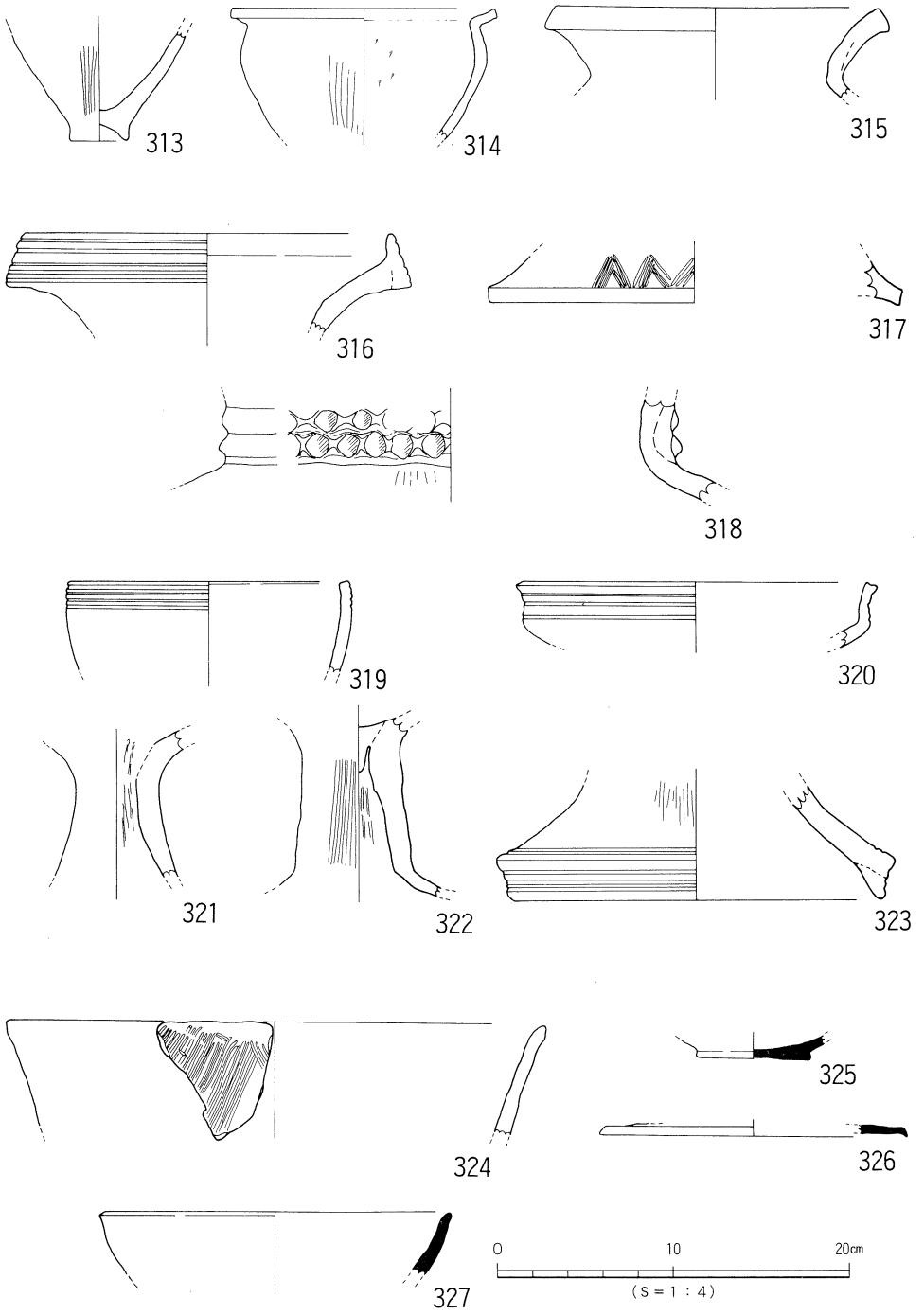
表採及び層不明品（第52～54図296～336）

土製品(296～327)　296～323は弥生土器、324は縄文土器、325～327は須恵器である。296～300は弥生中期中葉、301～307は弥生中期後葉、313～323は弥生後期前半のものである。308はジョッキ形土器の把手で、309、310は高坏形土器の坏部片、311はジョッキ形土器片、312はミニチュア品である。323は器台形土器の脚部片と考えるが、平野内の出土例がない。324は縄文晩期の深鉢形土器片である。斜行沈線文が看取される。

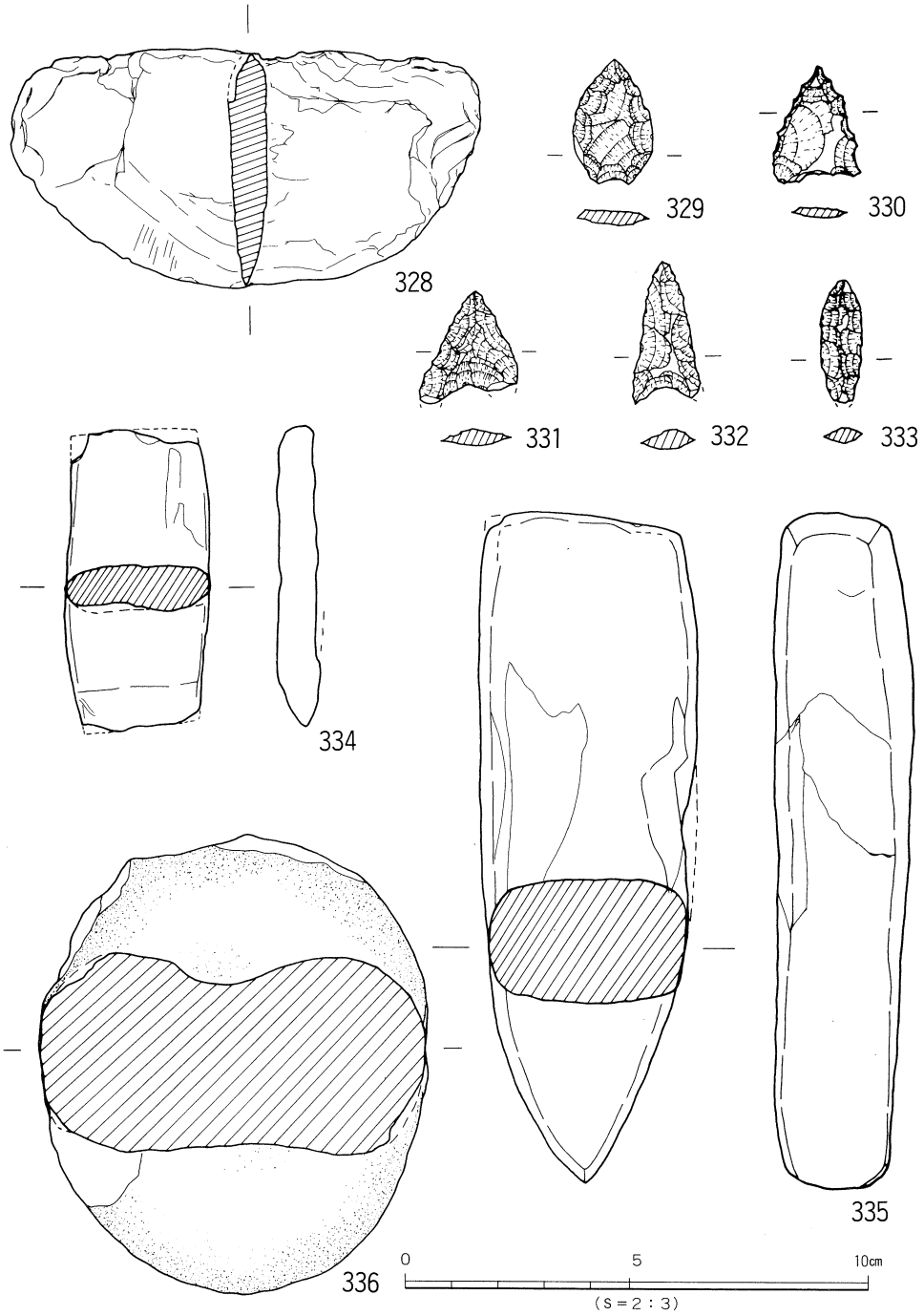
石製品（328～336）328は石庖丁の未製品である。328は磨きにより刃部をもつ。329～333は打製石鏃である。334、335は加工斧で、いずれも稜線が弱い。336は凹み石で、使用痕を顕著に残す。



第52図　表採及び層不明出土遺物実測図（1）



第53図　表採及び層不明出土遺物実測図 (2)



第54図　表採及び層不明出土遺物実測図 (3)

〔6〕分銅形土製品

当遺跡から分銅形土製品が2点出土している。整理上、資料名は谷若倫郎氏の方法に準じてアイリA、アイリBと命名した。

(1)アイリA：SB2出土品（第55図上、図版33上）

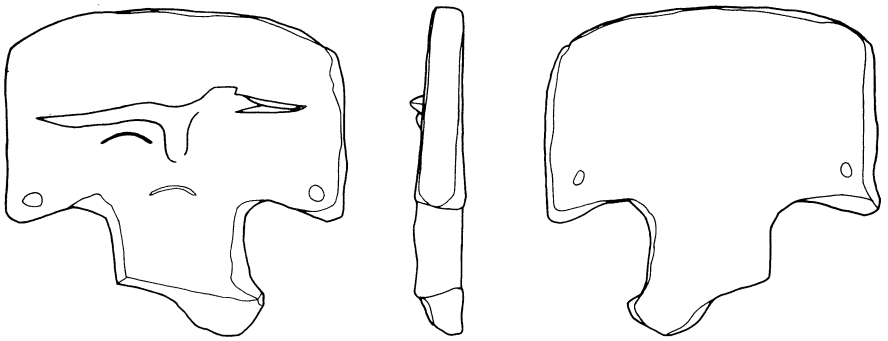
出土状況――アイリAは、SB2号住居址、第Ⅳ層（最下層：灰褐色シルト）中からの出土である。SB2号住居址の床面直上であるかどうかは不明であるが、同層からは弥生時代後期に比定される弥生土器片が共伴遺物として出土している。

遺物――下半部を欠失した分銅形土製品である。器形は隅丸方形で、表裏とも平坦である。顔面を表現した面を表面とすると、裏面には文様がみられない。眉は断面三角形の突帯を張りつけ、鼻を一体で表現する。目と口は、同一施文具と推定される道具で半月形に線刻する。また、上半部のくり込み部両端に、左右一対で表面から裏面に穿孔しており、耳を表現したものと思われる。なお頭髪の表現はみられない。色調は表裏面ともに黄褐色である。胎土は、細かい砂粒を含むものの密である。焼成は良好で、朱彩の痕跡は見られない。残存長8.5cm、上半部最大幅9.0cm、くり込み部最大幅3.4cm、上端面厚さ0.9cm、くり込み部厚さ1.2cmを計る。

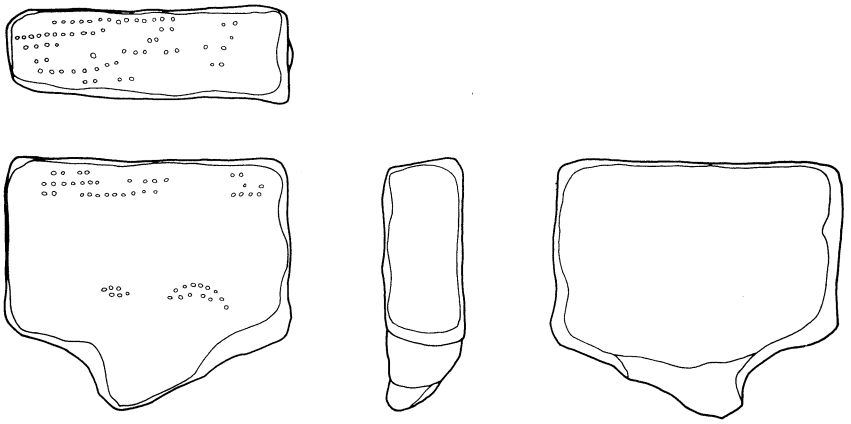
(2)アイリB：SX010出土品（第55図下、図版33下）

出土状況――アイリBは、SX010の埋土（黒灰褐色シルト）中からの出土である。SX010はSK4の上部層になるため（参考：P69)、アイリBは流れ込みの可能性もある。

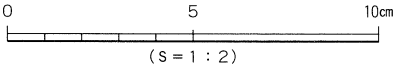
遺物――くびれ部以下を欠失した分銅形土製品である。器形は方形で、表裏とも平坦である。表面と推定される面に顔面を表現し、裏には文様を表現しない。頭髪は、表面に3列、上端面に6列の刺突文を施すことによって表現する。中央やや下方に、2列の円弧状の刺突文が2条並んで施され、眉を表現したものと推定される。そのほかの顔面表現は見られない。色調は表面淡黄褐色、裏面茶褐色である。胎土は1～2㎜の砂粒を含み、やや粗い。焼成はやや不良で、表面の摩滅が著しい。眉と頭髪、左右側面及びくり込み部にベンガラの塗彩の痕跡がみられ、当初は全面に塗彩されていたものと推測される。残存長6.5cm、上半部最大幅7.5cm、厚さ2.0～2.2cmを計る。



アイリA



アイリB



第55図　祝谷アイリ遺跡出土の分銅形土製品

4．小　結

(1)　層序

本調査地は、傾斜部と小谷部からなる。傾斜部は、近現代の開墾により包含層及び遺構が全て削平されている。小谷部は、７層及び間層２層からなる土壌堆積を確認した。第Ⅲ～Ⅵ層、間層Ａ・Ｂ層が遺物包含層である。このうち、第Ⅵ層・Ｂ層は弥生時代の、第Ⅲ～Ⅳ層・Ａ層は古墳時代～中世の遺物包含層であった。Ｂ層は、傾斜部でも自然地形が凹地となり、後世の削平をうけなかった地点での検出に限られていることより、本来は傾斜部全面に堆積していた可能性があるものと考えている。

また、包含層出土遺物は、弥生時代中期中葉、同後期前半、古墳時代後期、中世前半期のものに限られる。時代・時期が限定でき、かつ短期間内の遺物である。検出遺構も出土遺物にほぼ対応することから、集落経営分析の資料として注目されるものである。

(2)　弥生時代遺構

中期中葉と後期前半の遺構を確認した。

中期中葉　竪穴式住居址１棟（ＳＢ５）、土壙２基（ＳＫ７）、性格不明遺構１基（ＳＸ07）がある。

ＳＢ５は、傾斜部に立地し、炉址を付設する。松山平野の同時期同立地の住居址は、大峰ヶ台遺跡で検出事例がある〔栗田茂敏　1989〕。現在までに松山平野では同時期の住居址検出例は少なく、稀少資料として貴重である。

後期前半　竪穴式住居址１棟（ＳＢ２）、土壙６基（ＳＫ１～４、８、15）、性格不明遺構３基（ＳＸ08～010）がある。

ＳＢ２は、傾斜地立地で、高床部と炉址を付設する。先記した大峰ヶ台遺跡の住居址とは時期が異なるものの、両遺跡の竪穴式住居址は住居築造における掘削方法に共通点が認められる。ＳＢ２及び大峰ヶ台遺跡ＳＢ８は、高所部分の平面形が扇状を呈し、壁体が階段状に幅広く削られ、かつ傾斜をなす構造である。

ＳＫ15は、本調査において最も注目されるものである。本遺構の注目点は三項目ある。１つには本来の機能が井戸であったこと、２つには祭祀行為が行われたこと、３つには多量の遺物が出土したことである。

松山平野では、弥生時代井戸は祝谷六丁場遺跡ＳＥ１（中期中葉）、谷田遺跡ＳＫ８、12、21、32（中期後葉）の４基が確認されている（註１）。松山平野検出の井戸はいずれも素掘りであり、かつ、断面円筒状を呈し、何ら特異構造をもつものでなく、他の遺構（貯蔵穴）との区別が難しい。よって、調査における観察点と認定について、充分に考慮しなければならないことを提示する資料となった。また本遺跡と、祝谷六丁場遺跡は、地理的性格上弥生時

代においても河川から50mと離れておらず（現在約20m）、集落における水利（例えば、井戸水と河川水の利用の違い）について課題を残すものとなった。

次に、祭祀行為についてである。ＳＫ15の遺物出土状況をみると、基底部では完形（全てに焼成後穿孔あり）ないし一部欠損の土器（意識的に打ちかいたものか）が同心円状に検出された。その上部には、複合口縁壺の口頸部完存品や複合口縁部壺の頸肩部完存品が出土した。さらに、埋土Ⅲ層上面にある礫群との間では、大型の土器破片と石器が出土した。礫群中及び直上（埋土Ⅱ層下部）では高坏形土器脚部片を中心とする土器片（１点を除き小型破片）が出土している。基底部より遺構上部におよぶ間に、遺物の選択と意識的な埋置が行われたことを考えさせる出土状況となっている。この出土状況は、福岡市比恵遺跡検出の井戸においてもみられる事象であり〔山口譲二　1990〕、本事例も井戸における祭祀行為として判断される可きものであろう。

ＳＫ15の出土遺物は、後期前半（梅木編年後期Ｉ式新～Ⅱ－１式古）〔梅本謙一　1991〕に比定される。出土土器は、遺構の性格上、器種構成比率は日常生活の比率とは異なるものの、胎土・形態等祭祀具として焼成前より製作されたものではないと考える。また、器種構成では、長頸壺と高坏形土器が多く、かつ高坏形土器脚部が顕著に多く、坏部は小片がわずか10点に満たない出土量となり、祭祀における特定器種及び部位の選択が存在することを示唆するものであると考える。

ＳＫ２、３、８は平・断面形態、規模において大差なく、同時期同機能をもった遺構と考えている。時期は、出土遺物が小片少量であるため判断に難しいが、ＳＫ３の土器より後期前半に比定される可能性が高い。機能については、その位置関係において建物址に関するものでなはいかと調査中には考えたが、三基とも柱痕が検出されなかったことより、現時点においては特定の判断をさけるものである。

(3)弥生時代遺物

ＳＫ15出土遺物は一括性の高い遺物である。遺物の性格上器種構成比率には問題があるものの器形が知れることでは良好な資料である。器種には、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、器台形土器、支脚形土器がある。

甕形土器は、法量に大中小の３種があり、形態には口縁部と胴部の変化により三分類が可能である（Ｐ36）。底部は、小～中型品は上げ底でくびれる傾向にある。口縁端部は、口縁端をわずかに拡張し、まれに擬凹線文を施すものがある。また、口縁部を折り曲げて成形する際に頸部を強くヨコナデする傾向にあり、頸部が直立しているかのように見える。成形及び調整は、肩部が張るものは肩部以下をヘラ削りし、胴部が張るものは刷毛目調整を行う傾向が強い。

壺形土器は、複合口縁壺では口縁接合部形態に二形態がある。施文は山形文や山形文状の

波状文が施される。壺形土器全体は、施文では頸部下端部～肩部に横沈線文や刺突文ないし「ノ」字状文を施す傾向が強い。口縁端部の加飾は極少数に見られるにとどまる。調整は、複合口縁壺と一部のものにヘラ磨きが行われるが、刷毛目調整が多数をしめる。

鉢形土器は、台付鉢が存在する。また、法量がやや大きいものもある。

高坏形土器は、坏部形態は外傾ないし直立する口縁部をもつものと外反するものがある。前者は屈折部の稜はきわめて弱い。脚部形態は、柱上部が太く、柱が短く、裾部の開きが弱いことを共通とする。施文は円孔が施されることが多く、脚端面に１～２条の沈線文を施すものがある。

器台形土器は、器形全体は明確ではないが、受部端面がわずかにナデ拡張される。

支脚形土器は、中空で受部が傾斜面をなす。

ＳＫ15出土遺物は、高坏形土器脚部と小形甕に中期後葉の形態要素を残すものの、他のものは中期の形態から、脱却している。施文は、刺突文ないし、「ノ」字状を主要素とし、沈線文（擬凹線文を含む）をわずかに施す。中期後葉の施文が衰退化した様相を顕著に現したものといえる。ＳＫ15出土遺物は、後期前葉～中葉（後期前半）に比定される形態をもつ土器群である。

次に本調査出土の石器について触れる。中期中葉のＳＢ５からは自然石の節理面を利用した男茎状石製品が出土している。弥生時代の石製品としては県下で出土例はなく、西日本においても類例が少ない。

ＳＫ15出土の石錘は出土数が一点であることで注意をひき、さらに本地点集落の海浜との関係を示す資料として注目したい。

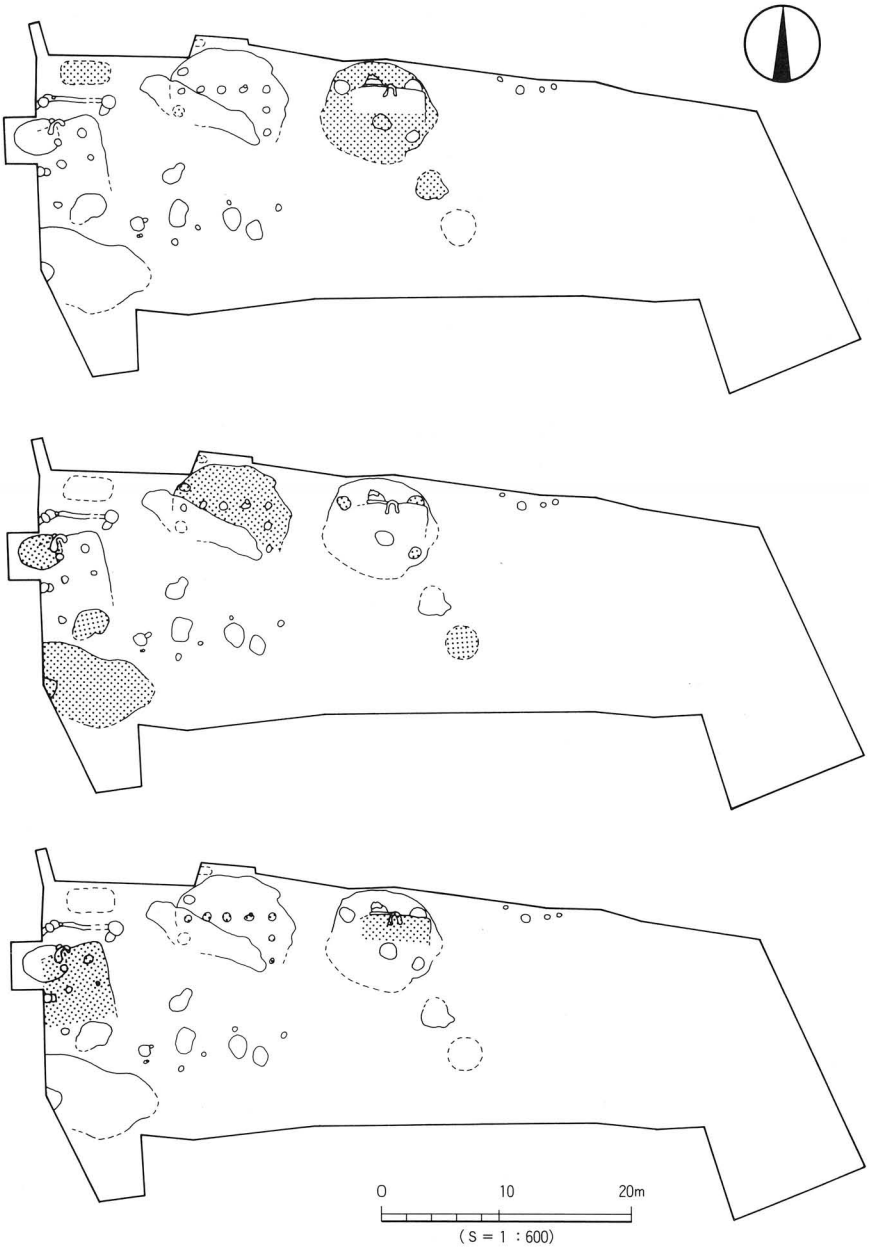
その他弥生時代遺物で注目されるものは、ＳＫ15出土の長頸壺58とＳＸ09出土245、包含層出土309、310の高坏形土器坏部片である。58は平野では初例で北部九州に類似形態がある。後者は技術的には北部九州地方のものであるが、それ以上の判断はできかねる。

(4) 古墳時代遺構

後期の竪穴式住居址２棟（ＳＢ１、３）が検出の主たるものである。

ＳＢ１は、改築の様相が強いものである。改築前のものには壁体溝を付設するのに対し、改築後は付設しないことは注目される。

ＳＢ１では、カマドが検出され、さらにカマド中より土師器の高坏形土器を利用した支脚が出土した。市内類例には、市内福音小学校構内遺跡〔武正良浩　1991〕に検出事例がある。ただしカマド出土の高坏形土器には、高坏形土器が明らかに加燃され支脚として利用されたと考えられるものと、加燃がみられずカマド廃絶に関する祭祀ではないかと考えられる出土状況のものの二者があり、その判断には調査時の出土状況と遺物観察が重要といえる。



第56図　祝谷アイリ遺跡の集落動態図

(5) 古墳時代遺物

ＳＢ３及びＳＢ２埋土中層から出土した遺物は、祝谷地区を含む道後城北遺跡群内で出土例が少ないものであり、同遺跡群の集落構造を考える際の一つの資料となるものである（第Ｖ－３章参照)。

ＳＢ１カマド出土の土師器の高坏形土器は、平野内でも出土例が少なく、稀少資料として現時点では重要視できるものである。

(6) 集落の様相

本調査地は、弥生時代中期中葉と同後期前半、古墳時代後期に、居住地として、集落が存在していたことが明らかとなった。各時代を概観すると、弥生時代中期中葉は住居址他が、後期前半は住居址、井戸、土壙が存在する。集落域を考えると、南側は谷部であり伏流水もあることより住居としての立地条件は悪く、集落の居住地は北部の高地に延びるものと考えられる。

古墳時代のものは、掘立柱建物址と竪穴式住居址の時期関係が不明確であるが、掘立柱建物址が二棟の竪穴式住居址の中間に位置することは注意しておきたい。弥生時代の傾斜地居住については、平野内においても大峰ヶ台遺跡、松山市～伊予郡砥部町に広がる釈迦面山遺跡等の丘陵地帯で確認されているが、古墳時代後期のものは初例である。

本調査は、祝谷地区の土地利用を考える上で貴重な資料となるものであり、さらに、同地域や丘陵地帯の埋蔵文化財調査において課題を提示するものとなった。なお、遺構が全て西側で検出されているのは、近現代の削平が著しいことによるものであり、遺構存在の有無は判断できなかった。

〔註〕

(1)祝谷六丁場遺跡……宮崎泰好　1991　『祝谷六丁場遺跡』松山市教育委員会他
　谷田Ⅲ遺跡……坂本安光編　1981　『愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』愛媛県教育委員会
　なお、谷田Ⅲ遺跡検出井戸は、『愛媛県史　原始　古代Ⅰ』では３基となっている。

【文献】

栗田茂敏　1989　「大峰ヶ台遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会
山口譲二　1990　『比恵遺跡群(9)』福岡市教育委員会
梅木謙一　1991　「松山平野の弥生後期土器―編年試案」『松山大学構内遺跡』松山大学、松山市教育委員会
武正良浩　1991　「福音小学校構内遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

Ⅳ-1　植物珪酸体分析

古環境研究所　杉山　真二

1．はじめに

祝谷アイリ遺跡では、土壙（ＳＫ15）の底部付近から弥生時代後期前半の完形に近い土器が多量に検出された。この調査は、これらの土器胎土および土器の内部土壌などについて植物珪酸体分析を行い、土器の素材（粘土）の給源および遺跡周辺の古環境などについて検討を試みたものである。

2．分析試料

分析の対象とした土器は、ＳＫ15遺構の底部付近から多量に出土したものであり、弥生時代後期前半と編年されていた。これらの土器の多くは完形に近いものであり、その内部には土壌が詰まっていた。胎土分析用の試料（土器片）は、このうちのNo.57、92、58、62、70の５点から、土器内部の土壌はNo.57、59、56、60、92、58、62、70の８点から採取された。なお、土壌分析の試料番号は胎土分析の番号及び挿図の土器実測番号とに対応している。比較試料として土器周辺の土壌（ＳＫ15埋土Ⅲ層）も採取された。

また、平野出土の同時期の資料をも比較資料として分析を行った。

釜ノ口遺跡（７次）では弥生時代後期前半とされる炉跡（ＳＢ１）が出土しており、ここから検出された焼土についても試料が採取された〔高尾・真木　1991〕。試料数は計15点である。

3．分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法」〔藤原宏志　1976〕をもとに、次の手順で行った。なお、土器片については、前処理として土器のコア（中心部分）を抽出し、24時間水浸の後に乳鉢を用いて細粒化したものを分析試料とした。

(1)　試料の絶乾（105℃・24時間）

(2)　試料約１ｇを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm、約0.02g）

　※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量

(3)　電気炉灰化法による脱有機物処理

(4)　超音波による分散（300W・42KHz・10分間以上）

(5)　沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥

(6)　封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成

(7)　検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

４．分析結果

表２および表３に分析結果を示す。分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は次のとおりである。イネ、イネの籾殻（穎の表皮細胞）、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属など）、ジュズダマ属、タケ亜科のＡ１ａタイプ（ネザサ節など）、Ｂ１タイプ（クマザサ属など）、Ｂ２タイプ（メダケ属など）、その他、給源不明のＡタイプ（キビ族類似）、Ｂタイプ（ウシクサ族類似）、Ｃタイプ（ウシクサ族類似、大型）、表皮毛起源、茎部起源、棒状珪酸体、その他（未分類）、樹木起源のＡタイプ（ブナ科のシイノキ属）、Ｂタイプ（ブナ科のコナラ属）、Ｃタイプ（ブナ科）、Ｄタイプ（広葉樹）である。また、海綿骨針もわずかに検出された。

以下にこれらの分類群の形態を記載し、同定の根拠を示した。写真図版に各分類群の顕微鏡写真を示す。なお、現時点では植物珪酸体標本の整備および検討が十分ではないため、記載内容は今後の研究によって訂正や追加がなされる余地を残している。

⑴　イネ　Oryza sativa Linn.（第57図　１～３）

断面の形状は扇型もしくはイチョウの葉型である。大きさは45μm 前後。植物体中では弧の部分が葉身の裏側に、尖った部分が表側に向いていることから、前者を裏面部、後者を表面部とよんでいる。また、葉身の縦断面方向から見た面を断面、横断面方向から見た面を側面とよんでいる。裏面部には亀甲状もしくはゴルフボールの表面様の凹凸があり、側面突起が比較的明瞭で、表面先端部には溝状のわずかな凹みがある。

イネに近似したものに、サヤヌカグサ属のサヤヌカグサ（Leersia　oryzoidessubsp. Sayanuka）とアシカキ（Leersia japonica）がある。前者はイネに極めて近似しているが、表面先端部が丸みを帯びており溝状の凹みが見られないことや側面突起が不明瞭であることなどからイネと識別される。また後者は側面部や表面先端部に大きな突起があり裏面部の凹凸が荒いことなどからイネと識別される。

⑵　イネの籾殻（穎の表皮細胞）　（第58図　４）

イネの籾殻（穎）の表皮細胞には特徴的な乳様突起があり、その裏側（基部）は丸く凹んでいる。大きさは50μm 前後。

(3) ヨシ属　Phragmites　(第58図　5)

大きさ(縦長)は80μm前後と大型。裏面部の比率が非常に大きいことから、断面の形状は一部が欠けた小判のように見える。側長は30μm程度と比較的小さく、断面部が皿状に凹んでいるものが多い。ヨシ属に近似したものにダンチク属(Arundo)があるが、ヨシ属の裏面部が丸みを帯びた弧になっているのに対し、ダンチク属のそれは弧の中央部付近に1～2つの大きな凹みがあることで識別される。

(4) ウシクサ族　Andropogoneae　(第58図　6)

断面の形状は、丸みを帯びた扇型およびその胴部の片方がくびれたものなど変異が大きい。裏面部に浅い凹みがあるものが多い。大きさは45μm前後。ウシクサ族にはススキ属やチガヤ属、サトウキビ属などが含まれるが、植物珪酸体の形状からここで検出されたものは、そのほとんどがススキ属(Miscanthus)に由来するものと考えられる。

(5) ジュズダマ属　Coix

表面が広く扁平な独特の断面形状で、側面突起が比較的明瞭である。裏面部に比較的大きな亀甲状の凹凸がある。

(6) タケ亜科　Bambusoideae　(第59～60図　7～11)

タケ亜科の珪酸体は、その形態からAタイプとBタイプに大別される。前者は立体的であり比較的小型で裏面部に明瞭な稜線があるもの、後者は平面的であり比較的大型で裏面部の稜線が不明瞭なものである。

Aタイプは断面の形状などからさらにA1、A2、A3の3つに細分できる。すなわち、A1タイプは裏面部が丸みを帯びているもの、A2タイプは裏面部が尖り気味のもの、A3は裏面部に亀甲状の凹凸部があるものである。A1タイプのうちA1aタイプは側長が35μm前後と大きく裏面部の稜線が特に明瞭なことで他と区別される。Bタイプは断面の形状などからさらにB1、B2の2つに細分できる。すなわち、B1タイプは断面の形状がヨシ属に類似したものと扇頂部が欠けた扇型様のものおよびその中間型、B2タイプは断面の形状がやや細長い扇型のものである。

なお、A1aタイプにはメダケ属のネザサ節とシホウチク属が、A2タイプにはマダケ属とホウライチク属が、B1タイプにはクマザサ属が、B2タイプにはネザサ節以外のメダケ属とヤダケ属が含まれる。詳細については杉山論文〔杉山真二　1987〕を参照されたい。

(7) 不明Aタイプ　(第60・61図 12、13)

基本的には丸みを帯びた直方体(食パン状)でキビ族に近似しているが、裏面の凹凸が不明瞭なもの。

(8) 不明Bタイプ

ウシクサ族に類似しているが、やや小型で表面部が広いものや横長が小さいものなど。ススキ属などの機動細胞列の脇に形成される不完全な珪酸体（変形）もこれに含まれる。

(9) 不明Cタイプ

大きさ（縦長）が80μm前後と大型で、断面の形状がウシクサ族に近似しているもの。サトウキビ属にこれと類似したものが含まれている。

(10) 表皮毛起源（第61図 14）

刺状もしくはくちばし状の珪酸体。イネ科の葉縁などに多く見られる表皮毛に由来している。

(11) 茎部起源

扁平なかまぼこ状で、長軸方向に2～3本の棟をもつ珪酸体。長軸方向の長さはおおむね80μm前後である。これは赤山陣屋敷遺跡の草本質泥炭層などで見られた不明C（杉山・藤原1987）と同一物であり、低湿地遺跡では普通に見られる。ヨシなどの葉鞘や茎に含まれる。

(12) 棒状珪酸体 （第61・62図 15、16）

長さが100μm前後もしくはそれ以上の棒状の珪酸体。径の太さや断面の形、側面突起の有無などからいくつかのタイプに分類できる。多くはイネ科の結合組織細胞や維管束細胞などに由来している。

(13) 不明（その他）

以上の分類群以外のもの。この中には、風化が激しく同定不能なものや珪酸体の破片なども含まれている。

(14) 樹木起源Aタイプ（ブナ科のシイノキ属 Casutanopsis） （第62図 17、18）

塊状もしくは紡錘状で、全面にスプーンで欠いたような多数の凹みがある。大きさは70～80μm前後と大型。シイノキ属の葉中に見られる。これと似たものにモクレン科があるが、全体の形が扁平なことや網目状の棟が細く鋭いことからシイノキ属と識列される。

(15) 樹木起源Bタイプ（ブナ科のコナラ属 Quercus） （第63図 19～21）

棒状もしくはブーメラン状で、片面にスプーンで欠いたような複数の凹みがある。一見鹿の角に似ているものがある。大きさは100μm前後と大型。ブナ科のコナラ属（おもにアカガ

シ亜属 Quercus subgen. Cyclobalanopsis）の葉脈に見られる。

⑯　樹木起源Ｃタイプ（ブナ科 Fagaceae など）（第64図 22）

枝分かれした棒状もしくはよじれかかった棒状（ひも状）を呈する珪酸体。おもにブナ科の葉脈に見られる。

⑰　樹木起源Ｄタイプ（広葉樹）（第64図 23）

はめ絵パズル状〔近藤・ピアスン　1981〕の珪酸体。ブナ科やモクレン科などの広葉樹の表皮細胞に由来している。

5．考　察

(1)　弥生時代後期前半の土器内部の土壌

遺構の底部付近から出土した弥生時代後期前半とされる土器(No.57、59、56、60、92、58、62、70）の内部土壌について分析を行った。これらの土器は完形に近いものであり、上部層から後代のものが混入した危険性は考えにくい。したがって、これらの土器内部の土壌は土器が廃棄された時期とほぼ同時期のものと考えられる。

分析の結果、すべての試料からイネおよびイネの籾殻（穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体が検出された。イネの珪酸体密度は平均で3,800個／gであるが、No.59では7,400個／gおよびNo.58では5,100個／gと高い値の試料も見られた。水田跡（稲作跡）の確認や探査を行う場合の判断基準は、一般に5,000個／g以上とされていることから、これらの土壌は水田もしくはその周辺の土壌である可能性が高いと考えられる。

イネ以外の分類群では、ウシクサ族やタケ亜科Ａ１ａタイプ(ネザサ節など)、不明Ｂタイプ（ウシクサ族類似)、棒状珪酸体、樹木起源のＡタイプ（ブナ科のシイノキ属）およびＢタイプ（ブナ科のコナラ属）が多く見られ、ヨシ属なども少量見られた。植物珪酸体の組成は試料間で大きな差異は見られず、比較試料（土器周辺の土壌）を含めていずれもほぼ同様であった。

ウシクサ族については、上述のようにそのほとんどがススキ属に由来するものと考えられる。また、不明Ｂタイプとしたものの中にもススキ属が含まれている可能性があり、棒状珪酸体もその多くがススキ属の結合組織細胞に由来するものと考えられる。

一般にススキ属やヨシ属などは森林の林床では生育しにくいことから、上記の植物群がすべて同一場所に生育していたとは考えにくい。おそらく当時は、遺跡周辺にシイノキ属やコナラ属（おもにアカガシ亜属？）などの照葉樹を主体とした森林植生があり、その縁辺部などでススキ属やネザサ節が生育していたものと推定される。また、調査地点の近辺では稲作が行われており、低地部などではヨシ属が生育していたものと考えられる。

(2) 弥生時代後期前半の土器胎土

弥生時代後期前半の土器（No.57、92、58、62、70）の胎土について分析を行った。その結果、植物珪酸体組成は土器によって大きく異なっており、No.57ではヨシ属や棒状珪酸体、No.62では樹木起源のＡタイプ（ブナ科のシイノキ属）、No.70では樹木起源のＡタイプおよびタケ亜科Ｂ１タイプ（クマザサ属など）が卓越して検出された。なお、土壌試料で比較的多く検出されたウシクサ族やタケ亜科はほとんど見られず、イネはいずれの試料からもまったく検出されなかった。

以上のことから、これらの土器は同一の素材（粘土）をもとに製作されたものではなく、No.57ではヨシ属の生育するような湿地の土壌、No.62とNo.70ではシイノキ属の森林もしくはその近辺の土壌が使われていたものと考えられる。また、No.92とNo.58についても他の土器とは異なる素材が用いられていたものと考えられる。なお、イネの植物珪酸体がまったく検出されないことから、土器の素材として水田土壌が使われていた可能性は考えられない。

(3) 炉跡内の焼土

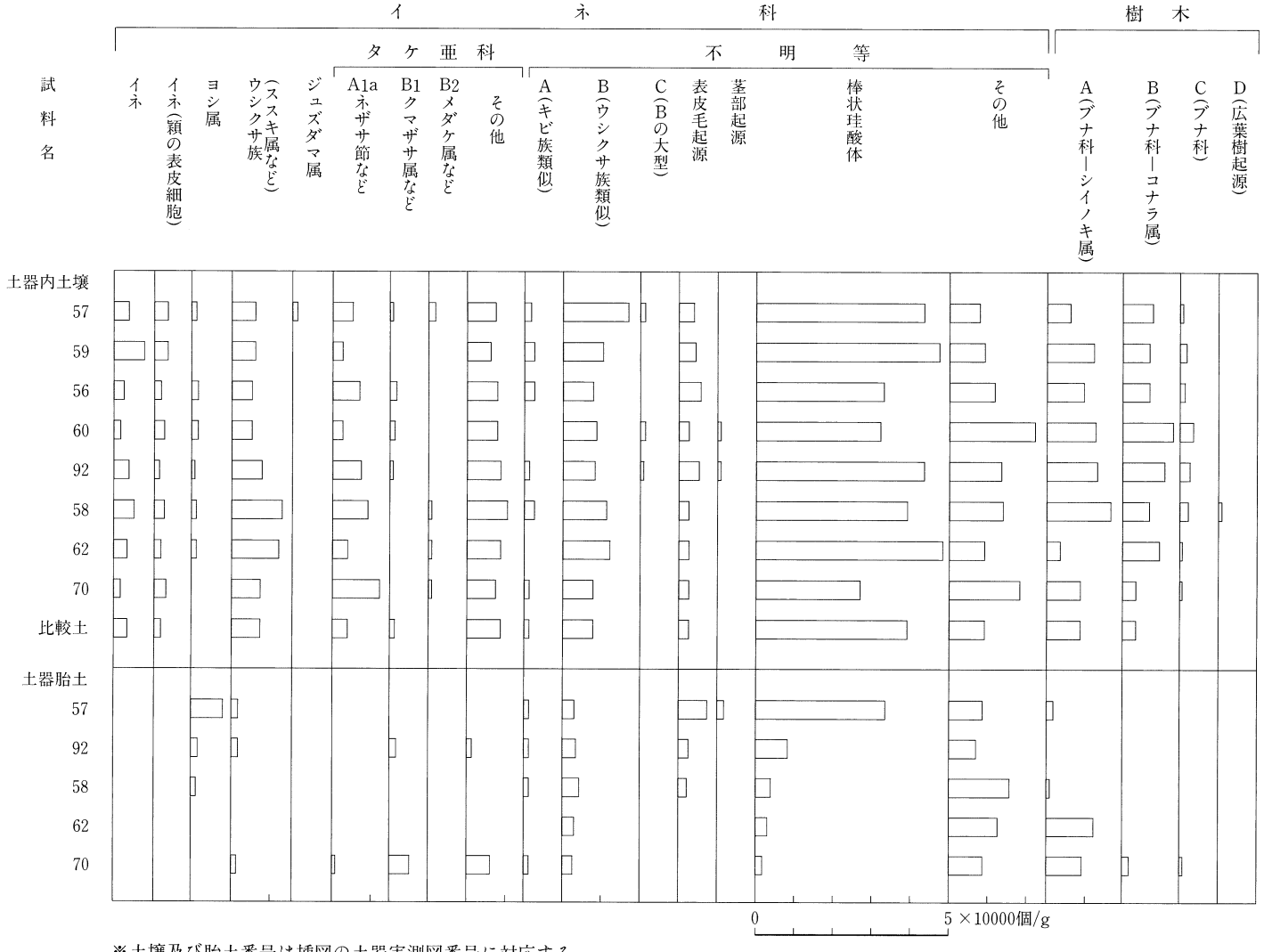
釜ノ口遺跡から出土した炉跡内の焼土について分析を行った。その結果、ネザサ節やウシクサ族、不明Ｂタイプ、棒状珪酸体などが極めて多量に検出された。このうち、後者の３つの分類群については、上述と同様にその大半がススキ属に由来するものと考えられる。また、イネやヨシ属も比較的多く見られたが、樹木起源の珪酸体はまったく検出されなかった。

これらのことから、この炉跡では燃料としてネザサ節やススキ属、および稲藁などが利用されていたものと推定される。なお、この焼土は住居跡の屋根が焼け落ちたものとも見られていることから、住居の屋根材としてこれらの植物が使われていたことも考えられる。

【参考文献】

近藤錬三・ピアスン友子　1981「樹木葉のケイ酸体に関する研究（第２報）―双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について―」『帯広畜産大学研究報』12:217-229
杉　山　真　二　1987「タケ亜科植物の機動細胞珪酸体」『富士竹類植物園報告』第31号:70-83
杉山真二・藤原宏志　1987「川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析」『赤山―古環境編―』川口市遺跡調査会報告　第10集　281-298
杉山真二・松田隆二・藤原宏志　1988「機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用―古代農耕追究のための基礎資料として―」『考古学と自然科学』20:81-92
杉山真二・石井克己　1989「群馬県子持村、ＦＰ直下から検出された灰化物の植物珪酸体（プラント・オパール）分析」『日本第四紀学会要旨集』19:94-95
藤　原　宏　志　1976「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)　―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―」『考古学と自然科学』9:15-29
藤　原　宏　志　1982「プラント・オパール分析法の基礎的研究(4)　―熊本地方における縄文土器胎土に含まれるプラント・オパールの検出―」『考古学と自然科学』第14号:55-65
高尾和長・真木　潔　1991「釜ノ口遺跡７次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

表 2　土器胎土及び土器内土壌の植物珪酸体分析



※土壌及び胎土番号は挿図の土器実測図番号に対応する。

表3　祝谷アイリ遺跡における植物珪酸体(プラント・オパール)分析結果（単位：×100個/g）

分類群	土器内土壌								
	57	59	56	60	92	58	62	70	比較土
イネ科									
イネ	42	74	27	14	42	51	37	15	37
イネ（穎の表皮細胞）	35	34	13	28	13	26	12	29	12
ヨシ属	7		13	14	3	6	6		
ウシクサ族（ススキ属など）	56	54	47	50	68	122	118	73	68
ジュズダマ属	7								
タケ亜科									
A1aタイプ（ネザサ節など）	49	20	60	21	68	90	37	117	43
B1タイプ（クマザサ属など）	7		13	7	3				6
B2タイプ（メダケ属など）	14					6	6	7	
その他	70	60	80	78	91	103	87	66	81
不明等									
Aタイプ（キビ族類似）	14	27	27		7	26		7	6
Bタイプ（ウシクサ族類似）	154	101	73	92	88	109	124	88	75
Cタイプ（Bタイプの大型）	7			7	3				
表皮毛起源	42	47	53	28	52	26	25	22	19
茎部起源				7	3				
棒状珪酸体	433	463	333	313	427	385	478	264	391
その他	84	94	113	213	127	135	93	176	93
樹木起源									
Aタイプ（ブナ科―シイノキ属）	56	121	100	128	137	161	43	88	93
Bタイプ（ブナ科―コナラ属）	77	67	67	135	104	71	99	29	31
Cタイプ（ブナ科）	7	13	13	43	33	26	6	7	
Dタイプ（広葉樹）					3	6			
（海綿骨針）								15	
植物珪酸体総数	1159	1174	1032	1181	1273	1349	1173	988	956

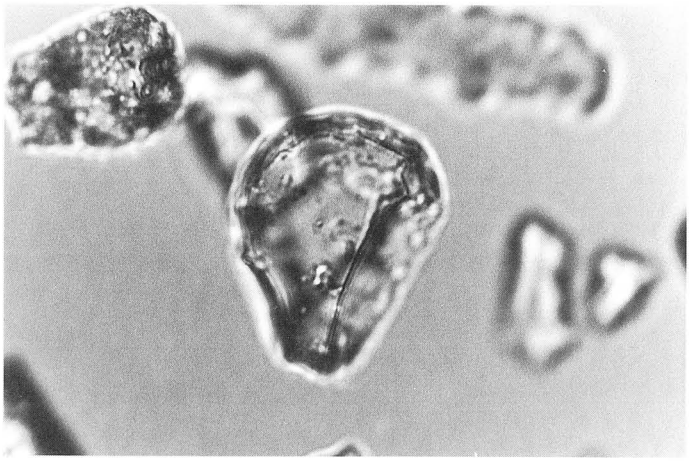
※土器はすべて弥生時代後期前半のもの。
※土壌及び胎土番号は挿図の土器実測図番号に対応する。

土器胎土					釜ノ口	
57	92	58	62	70	焼土	分類群
						イネ科
					62	イネ
						イネ（穎の表皮細胞）
75	14	7			62	ヨシ属
12	14			6	394	ウシクサ族（ススキ属など）
						ジュズダマ属
						タケ亜科
				6	1888	Ａ１ａタイプ（ネザサ節など）
	14				187	Ｂ１タイプ（クマザサ属など）
					124	Ｂ２タイプ（メダケ属など）
	7			55	2821	その他
						不明等
6	7	7		6	62	Ａタイプ（キビ族類以）
35	34	46	31	24	436	Ｂタイプ（ウシクサ族類以）
					41	Ｃタイプ（Ｂタイプの大型）
75	21	20			83	表皮毛起源
12					21	茎部起源
330	82	40	31	18	2406	棒状珪酸体
87	69	152	118	85	311	その他
						樹木起源
17		7	118	96		Ａタイプ（ブナ科―シイノキ属）
				12		Ｂタイプ（ブナ科―コナラ属）
				6		Ｃタイプ（ブナ科）
						Ｄタイプ（広葉樹）
	7					（海綿骨針）
648	261	278	297	315	8900	植物珪酸体総数

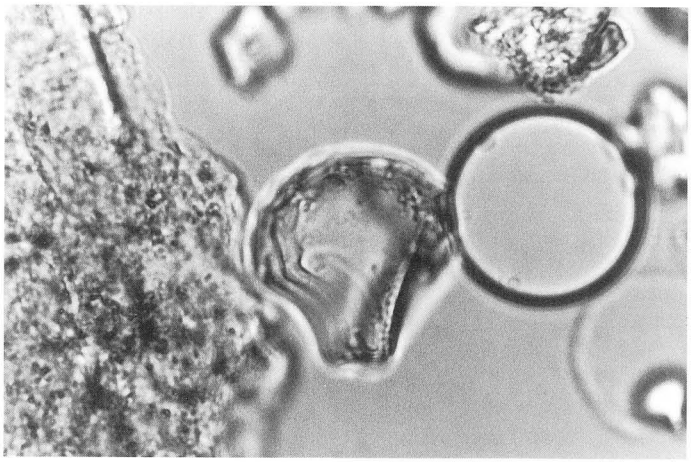
表4　祝谷アイリ遺跡他から検出されたプラント・オパールの顕微鏡写真

No.	分　類　群	試料名	倍率
1	イネ	釜ノ口遺跡、焼土	400
2	イネ	土器内土壌、No.57	400
3	イネ	比較土壌	400
4	イネの籾殻（穎の表皮細胞）	土器内土壌、No.57	400
5	ヨシ属	土器胎土、No.57	400
6	ウシクサ族（ススキ属など）	釜ノ口遺跡、焼土	400
7	タケ亜科Ａ１ａタイプ(ネザサ節など)	釜ノ口遺跡、焼土	400
8	タケ亜科Ｂ１タイプ（クマザサ属）	釜ノ口遺跡、焼土	400
9	タケ亜科Ｂ１タイプ（クマザサ属）	釜ノ口遺跡、焼土	400
10	タケ亜科Ｂ２タイプ（メダケ属など）	釜ノ口遺跡、焼土	400
11	タケ亜科Ｂ２タイプ（メダケ属など）	土器内土壌、No.70	400
12	不明Ａタイプ（キビ族類似）	釜ノ口遺跡、焼土	400
13	不明Ａタイプ（キビ族類似）	比較土壌	400
14	表皮毛起源	釜ノ口遺跡、焼土	400
15	棒状珪酸体	釜ノ口遺跡、焼土	400
16	棒状珪酸体	釜ノ口遺跡、焼土	400
17	樹木Ａタイプ（ブナ科―シイノキ属）	土器胎土、No.62	400
18	樹木Ａタイプ（ブナ科―シイノキ属）	土器胎土、No.62	400
19	樹木Ｂタイプ（ブナ科―コナラ属）	土器内土壌、No.57	400
20	樹木Ｂタイプ（ブナ科―コナラ属）	土器内土壌、No.62	400
21	樹木Ｂタイプ（ブナ科―コナラ属）	比較土壌	400
22	樹木Ｃタイプ（ブナ科）	土器胎土、No.70	400
23	樹木Ｄタイプ（広葉樹）	土器内土壌、No.62	400
24	樹木	土器胎土、No.62	400

※土器胎土の土器番号は挿図の土器実測図番号に対応する。



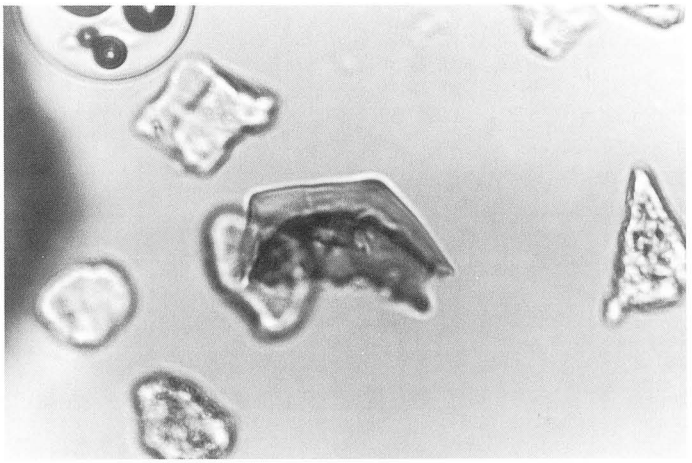
1　イネ
釜ノ口遺跡（7次)、焼土



2　イネ
祝谷アイリ遺跡、57内土壌

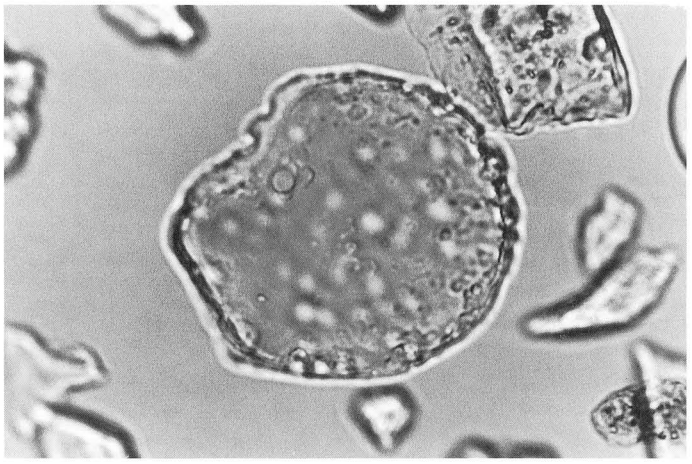
3　イネ
祝谷アイリ遺跡、ＳＫ15Ⅲ層土壌

第57図　プラント・オパールの顕微鏡写真（1）　(400倍)



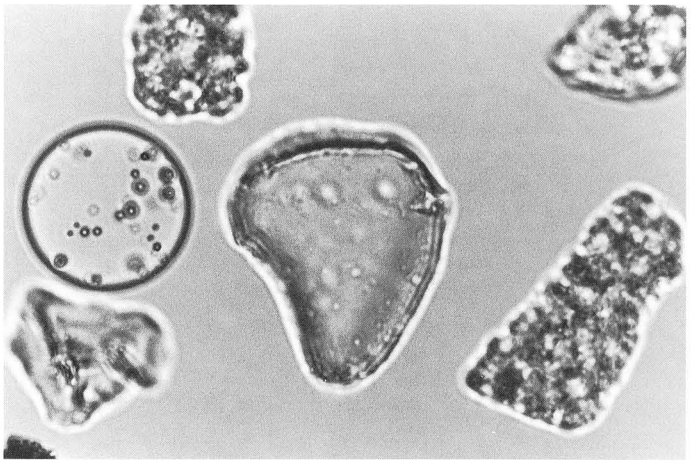
4　イネの籾殻

祝谷アイリ遺跡、57内土壌



5　ヨシ属

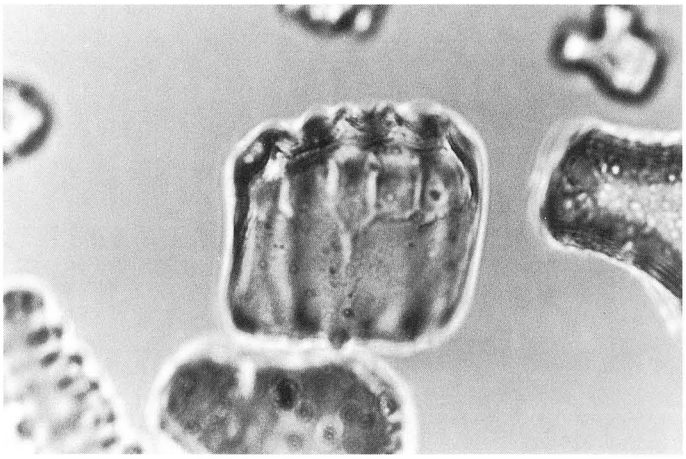
祝谷アイリ遺跡、57土器胎土



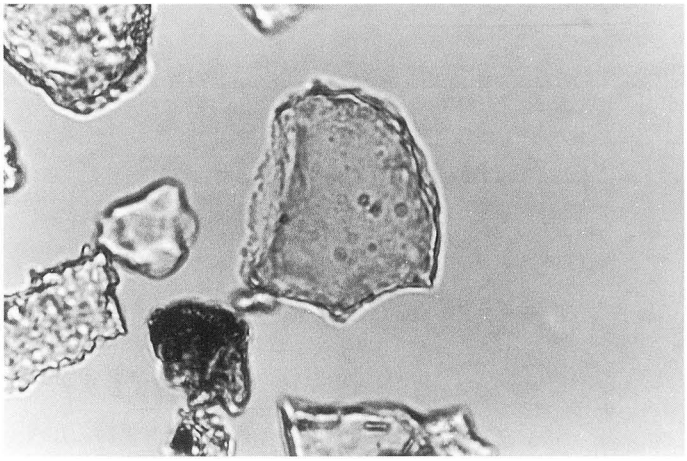
6　ウシクサ族

釜ノ口遺跡（7次）、焼土

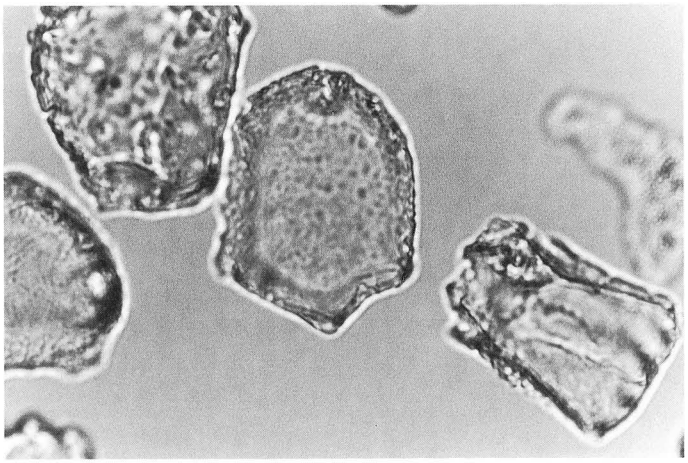
第58図　プラント・オパールの顕微鏡写真 (2)　　(400倍)



7　タケ亜科Ａ１ａタイプ
釜ノ口遺跡（７次）、焼土



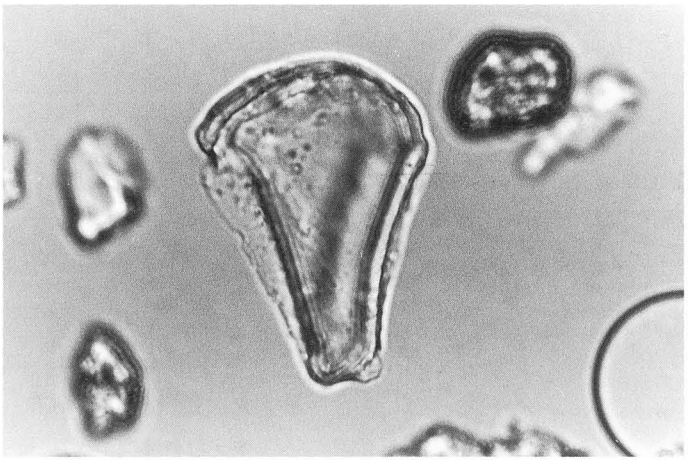
8　タケ亜科Ｂ１タイプ
釜ノ口遺跡（７次）、焼土



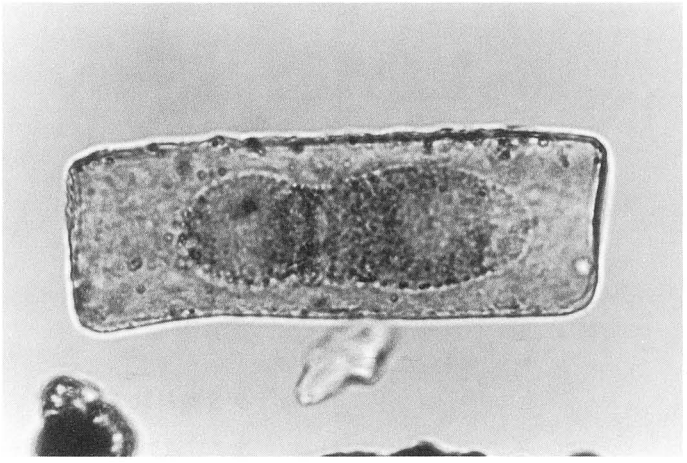
9　タケ亜科Ｂ１タイプ
釜ノ口遺跡（７次）、焼土

第59図　プラント・オパールの顕微鏡写真 (3)　　(400倍)

10　タケ亜科Ｂ２タイプ
釜ノ口遺跡（７次）、焼土

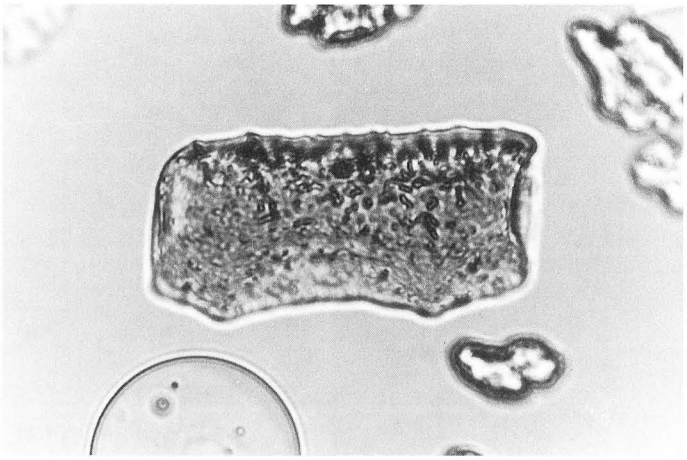


11　タケ亜科Ｂ２タイプ
祝谷アイリ遺跡、70内土壌



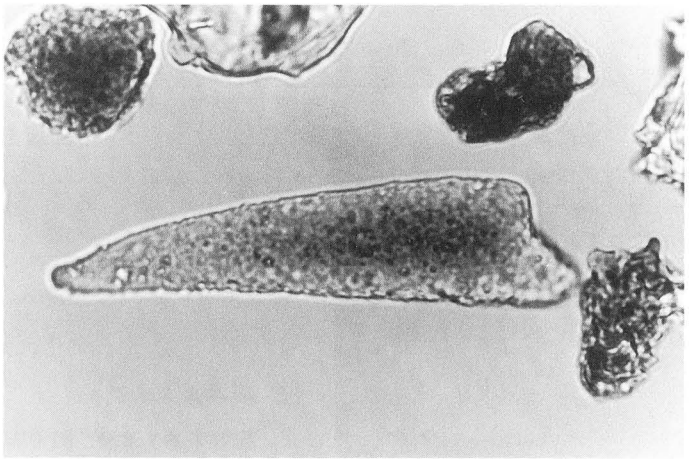
12　不明Ａタイプ
釜ノ口遺跡（７次）、焼土

第60図　プラント・オパールの顕微鏡写真（4）　（400倍）



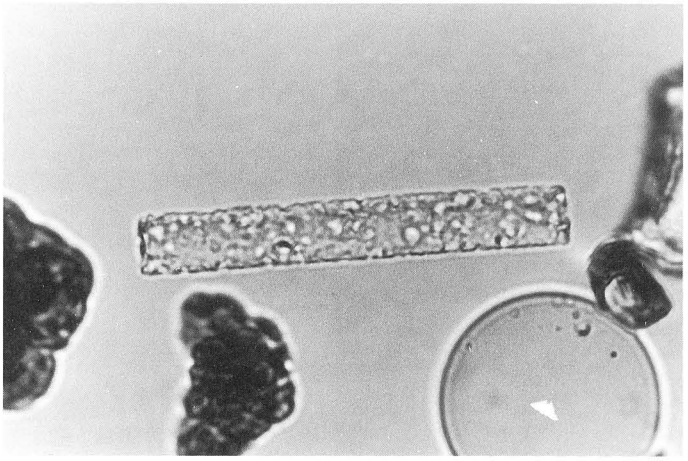
13　不明Ａタイプ

祝谷アイリ遺跡、ＳＫ15Ⅲ層土壌



14　表皮毛起源

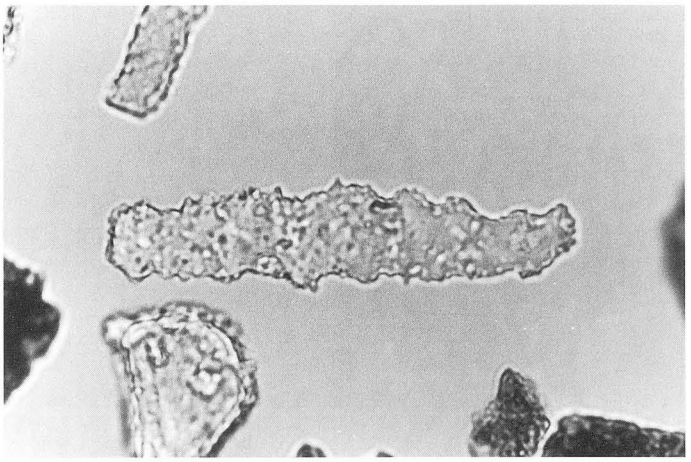
釜ノ口遺跡（７次）、焼土



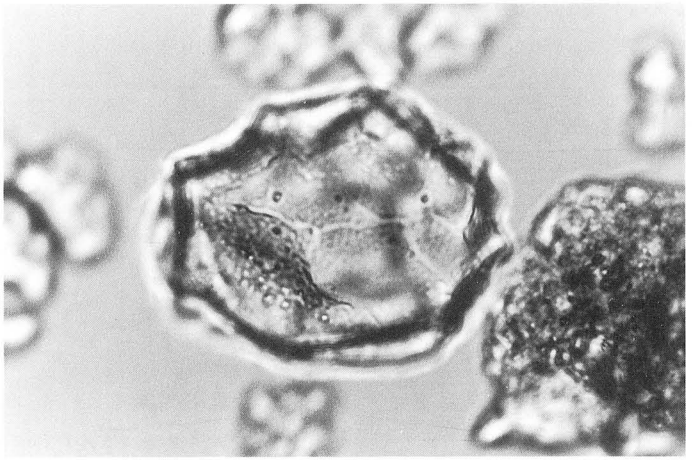
15　棒状珪酸体

釜ノ口遺跡（７次）、焼土

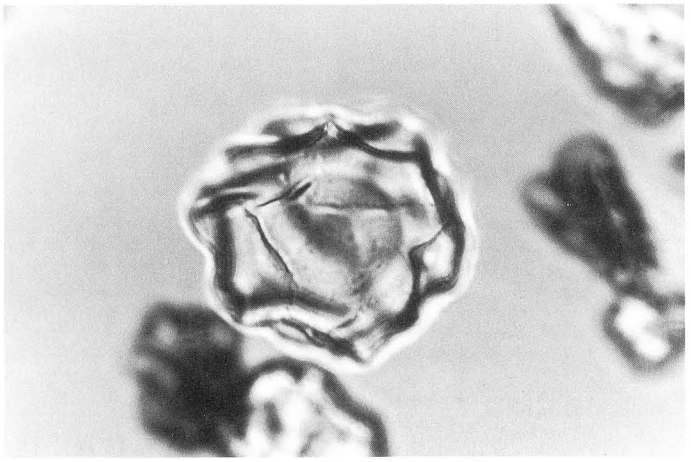
第61図　プラント・オパールの顕微鏡写真 (5)　　(400倍)



16　棒状珪酸体
釜ノ口遺跡（7次）、焼土

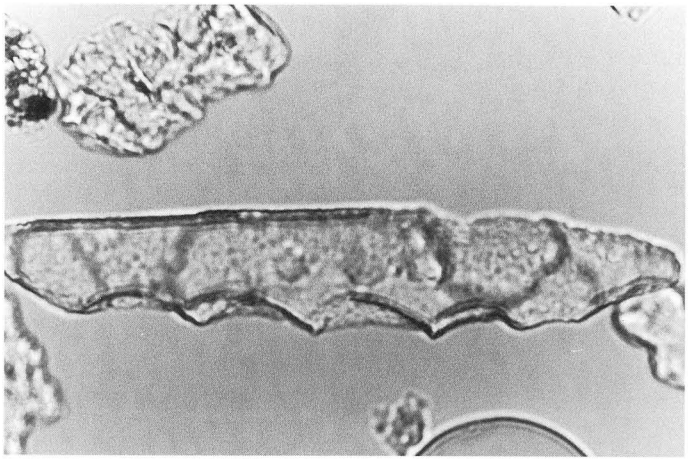


17　樹木Aタイプ
祝谷アイリ遺跡、62土器胎土

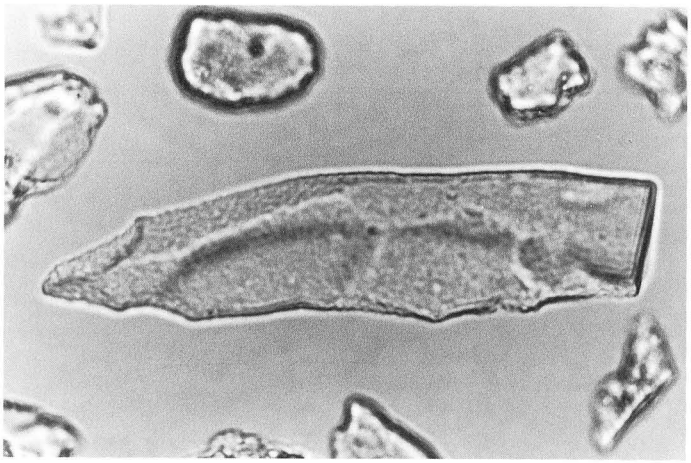


18　樹木Aタイプ
祝谷アイリ遺跡、62土器胎土

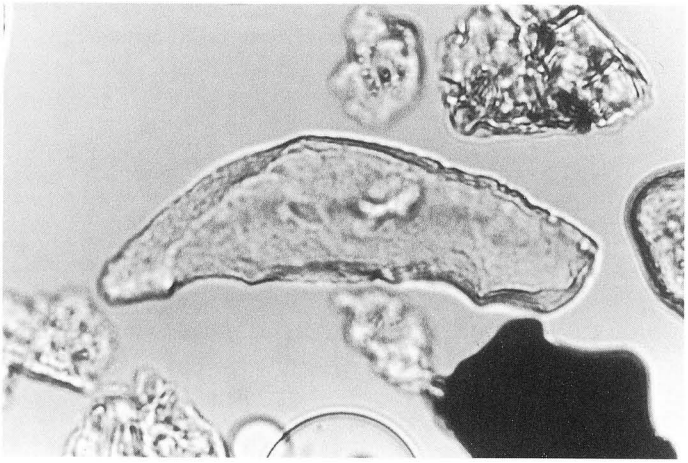
第62図　プラント・オパールの顕微鏡写真（6）　（400倍）



19　樹木Ｂタイプ
祝谷アイリ遺跡、57内土壌

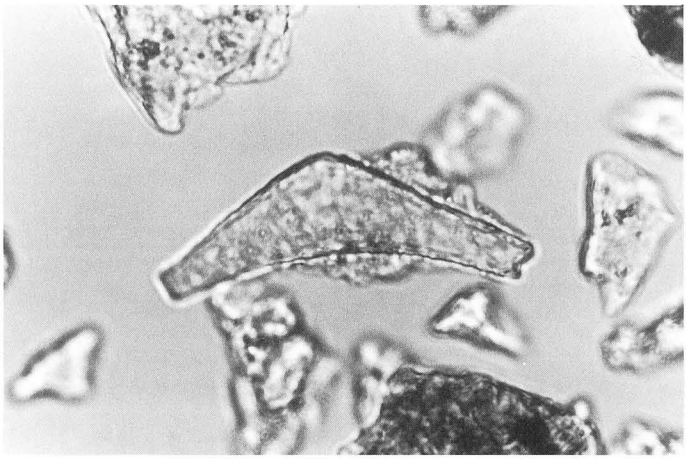


20　樹木Ｂタイプ
祝谷アイリ遺跡、62内土壌



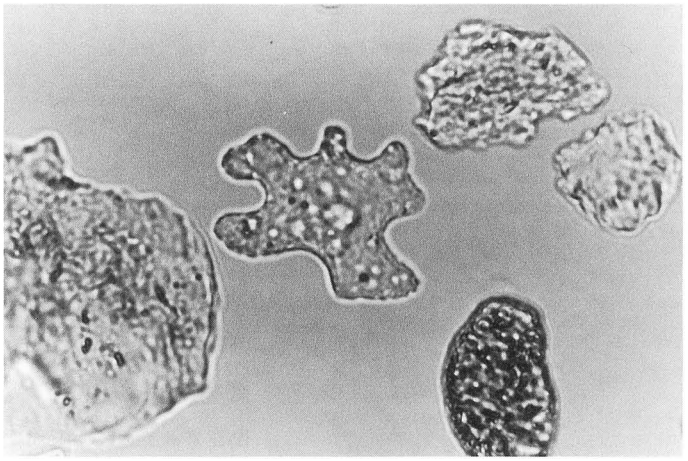
21　樹木Ｂタイプ
祝谷アイリ遺跡、ＳＫ15Ⅲ層土壌

第63図　プラント・オパールの顕微鏡写真（7）　（400倍）



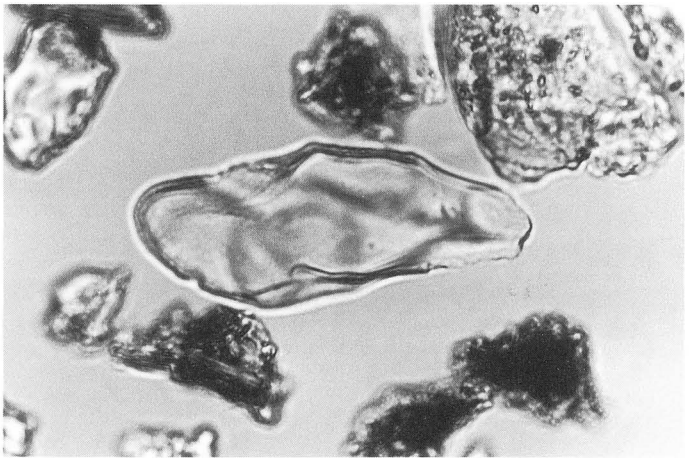
22　樹木Ｃタイプ

祝谷アイリ遺跡、70土器胎土



23　樹木Ｄタイプ

祝谷アイリ遺跡、62内土壌



24　樹木

祝谷アイリ遺跡、62土器胎土

第64図　プラント・オパールの顕微鏡写真（8）　（400倍）

IV-2 樹種同定

古環境研究所　杉山　真二

1．はじめに

方法と記載

同定を行うに当たって、生材試料は、片刃カミソリをもちいて試料の横断面(木口と同義)、接線断面（板目と同義)、放射断面（柾目と同義）の３断面についてつくり、ガムクロラール(Gum Chloral)で封入し、永久標本を作成し、光学顕微鏡下で40～400倍率で観察した。炭化材試料は、片刃カミソリをもちいて試料の横断面(木口と同義)、接線断面(板目と同義)、放射断面（柾目と同義）の３断面についてつくり、直径１cmの真鍮製の台に固定し、金蒸着を施した後、電子顕微鏡（日本電子製、JSM T-20型）で観察した。樹種の同定は、現生標本との比較により行う。表１にその結果を示す。

以下に、観察による特徴記載および樹種同定の根拠を示し、電子顕微鏡写真を示す。

表５　祝谷アイリ遺跡・釜ノ口遺跡（７次）出土材とその樹種

遺　　跡	試　　料	樹　　種
祝谷アイリ	ＳＢ－２　West	コナラ属クヌギ節（ブナ科）
	ＳＢ－２　East	アカガシ亜属（ブナ科）
	ＳＢ－２　West　縦	コナラ属クヌギ節（ブナ科）
釜ノ口７次	ＳＢ－１（No.１）－炭化材	アカガシ亜属（ブナ科）
	ＳＢ－１（No.２）－炭化材	サカキ（ツバキ科）
	ＳＢ－１（No.３）－炭化材	アカガシ亜属（ブナ科）
	ＳＢ－１（No.４）－炭化材	アカガシ亜属（ブナ科）
	ＳＢ－１炉内（No.1）－生材	マツ属（マツ科）
	ＳＢ－４（No.1）－炭化材	マツ属（マツ科）

(1)　コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科

第65図１ａ～１ｃ（祝谷アイリ遺跡)、第66図２ａ～２ｃ（釜ノ口遺跡)

大型の管孔が放射方向に配列する放射孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、チロ

ースが見られる。(放射断面または接線断面)。放射組織は、柔細胞で単列同性のものと広放射組織とがある（接線断面)。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のアカガシ亜属の材と同定される。アカガシ亜属の樹木には関東に分布するアカガシ（Q. acuta）やアラカシ（Q. glauca）やシラカシ（Q. myrsinaefolia)をはじめ８種類ほどある。アカガシ亜属の樹木は、樹高20m、幹径１ｍに達する常緑広葉樹で、日本の暖帯の照葉樹林の主要な構成要素であり、木材は重硬、強靱であり、船舶材、車両材、農具などに用いられる。

(2) コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Aegilops　ブナ科

第65図２ａ～２ｃ（祝谷アイリ遺跡)

年輪のはじめに大管孔が１～２列並び、そこからやや急に径を減じたやや厚壁の丸い小管孔が放射方向に配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、時としてチロースが見られる(放射断面)。放射組織は単列同性のものと広放射組織とがあり、複合放射組織の分布型を示す（接線断面)。

以上の形質から、いずれの試料もブナ科のコナラ属クヌギ節の材と同定される(表１)。クヌギ節の樹木には関東地方に普通に見られるクヌギ（Quercus acutissima）と、東海・北陸以西に主として分布するアベマキ(Q. variabilis)があるが、識別するには至っていない。いずれの樹木も樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹で、木材は堅硬で割裂容易、耐朽性があり、器具材や車両材、下駄材、薪炭材、椎茸原木などに用いられる。

(3) マツ属　Pinus　マツ科

第66図１ａ～１ｃ（釜ノ口遺跡)

仮道管、放射柔細胞放射仮道管、垂直および水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞からなる針葉樹で、早材から晩材への移行は緩やかである（横断面)。分野壁孔は窓状である（放射断面)。エピセリウム細胞以外は、放射仮道管を含め単列で２～12細胞高である(接線断面)。材の色調は、淡褐色を呈する。

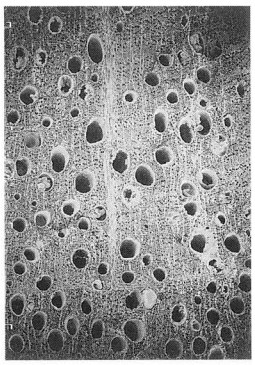
以上の形質から、マツ科マツ属の材と同定される。マツ属は、二葉松類に区別することができるが、本試料は、保存が良くないため区別できない。マツ属の樹木には、暖帯の沿岸沿いに見られる二葉松のクロマツ（Pinus thunbergii)、本州の暖帯から温帯にかけて見られる二葉松のアカマツ(P. densiflora)、あるいは北海道から九州にかけて広く見られる五葉松のヒメコマツ（P. parviflora）などがある。樹高は約30m、幹径１ｍ前後の針葉樹である。木材は、建築材や器具材などに用いられる。

(4) サカキ Cleyera japonica Thunb. ツバキ科

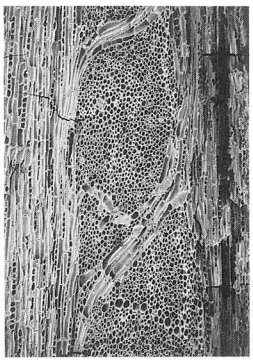
第66図３ａ～３ｃ（釜ノ口遺跡）

薄壁で小型の管孔が放射方向またはやや斜めに２個程度複合して散在する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は、40本程度以上の横棒からなる階段状セン孔である（放射断面）。放射組織は、単列異性で、２～32細胞高である（接線断面）。

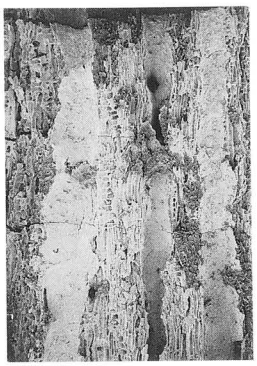
以上の形質から、ツバキ科のサカキの材と同定される。サカキは、樹高８～10m、幹径20～30cmの常緑広葉樹で、本州（関東以西）・伊豆七島・四国・九州など暖帯や亜熱帯に広く分布する。材は、建築、器具、船材などに用いられる。



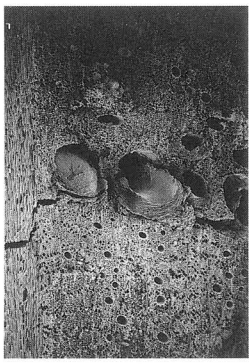
1a. アカガシ亜属（横断面）
SB-2、East Bar：1mm



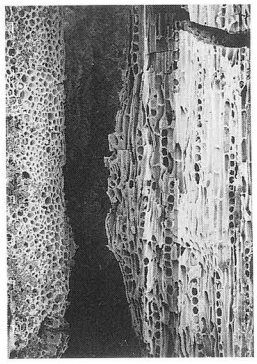
1b. 同（接線断面）
bar：0.5mm



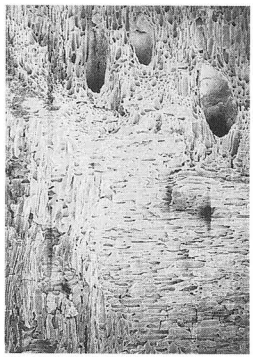
1c. 同（放射断面）
bar：0.5mm



2a. クヌギ節（横断面）
SB-2、West bar：1mm

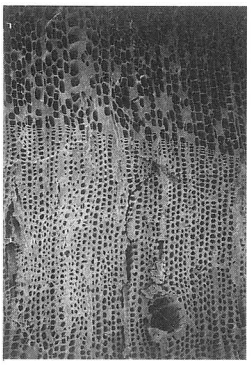


2b. 同（接線断面）
bar：0.1mm

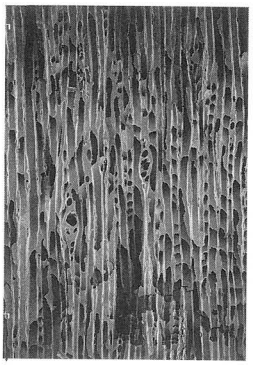


2c. 同（放射断面）
bar：0.5mm

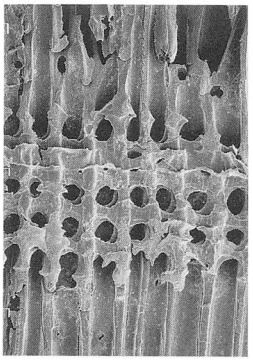
第65図　祝谷アイリ遺跡出土材の電子顕微鏡写真



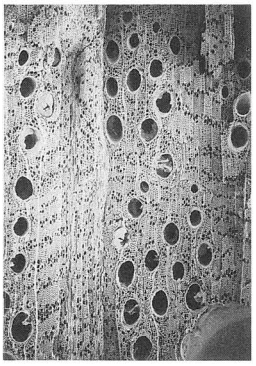
1a. マツ属(横断面)
SB-4、No.1 Bar：0.5mm



1b. 同(接線断面)
bar：0.5mm

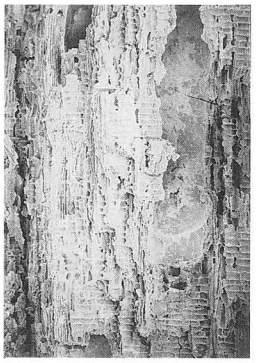


1c. 同(放射断面)
bar：0.1mm

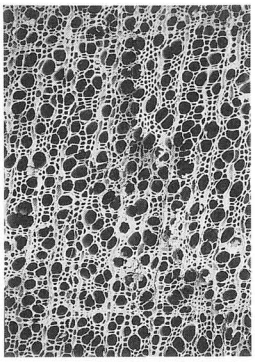


2a. アカガシ亜属(横断面)
SB-1、No.4 bar：1mm

2b. 同(接線断面)
bar：0.5mm

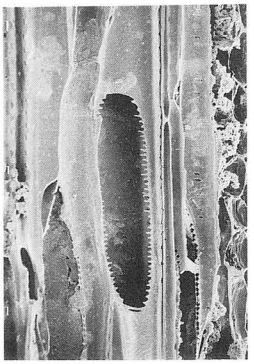


2c. 同(放射断面)
bar：0.5mm



3a. サカキ(横断面)
SB-1、No.2 bar：0.5mm

3b. 同(接線断面)
bar：0.5mm



3c. 同(放射断面)
bar：0.1mm

第66図　釜ノ口遺跡（７次）出土材の電子顕微鏡写真

Ⅳ-3 種子分析

古環境研究所　杉山　真二

1．祝谷アイリ遺跡出土種子

試料は全部で4点で、すべて炭化していないモモの核であった。それぞれの計測値(長さ、幅、厚さ）は、

① 22.4×18.3×14.7

② 25.0×20.3×15.1

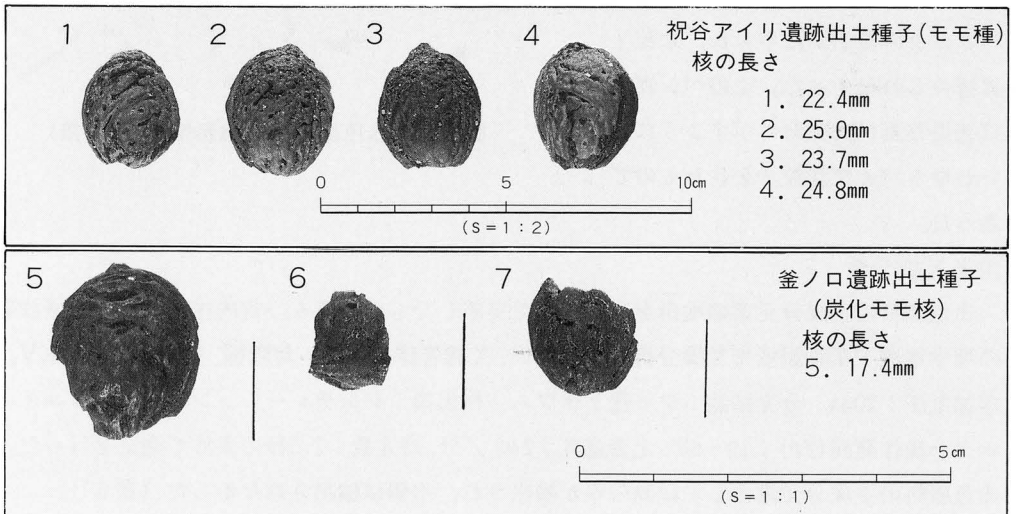
③ 23.7×19.2×14.5

④ 24.8×21.0×14.7（mm）

であった。1はやや小さいが、すべてほぼ普通のモモ核のサイズである。破損もほとんどなく、縦方向に流れるモモに特徴的な彫紋もきれいに残っている。時代が不明なためこれ以上の言及は出来ないが、少なくとも現在の栽培モモはこれらよりやや大きい。

2．釜ノ口遺跡7次調査出土種子

試料は全部で3点で、すべて炭化したモモ核であった。うち2点は破片である。1点の計測値は、長さ、幅、厚さが17.4×14.7×11.6（mm）であった。これは、モモとしてはかなり小さく、長さと幅の比は1.18と円形に近い。古代には、形態からみた2種類のモモが出土しているが、形状としては古代モモに類似している。古代モモは、小型で丸みの強い円形とされているが、中間型など変異幅があることからある程度の個体数がないと確実なことは言えない。



第67図　祝谷アイリ遺跡・釜ノ口遺跡（7次）出土の種子

Ⅳ-4　分銅形土製品付着の赤色顔料分析

福岡市埋蔵文化財センター　本田　光子
宮内庁正倉院事務所　成瀬　正和

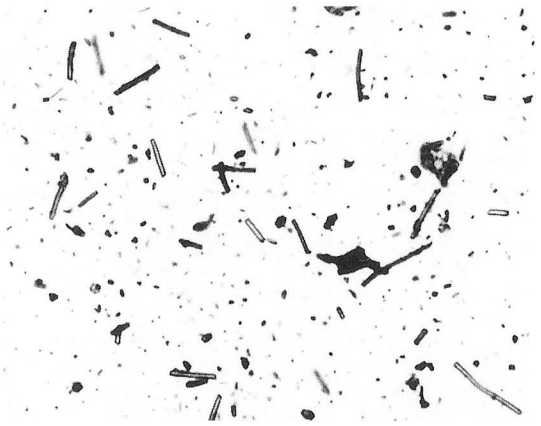
祝谷アイリ遺跡出土分銅形土製品に認められる赤色が何によるものかを、顕微鏡観察及び蛍光X線分析を行い調査した。

試料（第55図―下、図版33）

分銅形土製品の赤色部分の色調や付着の状態を肉眼で観察すると、土製品の焼成後にベンガラと思われる赤色顔料が塗布されたように判断できる。上端部刺突文中に付着している赤色物から微量をステンレス製のメスで採取した。針先に付く程度の量を採りプレパラートを作成し、検鏡用試料とした。残りはメノウの乳鉢で研和し蛍光X線分析の試料とした。

顕微鏡観察

光学顕微鏡により透過光・反射光で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類を判断するものである。一般に土器や土製品の赤彩に用いられる顔料はベンガラ（酸化第二鉄）と朱（硫化水銀）であるが、両者は特に微量のものが混在していなければ検鏡により見極めがつく。本試料には、赤色顔料としてはベンガラの粒子が認められ、朱粒子は認められなかった。このベンガラは透過写真（第68図）に示すように、いわゆるパイプ状粒子を含むものであった。



第68図　赤色顔料の透過影像（約500倍）

蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業㈱製蛍光X線分析装置を用い、X線管球：クロム対陰極、印加電圧：40KV、印加電圧：20mA、分光結晶：フッ化リチウム、検出器：シンチレーション計数管、ゴニオメーター操作範囲（2θ）：10～60°、走査速度：2θ8°／分、時定数：2.5秒の条件で測定を行った。赤色顔料の主成分元素としては鉄のみが検出され、水銀は検出されなかった（表6）。

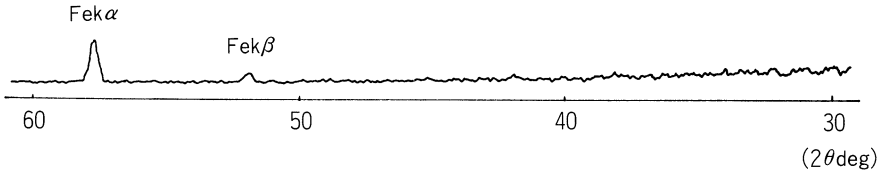


表6　蛍光X線スペクトル図

まとめ

以上の結果から推定される赤色顔料はベンガラ（パイプ状粒子含む）であり、土製品の焼成後に塗布したものである。

一般にベンガラというのは主成分元素が鉄であり、主成分鉱物は赤鉄鉱である赤色顔料を指す。出土赤色顔料の「ベンガラ」の場合は主成分鉱物として赤鉄鉱の他褐鉄鉱（針鉄鉱、鱗鉄鉱等）、非晶質の褐鉄鉱があり、これらの混合物であることも多い。そのためX線回析により赤鉄鉱が同定されない場合も少なくない。これは試料の量が主な原因であるが、赤鉄鉱と非晶質の褐鉄鉱が混合している場合、後者の量が多いと赤色が強くなるのではないかともいわれている。一方、主成分の定性分析で鉄が確認され、他に水銀、鉛が検出されなければ、主成分鉱物として赤鉄鉱（Hematite）が同定されなくともベンガラであるという判断もごく一般的になされている。さらに主成分の定量分析を行い、鉄の含有量の多少からベンガラの種類（品位・生産地）を分けることもある。また、出土ベンガラの粒子に種々の形状があることもわかってきており、本例のようにパイプ状を呈する特異な粒子は産地を示す指標ではないかという指摘もある。なお、パイプ状粒子を含むベンガラは、X線回析により赤鉄鉱の顕著なピークが認められるのだが、今回の試料はX線回析に供するには少なすぎたため、測定を行っていない。

祝谷アイリ遺跡出土の分銅形土製品に認められる赤色は、焼けによる発色あるいは鉄分の多い赤土ではなく赤色顔料「ベンガラ（含パイプ）」の塗彩によるものである。今後、分銅形土製品については赤色塗彩有無の観察が期待される。

〔文献〕

中　村　忠　晴　　1981　「群馬県東下および清里庚申塚遺跡出土の赤色顔料について」『清里・庚申塚遺跡』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
安　田　博　幸　　1983　『古代日本の知恵と技術』朝日カルチャーブックス28
永　嶋　正　春　　1985　「縄文時代の漆工技術」国立歴史民俗博物館研究報告 6

V-1　松山平野の石器文化

多田　　仁

1．祝谷丸山遺跡採集の石器について

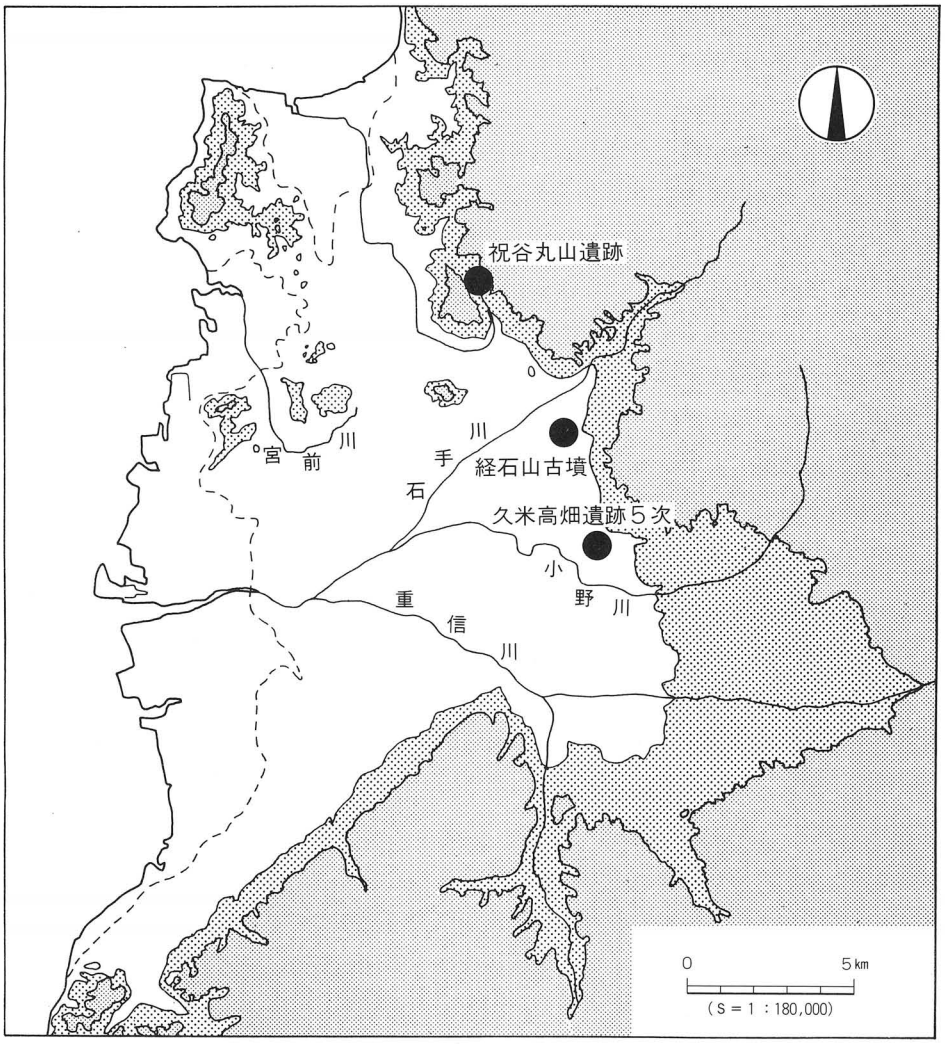
(1)　「祝谷丸山以後」の細石刃文化研究

祝谷丸山遺跡の細石刃文化資料は、1978年の十亀幸雄氏による資料紹介と細石刃剝離技術の検討によって〔十亀1978〕、愛媛県内の細石刃文化を代表する資料の一つとなっている。1985年刊行の『愛媛県史』〈長井1985〉や翌年刊行の『日本の古代遺跡22 愛媛』〔正岡、十亀1986〕にも祝谷丸山遺跡の資料は取り上げられ、十亀氏の当遺跡に対する資料評価は不動のまま現在に至るまで受け継がれてきている(註1)。こうして祝谷丸山遺跡の資料が紹介されて以来、瀬戸内海沿岸地域ではどのような細石刃文化研究がなされ、その研究にどう影響したであろうか。ここでは「祝谷丸山以後」を振り返り、祝谷丸山遺跡の研究史的位置づけを考えてみる。

1979年、十亀氏の論考が提示された翌年には、日本の細石刃文化研究に大きな影響を与えた『駿台史学47号』〔駿台史学会1979〕の刊行があった。ここでは10名の旧石器時代研究者が当時までの細石刃文化研究史を盛り込みながら、今後の研究課題の提示や新しい視点から細石核分類や地域単位での細石刃文化研究を行っている。さらに、「瀬戸内沿岸地方の細石器文化」〔小野1979〕と題した論考が小野昭氏によって述べられており、過去の研究を振り返りながら数々の問題点を指摘している。この中で小野氏は細石核をⅠ類とⅡ類に分け、Ⅰ類は「瀬戸内的な特徴」があるとし、Ⅱ類には福井第3層との関連を示唆した。

1980年頃には、瀬戸大橋関連の概報・本報告が相次いで発刊された。その一例を挙げると、花見山遺跡の概報〔香川県教育委員会1981〕では3分類5細分の細石核の分類が行われ、その中には福井洞穴2、3層と共通するものや、在地性を見いだすことができるものの存在などを示唆している。この瀬戸大橋関連の報告は現在も継続中であり、その度に細石刃文化資料は増加し続けている。

この頃、九州地方では、細石刃文化資料の増加は勿論のこと様々な論考が展開され、特に木崎康弘氏は祝谷丸山遺跡の資料を「船野形細石核」の範疇とてしている〔木崎1981〕。また1983年にも同氏は瀬戸内海沿岸地域に「非調整打面糸細石核」〔木崎1983〕が分布していることを述べている。同年、西村尋文氏が中部瀬戸内地域の細石核を取り上げ、詳細な分析と検討を行っている〔西村1983〕。ここで氏は細石核を4分類8細分し、この中に野岳・休場形細石核と福井2、3層の細石核に共通する資料があることを示した。また東九州地方に存在する船野型細石核が東海地方に分布を拡げる上で、中部瀬戸内地方がその通り道的位置づけにあることを述べ、瀬戸内海沿岸地域における細石刃文化をさらに興味深いものとしている。



第69図　松山平野における主要石器出土分布図

1984年には『駿台史学60号』〔駿台史学会1984〕が発刊され、副題に『特集日本細石器文化の研究II』と題し、1979年に続いてその続編が展開された。この中では全国規模での細石刃文化研究が行われており、特に注意される事は系統論的研究や起源論的研究が精力的に行われていることであろう。

この時期、愛媛県周辺では山口県旧石器文化研究会による調査・報告〔山口県旧石器文化研究会1985・1988〕や先に述べた瀬戸大橋関係の報告などによって細石刃文化資料が急増している。そして1988年には十亀氏が金ケ崎遺跡採集の細石核を検討している〔十亀1988〕。この中で氏は細石核を第１類と第２類に分類し、前者を船野型細石核、後者を加栗山型細石核

の範疇に含めている。これは「祝谷丸山以後」に瀬戸内海沿岸地域で行われてきた他地域との細石刃文化の比較研究が、愛媛県内でも実践的なものになっていることを示唆するかのようである。

以上で瀬戸内海沿岸地域における細石刃文化の研究を簡単に述べたが、総じて「祝谷丸山以後」における本地域の細石刃文化研究は、周辺地域との関連を論究するといった系統論的研究の中で展開していったと考えられる。これらのことから愛媛県内の細石刃文化資料の増加が期待されるのは勿論のこと、これまでの資料を検討することが必要となっている。今回はその第一歩として改めて祝谷丸山遺跡の資料を検討してみる。これによって祝谷丸山遺跡に対するより正当な評価と研究の活発化を促すことを試みたい。

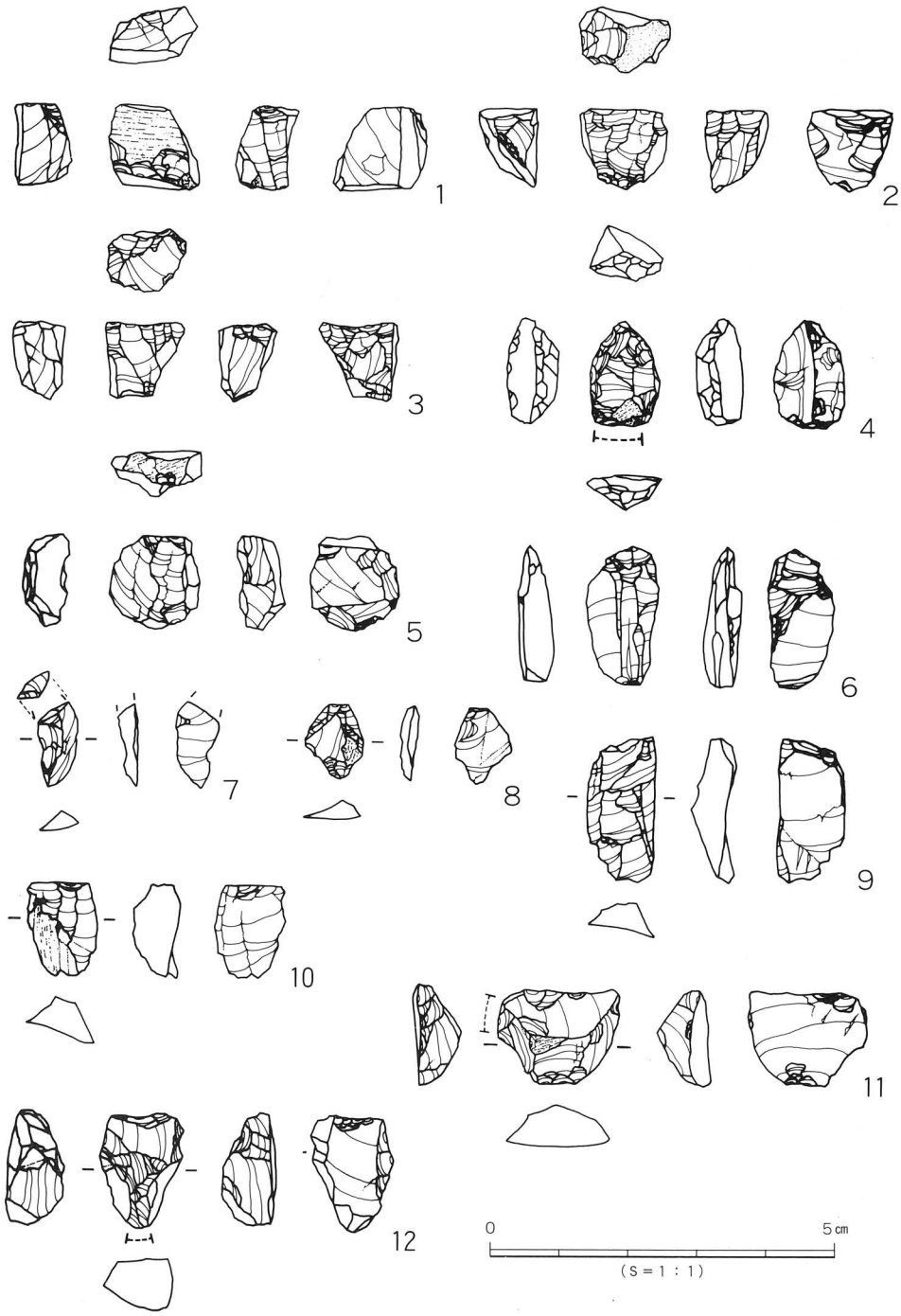
⑵　石器の観察（第70図）

ここでは十亀氏によって紹介された石器群のうちの12点について個別記載を行っていく。尚、これらの石器は再実測を行っているが、その展開方法については十亀氏の提示された方法に基づいたものである。

1はa面に礫面または節理面を残し、下半部は下方からの加撃による細かな剥離痕が残されている。b面には二条の樋状剥離が残り共に上方からの加撃によって形成されているが、右側の剥離痕は下方からの加撃による剥離痕と切り合っている。c面も上方からの加撃による2～4条の樋状剥離がみられる。b・c面の剥離痕は切り合い関係が不明瞭で一回の加撃で残された可能性が強い。d面は1枚のネガティブな剥離痕が大部分を占めており、実測図には明確に示していないがこの剥離痕は上方右隅に打点を残している。e面は大小2枚の剥離痕を残しており共にd面側からの加撃によるものである。左側の大きな剥離痕は打点部分が切られており、このことからe面の剥離からd面の剥離への新旧関係を想起できる。

2はa面に上方からの加撃によるやや縦長といえる剥離痕を複数残している。また下部には下方からの加撃による小剥離痕を残している。特に左側の上下の剥離痕は切り合い関係が不明瞭である。b面は上方からの加撃による小剥離痕を残しており、これらは階段状剥離を呈している。さらには横位方向（a面より）からの加撃による剥離痕を残している。この剥離痕は上部にある小剥離痕よりも古い段階のものである。c面にも上方からの加撃による小剥離痕とそれより古い段階の横位方向（d面より）からの加撃による剥離痕が残され、さらに微細な連続する剥離痕を残している。d面には上方からの加撃によるやや横長な剥離痕がみられるが、この面の大部分を占めるポジティブな面を呈する剥離痕がその形状を崩すことなく残されている。それはb・c面観をみれば明確であろう。e面は左側にc面側からの加撃による剥離痕と右側には礫面を残している。

3はa面に上方からの加撃によるやや縦長な剥離痕が複数と、下方からの加撃による剥離痕と打点だけがみられる。上下方向からの加撃による剥離痕のうちで切り合い関係をもつ左側のものは、上下からのものが階段状剥離を呈している。尚、上下からの加撃による剥離痕



第70図　祝谷丸山遺跡出土石器実測図

の中で、右側の２枚は１回の加撃によって剥離した可能性が考えられる。ｂ面には上方からの加撃による小剥離痕を残し、さらに横位方向（ａ面より）の大きな剥離痕を残している。この剥離は二次剥離（二次加工）以前の段階での切断（分割）面とも考えられる。これと類似するものがｃ面の横位方向（ｄ面より）の剥離痕であろう。ｄ面は上方と両方の横位方向からの加撃による複雑な剥離痕を残している。これらの剥離痕はその殆どが面的に行われている。ｅ面は平坦な剥離痕が大部分を占める他、主にｄ面側からの加撃による小剥離痕を残している。

４はａ面がほぼ周囲からの加撃による連続する小剥離痕を残している。また下部は敲打による痕跡をみせ(破線)、やや平坦な面を形成している。そして周囲の小剥離痕の中でも左側下部のものは階段状剥離を呈している。中央部は一部に節理面を残し、そのすぐ近くの小さな空白部分は敲打による痕跡である。ｂ・ｃ面はそれぞれａ・ｄ面によって形成される稜線をみせており、ｂ面の中央の小剥離痕の一つはｄ面左部分の剥離痕の打面である。ｄ面の左部分は先に述べた様に打面を残すポジティブな剥離面で、さらにバルバスカーもみられる。右部分の剥離は平坦な下方からの加撃によるもので、打点を残していることがわかる。この加撃は先に述べたａ面下部の敲打に伴うものと考えられる。ｅ面はａ・ｄ面によって形成される先鋭性のある稜線をつくる。

５はａ面に下方からの加撃による剥離痕を大きく残し、上下部に小剥離痕を残している。下部の剥離痕はあたかも打点の様なもので階段状剥離を呈している。ｂ面は横位方向（ａ面より）と下方からの加撃による剥離痕がある。下方のものは、ａ面で述べた下部の小剥離痕と切り合い関係が不明瞭なことや打点を共有すると考えられることから同時の加撃によるものと考えられる。ｃ面はａ・ｄ面に形成される稜線をみせている。ｄ面はポジティブな１枚の剥離痕が大部分を占め、下半部は階段状剥離による痕跡と思われる。右側部は小剥離痕が複数残されている。またこの面の大部分を占めるポジティブな面は、右側部に打点を残していたと考えられるが小剥離痕によって失ったものと思われる。ｅ面は礫面もしくは節理面を残しており、ａ面に接する部分に小剥離痕を残している。この小剥離痕はａ面右部分の剥離を行った際に残されたものであろうと思われる。

６はａ面に複数の樋状剥離をみせ、下端部には割れ円錐もみられる。また右側部の複数の樋状剥離は１回の加撃によって上下方向の加撃のものが形成されたと考えられ、さらに左側部から中央部にかけての下方からの加撃によるものは、先に述べた割れ円錐を共有すると思われる。ｂ・ｃ面はそれぞれ、ａ・ｄ面によって形成された稜線をみせている。ｄ面には中～下半部にかけて上方からの加撃による平坦な剥離痕を残し、上部には上方からの加撃による階段状剥離を呈する複数の剥離痕を残している。ｅ面はａ・ｄ面によって形成された稜線をみせる。

７は裏面にポジティブな１枚の剥離痕をもつもので上半部は欠損している。表面は横位方

向からの加撃による剥離痕をみせ、全体形は両側縁が僅かに平行して末端の細くなるものである。

8は全体形のやや横長なものである。表面には上下方向からの加撃による小剥離痕を残し、左側には横位方向（左より）からの剥離痕と右側には節理面を見せている。裏面はやや斜め上方からの1枚の剥離痕をみせ、打点と共に割れ円錐も残している。

9は表面に上方からの加撃による多数の剥離痕を残し、上部の剥離痕には階段状剥離を呈するものもある。裏面には上方からの1枚の剥離痕が大部分を占め、上部に切断とも思えるような小剥離痕を残している。全体形は両側縁が平行し上下辺は不安定ながらもほぼ四辺形を呈している。

10はやや縦長なもので、節理面が複雑に入る為か表面の剥離痕は不安定なものである。表面左半部は節理面で裏面は上方からの加撃による1枚の剥離痕で占められる。裏面上部には小剥離痕がみられるが、先に述べた剥離痕の形成に伴う打点と考えられる。

11のa面は左側部分・上下部分に小剥離痕を残すもので、上半部の剥離痕は横位方向（c面より）からの加撃方向を示し右側部分はポジティブな面で、これも同じ加撃方向を示している。また左側上部は敲打によるものと思われる痕跡を残しており(破線)、同様な痕跡が中央部の小剥離痕部分にもみられる。b・c面はa・d面によって形成される稜線をみせるが、前述した様にc面には上部に敲打痕を残すほかに下部には急角度の剥離痕も残している。d面は下方からの加撃による1枚のポジティブな剥離痕が大部分を占め、その加撃による小剥離痕も残している。上部右側の小剥離痕は階段状剥離を呈するものもある。

12はa面中央部に横位方向（c面より）からの加撃による小剥離痕がみられるが、これは敲打によるものと思われ、稜線が潰された状態を呈している。また同様な痕跡が下端部にも確認できる（破線)。b面は横位方向（a面より）からの加撃による大小の剥離痕があり、下半部の大きなものは平坦なものである。また上半部の4枚の剥離痕は1回の加撃で残された可能性もある。c面下半部にも横位方向からの加撃による剥離痕があるが、リングを観察するとa・d面の両方から入るものでその切り合い関係は不明瞭である。d面は1枚の平坦な剥離痕が大部分を占め上下部にそれぞれ小剥離痕を残している。上下の剥離痕は先に述べたa面の上部の剥離痕と同時に残されたもの、つまり1回の加撃で残された可能性があり、下部のものについてもa面下部にあった敲打痕に伴うものと考えられる。

(3) 検　討

以上、12点の石器は十亀氏によって1～6が細石核、7～10が細石刃、11・12が台形様石器として器種認定されているものである。ここではこれらの石器についての注意しておくべき点を挙げながら検討を行っていく。

1はb面に1回の加撃によると考えられる複数の剥離痕が存在し、それに対応するかの様な下方からの加撃による剥離痕もみられる。またc面にも1回の加撃によって複数の剥離痕

が残されている。2はa面において剥離痕の切り合い関係が不明瞭なものがある。またこの面では上下で加撃方向の対応する剥離痕がある。3はa面で1回の加撃による複数の剥離痕があることや加撃方向の対応する剥離痕がある。4はa面をみると周縁に細かな剥離痕があることや下部に敲打痕を残していること、さらに敲打に伴う平坦な剥離痕の存在が注意される。5はa・b面をみると1回の加撃によって残されたと思われる複数の剥離痕があることや、a面右側下部にみられる剥離痕の様に、上下に対応する加撃方向を示すものがある。6はa面で1回の加撃による複数の剥離痕があることや、上下に対応する加撃方向を示す剥離痕がある

ここで1～6までの石器にみられる共通する要素を挙げてみると、

①1回の加撃による複数の剥離痕が存在する。(1、3、5、6)

②上下に対応する加撃方向を示す剥離痕が存在する。(1～3、5、6)

この2点の共通項は両極打法（バイポーラー・テクニック）による特長の一部であると考えられ、この技法によって製作された代表的な石器として楔形石器（ピエス・エスキーユ）が挙げられよう(註2)。ただし上記の共通項に含まれなかった4であるが、これには敲打痕に伴う平坦な剥離痕に注意しなければならない。これはその状態などから判断して、楔形石器に認められる「載断面」あるいは「剪断面」に共通するものであると考えられる。またこれら6点の石器はほぼ四辺形を呈することなど、形態的にも楔形石器に共通する部分を考えることができる。しかし留意点として楔形石器に未製品が成立すると考えた場合に、これら6点中にその未製品が含まれる可能性があることも指摘しておかなければならない(註3)。

7～10については主要剥離面を残していることや二次加工が認められないことなどから、剥片・砕片として扱うことができる。ただし7、9は上部に切断面と考えられるものが残されていることから、切断剥片とも考えられる。しかしその意図がここで明確に判断できない為、現状では剥片・砕片とした方がよいであろう。また表面に残された剥離痕の状態や細石刃としての全体形などを考慮した場合、定形的な製品としての判断はできないであろう。

11はd面がこの石器の主要剥離面であり、その形状が大きく改変されていないことが挙げられる。しかしc面に二次加工を思わせる剥離痕があることや敲打痕も残されていることがわかる。これらのことからこの石器は二次加工を積極的に評価したとしても、定形的な製品とは考えられない。また別の考え方として楔形石器の未成品が存在するならば、それとすることもできる。

12はc面下半部に加撃方向が対応し、さらにその切り合い関係が不明瞭な剥離痕がある。またb面上半部には1回の加撃による複数の剥離痕があり、これらの現象はすでに述べてきた両極打法の特長とすることができる。これによって、この石器も先に挙げたものと同様に楔形石器として考えることができよう。

(4) まとめ

これまでに祝谷丸山遺跡の12点の石器について、観察・記載・検討を行ってきた。ここでもう一度まとめとして整理してみると以下の様になる。

①１～６、12については残る剥離痕に両極打法の特長がみられることや形態的に判断して、楔形石器またはその未成品としての器種認定を行った。

②７～10は二次加工が認められないことや形態的にみて、剥片・砕片の類であるとした。

③11は問題の残るところであるが、１つには二次加工剥片として、もう一方では楔形石器の未成品としての認定ができよう。

なお、これまでには触れてなかった石材について付記しておくと、ここで取り上げた石器の３が灰色チャート製である他は、全て緑色チャート製である。この緑色チャートは十亀氏がすでに南予地方で産出されるものであることを述べている。こうした石材利用は、その交易・運搬等から導き出せる文化の伝播論や人々の移動を考える上でも興味深い示唆を与えるものであろう（註４）。

２．松山市桑原経石山古墳１次調査出土の石器について

(1) 出土の経緯

ここに紹介する２点の石器は、1990（平成２年）10月17日～12月19日に行われた経石山古墳１次調査によって得られたものである。この調査では後円部の北東隅に調査区が設置され、本古墳の周溝と考えられる溝状遺構（ＳＤ－１）が検出されている。本資料はこの遺構確認時に出土した。

(2) 石器の観察（第71図）

スクレイパー（第71図１）

溝状遺構内より出土したスクレイパーである。横長の平面形が四辺形となる剥片を素材としており、刃部はその底辺（下辺）の上辺右側部に設けられている。下辺の刃部は素材時の主要剥離面側から、上面の刃部は表面側から施されている。いずれも刃部は直線形で、上辺のものは微細な使用痕を残しており、下辺のものは大まかな剥離痕によって形成されたものである。なお、このスクレイパーの素材となった剥片を想定すると、単剥離打面を有する横長剥片石核より作出されたものであることがわかる。また、表面にも同様な剥片を作出した痕跡がみられ、横長剥片を連続的に作出した石核の存在が考えられる。ただし、このスクレイパーの素材は、表面右側部が折り取られている様子がわかるため、本来の素材はこれより幅広なものと考えなくてはならないだろう。石材は赤色頁岩である。

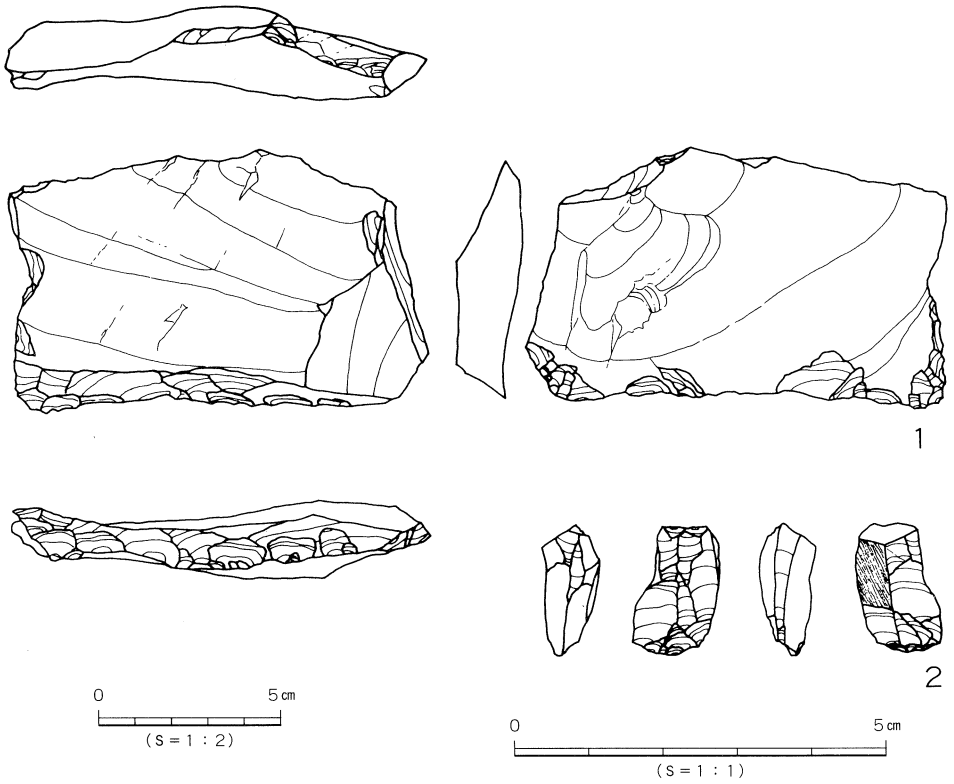
楔形石器（71図２）

溝状遺構外出土の楔形石器である。ａ面には数上の樋状剥離を残し上下両端には微細な剥離痕がみられる。右側部には三角形状に、左側部には断面凸レンズ状の剥離を残しており、

これらはいずれも載断面に共通するものであろうと考えられる。裏面は下方からの加撃による剝離痕を残しており、下部の小剝離痕は表面の下部にある小剝離と打点を共有している。以上の様に載断面を有することや一回の加撃による複数の剝離痕が形成されていることなどから、バイポーラー・テクニック（両極打法）によって製作された楔形石器の特徴を表している資料であることがわかる。石材はチャート（緑白色）である。

(3)　まとめ

以上２点の石器は溝状遺構（ＳＤ－１）の構築時期と符合するとは考え難く、それ以前のものとして扱うことができる。しかし本遺構内に存在した土器群の検討が行われていないこともあり、時期認定についてはここでは割愛をさせていただくことにする。



第71図　経石山古墳出土石器実測図

3．久米高畑５次調査出土の「細石刃」とチャート製石器群

(1) 出土の経緯

久米高畑遺跡は1988年10月26日～12月24日まで約1700㎡の調査を行っている。この年行われた５次調査区は来住廃寺の南西にあり、来住台地上の微傾斜をもつ場所である。主な遺構・遺物には弥生時代の住居や土器・石器の他に古墳時代の住居や土師器などが確認されており、さらに７世紀初頭～８世紀初頭の遺構・遺物においては久米郡衙の様相を検証する良好な資料とされている。

今回ここに紹介する石器類は、本調査において上記の遺物の包含層より出土したものである。

(2) 石器の観察

砕片（第72図１）

この石器は概報の中で「細石刃」として認定されたものである。平面形は長方形を呈しており、下半部は折損している。表面には縦位に１条の稜線が残り、大小２枚の剥離痕はそれぞれ横位方向（左側より）の加撃であることがわかる。側面観は簿手の直線的な形状で、やや主要剥離面側に湾曲している。裏面（主要剥離面）は垂直方向（上方から）の加撃であることがわかる。この石器は先に述べた様に「細石刃」としての器種認定が行われたものであるが、表面の剥離痕の不安定さ、つまり横位方向からになることなどから、細石刃としてではなく、砕片として扱うこととした。黒曜石（黒色）製である。

周縁加工石器（第72図２）

チャート製の剥片を素材としたもので、上半部が欠損しているために全体形を知ることはできないが、その周縁に二次加工を施して尖鋭性のある製品に仕上げたものである。二次加工はすべて裏面側からの加撃によって施されており、その打角は直角に近くなる。この石器はナイフ形石器または角錐状石器に共通するものとも考えられるが、全体形が把握できないことなどから、ここでは周縁加工石器として扱うこととした。チャート（緑色）製。

楔形石器（第72図３～第73図17）

楔形石器としたものは15点あるが、その形状などから以下のように分類される。

第ＡＩ類楔形石器……側面観が凸レンズ断面状になり、載断面を有する。（３～５）

第ＡII類楔形石器……側面観が凸レンズ断面状になり、載断面を有しないもの。（６～８）

第ＢＩ類楔形石器……側面観が方形もしくは不定形となり、載断面を有するもの。(9～13)

第ＢII類楔形石器……側面観が方形もしくは不定形となり、載断面を有しないもの。(14～17)

このように２分類４細分されるが、これらを各類ごとに観察してみる。

第ＡＩ類楔形石器（第Ａ図３～５）

３は左側部に載断面を有しており、表裏面にはそれぞれ上下方向からの加撃による剥離痕を残している。表面は中央の剥離痕の中に稜線状になるフィッシャーが確認されている。さ

らにこのフィッシャーの基部には打点がみられ、この石器の載断面の打点と同じであることがわかる。4は右側部に載断面をみせ、その下端部には打点のみが残されている。5は右側部に載断面をみせており、その形状はやや内側に湾曲する状態である。節理が入っているためか、全体形はやや不安定である。全てチャート製である。

第AⅡ類楔形石器（第72図6～8）

6は平面形がわずかに長方形状となるもので、側面観はやや裏面側に湾曲している。裏面中央の縦位に走る稜線は上端部の打点からのびるものである。7も平面観はやや長方形状になる。この石材に節理が複雑に入るために、明確な稜線はとらえにくい。また表面には横位方向からの加撃による小剥離痕もみられる。8はやや正方形に近い形状であるが、上下両辺は一方へ傾斜した状態である。表裏両面ともに平坦な剥離を残している。全てチャート製である。

第BⅠ類楔形石器（第72図9～13）

9は載断面が左側部と裏面に残されている。左側部の方は節理面となっているために剥離しやすい箇所であったとも考えられ、裏面の方はややポジティブな剥離面となっている。また表面にみられる下方からの加撃による剥離痕と載断面としての特徴を有しているが、そうなれば載断面によって囲まれた状態を想定しなければならない。10は両側部に載断面を持つもので、左側部の方は縦位に、右側部の方は横位に稜線を形成されるものである。表面上部の剥離痕は段階状剥離を呈しており、これは加撃方法によるばかりでなく、節理の複雑さであるとも考えられる。11は表面左側部に節理面をみせる載断面を残している。裏面はポジティブな一枚の剥離痕が大部分を占め、下方からの加撃による小剥離痕も残している。12は右側部に載断面を有し、上下方向の加撃によって形成されたために中央には横位に入る稜線を残している。形状は下部が凸レンズ断面形になり、上部は方形状となる。13は裏面左半部の剥離痕が載断面となる。この面はネガティブな面となっており、両側面観をみるとその様子をとらえることができる。全てチャート製である。

第BⅡ類楔形石器（第73図14～17）

14は平面がわずかに長方形状を呈し、断面が不定形なものである。表裏面ともに上下方向からの加撃が残り、樋状となっている。15は平面観・側面観ともに不定形で、剥離痕も大まかなものが残されている。また表面の大部分を占める一枚の剥離痕はポジティブな面を形成している。16は表面にみられる下方からの加撃によって階段状剥離を呈しているため、側面観は不定形な状態となっている。裏面は二条の樋状剥離がみられるが、これを形成する縦位の稜線は打点からのびるものである。17は平面・側面観ともに不定形なもので、表面をみると、中央に縦位にのびる稜線は上下両端に打点を有するものであることがわかる。裏面には礫面を残している。全てチャート製。

楔形石器未成品（第73図18・19）

第72図　久米高畑遺跡５次調査出土石器実測図（1）

ここでは大まかな剝離を有し、楔形石器の中では大形のものを未成品としてあつかった。ただし、楔形石器としてまとめた一群の中にも未成品の範疇に含まれるものが存在することも示唆できるが、この２点は特に大形品であるために区分しておくこととした。

18は節理面が複雑に入るため稜線が複雑な状態となっている。加撃は主に上下両端から行われているが、裏面には横位方向からの加撃による剝離痕も確認される。また左側部には載断面も残されている。19は節理面を露出させている部分もあるため、剝離痕の切り合いが不明瞭な状態もみられる。加撃は表裏ともに上方から行われており、上端は平坦面も残されている。２点ともにチャート製である。

両極剝片（第73図20～22）

３点ともにチャート製で、上下両端に打点を残すものである。20は主要剝離面が節理面と平行しているもので、下端には階段状剝離を呈する剝離痕もある。21は主要剝離面の上部がポジティブで下部がネガティブとなるものだが、上下の境界である稜線がやや不明瞭である。22は主要剝離面側に打点からのびる稜線状のフィッシャーを残している。形状は縦長で、楔形石器にみられる樋状剝離の形状と共通するとも考えられる。

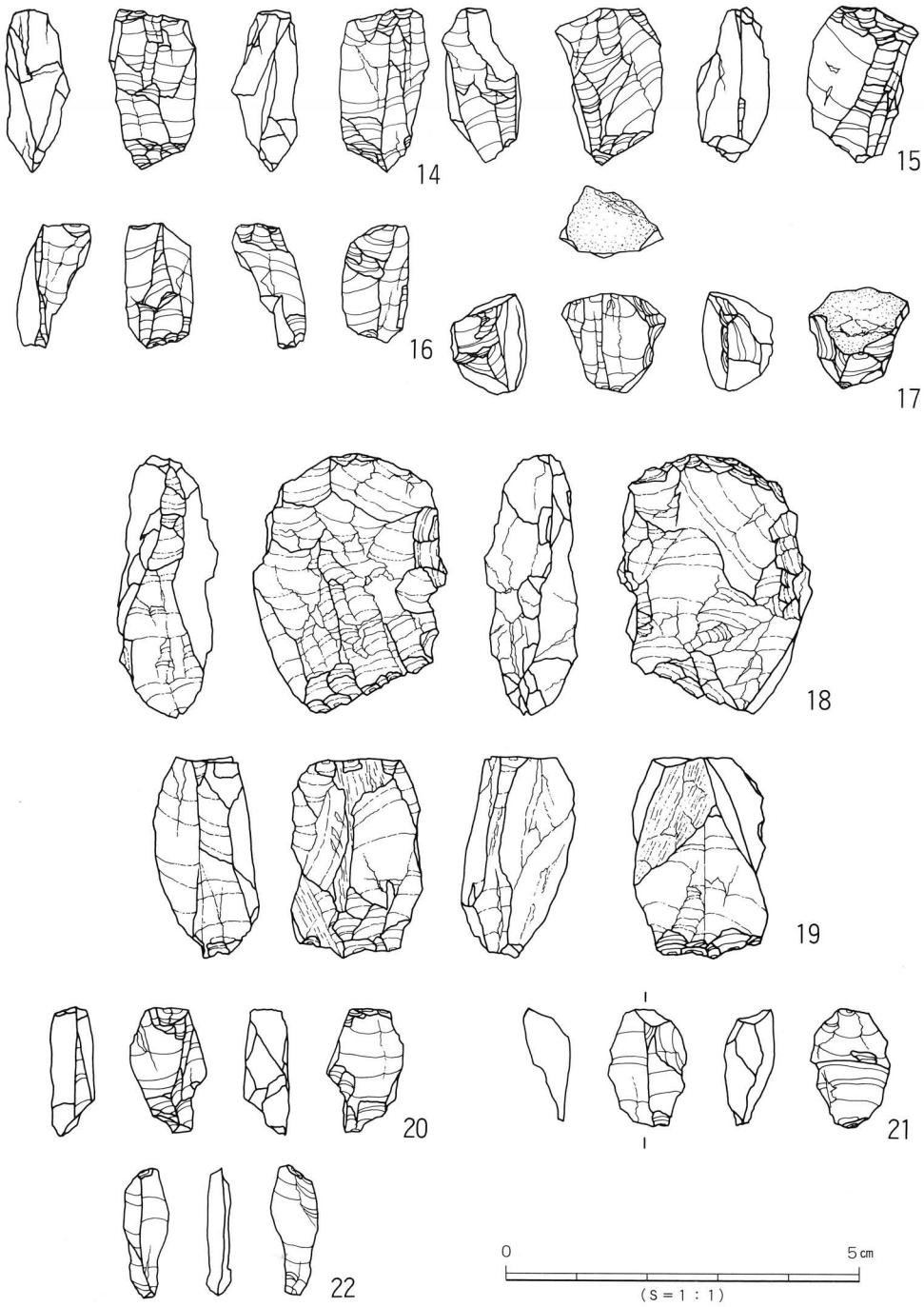
石核（第74図23）

チャート製のもので、打面部と底面部は礫面を大きく残している。表面は剝片剝離作業面で、作出された剝片はやや縦長の不安定なものであろうと考えられる。剝片作出に伴う打面調整は行われておらず体部調整とその痕跡をみることはできない。背面は分割面で占められており、この分割面は礫を荒削りした段階で残されたものであろうと思われる。この石核から想定される剝片剝離技術を考えてみると、素材はレンガ状もしくは厚手の板状の原石（母岩）を用意し、それを荒削り作業によって分割する。この時、対応する２面は礫面を残したままである。そしてその分割された礫片の一面を作業面に設定し、打面再生や打面細調整をすることなく一方へ後退しながら剝片剝離作業を進行していく。ただし残る問題として底面にみられる剝離痕であるが、これらの剝離痕の一部が剝片剝離作業面にかかるものであるため、剝片作出に伴う下端部の調整が存在するとも考えられよう。

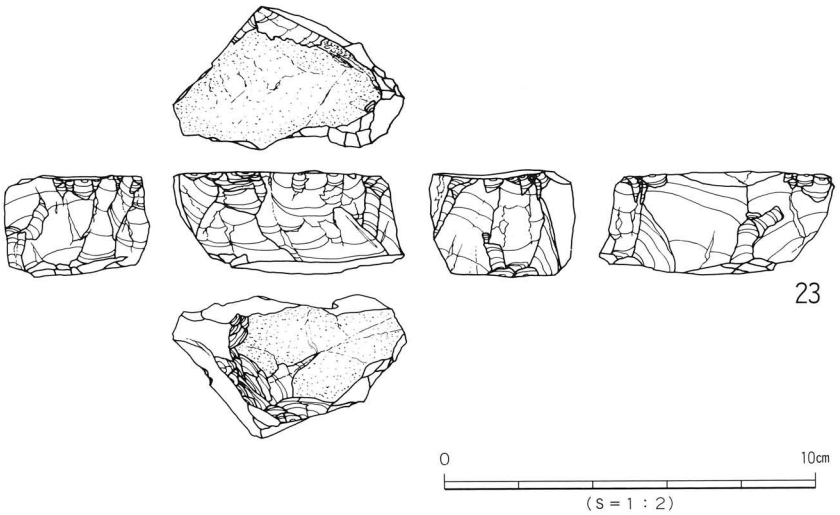
(3)　まとめ

久米高畑５次調査において確認されたチャート製石器群は楔形石器を主体としたものであることが理解されるが、これらの石器群についてここで考えてみることとする。

まず15点の楔形石器であるが、筆者はこれを２分類４細分してその特徴をとらえ観察してきた。この分類は完成された状態での楔形石器のバリエーションというより、楔形石器が製作され、当時の人々の手を離れて遺棄された過程を示していると考えている。つまり第ＢII類楔形石器→第ＢＩ・第ＡII類楔形石器→第ＡＩ類楔形石器といった工程を想起できるのである。これを説明すると、第ＢII類楔形石器がその未成品よりもわずかに完成に近づいた状態を示している。これはその形状的な不安定さからも考えられる。これからさらに作業が進



第73図　久米高畑遺跡５次調査出土石器実測図 (2)



第74図　久米高畑遺跡５次調査出土石器実測図 (3)

行すると、第ＡII類楔形石器のような形状を呈したものに仕上がる。ただし完成に近づく直前に加撃のみだれが生じた時には、第ＢＩ類楔形石器のように載断面を残す状態でその石器は放置されると考えられる。形状の安定した第ＡII類楔形石器はやがて使用されることになるが、その際の破損による結果、載断面を残した状態で遺棄されると思われる。しかし、以上のような経過の前段階に、今回紹介した楔形石器未成品の存在を忘れてはならない。これらはその大きさなどからも礫片もしくは剥片を素材としたものと考えられ、このことを示すかの様に本遺跡ではチャート製石核が出土している。石核の項目の中で剥片が生産される前に礫を荒削りする段階があることを述べたが、このことは楔形石器の素材となる剥片生産が石核より作出されたものに頼るばかりでなく、原石（母岩）の荒削り段階での礫片をもその素材として扱っていることを示唆するものである。

以上の様に本遺跡では、楔形石器の製作から遺棄に至るまでを考えることのできる良好な資料を確認できたといえるであろう。また楔形石器の製作にはバイポーラー・テクニックによって行われているが、このことを示す資料として20～22の両極剥片の存在が指摘できる。

周縁加工石器（第76図）であるが、これは他に類例を待ってその評価を与えていきたいと考えている。ただしこの石器は角錐状石器あるいは小形のナイフ形石器とも考えられるため、充分な注意が必要となろう。

黒曜石製の砕片であるが、今回紹介したのはこれまで本資料が「細石刃」として評価されていたことにある。この石器をみる限りでは外形的に細石刃として扱うことに問題はないと考えるが、表面に残された剝離痕から考えて細石刃として認定できないであろう。

今回の執筆では、久米高畑5次調査出土の資料中より、主にチャート製石器群の紹介を試みた。これらの資料は弥生時代の土器・石器とともに出土しているが、松山平野における弥生時代の石器にチャートが普遍的でないことから、その時期決定は今後の問題として残るであろう。

4．おわりに

今回は祝谷丸山遺跡、経石山古墳、久米高畑遺跡の3遺跡より得られた資料を基に、資料紹介と弱干の検討を行ってみた。これらに共通していえることは全てが楔形石器を備えていることであり、この石器が松山平野でどういった時間的位置づけにあり、また、どう展開していったかを検討していかねばならない必要性を感じている。

これら諸遺跡における石器類の記載・検討については、筆者自身の不勉強さから誤った解釈となっている点があるかもしれない。これについては数々の御批判を願うものである。

最後になったが、祝谷丸山遺跡の石器実測については十亀幸雄氏に長期間にわたって貴重な資料をお借りした上に、今回の記載についても心よく御承諾を得た。また、経石山古墳の調査内容等については田城武志氏に、久米高畑5次調査の概要については宮崎泰好氏に御教示いただいた他に、松山市教育委員会の重松佳久氏、財団法人松山市生涯学習振興財団埋文センター梅木謙一氏、山之内志郎氏、大西朋子女史（写真図版）各位にも今回の執筆の機会と御助言をいただいた。ここに感謝する次第であります。

〔註〕

(1) 現在までに祝谷丸山遺跡の評価は変わらないとしたが、『愛媛県史』の長井数秋「一先土器時代遺跡解説」では「細石刃器は松山丸山遺跡で発見されたといわれているが、現状では判断するまでには至っていない。」と述べながらも、文2の中では細石刃文化の存在を積極的に認めている。さらにこれは誤植であることも考えられるが、17ページの図1-4のキャプションには「丸山遺跡出土の楔形石器」とある。これらの事実は本遺跡を評価する上での混乱をひきおこすもので、充分な注意が必要とされよう。

(2) 楔形石器（ピエス・エスキーユ）としての器種認定については、岡村道雄「ピエス・エスキーユについて」『東北考古学の諸問題』1976、同「ピエス・エスキーユ、楔形石器」『縄文文化の研究7』1983が大変参考になった。また楔形石器の製作に直接的関係をもつ両極打法（バイポーラー・テクニック）の諸特徴については小林博昭「バイポーラー・テクニックについて」『考古学ジャーナル78』1973も参考になる。

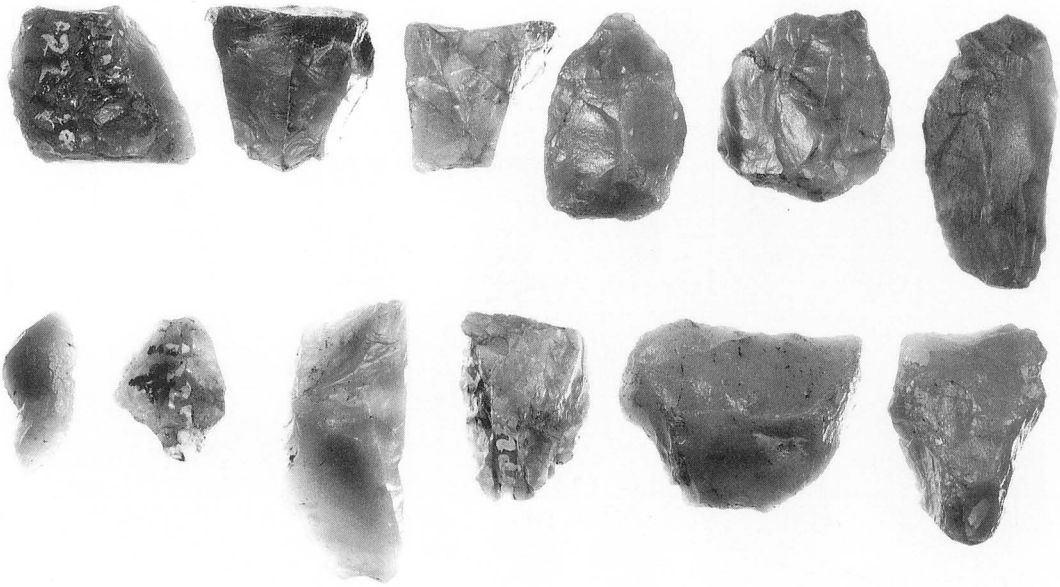
(3) 他に注意しておかなければならない点として、1・3・5の様に上下両端もしくはどちらか一端に平坦面を残している場合があることが挙げられる。楔形石器にこうした特徴を見い出すことができるかは疑問の残ることであり、先に述べた様に未成品としての解釈が可能であるならば、楔形石器そのものの充分な検討を行った上で本資料を評価しなければならないであろう。

(4) 本文執筆中に、愛媛県東宇和郡城川町歴史民俗資料館を訪れる機会を得た。この館内には城川町内の洞穴遺跡より採集・出土した資料が数多く展示されていたが、その中でも菊野谷岩陰遺跡の資料中にこの緑色チャートと肉眼観察において共通するものが含まれていた。祝谷丸山遺跡と菊野谷岩陰遺跡に直

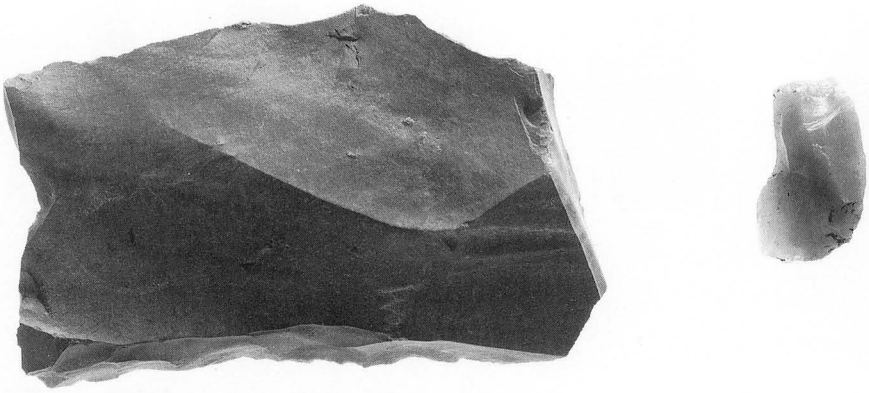
接的な関連を見いだす訳にはいかないが、この事実は祝谷丸山遺跡の石材利用を考える上でも興味深いものがある。なお城川町内の遺跡に関しては、愛媛県東宇和郡城川町教育委員会『城川の遺跡』1979を参考にされたい。

【参考文献】

十　亀　幸　雄　　1978　「愛媛県祝谷丸山遺跡の細石刃剝離技術」『古代学研究第88号』
十　亀　幸　雄　　1988　「芸予諸島の先土器時代資料」『遺跡第31号』
長　井　数　秋　　1985　「七　丸山遺跡」『愛媛県史　資料編考古』
正岡睦夫・十亀幸雄編　1986　『日本の古代遺跡　愛媛』
駿 台 史 学 会　　1979　『駿台史学第47号』
小　野　　昭　　1979　「瀬戸内沿岸地方の細石器文化」『駿台史学第47号』
香川県教育委員会　　1981　『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（IV）』
木　崎　康　弘　　1981　「九州地方の細石核」『熊本史学55・56合併』
木　崎　康　弘　　1983　「東日本細石核技術展開についての一理解」『旧石器考古学26』
西　村　尋　文　　1983　「中部瀬戸内地域における細石刃生産技術の検討」『旧石器考古学26』
駿 台 史 学 会　　1984　『駿台史学第60号』
細石刃文化資料が多量に採集されている遺跡を取り上げる。
山口県旧石器文化研究会　1988　南方遺跡……「宇部台地における旧石器時代遺跡(7)」『古代文化40－３』
山口県旧石器文化研究会　1985　長桝遺跡……「宇部台地における旧石器時代遺跡(3)・(4)」『古代文化37－２、37－８』
大森一成・田城武志　　1991　「経石山古墳１次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報III』
宮　崎　泰　好　　1989　「34．久米高畑遺跡（５次）」『松山市埋蔵文化財調査年報II』

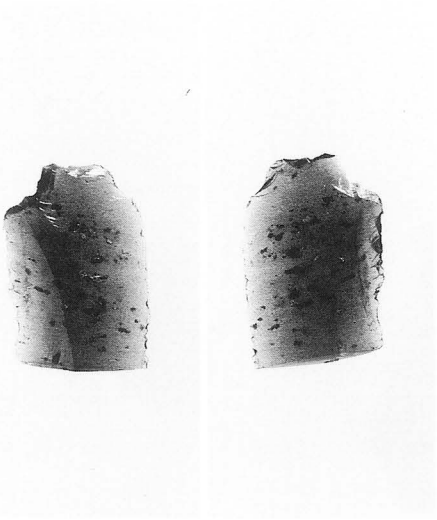


祝谷丸山遺跡出土旧石器　（約１：２）



経石山古墳出土旧石器　（約１：1.4）

久米高畑遺跡５次・出土旧石器　（約１：0.9）



No.1　表面　裏面　（約１：３）

No.2　左側面　表面　右側面　裏面　（約１：３）

V-2　道後城北地域出土の分銅形土製品
～顔面の表現方法を中心として～

山之内志郎

1．はじめに

道後城北遺跡群では、祝谷アイリ遺跡で出土した2点の新出資料を加えて、これまでに5遺跡26例の分銅形土製品が出土している。現時点での県内の総出土点数が17遺跡41例であることを考えると、当地域での集中度に改めて驚かされる。しかしそのうちのほとんどが、近年の開発に伴う緊急発掘調査による出土であり、調査地点に偏りがあるのも事実である。本稿では、顔の各部分の表現方法について分類し、この遺跡群におけるその方法の傾向や諸特徴について明らかにしていこうとするものである。

なお慣例により、顔面表現があるものを表面とし、その裏を裏面とした。また両端の孔等の顔面表現があるものは上半部、ないものは下半部と考え、実測図もそれに従った。

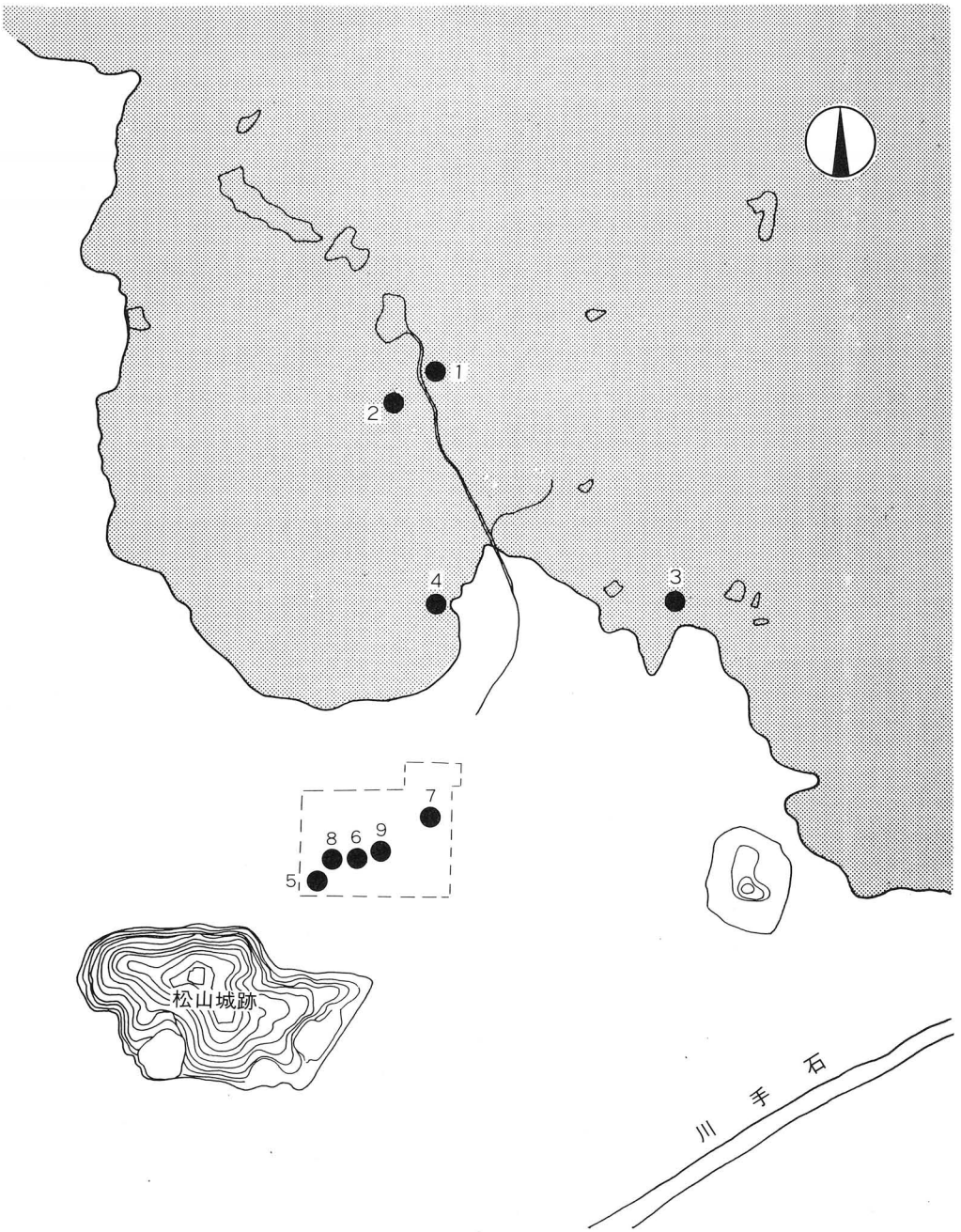
分銅形土製品は周知の通り、完成品が少なく、そのほとんどが破損品であるため、全貌をうかがえないものが多く存在する。そこで出土地名表では、顔面表現の各部分を表現していないものは「なし」、欠失しているため不明なものについては「不明」と区別した。また、顔面表現または文様が認められない場合は、「顔面表現なし」や「文様なし」としたことを予め断っておく。なお、資料名及び出土地名表は谷若氏の論文を参照し、追加資料については順次記号を追加した。

2．顔面の表現方法

今回再検討した資料の中で、外縁に文様が施される資料は5遺跡8例で、そのうち頭髪と推定される文様をもつ資料は、アイリB・文京B・御幸寺山・六丁場B・E・F・鷺谷〔註1〕例の合計5遺跡7例である。これらの頭髪と推定される外縁の施文はすべて刺突文であり、その施文位置は、表面・上端面・裏面の3面であることが一つの特徴としてあげられよう。なお、それぞれの全体の形状を分類すると、Ⅰ〈円形〉が3例（御幸寺山・六丁場E・F）、Ⅱ〈隅丸方形〉が1例（文京B）、Ⅲ〈方形〉が2例（アイリB・六丁場B）、Ⅵ〈丸〉が1例（鷺谷）であった。

外縁に文様のみが施される文京D例の櫛歯刺突文の場合、頭髪の可能性も考えられるが、破損品であるため断定は避け、一つの文様形態として認識している。

次に眉の表現がある資料は、4遺跡15例にのぼる。そのうち刺突文のアイリB例を除き、全て粘土紐を張りつけた突帯文である。分銅形土製品全体の形状から次のように区分できる。Ⅰ〈円形〉が4例（文京A・G・御幸寺山・六丁場E）、Ⅱ〈隅丸方形〉が6例（アイリA・文京B・C・F・H・六丁場A）、Ⅲ〈方形〉が4例（アイリB・六丁場B・C・D）、Ⅴ〈長



1 祝谷アイリ遺跡　2 祝谷六丁場遺跡　3 道後鷺谷遺跡　4 御幸寺山東麓遺跡
5 文京遺跡１次　6 文京遺跡３次　7 文京遺跡４次　8 文京遺跡10次
9 文京遺跡11次

第77図　道後城北遺跡群出土の分銅形土製品分布図　（S＝1：25,000）

方形〉が１例（文京Ｉ〔註２〕）であった。

そのうち六丁場Ｅ例の、眉の周辺を刺突文で囲む方法以外は全て、突帯文の単独表現である。また必ず眉は鼻と同一の突起物として一体で表現する。これら全ての眉は、中央部から左右に半円形・横一線・斜め上がりのいずれかの形状で上端面または側面に至る。その内訳は、半円形が10例（アイリＢ・文京Ｂ・Ｃ・Ｆ・Ｇ・Ｈ・御幸寺山・六丁場Ａ・Ｄ・Ｅ）、横一線が３例（アイリＡ・文京Ｉ・六丁場Ｃ）、斜め上がりが２例（文京Ａ・六丁場Ｂ）であり、圧倒的に半円形の例が多い。

前述したアイリＢ例は、上半部中央部のやや下方で半円形に刺突を施しており、当該地域内における分銅形土製品の眉の表現方法としては他に例をみないものである。現在では、両半円形の中央部分がとぎれているが、これはもともととぎれていたものか、あるいは一体のものが後に中央のみ摩滅したのかは判断しかねる。

次に目の表現は、ヘラ状工具または半裁竹管状工具による施文であり、その中でアイリＡ、文京Ｇと鷺谷例については、後者の工具による施文と判断しても間違いないと考えられる。目の形状はいずれの例も下弦の半月形を描き出している。

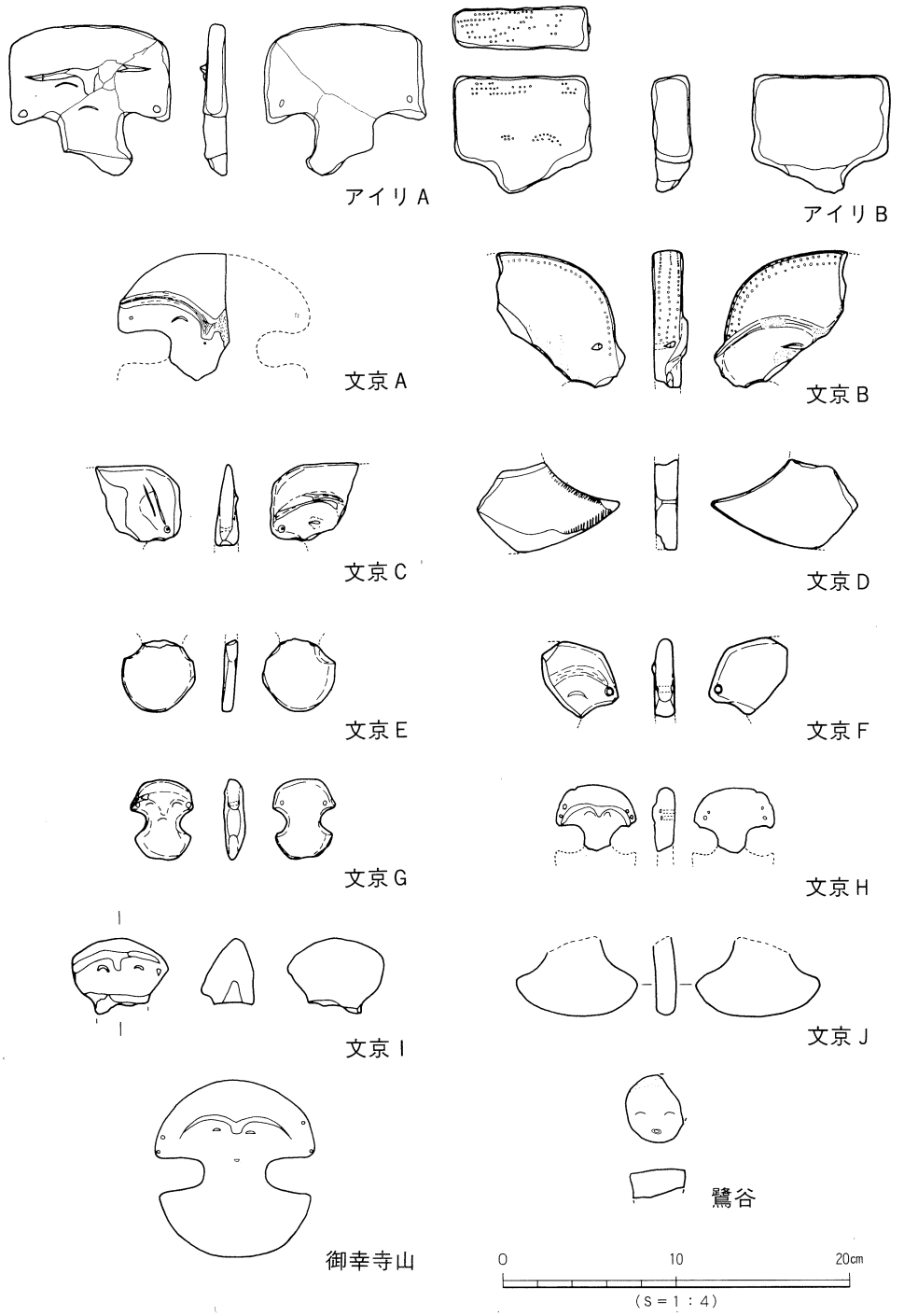
口の表現も目のそれと同様で、ヘラ状工具または半裁竹管状工具による施文方法がとられる。その形状の種類として４種類ある。１〈半円形〉が２例（アイリＡ・文京Ｇ）、２〈横一線〉が５例（文京Ｈ・御幸寺山・六丁場Ａ・Ｂ・Ｃ）、３〈刺突〉が１例（文京Ａ）、４〈楕円形〉が１例（鷺谷）であった。

全体として口の表現は申し訳程度に表現され、鷺谷例のように楕円形をなす例は希である。またアイリＡ・文京Ｇ例の場合、目と口は同一施文具による線刻表現である可能性が高い。

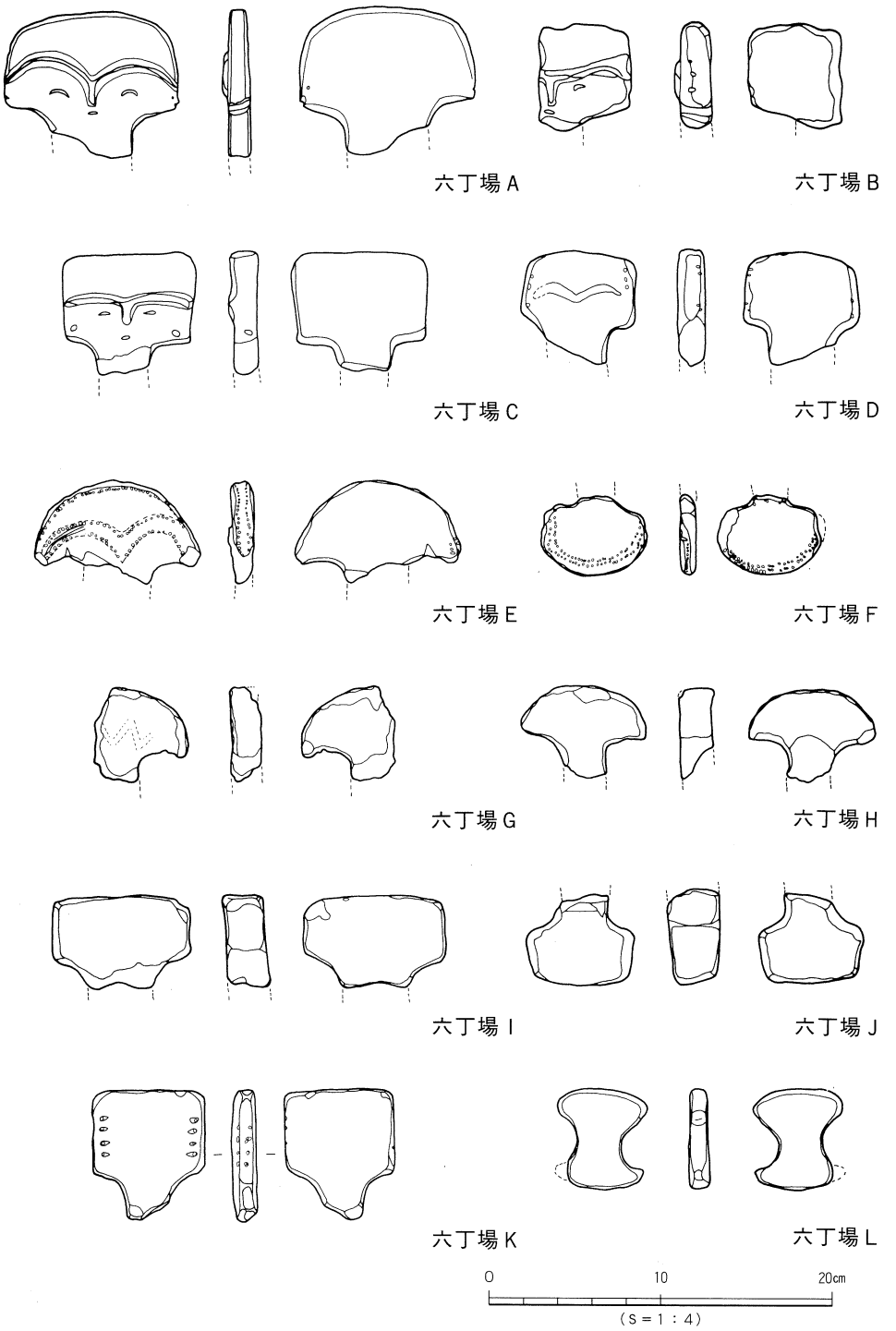
他県の資料をみると、上半部裏面上部近くから外縁に沿って、上端面に斜めに針穴状の小孔が多数穿たれている場合がある。しかしこれまでのところ道後城北地域では、上半部左右両端に小孔が穿たれている事例しか確認されていない。後者の場合をその穿孔方向から分類すると４種類になる。例えば表面から裏面まで貫通している場合、表面→裏面と裏面→表面の２方向があるが、その区別は困難であるため、同一のものとして次の通りとした。

まず表面から裏面まで貫通している場合で、一孔はアイリＡ・文京Ａ・Ｃ・Ｆ・Ｇ・Ｉ・六丁場Ａがあり、二孔は文京Ｈ・御幸寺山がある。三孔はなく、四孔は六丁場Ｄがある。次に表面から側面まで貫通している場合は、一孔は六丁場Ｃがあり、二孔・三孔はなく四孔は六丁場Ｋがある。また裏面から側面まで貫通している場合は、一孔は文京Ｂ、二孔はなく、三孔は六丁場Ｂがある。最後に上端部端面又は側面からくりこみ部端面まで貫通している場合は、一孔は文京Ｂがある。

孔の位置は、分銅形土製品の形状がＩ〈円形〉の場合、眉よりも下位に表現され、またII〈隅丸方形〉またはIII〈方形〉の場合、上半部の左右側面に表現されるが、上端面まで穿孔されることはない。



第78図　道後城北遺跡群出土の分銅形土製品実測図（I）



第79図　道後城北遺跡群出土の分銅形土製品実測図 (2)

耳状の表現は、本来耳であることを意図して穿孔されたならば、左右一対で十分であるが、六丁場K例のように左右側面に四孔を穿つのみで、他に顔面表現は見当たらない。これは、眉が鼻と一体化して誇張表現されるのと同様に一孔で十分のものが、装飾的な意味合いをもつことによって過大に表現されたものと推定することができる。

3．顔面表現がない資料

顔面表現はないが文様があるものは文京D・六丁場G・Jの3例の資料があげられる。前述した通り、いずれも顔面表現がないため、下半部として取り扱っている。文京D例は、端部に櫛歯刺突文が刻まれ、この地域内ではその類似例を見ない。形態も残存部分から推測すると、Ⅳの揆形に近い。六丁場G例は、細かな文様が刺突文と波状文の組み合せで、表・裏・側面の3面を飾っている。六丁場J例は、くびれ部に二条の沈線文を施す。これらはいずれも分銅形土製品の上半部を顔に見立てて表現するという、顔面表現のある分銅形土製品の定義とはかけ離れており、上半部における顔面表現の存在をうかがわせるものではない。そのため、これらは分銅形の土板を装飾した土製品であり、一般にいわれる顔面表現された分銅形土製品とは区別する必要がある。

また顔面表現・文様が共に認められない文京J・六丁場H・I・Lの4例の場合、実際に下半部であるのか、それとも上半部であったのが、何等かの理由で顔面表現部分が剝離したり欠損したために下半部として取り扱われているのか、現時点では判断できない。

4．最大厚

当地域の分銅形土製品の厚みは、各形態によって違う特徴がみられる。なお、この場合の厚みとは、眉を張りつけた部分を除き、平坦な表面から裏面までを計測した最大厚である。まず、I〈円形〉は、0.7～1.4cmの薄手タイプと1.8cmの厚手のタイプに2分される。またII〈隅丸方形〉は、1.2～1.6cmの薄手のタイプのみである。III〈方形〉は、1.3～1.5cmの薄手のタイプと2.1～2.8cmの厚手のタイプとに2分できる。

以上のようにIIタイプは、1.2～1.6cmの範囲内でほとんど厚みに大差ないことが分かる。IとIIIタイプは、薄手と厚手の2つのタイプに分けられ、厚手のものは薄手のものに比べ、顔面表現されにくい傾向があることがうかがえる。またIIIタイプはIに比べて全体的に厚手で、六丁場I・Jのように2cmを越える厚手のものが特徴的である。

これまで分銅形土製品の厚みに関しては、論議されることがほとんどなく、報告書などの図面にも断面図が掲載されていない場合があるが、今後は表裏の平面図及び断面図は必ず掲載して議論の対象としたい。また厚みに関連して一言つけ加えると、当該地域のみでなく松山平野で出土する分銅形土製品は、凹凸がほとんどなく、表裏とも平坦であることも一つの特徴としてあげられるであろう。

5．赤　彩

今回実現した資料の中で赤彩が認められる資料は、アイリB・文京B・G・御幸寺山・六丁場A・D・E・H・I例の9点である。これ以外にも本来赤彩されていたが、摩滅によって剝落したものも相当数存在すると思われ、肉眼観察できた上記の9点を対象に赤色顔料の塗布位置と方法について考えたい。まず、その塗彩位置には、全面の場合と部分的な場合との2種類がある。全面塗布と部分塗布に、どのような意味の違いが存在していたかは知る由もないが、はっきり区別していた点は明確である。ここで問題になるのは後者で、特に眉や頭髪のような部分に塗布する場合である。次に塗布方法では、表面に塗る場合と、胎土そのものに顔料を混入させている場合の2種類がある。例えば、六丁場Eの資料は、眉の表面に塗布するのではなく、顔料を混入させた粘土紐で眉を形作り、張りつけたものと推定される。

6．小　結

分銅形土製品の出土点数の増加にともなって、形態そのものや分布圏についての分類・検討はかなり進んできたが、顔面表現や文様の分類についてはまだ浅く、今回の再検討を試みた結果、一つの枠の中ではとらえきれないものが多いことが明らかになった。この地域で出土する分銅形土製品の顔面表現の特徴としては、頭髪は刺突文、眉と鼻を一体で突帯文で表現し、目と口は、ヘラ状工具又は半裁竹管状工具による施文で、耳の穿孔方向には4種類あるが、そのほとんどが表面から裏面への穿孔である。

また今回の再検討によって、厚みの点や赤彩についても言及できたことは大きな成果であった。よって、赤彩の有無についても明確な報告を希望するものである。

最後に本稿では、対象を道後城北地域出土の資料に限定したため、狭小な範囲での資料の顔面表現の方法解明に終始した。今後は対象範囲を広げ、松山平野全体、瀬戸内沿岸地域全体の中での分銅形土製品の形態、顔面表現方法、厚み、赤彩などについて追求していきたいと考えている。また分銅形土製品だけではなく、同時期の土製品や木製品などの顔面表現方法の対比等も試みたいと考えている。本稿の執筆に際し、ご指導を頂きました愛媛大学教授下條信行先生、赤色顔料の鑑定についてご助言を頂きました福岡市埋蔵文化財センターの本田光子女史と宮内庁正倉院事務所の成瀬正和氏に厚くお礼申しあげます。

〔註〕

（1・2）鷺谷・文京I資料は、形態からみると、本来は人面形土製品と呼ぶべきものであるが、顔面の表現方法に分銅形土製品に類似する点があり、当地域の分銅形土製品の諸特徴を備えた資料として、一応分銅形土製品の範疇に含まれるものとする。

表 7　分銅形土製品出土地名表（道後城北地域）

No.	資料名	遺跡名	所在地	形態	顔面表現		
					頭髪	眉	目
1	アイリA	祝谷アイリ遺跡	祝谷6丁目1277他	II	なし	突帯・鼻一体	線刻（半裁竹管状工具）
2	アイリB	祝谷アイリ遺跡	祝谷6丁目1277他	III	刺突　表面3列 上面6列	刺突2列（左右）	不明
3	文京A	文京遺跡1次	文京町3	I	なし	突帯・鼻一体	線刻
4	文京B	文京遺跡3次	文京町3	II	刺突　表面3列 側面3列 裏面1列	突帯	線刻
5	文京C	文京遺跡3次	文京町3	II	なし	突帯（剝離）	線刻
6	文京D	文京遺跡3次	文京町3	I orIV	顔面表現なし・表面裏歯刺文あり		
7	文京E	文京遺跡3次	文京町3	I	顔面表現なし		
8	文京F	文京遺跡3次	文京町3	II	なし	突帯	線刻
9	文京G	文京遺跡3次	文京町3	I	なし	突帯（剝離）・鼻一体	線刻（半裁竹管状工具）
10	文京H	文京遺跡4次	文京町2	II	なし	突帯・鼻一体	線刻
11	文京I	文京遺跡10次	文京町3	I	なし	突帯・鼻一体	線刻
12	文京J	文京遺跡11次	文京町3	I	顔面表現・文様あり		
13	御幸寺山	御幸寺山東麓遺跡	祝谷3丁目	I	刺突　表面2列	突帯・鼻一体	線刻
14	六丁場A	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122他	II	なし	突帯・鼻一体	線刻
15	六丁場B	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122他	III	刺突　裏面2列	突帯・鼻一体	線刻
16	六丁場C	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122他	III	なし	突帯・鼻一体	線刻
17	六丁場D	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122他	III	なし	突帯（剝離）・鼻一体	不明
18	六丁場E	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122他	I	刺突　表面1列 側面2列	突帯（一部残存） ・周囲に刺突	不明
19	六丁場F	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122他	I	刺突　裏面2列 側面1列 裏面2列	なし	なし
20	六丁場G	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122他	I	顔面表現なし・櫛描文あり		
21	六丁場H	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122他	I	顔面表現・文様なし		
22	六丁場I	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122他	III	顔面表現・文様なし		
23	六丁場J	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122他	III	顔面表現なし・くびれ部に沈線2条		
24	六丁場K	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122他	III	なし	なし	なし
25	六丁場L	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1122他	IV	顔面表現・文様なし		
26	鷺谷	道後鷺谷遺跡	道後鷺谷町5－32	VI	刺突　表面2列	なし	線刻（半裁竹管状工具）

口	耳	赤彩	最大厚(cm)	時期	参考文献	資料名	No.
線刻（半月形）、半裁竹管状工具	一孔（両側）〔表面―裏面〕		1.2	後・前		アイリA	1
不明	なし	全面	2.1	後・前		アイリB	2
刺突	一孔（右のみ）〔表面―裏面〕		1.4	中・後	①②⑤	文京A	3
不明	二孔（右のみ）〔表面―裏面〕〔側面―くびれ部〕	全面	1.6	中・後	①②⑤	文京B	4
不明	一孔（右のみ）〔表面―裏面〕		1.3	中・後	①②⑤	文京C	5
			1.3	中・後	①②⑤	文京D	6
			0.7	中・後	①②⑤	文京E	7
不明	一孔（左のみ）〔表面―裏面〕		1.2	中・後	①②⑤	文京F	8
線刻（半月形）、半裁竹管状工具	一孔（両側）〔表面―裏面〕	全面	1.2	中・後	①②⑤	文京G	9
線刻（横一線）	二孔（両側）〔表面―裏面〕		1.2	中・後	②⑤	文京H	10
なし	一孔（左のみ）〔貫通しない〕		3.0	中末～後前	⑤⑦	文京I	11
			1.2	?	⑥	文京J	12
線刻（横一線）	二孔〔表面―裏面〕	全面	1.1	?	①⑤	御幸寺山	13
線刻（横一線）	三孔（左）〔表面―裏面・一孔は未貫通〕 一孔（右）〔表面―裏面〕	表面	1.2	中・中	②⑤⑧	六丁場A	14
線刻（横一線）	側面三孔（左のみ）〔表面―裏面〕 裏面四孔〔表面―裏面〕		1.5	中・中	②⑤⑧	六丁場B	15
線刻（横一線）	一孔（両側）〔表面―側面〕		1.3	中・中	②⑤⑧	六丁場C	16
不明	四孔（右）〔表面―裏面〕 五孔（左）〔表面―裏面〕	裏面	1.4	中・後	②⑤⑧	六丁場D	17
不明	なし	眉部分	1.2	中・後 中・後	②⑤⑧	六丁場E	18
なし	なし		0.8	中・中	②⑤⑧	六丁場F	19
			1.8	中・後	②⑤⑧	六丁場G	20
		全面	1.8	中・中	②⑤⑧	六丁場H	21
		全面	2.5	中・後	②⑤⑧	六丁場I	22
			2.8	中・後	②⑤⑧	六丁場J	23
なし	四孔（両側）〔表面―側面〕		1.4	中・中	④⑤	六丁場K	24
			1.1	?	⑨	六丁場L	25
線刻（楕円形）	なし		1.5	中・後	②③⑤	鷲谷	26

【参考文献】

①愛　媛　県　　1986　『愛媛県史　資料編　考古』
②古代学協会四国支部　　1988　『松山道後城北の弥生遺跡をめぐって』（シンポジウム資料）
③宮　崎　泰　好　　1989　「道後鷺谷遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会
④㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター　1989　「祝谷六丁場遺跡」
『一般県道「菅沢―松山線」埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』
⑤谷　若　倫　郎　　1989　「分銅形土製品にみる地域相」『花園史学10号』
⑥愛媛大学埋蔵文化財調査室　1989　『文京遺跡第８・９・11次調査』
⑦愛媛大学埋蔵文化財調査室　1990　『文京遺跡第10次調査』
⑧松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター　1991　『祝谷六丁場遺跡』

V-3　道後城北遺跡群の須恵器

宮内　慎一・山之内志郎

1．はじめに

道後城北遺跡群は松山平野のやや北寄り、松山城を擁する勝山の北に広がる平野部と丘陵部で構成されている。これまでの発掘調査結果の蓄積とその研究によって、この地域を「道後城北遺跡群」と呼ぶにふさわしい拠点集落の様相が浮かび上がってきた。しかし、その研究は緒についたばかりで、特に古墳時代の集落経営の様相は極めて不明な点が多い。そこで本稿では、これまで出土した須恵器の形態や分布状況より５～７世紀の古墳時代集落の一端を見いだすべく論を進めていくことにする。

まず時期区分であるが、これについては須恵器の型式によりⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ期の４区分として型式分類を行った。Ⅰ期については、初期須恵器と呼ばれる段階の須恵器以降のものがこれにあたる。Ⅱ期は出土資料が多く、その必要性から前後の２段階に区分した。また、Ⅲ・Ⅳ期については出土資料が少なく、あえて区分はしなかった。加えて、現在、松山平野の須恵器の編年については、不明瞭な点が多く、各型式を細分類することは困難であるため、今回は、この５区分におさめた。また、各型式の須恵器を論ずるにあたり本稿では、遺構に伴う遺物を基準資料とした上、蓋坏を中心に実測図を掲載し型式分類を行った。そのため一般的な須恵器編年に照らし合わせるならば、表８のように中村編年に併行するものと考えられる。　〔宮内・山之内〕

表８　須恵器型式分類表

型　式（期）	Ⅰ	Ⅱ		Ⅲ	Ⅳ
段　階		前　半	後　半		
中村編年 （型式・段階）	Ⅰ 4・5	Ⅱ 1・2	Ⅱ 3・4・5・6	Ⅲ	Ⅳ・Ⅴ
絶対年代	5世紀	6世紀		7世紀以降	

2．型式分類

(1)　Ⅰ期（第80、81図）

この型式の須恵器は、道後姫塚遺跡（現　にぎたつ会館敷地内）と若草町遺跡（現　松山市総合福祉センター敷地内）、東雲神社遺跡他から出土したものである。

坏蓋（第80図１～６、第81図７・８）

口径は10～11cmのものと12～13cmのやや大型のものがある。天井部は丸みをもつものと、

やや偏平のものがある。天井部と口縁部を分ける稜は断面三角形の鋭いものとやや鈍いものがある。口縁部は直下に下がるもの、外反するもの、内湾気味に下がるものがあり、端部は尖るものと尖り気味に丸いものがある。口縁部の高さは2㎝を越える。内面は内傾する段をなし、中凹みの面を有するものが多くみられる。天井部外面は、その2分の1程度に回転ヘラ削り調整が施されている。

坏身（第81図9～12）

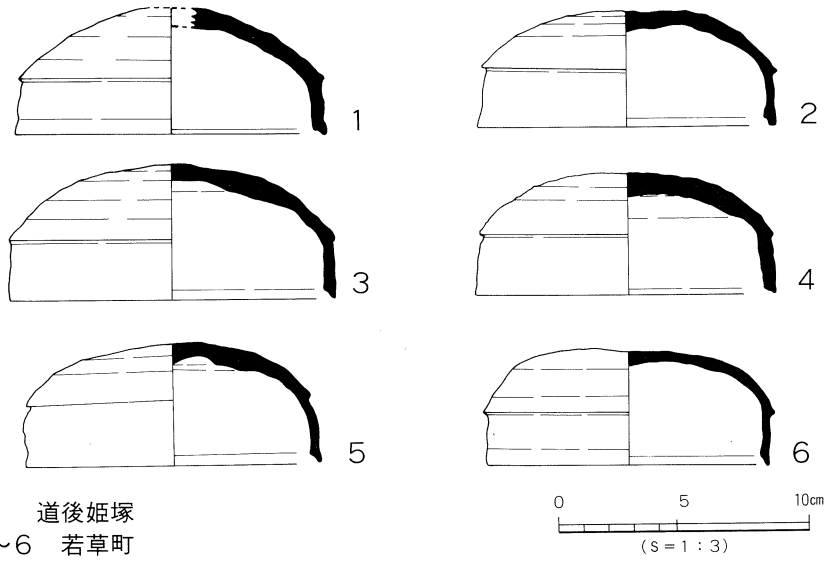
坏蓋と同様、口径に差がみられる。たちあがりは内傾するものと内傾して後直立するものがある。たちあがり高は1.6～1.8㎝程度のものが多い。端部は尖り気味で内傾する段をなす。坏蓋と同様に端部に中凹みの面がみられるものが多い。受部は水平にのびるもの、やや上外方にのびるものがあり、端部は尖り気味である。受部基部に沈線が巡るものが多くみられる。底部は丸いもの、扁平なものがあり、底部外面ヘラ削りは2分の1前後である。

高坏（第81図13～17）

小型の有蓋高坏である。蓋は天井部は丸みをもち、中凹みのつまみが付く。断面三角形の稜をもち口縁端部は内傾する中凹みの面を有する。坏部は坏身と同様の形態をなす。脚部はハの字形に外反し、端部付近で段をなし裾部は甘く内傾する。脚体部には、台形状のスカシ窓が三方向にみられる。

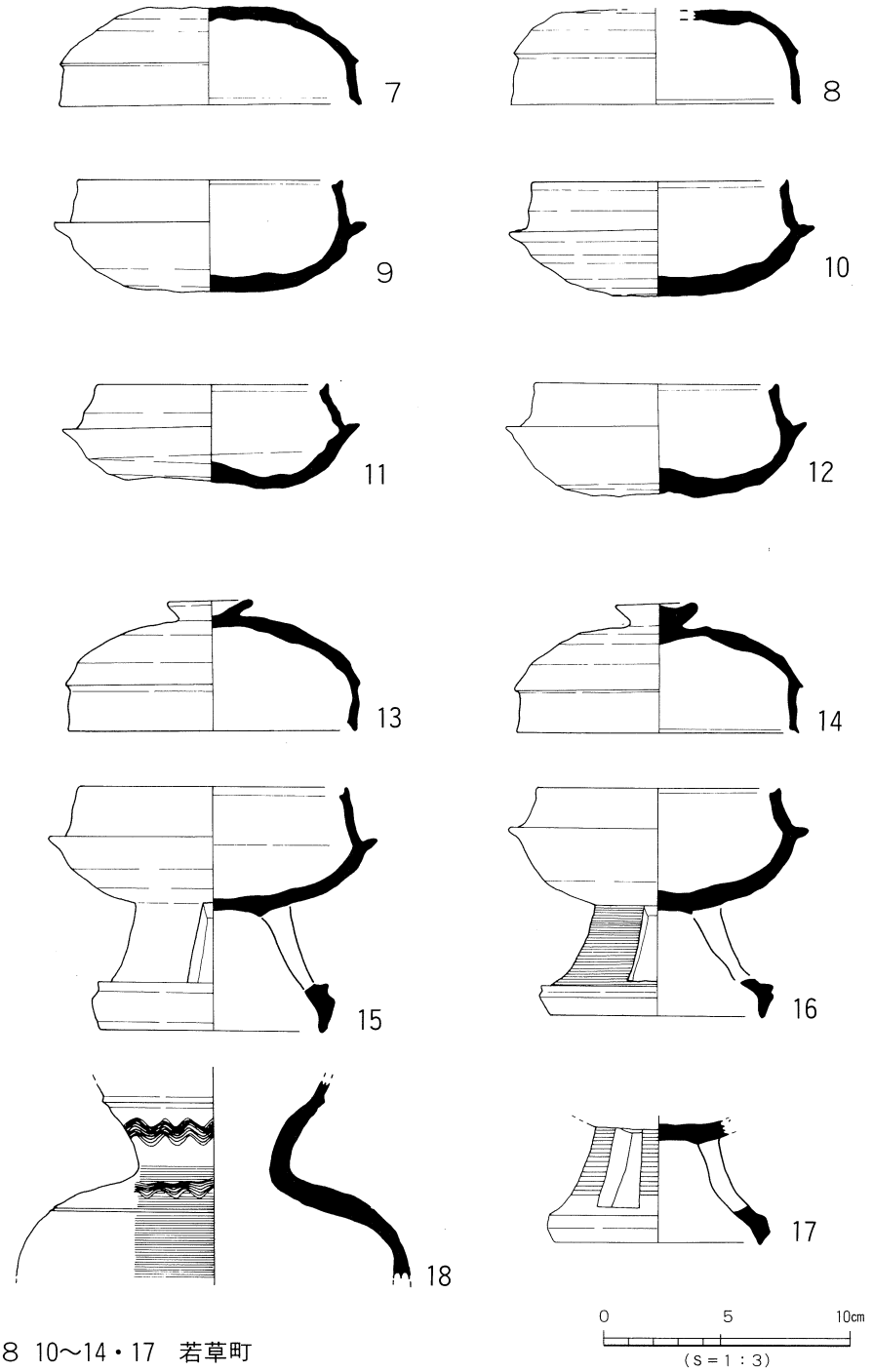
𤮔（第81図18）

大型の𤮔である。口頸部には1条の明瞭な凸線が巡り、凸線下に櫛描の波状文がみられる。体部は肩が張り、体部上半にその最大径を求めることができる。体部上部に1条の凹線が巡る。肩部にも櫛描きの波状文がみられ体部外面には回転カキ目調整が施されている。



1　　道後姫塚
2～6　若草町

第80図　道後城北遺跡の須恵器Ⅰ期（1）



7・8 10～14・17 若草町
9・15・16 道後姫塚　　18 東雲神社

第81図　道後城北遺跡の須恵器Ⅰ期（1）

(2)　II期（第82～85図）

全体としてI期に較べ、やや器形が大型化する。坏蓋は稜の有無、坏身は、たちあがり・器高の高低により前後半に分けた。

II期　前半（第82・83図）

この型式の須恵器は、道後今市遺跡、文京遺跡、祝谷六丁目遺跡、若草町遺跡、祝谷古墳群、桜谷古墳群他から出土している。

坏蓋（第82図19～22・第83図23・24）

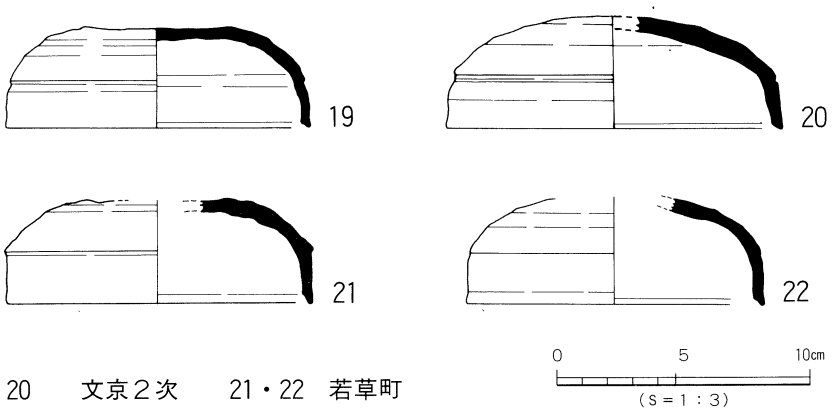
口径は13～15cm程度になり、天井部はやや扁平のものが多くみられる。天井部と口縁部を分ける稜はI期に比較して明瞭でなく代わって凹線が巡るものもある。口縁部は外反するもの、直下に下がるものがあり、端部は尖り気味で内面に内傾する段をなす。但し、幅広の凹線が巡るものについては端部は丸く仕上げられ内傾する段のみられないものがある。また、この器種に、口唇部に刻目が施されているものがある(第83図23)。天井部外面2分の1前後に回転ヘラ削り調整がみられる。

坏身（第83図25～32）

坏蓋と同様にやや大型化している。たちあがりは、I期に比較してやや低く内傾し端部は内傾する段をなすものと丸いものがある。たちあがり高は1.5～2.0cm前後である。受部は水平もしくはやや上外方にのび端部は尖り気味に丸い。底部は丸みをもつものと平底風のものがあり、底部外面の回転ヘラ削りは2分の1から3分の1程度である。

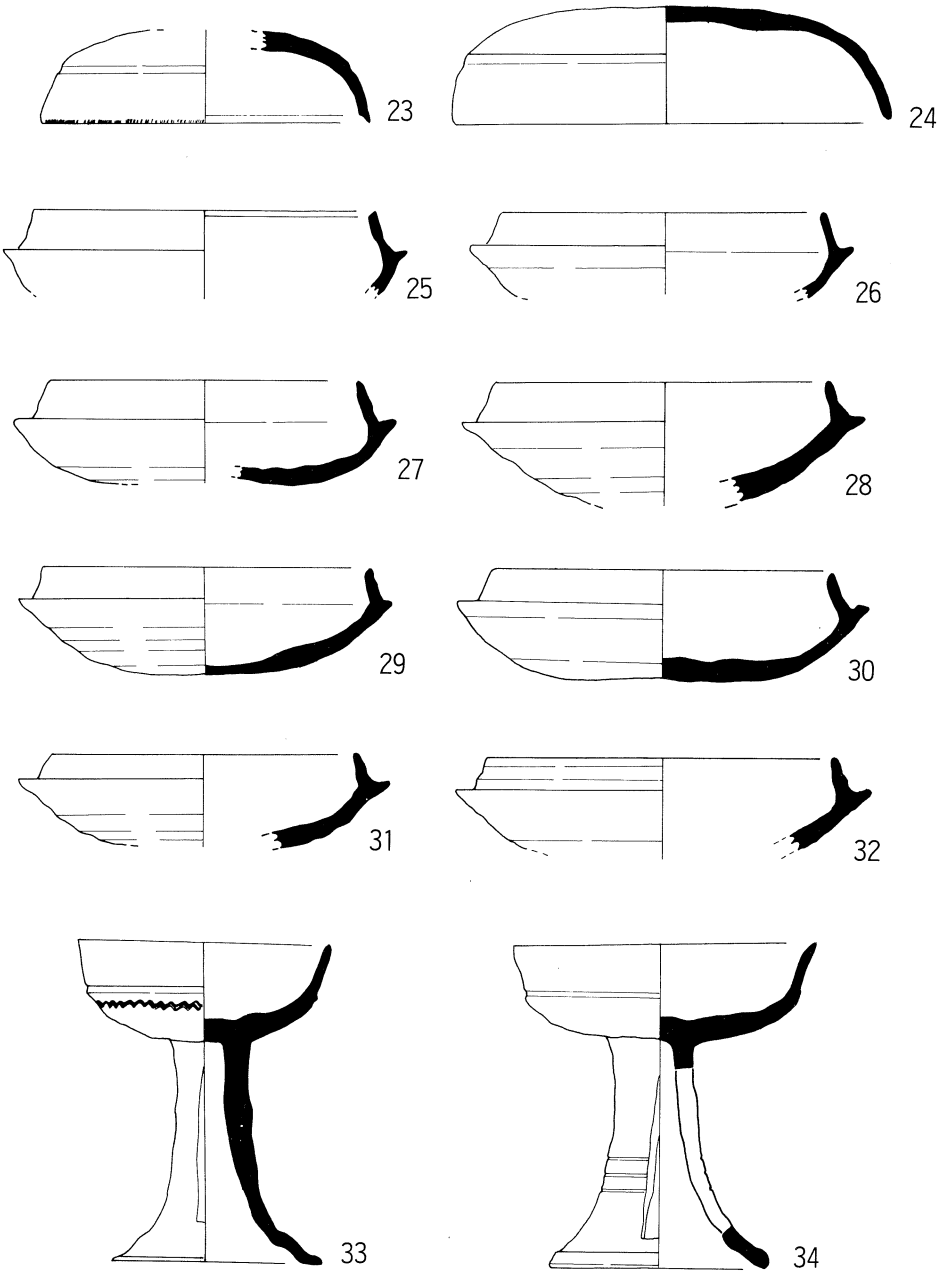
高坏（第83図33・34）

この型式の高坏の類例は少ない。わずかに桜谷1号墳出土の無蓋高坏をあげることができる。小型の高坏で形態的には、やや外反気味にのびる口縁部をなし、坏体部中位やや下方に稜をなす。脚基部は細く外反しながら下がり端部に至る。脚体部には凹線が巡るものもあり、1段の細長い台形状の透かし窓がみられる。



19・20　文京2次　21・22　若草町

第82図　道後城北遺跡の須恵器II期前半（1）



23・26・28　道後今市Ⅰ次　　32　道後今市Ⅱ次
24・30・32　道後今市Ⅲ次　　25・31　祝谷六丁目
27　若草町　29　文京６次　33・34　桜谷１号墳

0　5　10cm
（S＝1：3）

第83図　道後城北遺跡の須恵器Ⅱ期前半（2）

II期　後半（第84・85図）

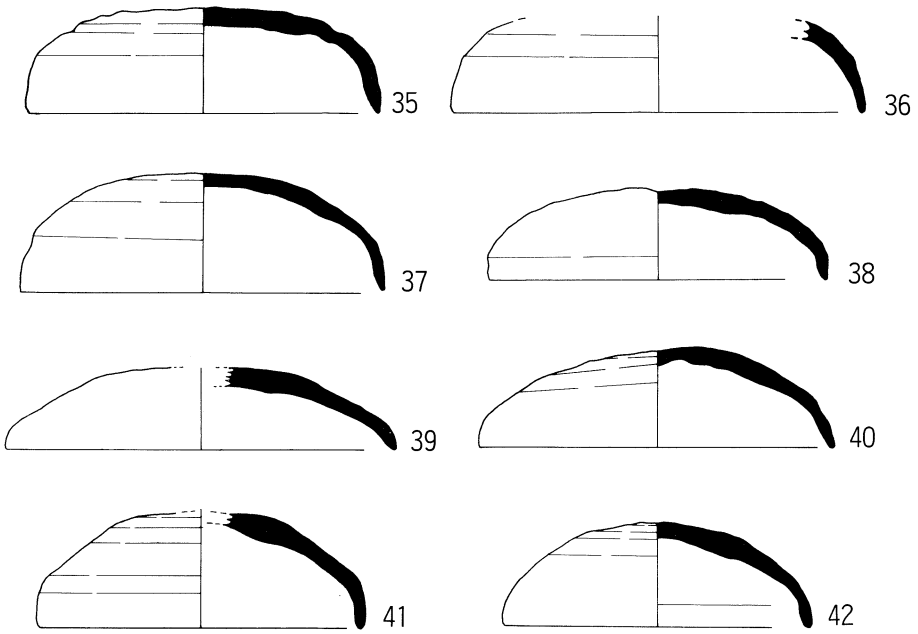
この型式の須恵器は道後今市遺跡Ⅰ～Ⅳ・Ⅵ次調査地点、若草町遺跡、祝谷アイリ遺跡他から出土している。

坏蓋（第84図35～42）

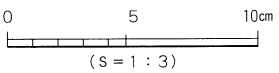
天井部と口縁部を分ける稜のようなものは全く消え、天井部から口縁部にかけて丸くなだらかなカーブを描いている。但し、口径11cm前後のものについては天井部が丸みをもつが尖り気味で外面にはヘラ切り痕が残るものが多くみられる。口縁部はやや直立気味に下がるもの、外反気味に下がるものがあり端部は丸く仕上げるものが多い。天井部外面のヘラ削りは3分の1程度である。

坏身（第85図43～50）

前半に較べて器高が低くなる。たちあがりはより短く内傾し、たちあがり高は0.5～1cm程度である。端部は丸いもの、尖り気味に丸いものがあるが段をなすものはほとんどみられない。受部は比較的短くなり端部は尖り気味なもの、丸いものとがある。底部は丸底のものや扁平のものがあるが、たちあがり高が0.5cm程度の器種については平底風のものが多く、外面にはヘラ切り痕が残るものが多くみられる。底部外面のヘラ削りは2分の1から3分の1程度である。



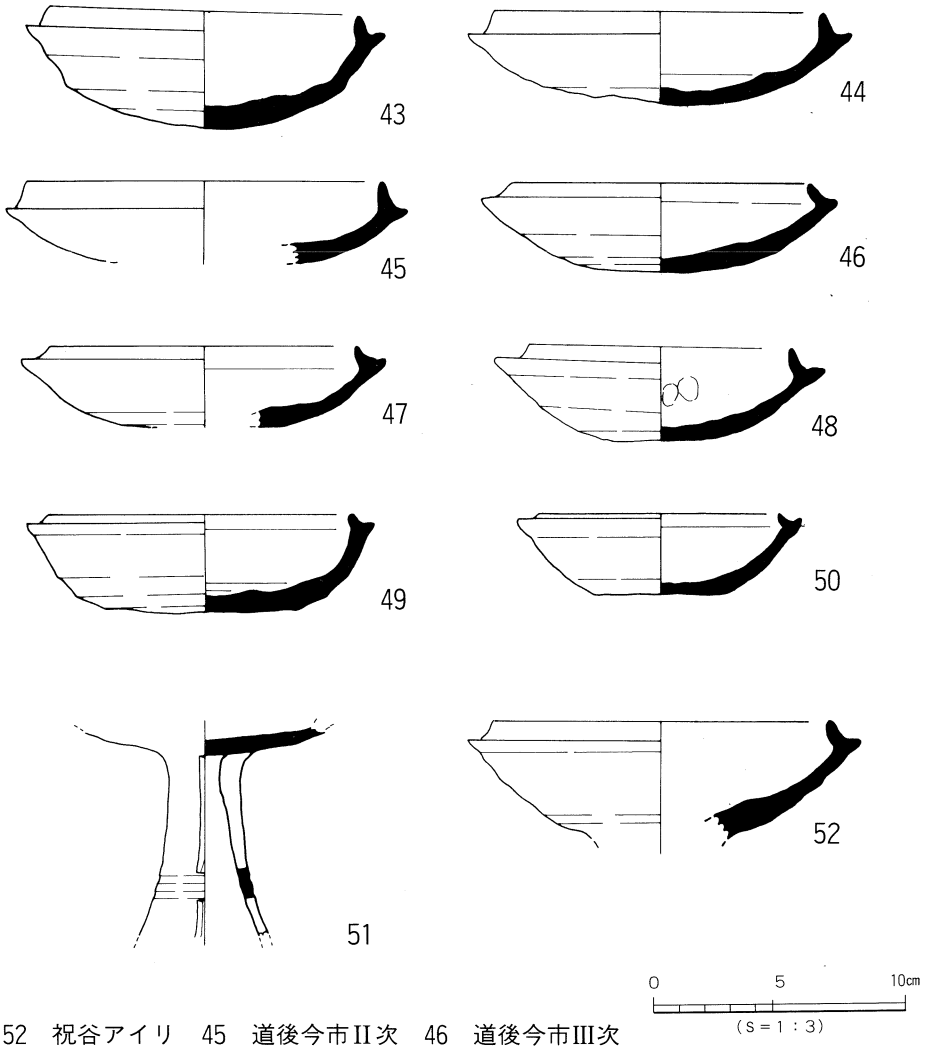
35　祝谷アイリ　36　文京8次　37　道後今市III次
38　道後今市IV次　39～42　若草町



第84図　道後城北遺跡の須恵器II期後半（1）

高坏（第85図51・52）

坏部は坏身と同様の形態をなす。脚基部は細く緩やかに外反する。脚体部には２本の凹線がみられ、その上下に長方形の透かし窓が２方向にみられる。



43・52　祝谷アイリ　45　道後今市II次　46　道後今市III次
49　松山北高２次　47・48・50・51　若草町

第85図　道後城北遺跡の須恵器II期後半（2）

(3)　III期（第86図）

この型式の須恵器は前段階の蓋坏の形態が全く逆転する段階のものである。坏蓋は、つまみが付き、かえりが出現し、坏身については前段階の蓋を逆転させたようなものと、高台の付くものとがある。道後今市遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ次調査地点、若草町遺跡、松山大学構内２次調査地点他から出土した数点である。

坏蓋（第86図53・54）

口径は10cm前後のものと13～14cmのやや大型のものがある。天井部は丸みをもつもの、扁平なものがあり、内面にはかえりを有する。口縁端部及びかえりの端部は、やや尖り気味である。天井部外面のヘラ削りは２分の１程度である。

坏身（第86図55・56）

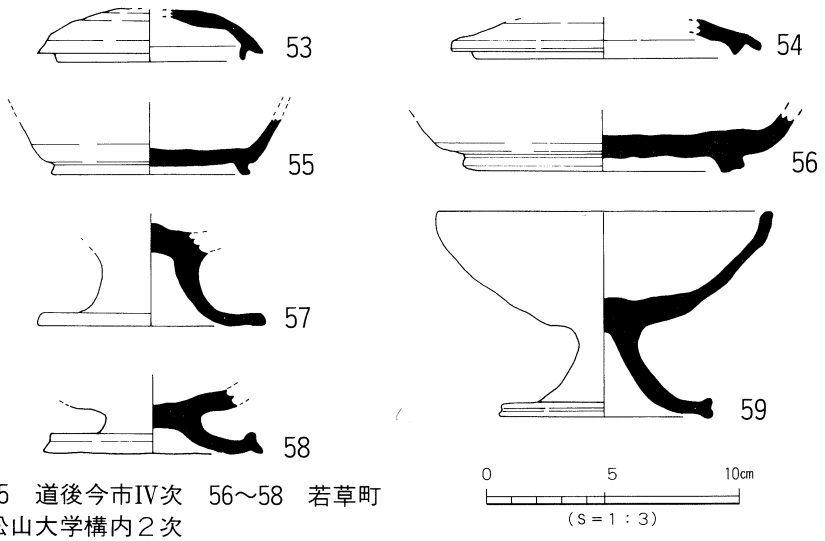
前段階の蓋を逆転させたかのような形態のものと高台の付くものがある。前者は資料がわずかであるため図示していない。後者については比較的高い高台がハの字形に付き端部はわずかに段をなし、内端部が接地する。高台から底体部端にかけて回転ヘラ削り調整を施しているものがある。

高坏（第86図57～59）

小型で高さの低い高坏である。脚部は２～４cm程度である。やや椀形に近い坏部をもつ。口縁端部は丸く仕上げられている。脚部は短く裾を広げるものと、端部で下方へ屈曲させ段をなすものとがある。

(4)　IV期（第87図）

この型式は、前段階の蓋にみられるかえりが消失する形態の出現をもってはじまる。道後今市遺跡Ⅰ次調査地点、若草町遺跡、松山北高２次調査地点他から出土したものである。



53～55　道後今市IV次　56～58　若草町
59　松山大学構内２次

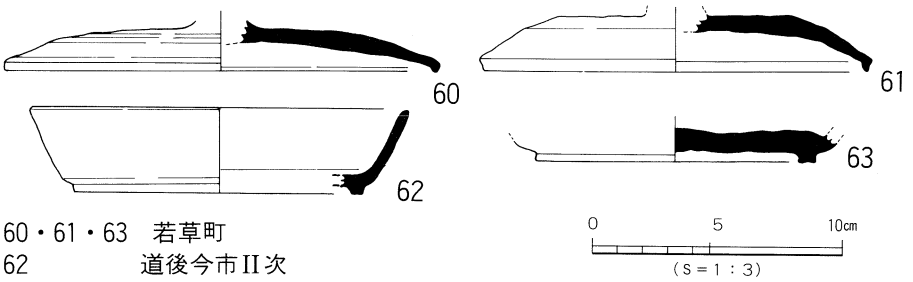
第86図　道後城北遺跡の須恵器III期

坏蓋（第87図60・61）

口径16～18cm程度になり、前段階に較べて器形が大きくなる。天井部は扁平になり、前段階にみられたようなかえりはなくなる。代わって口縁端部に鈍い稜をもち、それより短く屈曲するつまみだしがみられるようになる。その端部は尖り気味である。天井部外面には肩部付近まで、ほぼ2分の1前後に回転ヘラ削り調整が施されている。

坏身（第87図62・63）

平底のものはあまりみられない。高台の付くものは直立気味な高台を伴う。その貼り付けする位置は前段階のものより底部端になり、接地面はほぼ平らであり、凹面をなすものもみられる。体・底部外面には回転ヘラ削り調整が施されているものが多い。〔宮内〕



60・61・63　若草町
62　　道後今市II次

第87図　道後城北遺跡の須恵器IV期

3．遺構と遺物

道後城北遺跡内でこれまでに検出された古墳時代の遺構と遺物について、出土資料の評価をその出土状況より、①遺構、②包含層、③遺構＋包含層の3種類に分けた（表9）。

①遺構――住居址・溝・土壙等の集落に関連するものと古墳である。

②包含層―明確な遺構に伴わず、包含層から出土したものである。他に表採資料、出土地点不明のものも含む。

③遺構＋包含層－同じ時期の資料が遺構からも包含層からも出土している場合である。

このようにして、道後城北地区の古墳時代の遺構・遺物の分布状況から集落の立地や様相を考えてみることにする。

(1)　地区割り（第89図）

谷若倫郎氏の地区割に準じ、遺跡群内を城北・道後・祝谷の3地区に区分した。そのうち主要な遺跡は次のとおりである。

城北地区　扇状地には文京遺跡、松山大学構内遺跡、松山北高遺跡、道後樋又遺跡、若草町遺跡が、丘陵地には東雲神社遺跡がある。

道後地区　扇状地には道後今市遺跡が、丘陵地には道後姫塚遺跡がある。

祝谷地区　丘陵地には祝谷アイリ遺跡、祝谷六丁目遺跡、祝谷六丁場遺跡、祝谷本村遺跡等があり、古墳は祝谷古墳群、桜谷古墳群がある。

(2)　遺構・遺物の分布（第89図、表９）

Ⅰ期　城北地区―若草町遺跡、東雲神社遺跡がある。若草町遺跡では竪穴式住居址や周溝（ＳＤ12）他と遺物が検出されている。丘陵地には東雲神社遺跡があり遺物が包含層中より出土している。道後地区―扇状地では道後今市遺跡Ⅰ次調査があり、包含層中より遺物が出土している。丘陵地では道後姫塚遺跡の竪穴式住居址（ＳＢ１）より遺物が出土している。祝谷地区―祝谷六丁目遺跡、祝谷山田遺跡において包含層中より遺物が数点出土している。

この時期は祝谷地区においては明確な遺構は確認されておらず、丘陵地では、わずかに道後姫塚遺跡に集落関連遺構が検出されているのみである。扇状地では若草町遺跡周辺の地域に集落が営まれていたものと考えられる。

Ⅱ期　前半　城北地区―松山北高２次調査地点、文京遺跡２、６、10次調査地点、若草町遺跡がある。松山北高遺跡２次調査地点からは土器溜りよりこの時期以降Ⅳ期までの遺物が混在して出土している。文京遺跡２、６次調査地点では包含層中より遺物が出土しており、若草町遺跡からは竪穴式住居址や溝と遺物が出土している。道後地区―道後今市遺跡Ⅰ～Ⅳ次調査地点では遺構と遺物が検出されている。道後今市遺跡１次調査地点では、Ⅱ期前半の遺物が包含層より出土しており、口縁端部に刻目が施されている坏蓋が数点出土している。同Ⅱ・Ⅲ次調査地点では土壙及び包含層からの出土である。同Ⅳ次調査地点からは竪穴式住居址、掘立柱建物址と遺物が検出されている。祝谷地区―祝谷六丁目遺跡、祝谷六丁場遺跡、祝谷山田遺跡があり、古墳では祝谷古墳群、桜谷古墳群がある。古墳以外はすべて包含層からの出土である。

この時期は祝谷丘陵において古墳の造営がみられる。そして扇状地では道後今市遺跡及び若草町遺跡周辺地域に集落が経営されていたものと考えられる。

Ⅱ期　後半　城北地区―松山北高２次調査地点、文京遺跡８、10次調査地点、若草町遺跡がある。文京遺跡８次調査地では自然流路より遺物が出土している。同10次調査地点では包含層中からの出土である。若草町遺跡からは、竪穴式住居址、溝の他、包含層より遺物が出土している。道後地区―道後今市遺跡Ⅰ～Ⅳ、Ⅵ次調査地点で、遺構、遺物が検出されている。道後今市遺跡Ⅰ、Ⅳ次調査地点では包含層中よりの出土であり、同Ⅱ次調査地点では土壙（ＳＫ13）、同Ⅲ次調査地点では土壙（ＳＫ25）より遺物が出土している。同Ⅳ次調査地点では竪穴式住居址（ＳＩ02）より遺物が検出されている。祝谷地区―祝谷アイリ遺跡、祝谷六丁場遺跡がある。祝谷アイリ遺跡では竪穴式住居址（ＳＢ２）と遺物が検出されている。他に祝谷六丁場遺跡からは包含層中より遺物が出土している。

この時期は、祝谷地区において明確な集落関連遺構が検出されたのは初例であり、扇状地では道後今市及び若草町遺跡周辺において集落が継続して営まれていたことがうかがわれる。

表9　道後城北遺跡群の概要一覧

番号	遺跡名	立地（標高：m）	種類	型式 I	型式 II 前	型式 II 後	型式 III 前	型式 III 後	備考
A	祝谷アイリ	丘陵 (65.0)	包・集			●	○		住居址
B	祝谷本村	〃 (45.0)	包・集				○	○	
C	祝谷六丁目	〃 (90.0)	包・集		○		○	○	
D	祝谷六丁場(市)	〃 (63.3)	包・集		○	○			
E	祝谷六丁場(県)	〃 (60.0)	包・集			○			
F	祝谷山田	〃 (80.0)	包含層	○	○				
G	祝谷丸山	〃 (55.0)	包含層		○				
H	松山北高2次	扇状地 (24.0)	包・集	○	○	○	○	○	
I	文京2次	〃 (27.9)	包・集		○				
J	文京6次	〃 (29.0)	包含層		○				
K	文京8次	〃 (30.5)	包・集			◎			溝
L	文京9次	〃 (27.5)	包・集				○		
M	文京10次	〃 (29.0)	包・集		○	○	○		
N	松山大学2次	〃 (25.5)	包・集				◎		住居址
O	道後樋又II	〃 (29.3)	包・集				◎		溝
P	東雲神社	丘陵 (65.0)	包含層	○					
Q	若草町	扇状地 (23.5)	包・集・墓	●	●	●	●	○	住・溝
R	道後姫塚	丘陵 (49.0)	包・集	◎					住居址
S	道後今市I次	扇状地 (33.8～34.5)	包・集	○	○	○	○	○	
T	道後今市II次		包・集・墓		●	●	●		土壙
U	道後今市III次		包・集		◎	◎	○	○	住居址
V	道後今市IV次		包・集		●	●			住居址
W	道後今市VI次	扇状地 (31.0)	包・集			○			
X	祝谷古墳群	丘陵 (90.0)	古墳		◎				古墳
Y	桜谷古墳群	〃 (218)	古墳		◎				古墳

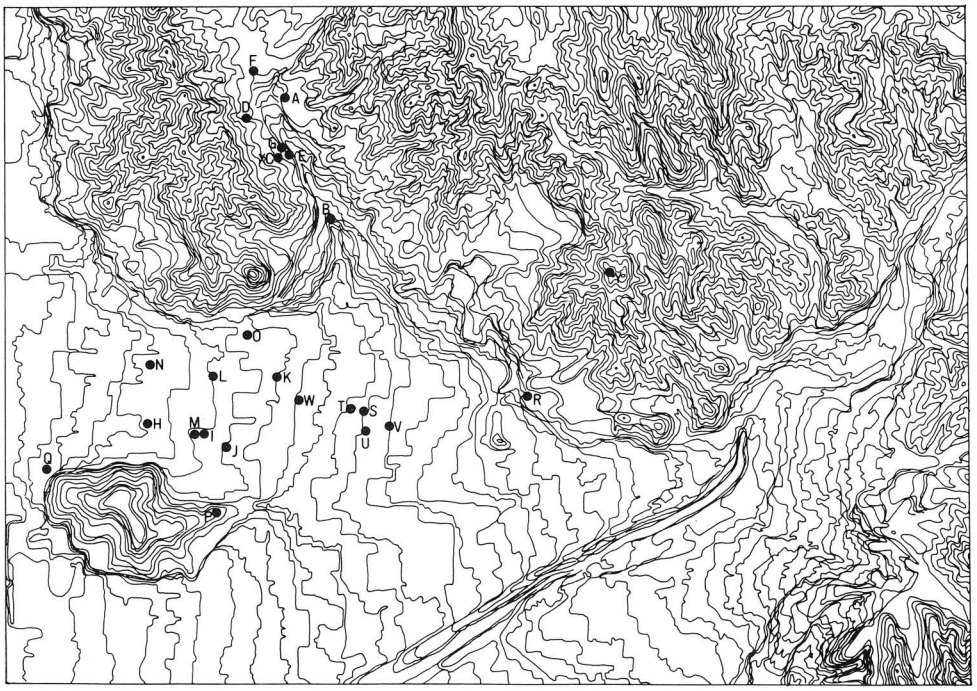
※　◎遺構　○包含層　●遺構＋包含層

Ⅲ期　城北地区―松山北高２次調査地点、文京遺跡９、10次調査地点、松山大学構内遺跡２次調査地点若草町遺跡がある。文京遺跡９、10次調査地点では包含層からの遺物の出土である。松山大学構内遺跡２次調査地点からは竪穴式住居址よりこの時期の遺物が出土している。この他、若草町遺跡では竪穴式住居址の他、包含層中からの遺物の出土がある。道後地区―道後今市遺跡Ⅰ、Ⅲ次調査地点があるが、すべて包含層からの出土である。祝谷地区―祝谷六丁目遺跡、祝谷本村遺跡があるが包含層からの出土であり、その量は少ない。

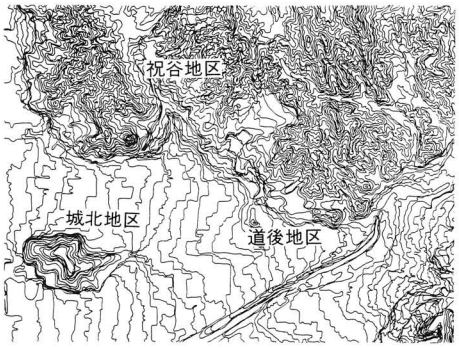
この時期になると集落関連遺構の検出が各地区とも少なくなり、わずかに若草町遺跡周辺において集落が継続して営まれていたものと考えられる。

Ⅳ期　城北地区―道後樋又Ⅱ遺跡、若草町遺跡がある。道後樋又Ⅱ遺跡では自然流路内より遺物が検出されている。若草町遺跡では包含層からの出土である。道後地区―道後今市遺跡Ⅰ、Ⅲ次調査地点があるが、これらもすべて包含層中からの出土である。祝谷地区―祝谷六丁目遺跡、祝谷本村遺跡がある。包含層からの出土であるが、その量はごくわずかである。

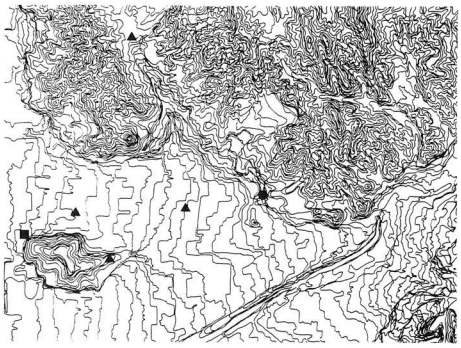
この時期になると扇状地においても集落関連遺構の検出はわずかになり、遺物の出土量も減少化している。　〔宮内〕



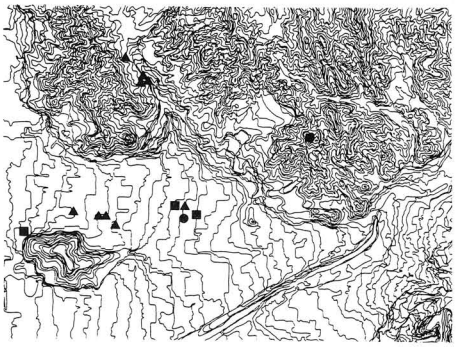
第88図　道後城北地区の主要遺跡の分布図



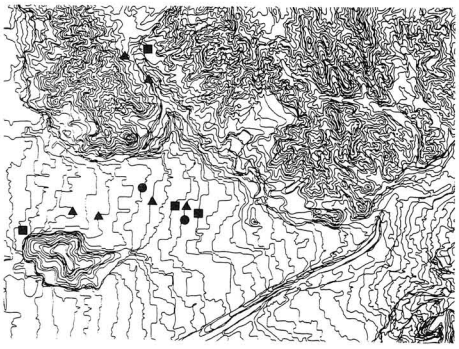
地区割り



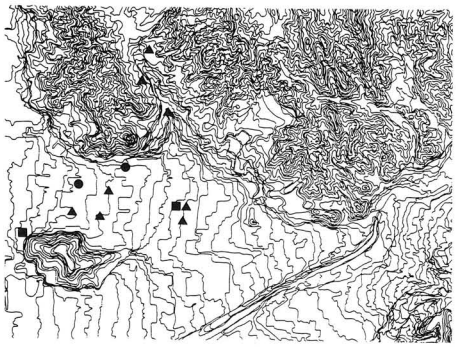
I　期



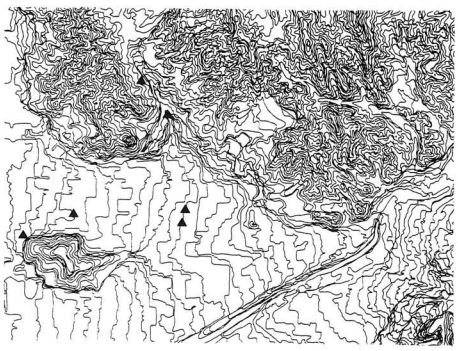
II 期　前半



II 期　後半



III　期



IV　期

● 遺構　▲ 包含層　■ 遺構＋包含層

第89図　道後城北遺跡の遺構・遺物分布図

4．小　結

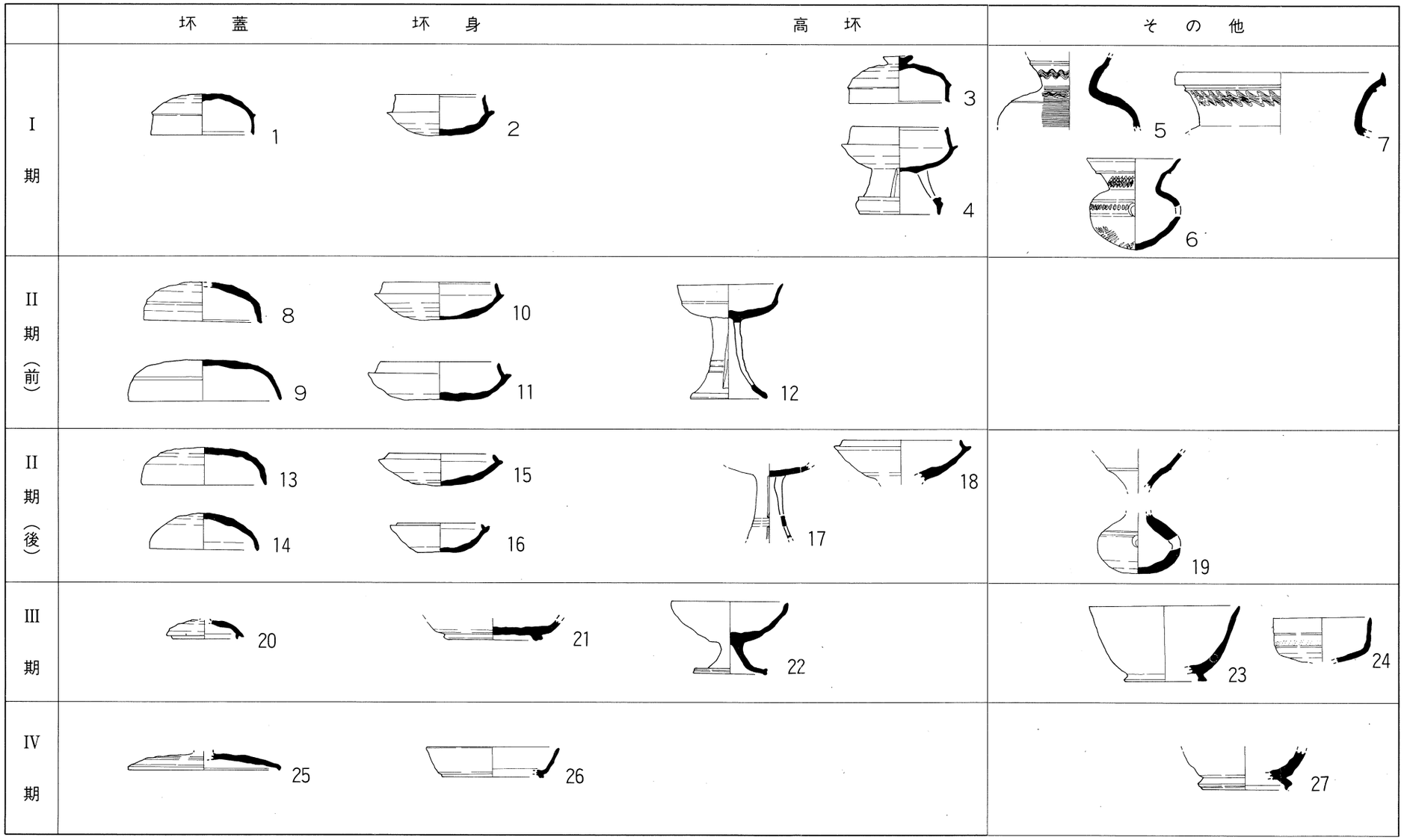
本論では道後城北遺跡群の古墳時代における集落の立地や動態を須恵器の分布等をもとに考えてみた。それによると、道後城北地区全体としての須恵器の出現は、それをⅠ期に求めることができる。それに対して衰退はⅢ期後半のはじまりにあると考えられる。遺物の出土量が減少し、その出土範囲も限られてくる。第90図は各時期における坏蓋、坏身、高坏、その他の器種の編年試案である。同一遺構内から各器種が共伴している例が少なく、同一時期で多遺構の資料を採用したため、多少問題点はあるが、各器種のおおまかな形態変化はつかむことができた。次に、集落の形成については、丘陵地と扇状地ではその性格に多少の差異が認められる。祝谷丘陵では出土資料の多くがⅡ期に集中しており、古墳もまたⅡ期前半の時期に限られていることから生活と墓が近接した位置に営まれていたことがわかる。道後・城北両地区の丘陵では、道後姫塚遺跡、東雲神社遺跡においてⅠ期の資料が出土しているにすぎず様相については不明である。扇状地における初現は城北地区の若草町遺跡である。Ⅰ期からⅢ期にかけ長期にわたり集落を形成していたものと考えられる。次の段階に集落関連遺構が集中して検出されるのは道後地区の道後今市遺跡周辺である。Ⅱ期からⅢ期前半にかけてその最盛期をなし、Ⅲ期後半でほぼ終末期を迎える。

これらのことから判断すると丘陵地においては、Ⅱ期を中心とした短期間での集落の営みがうかがわれる。それに対して扇状地では、若草町遺跡を別にするならばⅡ期前半からⅢ期前半を中心としながらも長期間にわたり、繁栄・衰退を繰り返していたものと思われる。その他、特筆すべき資料として「3．遺構と遺物」の分布でもふれたが、道後今市遺跡Ⅰ次調査地点で出土した口縁端部に刻み目が施されたⅡ期前半の坏蓋をあげることができよう。この資料は当該地域は勿論のこと、松山平野内でも類例がみられず、他地域との交流を物語る資料として注目されるものである。以上のように、本論では集落の立地・動態や変遷を、須恵器の分布をもとに考えてみたわけであるが充分に追求されたものとはいえず、概観するにとどまった。今後は本論を新しい資料で補強しつつ、遺構の面からも丘陵地や扇状地における集落の様相や動態を明らかにし、古墳時代における当地域の集落の変遷を考えていかねばなやないであろう。

また、今回は、論考の範囲を道後城北遺跡群に限ったわけであるが、今後は桑原地域、福音寺、来住廃寺など他地域との関連性を求め、松山平野における古墳時代の集落の変遷を論考していかなければならないであろう。資料調査にあたり、愛媛県教育委員会、㈶愛媛県埋蔵文化財調査センターの皆様方には多大の協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

〔宮内・山之内〕

道後城北遺跡群の須恵器（試案）　　（S＝1：6）



主要遺跡

I 期
若草町遺跡
道後姫塚遺跡
東雲神社遺跡
道後今市遺跡Ｉ次調査
祝谷六丁目遺跡

II 期（前）
松山北高遺跡
文京遺跡２・６・10次調査
祝谷六丁場遺跡
若草町遺跡
道後今市Ｉ～IV次調査
祝谷古墳群・桜谷古墳群

II 期（後）
文京遺跡８・10次調査
若草町遺跡
祝谷アイリ遺跡
祝谷六丁場遺跡

III 期
松山大学構内遺跡２次
若草町遺跡
祝谷六丁目遺跡

IV 期
道後樋又遺跡
祝谷六丁目遺跡
祝谷本村遺跡

〔遺跡・遺構〕　若草町遺跡　ＳＤ12 ①②③、ＳＤ２ ⑥、ＳＤ26 ⑦、ＳＢ18 ⑭、ＳＤ８ ⑯、包含層出土 ⑰⑲㉑㉓㉔㉕㉗　道後姫塚遺跡　ＳＢ１ ④
東雲神社遺跡 ⑤　文京遺跡２次調査地 ⑧　道後今市遺跡Ｉ次調査地 ⑪⑳㉖　道後今市遺跡II次調査地　ＳＫ32 ⑩　道後今市遺跡III次
調査地　ＳＢ３ ⑨　道後今市遺跡IV次調査地　ＳＩ02 ⑮　桜谷１号墳 ⑫　祝谷アイリ遺跡　ＳＢ２ ⑬　ＳＢ１ ⑱　松山大学構内遺跡２次調査　ＳＢ９ ㉒

〔参 考 文 献〕　古代学協会四国支部　1988「道後城北遺跡をめぐって」シンポジューム資料　　松山市教育委員会「松山市埋蔵文化財調査年報II・III」・「松山市埋蔵文化財調査報告書 松山大学構内遺跡」1991
松山市「松山市史料集一考古編Ｉ」1980　　愛媛県教育委員会「道後姫塚遺跡埋蔵文化財調査報告書」1977　「愛媛県立松山北高等学校遺跡埋蔵文化財調査報告書」1981
愛媛県「愛媛県史 資料編 考古」1986　　愛媛県埋蔵文化財調査センター「道後今市松山市埋蔵文化財調査」1985　『一般県道「菅沢一松山線」埋蔵文化財調査報告書Ｉ』1980
愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学「文京遺跡８・９・11次調査」1990　「文京遺跡10次調査」1991

第90図　道後城北遺跡群の須恵器

Ⅵ　祝谷アイリ遺跡の調査成果と課題

祝谷アイリ遺跡調査は、道後城北遺跡群祝谷地区の弥生時代の集落構造解明を主目的として実施した。調査・研究の結果、(1)祝谷地区の弥生～古墳時代の集落様相、(2)道後城北遺跡群の集落様相、(3)祝谷地区の自然環境を追究するものとなった。

(1)　祝谷地区では、祝谷六丁場遺跡・祝谷六丁目遺跡等の調査より弥生時代中～後期と古墳時代の遺構・遺物が確認され丸山川右岸の集落様相が明らかとなっていた。一方、本調査地のある丸山川左岸の様相は、本格的な調査に恵まれなかったことから、その様相は不鮮明であった。今回の調査では祝谷六丁場遺跡と同時代同時期(弥生時代中期中葉、同後期前半)の遺物、遺構を確認した。よって、当該期に祝谷地区では丸山川両岸に居住地が存在していたことを確認するものとなった。また、弥生時代に限らず、古墳時代においても傾斜地を居住地として利用していたことを確認したことは、祝谷地区に限らず平野内の同地形立地の遺跡研究や埋蔵文化財調査に対して大きな課題を提示するものとなった。

次に、本調査では、祝谷地区遺跡の出現期について一つの資料を提示するに至った。祝谷地区では、以前より表採及び包含層遺物として縄文時代後期の遺物が確認されていた。本調査においても縄文時代晩期の土器片一点が出土しており、加えて丸山遺跡出土の石器を分析（考察Ⅴ－１　多田仁）することで、縄文時代以前の祝谷地区における集落存在の可能性がより高いものとなった。また、多田氏の考察は祝谷地区に限らず松山平野の縄文時代以前の石器文化及び石器研究に大いに寄与するものであると考える。今後の継続的な調査と研究に期待するものである。

(2)　道後城北遺跡群内では、平形銅剣22口、石戈１点、イモ貝製縦型貝輪２点、青銅鏡(「日光鏡」)１面が出土しており、弥生時代集落として西日本においても注目される遺跡地帯であることが近年明かとなってきた〔下條信行　1991〕。

本調査では、調査地より出土した分銅形土製品を含め、道後城北遺跡群内出土の同資料を施文形態を中心に分類し、道後城北遺跡群の地域性の分析を試みた〔Ⅴ－２　山之内志郎〕。分銅形土製品の新たな分析視点を提示し、道後城北群内出土品の施文様相について詳細に分析したことは評価されよう。今後は、平野内外の資料を分析し、分銅形土製品の施文レベルにおける技術論及び文様論を展開し、地域性を追究することが課題であろう。くわえて、本調査出土の分銅形土製品に付着した赤色顔料分析は〔第Ⅳ－４　本田光子〕、顔料分析にとどまらず、着色時が明らかになったことで分銅形土製品のひとつの分析方法となりえることを提示できたことは大きい。

次に、本調査では道後城北遺跡群内出土の須恵器とその分布による集落構造分析を試みた〔第Ⅴ－３　宮内慎一、山之内志郎〕。遺跡群内の須恵器については論考が少なく、また同遺跡群の古墳時代集落研究も低迷している。論考では、遺跡群内出土品(既調査出土品を主に)を資料化し、時間軸を設定した後、各時期における分布と集落の様相を概観した。須恵器の時間軸設定については、これまで部分的に試みられたが、在地品による編年案の提示は皆無に等しい。論考は、道後城北遺跡群という狭い範囲に対する編年案であったが、松山平野の古墳時代研究にとってはその意義は大きいと考える。今後、今回の方法を用い、対象地域を平野全域に広げ、松山平野の須恵器研究を進めなければならないだろう。

(3)　本調査では、土器胎土及び遺構内・土器内埋土、建築部材の分析により弥生時代後期前半における祝谷地区の植生復元を試みた。これは、道後城北遺跡群の集落構造や文化を自然環境より解明しようとする試みの一つである。

ＳＫ15、ＳＢ２出土資料を珪酸体と樹種に着目し分析を実施した〔第Ⅳ－１・２　杉山真二〕。分析の結果、調査地の植生と土器胎土の採集地に違いがあることなどが判明し、ひとつの成果が得られた。また、比較資料として、同時期（弥生時代後期前半）の平野部遺跡である釜ノ口遺跡７次調査の竪穴式住居址資料を分析した。検出品種や検出値に違いが認められた点は興味深いものであった。今後は、分析を重ね、かつ分析対象や方法を改善し、自然環境の復元を多方面から進めなければならないと考える。

以上、祝谷アイリ遺跡調査より祝谷地区及び道後城北遺跡群の集落様相を追究した。また、新しい視点や分析を提示した。祝谷地区では、平形銅剣や貝輪が出土するなど注目される遺跡が多い。本調査は今後の祝谷地区の調査及び研究の一つの指針となるものであり、調査の意義は大きい。さらに、幾つかの資料分析は各々の研究者が継続し調査、研究していこうとするものであり、今後の成果に期待するものである。

【文　献】

下　條　信　行　　1991　　「松山平野と道後城北の弥生文化」『松山大学構内遺跡』
松山市文化財調査報告書20

遺構・遺物一覧

(1)　以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2)　遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

例）縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。

(3)　遺物観察表の各記載について。

法量欄　　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製度。（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。例）砂・長（1～4）多→「1～4㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表10　竪穴式住居址一覧

竪穴(SB)	時期	平面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	主柱穴(本)	内部施設				周壁溝	備考
					高床	土壙	炉	カマド		
5	弥生中期中葉	円形	8.60×6.90×1.70				○			
2	弥生後期	円形	9.50×4.00×1.10		○		○			
7	古墳	方形	2.93×0.21×0.06						○	SB7→SB1 改築
1	古墳後期	方形	5.14×2.00×0.15					○		
3	古墳後期	方形	5.30×5.30×0.20	3(1)				○		

表11　竪穴式住居址の炉・カマド一覧

竪穴(SB)	時期	炉	カマド	位置	平面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	備考
5	弥生中期	○		遺構中央やや南寄り	楕円形	1.15×0.79×0.31	
2	弥生後期	○		西壁中央やや北寄り	楕円形	2.93×1.30×0.28	
1	古墳後期		○	北壁中央	馬蹄形	1.05×1.17×0.22	
3	古墳後期		○	北壁中央	馬蹄形	1.13×1.23×0.23	

表12　掘立柱建物址一覧

建物番号	規模(間)	桁行		梁行		床面積(㎡)	時期	備考
		実長(cm)	柱間寸法(尺)	実長(cm)	柱間寸法(尺)			
1	2×4	700.0	6・5.9・4・4.3	390.0	5・5	27.3	古墳後期	

表13　溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土(シルト)	出土遺物	備考	時期
1	D8～D9	舟底状	5.30×0.30×0.05	灰褐色	須恵器小片		古墳後期

表14　土壙一覧

土壙(SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	備考	時期
1	C9	不整楕円形	皿状	3.00×1.90×0.07	灰褐色	弥生		弥生後期
2	D6～D7	楕円形	逆台形状	1.15×0.90×0.68	灰褐色		SB5を切る	弥生
3	D6	楕円形	楕円形	1.35×1.07×0.59	灰褐色		SB5を切る	弥生後期
4	C9	不整円形	皿状	1.72×0.96×0.22	黒灰褐色	弥生	SK4→SX010	弥生後期
5	C7	楕円形	皿状	1.58×1.15×0.25	黒褐色	土師		古墳
6	D8	楕円形	レンズ状	0.50×0.30×0.40	灰茶褐色	弥生	SK6→SX02	弥生中期
7	D6	不整楕円形	レンズ状	2.29×1.74×0.64	灰茶色砂	弥生	SB5の炉址	弥生後期以前
8	D6	楕円形	逆台形状	1.05×0.90×0.50	灰褐色		SB5を切る	弥生後期
9	C8	楕円形	皿状	1.83×1.48×0.24	黒褐色	弥生、土師		古墳以降
10	C8	隅丸長方形	皿状	1.97×1.40×0.19	灰褐色	弥生、土師		古墳以降
11	C8～D8	不整楕円形	皿状	1.95×1.25×0.14	灰褐色	弥生、土師		古墳以降
13	C6	楕円形	レンズ状	3.00×2.00×0.50	茶褐色	弥生		弥生中期以降
14	C8～C9	不整楕円形	皿状	0.96×0.90×0.15	灰色			
15	D9	楕円形	レンズ状	3.50×2.80×1.00	黒灰褐色	弥生、石器		弥生後期以降

表15　SX（不明遺構）一覧

(SX)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	備考	時期
02	D7～D8	溝状	レンズ状	10.20×2.30×0.32	暗青灰色		掘り方不明	古墳後期以降
07	D9、E9	不整楕円	凹み	4.00×3.00×0.32	B層	弥生、石斧	掘り方不明	弥生中期
08	E8	不整楕円	凹み	1.30×0.35	B層	弥生	掘り方不明	弥生後期
09	C5	楕円形状	凹み	3.80×3.15×0.37	暗青灰色	弥生、石器	掘り方不明	弥生後期
010	B8・C9	不整楕円形状	レンズ状	8.20×6.20×1.20	暗青灰色	弥生	SK4上層	弥生後期

表16　ＳＢ５　出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	口径(21.2)	折り曲げの口縁部。頸部内面にゆるやかな稜をもつ。口縁端は丸い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～5) ◎		
2	甕	口径(22.4)	折り曲げの口縁部。頸部内面に稜をもつ。口縁端部ナデ凹み。	ハケ→ナデ	ヘラミガキ (ヨコ方向)	石・長(1～4) ○	黒斑	
3	甕	口径(25.0)	貼り付けの口縁部。口縁部下に断面三角形の凸帯1条。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ→ナデ	(口)ヨコナデ (胴)磨滅の為不明 (ミガキの可能性あり)	石・長(1～3) ○		
4	甕	口径(30.9)	折り曲げの口縁部。頸部の凸帯文は指頭押圧を施す。	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	(口)ヨコナデ (胴)ミガキ(ヨコ方向)	石・長(1～2) 金 ◎		
5	甕	口径(31.4)	折り曲げの口縁部。頸部の凸帯文はヘラ工具による刻目。口縁端面に刻目。	(口)ヨコナデ (胴)磨滅の為不明	(口)ヨコナデ (胴)磨滅の為不明	石・長(1～5) ◎		
6	壺	口径(17.8) 底径(7.4)	頸部内面短かく直立する。頸部の凸帯は、指頭押圧を施す。	(口)ヨコナデ (胴)ヘラミガキ(磨滅) (底)ナデ	(口)ヨコナデ (胴)ヘラミガキ(磨滅) (底)ナデ	石・長(1～4) ◎		
7	壺	底径(8.6)	平底(わずかに上がる)。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	密 ◎		
8	甕	底径(5.2)	くびれの上げ底。充填。底部外面かき取り。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～3) ◎		
9	甕	底径 7.3	上げ底。底部外面指頭圧痕。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～8) ◎	黒斑	
10	ミニチュア	底径 2.0 残高 5.0	手捏ね。上げ底。器壁薄く仕上げ丁寧。	ナデ	ナデ	石・長(1～3) ◎		

表17　ＳＢ５　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
11	石斧	ほぼ完成	緑泥片岩	11.5	4.7	1.35	138.5		19
12	男茎状	完形		7.5	2.75	1.6	60.2		19

表18　ＳＢ５　出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
13	壺	残高 6.0	前期前半。大型壺。肩部にヘラ描き文2条。	ナデ	ナデ	石・長(1～4) ○		
14	甕	口径(13.5) 残高 6.6	折り曲げの口縁部。口縁下に指頭痕。口縁端部丸い。	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	ナデ	石・長(1～5) ◎	黒斑	

ＳＢ５ 出土遺物観察表　土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
15	壺	口径(16.5) 残高 5.0	口縁端部貼り付けによる拡張。頸部指頭圧痕を施す凸帯文1条。	⑪ヨコナデ ⑩磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～3) ○		
16	壺	残高 5.0	頸部に断面三角形の貼り付け凸帯文1条。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～4) ◎		
17	高坏	底径 12.2 残高 11.0	充填技法。脚端面ナデによる拡張。面をもつ。	ナデ	磨滅の為不明	石・長(1～4) ◎		
18	不明	底径 3.5 残高 10.0	磨滅著しい。上げ底の底部になる可能性が高い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～4) ○		

表19　ＳＢ２ 出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
19	甕	口径(21.6)	折り曲げの口縁部。口縁端ナデによる拡張。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～3) ○		
20	甕	口径(18.2)	折り曲げの口縁部。口縁端面ナデ凹み。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～3) ◎	黒斑	
21	甕	底径(7.8)	くびれの上げ底。	ヨコナデ	磨滅の為不明	石・長(1～4) ○		
22	壺	口径(24.0)	口縁端部貼り付けによる拡張。端面に凹線文4条。口縁端上部面取り。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～4) ◎		
23	壺	口径(13.8)	短頸壺。口縁端面ナデ凹み。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～3) ○		
24	壺	口径(9.8)	長頸直口壺。口縁端面丸い。	ナデ	磨滅の為不明	石・長(1～4) ◎		
25	壺	口径 7.6 残高 10.0	細長頸壺。口縁端面は面取り。	磨滅の為不明 (ミガキの可能性あり)	ナデ	石・長(1～2) ◎		
26	壺	残高 5.6	頸部片。6条以上の凹線文。	ナデ→施文	ナデ	石・長(1～3) 金 ◎		
27	鉢	口径(14.2) 残高 4.2	折り曲げ口縁。口縁端部丸い。頸部内面にゆるやかな稜。	⑪ヨコナデ ⑩磨滅の為不明	⑪ヨコナデ ⑩磨滅の為不明	石・長(1～3) ◎		
28	高坏	口径(13.2) 残高 3.3	直口口縁。口縁端部面取り。口縁端外面に指頭痕。	ナデ	ナデ	石・長(1～3) ◎		
29	壺	底径(6.3) 残高 2.2	平底(わずかに上る)。	ハケ→ナデ	ナデ	石・長(1～4) ◎	黒斑	
30	壺	底径 6.8 残高 9.5	丸みのある平底。	ハケ(縦方向)	ヘラケズリ	石・長(1～3) 金 ◎		

ＳＢ２ 出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
31	高坏	口径(8.6) 残高 3.2	内傾する口縁部。口縁外面に細沈線文4条。口縁端丸い。	磨滅の為不明	ヨコナデ	石・長(1～2) ○		
32	高坏	残高 5.8	シボリ痕。柱上部に太い沈線文を2条以上。	ヘラミガキ(縦方向)	シボリ痕顕著 ヨコナデ	石・長(1～2) ◎		
33	高坏	底径(11.5)	組み合せ技法。脚端面は丸みのある「コ」字状。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～5) 雲母 ◎		
34	支脚	受部径 6.7 器　高 7.0 底　径 6.2	中実。受部が凹む。	ナデ		石・長(1～4) ◎		
35	坏蓋	口径 14.4 器高　4.7	回転ヘラ削り。	⑪ヨコナデ ㊦⅔ヘラケズリ	ヨコナデ	石・長(1～5) ◎		
36	坏蓋	口径(15.6) 器高　4.1	回転ヘラ削り。	⑪ヨコナデ ㊦⅔ヘラケズリ	⑪ヨコナデ ㊦ヨコナデ→ナデ	密 ◎		
37	坏身	口径 11.9 器高　4.5	回転ヘラ削り。⅓以上。立ち上り内傾し、端面丸くとがる。	⑪ヨコナデ ㊦⅓ヘラケズリ	⑪ヨコナデ ㊦ヨコナデ→ナデ	石・長(1～4) ◎		

表20　ＳＢ２ 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
38	石庖丁	完形		12.2	4.7	0.75	66.4		19
39	石庖丁	½		6.1	6.3	1.0	78.65		19
40	石庖丁	½	結晶片岩	6.4	4.4	0.7	44.0	未製品	19
41	石斧	¾	安山岩	11.2	5.7	4.2	453.2		19

表21　ＳＢ７ 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
42	石庖丁	完形	結晶片岩	13.0	4.0	0.5	50.15		20
43	石庖丁	完形	結晶片岩	11.7	4.1	0.6	64.2		20

表22　ＳＢ１　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
44	甕	口径(19.8) 残高 5.6	内湾して立ち上がる口縁部。口縁部上面にナデ凹みある。	(口)磨滅の為不明 (胴)ハケ6本/1cm(横方向)	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	石・長(1～2) 金 ◎		
45	甕	口径(18.4) 残高 4.6	内湾して立ち上がる口縁部。 口縁端丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～3) ○		
46	高坏	口径(19.1) 器高 17.2 底径(12.9)	中実の柱部。脚端部が上方に上る。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	砂粒 ◎		20
47	高坏	口径(13.0) 残高 4.5	坏底部外面に擬口縁。 口縁端は内傾し外反。	(口)ヨコナデ (底)½ヘラケズリ	(口)ヨコナデ (底)ナデ	密 △		20

表23　ＳＢ１　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
48	石鏃	ほぼ完形	赤色夏岩	2.7	1.45	0.23	1.1		20

表24　ＳＢ３　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
49	坏蓋	口径(14.2) 器高 4.0	回転ヘラ削り。口縁端部丸い。	(口)ヨコナデ (天)⅔ヘラケズリ	(口)ヨコナデ (天)¼ヨコナデ→ナデ	石・長(1～3) ◎		
50	坏身	残高 3.3	口縁端部を欠く。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ○		
51	甕	口径(18.0) 残高 9.0	口縁部は外傾内湾。口縁端の部ナデによりわずかに肥厚。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ(7～8本/1cm)	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	砂粒 ◎		
52	壺	口径(11.9) 残高 11.5	口縁端部、上方に貼り付けによる拡張。端面に擬凹線文4条。	(口)ヨコナデ→施文 (胴)ハケ(6本/1cm縦方向)	(口)ヨコナデ (胴)ナデ ハケ(8本/1cm)	石・長(1～3) 金 ○		
53	高坏	底径(12.1) 残高 11.3	充填技法。柱上部に7条、裾部に6条の沈線文。	縦ハケ(8～9本/1cm)	ナデ	石・長(1～3) ◎		
54	高坏	残高 5.1	器形、胎土とも異質。 差し込み式。	磨滅の為不明	ナデ	長(1～3) ウンモ ◎		
55	高坏	底径(7.9) 残高	充填技法。柱部上部に6～7条の沈線文。脚端面に、凹線文2条。。	磨滅の為不明	(柱)ケズリ (裾)ヨコナデ	石・長(1～4) ◎		

表25　ＳＫ15 最下部他出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
56	壺	口径 12.0 器高 26.2 底径 7.2	完形。胴部中位に焼成後穿孔。頸部に木口による「ノ」字状文。	口ヨコナデ 胴ヘラミガキ(磨滅)	ナデ	石・長(1～5) 多含 ◎	黒斑	21
57	壺	口径(11.4) 器高 26.6 底径 5.4	口頸部を3分の2欠く。胴部下部に焼成後穿孔の可能性が一部で看取された。	口縦ハケ→ヨコナデ 胴縦ハケ	口ナデ 胴強くナデ上げ	石・長(1～2) ◎	黒斑	21
58	壺	口径 11.2 器高 30.0 底径 5.8	口頸部を一部欠く。肩部と胴部下位に焼成後穿孔2ケあり。頸部に凸帯文。	口縦ハケ(6本/1cm) 胴縦ハケ	口横ハケ(6本/1cm) 頸ナデ 胴ナデ	石・長(1～2) 金 ◎	黒斑	21
59	壺	口径 10.8 器高 31.9 底径 5.4	完形。胴部下位に焼成後穿孔1ケあり。口縁部、肩部に「ノ」字文2段。	口ヨコナデ 頸縦ハケ 胴縦ハケ(5本/1cm)	口ヨコナデ 頸ナデ 胴ナデ	石・長(1～4) ◎	黒斑	21 27
60	壺	底径 8.2 残高 26.0	口頸部を欠く。頸部に沈線文3条と木口による「ノ」字状文。	胴上 横ハケ 胴下 縦ハケ	胴上 板カキ→ナデ 胴下 ナデ	石・長(1～4) 多含 ◎	黒斑	22
61	壺	口径 14.1 器高 30.0 底径 8.2	頸部にヘラ状工具の押圧による「ノ」字状文2段。	口ヨコナデ 胴板ナデ	口ヨコナデ 胴上 ナデ 胴中 ケズリ	石・長(1～6) 多含 ◎	黒斑	22
62	壺	口径 8.1 器高 14.3 底径 3.1	口頸部を約2分の1欠く。底部小さい平底。頸部にヘラ状工具による押圧文。	口ヨコナデ 胴ハケ→ナデ消し	口ヨコナデ 胴ハケ	石・長(1～7) ◎	黒斑	22
63	壺	口径 20.5 残高 16.5	口頸部完存。口縁部：横沈線と波状文(櫛2本)。頸部：木口押圧	口ハケ→施文 頸縦ハケ 胴縦ハケ→ヘラミガキ	口ハケ→ヨコナデ 頸横ハケ(8本/1cm) 胴ナデ上げ	石・長(1～5) 金 ◎		22 27

表26　ＳＫ15 Ⅲ 層出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
64	甕	口径(24.7) 残高 18.8	口縁端部「コ」字状。端面ナデ凹み。	口ヨコナデ 胴ハケ	口ヨコナデ 胴ハケ	石・長(1～4) 金 ○		23
65	甕	口径(24.4) 残高 24.9	口縁端部丸みのある「コ」字状。 頸部下ヘラ工具による押圧文。	口ヨコナデ 胴ハケ(8本/1cm)	口ヨコナデ 胴磨滅の為明確でないがハケ・一部ケズリ	石・長(1～2) ○	煤	23
66	甕	口径(22.6) 残高 7.6	肩部の張り強い。 口縁端部ナデ凹み。	口ヨコナデ 胴ナデ	口ヨコナデ 胴ナデ	石・長(1～5) ◎		
67	甕	口径(25.2) 残高 9.0	口縁端部ナデ凹み。 頸部下外面「ノ」字状文。	口ヨコナデ 胴ナデ	口ヨコナデ 胴磨滅の為不明	石・長(1～4) ◎		
68	甕	口径(14.8) 残高 9.0	肩部の張り弱い。口縁端部は丸みのある「コ」字状。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～5) ◎		
69	甕	口径 16.6 残高 4.5	口縁端部丸みのある「コ」字状。	ヨコナデ	口ヨコナデ 胴ケズリ→ナデ	石・長(1～4) ◎	黒斑	
70	甕	口径(17.0) 器高 28.6 底径 4.2	小さい上げ底。口縁部やや厚い。 口縁端部丸みのある「コ」字状。	口ヨコナデ 胴ハケ(縦方向) 底ナデ	口ヨコナデ 胴ハケ	石・長(1～3) 多含 ◎		23

ＳＫ15 Ⅲ層出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
71	甕	口径(19.2) 残高 7.5	口縁端部下方に拡張。口縁端面擬凹線文2条。頸部下「ノ」字状文。	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	(口)ヨコナデ (胴)ケズリ→ナデ	石・長(1～3) 金 ○		
72	甕	口径(18.3) 残高 6.4	口縁部内湾する。口縁部やや厚い。端面ナデ凹み。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ	(口)ナデ (胴)ナデ(1部ケズリ)	石・長(1～6) ◎		
73	甕	口径(19.3) 残高 5.9	頸部強いナデによる凹み。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ	(口)磨滅の為不明 (胴)ハケ	石・長(1～3) 金 ◎		
74	甕	口径(17.2) 残高 6.0	口縁端部ナデにより面をもつ。	(口)ヨコナデ (胴)磨滅の為不明	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	石・長(1～7) 金 ◎		
75	甕	口径(14.3) 残高 8.5	肩部が強く張る。肩部以下をケズる。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ	(口)ヨコナデ (胴)ハケ・ケズリ	石・長(1～5) ○	黒斑	
76	甕	口径 19.5 器高 24.8 底径 5.0	口縁部やや内湾。 口縁端部、下方にやや突出。 わずかに上げ底。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ→ナデ	(口)ヨコナデ (胴上)板ナデ (胴下)ナデ	石・長(1～4) 金 ◎	黒斑 煤	23
77	甕	口径(17.8) 残高 13.0	肩部はヨコ方向の刷毛目調整。口縁部やや短かい。口縁端部丸みのある「コ」字状。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ(5～6本/1cm)	(口)ヨコナデ (胴)ケズリ	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	
78	甕	底径 5.7 残高 16.2	器壁薄い。平底(わずかに上る)。	(胴)ハケ(8～9本/1cm) (底)ナデ	(胴上)ケズリ→ナデ (胴下)ケズリ (底)ナデ	石・長(1～6) 金 ◎	黒斑 煤	
79	甕	底径 6.3 残高 15.5	くびれの上げ底。	(胴)板ナデ (底)ナデ	(胴)板ナデ (底)ナデ	石・長(1～5) ◎	黒斑	
80	甕	口径 12.8 器高 17.6 底径 5.3	上げ底。口縁端部やや下端で突出し、丸い。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ→ナデ (底)磨滅の為不明	(口)ヨコナデ (胴)ケズリ→ナデ (底)ナデ	石・長(1～2) ◎	黒斑	23
81	甕	口径(12.3) 残高 3.5	肩部が強く張る。口縁端部丸い。	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	(口)ヨコナデ (胴)ケズリ	密(石・長1) ◎		
82	甕	底径 4.6 残高 11.2	くびれの上げ底。器壁がやや薄い。	(胴)ハケ (底)ナデ	ナデ上げ	石・長(1～5) ○	黒斑	
83	壺	口径 22.0 残高 16.3	頸部：擬凹線文8条、ヘラによる「ノ」字文。 口縁部：櫛4条の山形文、横沈5条。	(口)ヨコナデ (頸)ハケ(5本/1cm) (ヵ)ハケ	(口)ヨコナデ (頸)ハケ (ヵ)ハケ	石・長(1～3) ◎		
84	壺	口径(16.6) 残高 4.8	口縁外面に擬凹線文6条。 口縁端面に擬凹線文2条。	(口)ヨコナデ (頸)ヨコナデ	磨滅の為不明	石・長(1～5) ○		27
85	壺	残高 9.7	頸部に断面三角形の凸帯文1本。頸部下に「ノ」字状文。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～5) 金 ○		
86	壺	残高 20.0	複合口縁壺胴部片。頸部に凹線文7条と木口による「ノ」字状文。	(頸)ハケ(4本/1cm) (ヵ)ハケ (胴)ハケ→ミガキ	ナデ上げ顕著	石・長(1～6) ◎	黒斑	27
87	壺	口径(12.7) 残高 13.5	口縁端部強いヨコナデ。端面ナデ凹み。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ(5本/1cm)	(口)ヨコナデ (胴)ナデ(ケズリか)	石・長(1～5) ○		

ＳＫ15 Ⅲ層出土遺物観察表　土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
88	壺	口径(16.4) 残高 10.5	口縁端部はナデにより、やや下端部が突出する。	口ヨコナデ 胴ナデ	口ヨコナデ 胴ナデ	石・長(1～3) ○		
89	壺	口径(16.2) 残高 3.4	口縁端部強いヨコナデ。口縁端面ナデ凹み。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～4) ○		
90	壺	口径(14.6) 残高 4.4	口縁端部はマメツしているが、わずかにナデ凹みする。	ハケ→ナデ	ナデ	石・長(1～5) ◎		
91	壺	口径(9.8) 器高 23.0 底径(5.5)	小さい平底。口縁端部「コ」字状。2分の1残存。	口ヨコナデ 胴ハケ(8本/1cm縦方向)	ナデ	石・長(1～4) 金 ◎		24
92	壺	底径 5.0 残高 22.5	口縁部と胴部2分の1欠損。 頸部の凸帯文にはヘラによる刻目。	頸ナデ 胴ハケ→ナデ 底ナデ	頸ナデ 胴ハケ→ナデ 底ナデ	石・長(1～9) 多含 ◎		24
93	壺	底径 5.8 残高 27.2	丸みのある平底。	磨滅の為不明	ハケ(磨滅)	石・長(1～9) 多含 ○		24
94	壺	残高 13.1	やや細い長頸壺。ヘラ工具の押圧による「ノ」字状文。	頸縦ハケ→ナデ 胴縦ハケ→ミガキ	頸ナデ 胴ナデ	石・長(1～5) 金 ◎		24
95	壺	底径 7.2 残高 8.2	突出ぎみで、丸い平底。	胴ヘラミガキ 底ナデ	ナデ	石・長(1～4) 金 ◎	黒斑	
96	壺	底径 5.2 残高 6.7	丸みのある平底。	磨滅の為不明	ケズリ(磨滅)	石・長(1～7) 多含 ○		
97	壺	底径 7.7 残高 11.4	上げ底。	胴ハケ(縦方向) 底ナデ	ナデ	石・長(1～3) ○		
98	壺	底径(5.2) 残高 8.7	上げ底。	ハケ(5本/1cm、縦方向)	磨滅の為不明	石・長(1～5) ○	黒斑	
99	高坏	口径(25.0) 残高 4.0	口縁端部丸い。	ハケ→ナデ	ミガキ(縦方向)	石・長(1～5) ◎		
100	高坏	残高 6.2	充塡技法が？ 器壁厚い。	ハケ(7本/1cm、縦方向)		石・長(1～3) 金 ○		
101	高坏	底径 15.6 残高 11.8	充塡技法。シボリ。 脚端面擬凹線文2条。 焼成前穿孔4ケ。	縦ハケ(8本/1cm)	杯ナデ 裾ハケ(横方向)	石・長(1～4) ○		25
102	高坏	底径(12.8) 残高 15.0	充塡技法。脚端面丸みのある「コ」字状。	磨滅の為不明 (ミガキの可能性あり)	杯ナデ 裾ヨコナデ	石・長(1～5) ○		
103	高坏	残高 11.8	充塡技法。	ヘラミガキ(縦方向)	ナデ	石・長(1～4) ○		
104	高坏	底径(11.9) 残高 9.4	充塡技法。脚端面は拡張し、擬凹線文2条施す。	ハケ(6本/1cm、縦ハケ)	杯ナデ 裾ヨコナデ	石・長(1～4) ○		

ＳＫ15 III層出土遺物観察表　土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土焼成	備考	図版
105	高坏	底径(11.0) 残高 6.5	柱上部に擬凹線文2条以上。 裾部に沈線文3条。 脚端面に擬凹線文2条。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～3) 金 ◎		27
106	高坏	底径 11.4 残高 2.0	充塡技法。 脚端面ナデによる面取り。	ハケ(5～7本/1cm、縦方向)	ハケ(5本/1cm)	石・長(1～5) ◎		
107	高坏	底径 8.5 残高 6.8	小型品。器壁やや薄い。 脚端面丸い。	磨滅の為不明	ヨコナデ	石・長(1～4) ○		
108	鉢	口径(35.2) 器高 21.8 底径 8.6	やや突出ぎみの平底。 口縁端面ナデ凹み。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ(5本/1cm) (胴下)ハケ→ヘラミガキ	(口)ハケ→ナデ (胴)磨滅の為不明	石・長(1～3) ◎	黒斑	25
109	台付鉢	底径 7.9 残高 5.0	上げ底。組み合せ式。	磨滅の為不明	ナデ	砂粒(石・長1) 金 ◎	黒斑	
110	台付鉢	底径 7.6 残高 4.0	器壁厚い。平底。	ナデ (指頭圧痕顕著)		石・長(1～4) ◎		
111	ミニチュア	底径 2.4 残高 2.0	甕形土器か。くびれの上げ底。	ナデ	ナデ	石・長(1～2) ◎		

表27　ＳＫ15 III層出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
112	石斧	刃部欠損	結晶片岩	12.0	4.5	2.1	234.3		25
113	石錘	完形	安山岩	8.0	5.5	4.7	245.5		25
114	磨き石	⅔	安山岩	9.2	7.4	5.5	554.0		25

表28　ＳＫ15 II層出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土焼成	備考	図版
115	甕	口径(17.4) 残高 2.4	口縁部は、わずかに内湾して立ち上る。口縁端面は面取り。	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒(石・長1) 金 ○		
116	甕	口径(21.0) 残高 3.0	器壁やや薄い。口縁端部は「コ」字状。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～3) ◎		
117	甕	底径 6.0 残高 2.8	くびれの平底。やや厚い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～2) 金 ◎		
118	甕	底径 5.4 残高 2.0	高台状の上げ底。	ナデ	ナデ	密 ◎		
119	壺	口径(24.8) 残高 6.8	剥離著しい。口縁端面にヘラによる山形文か。指頭押圧による凸帯文1本。	(口)ヨコナデ (頸)磨滅の為不明	ハケ→ヨコナデ	石・長(1～3) ○		

ＳＫ15　Ⅱ 層出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
120	壺	口径(12.7) 残高 10.6	口縁端部ナデにより、やや下方に突出をする。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ	(口)ヨコナデ (胴)ハケ	密（石・長1） 金 ○		
121	壺	口径(10.8) 残高 9.6	口縁端部わずかに拡張し擬凹線文2条。 頸部は木口押圧による「ノ」字状文	(口)ヨコナデ (胴)ハケ（4本/1cm縦方向）	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	石・長(1～2) ◎		
122	壺	口径 9.2 残高 5.2	口縁端部強いヨコナデ。	(口)ヨコナデ (頸)ハケ→ナデ	ナデ	密（長1） ◎		
123	壺	口径(18.4) 残高 8.4	頸部ヘラ描沈線文4～5条。 刺突文。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～3) ○		
124	壺	口径 18.0 残高 14.0	口縁端面と肩部に竹管文。 口縁端部上下にやや拡張。	(口)ハケ→施文 (頸・胴)ハケ（6本/1cm縦方向）	(口)ハケ→ヨコナデ (頸・胴)ハケ（6本/1cm）	石・長(1～4) ◎		26 27
125	壺	口径(19.0) 残高 1.8	口縁端面にヘラ描山形文。	ヨコナデ	磨滅の為不明	石・長(1～2) ○		
126	壺	残高 10.0	頸部に凸帯文1本。木口による「ノ」字状文。	ハケ（6本/1cm縦方向）	ハケ→ナデ	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	27
127	壺	底径 6.5 残高 12.2	丸みのある平底（わずかに上る）。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～5) 多含 ◎	黒斑	
128	高坏	口径(19.3) 残高 2.5	外反口縁。屈接部の擬口縁看取。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～3) ◎		
129	高坏	口径(20.8) 残高 2.5	屈接部の擬口縁看取。	ハケ	磨滅の為不明	石・長(1～5) ◎		
130	高坏	口径(25.6) 残高 3.7	大きく外反する口縁部。	ハケ	磨滅の為不明	石・長(1～6) ◎		
131	高坏	口径(16.0) 残高 5.2	屈接部に弱い稜あり。 口縁端部丸い。	磨滅の為不明	ハケ→ナデ	石・長(1～4) 金 ◎		
132	高坏	口径(20.0) 残高 4.5	口縁端部丸い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～2) 金 ○		
133	高坏	底径 15.0 残高 15.0	充塡技法。脚端部ナデ凹み。 脚端部内面強いヨコナデ。	磨滅の為明確でないが縦方向のハケかヘラミガキの可能性あり。	ナデ	石・長(1～7) 多含 ◎	黒斑	
134	高坏	残高 10.4	充塡技法。シボリ痕。	ハケ（10本/1cm縦方向）	磨滅の為不明	石・長(1～3) ◎		
135	高坏	残高 8.3	充塡技法。組み合せ式。 接合部の擬口縁看取。円孔1ケ以上。	ハケ（縦方向）	ナデ	石・長(1～2) 金 ◎		
136	高坏	底径 11.5 残高 12.6	焼成前円孔（直1.4cm）2ケ。柱部中実だが、坏部底部は充塡技法か。	磨滅の為不明	ナデ	石・長(1～6) 金 ◎		26

ＳＫ15 II層出土遺物観察表　土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
137	高坏	底径 14.7 残高 8.0	焼成前円孔(直径1.4cm)6ケ。 充塡技法の可能性あり。	ハケ(5本/1cm、縦方向)	ハケ(5～6本/1cm)	密(石・長1) 金 ◎		
138	高坏	底径(10.6) 残高 7.0	器壁が厚い。脚端部内面わずかに突出する。端部拡張。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～4) ○		
139	高坏	底径(9.4) 残高 5.1	脚端部ナデ凹み。	ハケ(6本/1cm)	ハケ→ナデ	石・長(1～2) 金 ◎		
140	高坏	底径 9.7 残高 7.0	柱上部円孔4ケ、裾部円孔8ケ。焼成前穿孔で直径5㎜前後。	ハケ(6本/1cm、縦方向)	(底)ハケ (柱)ハケ→ヨコナデ	石・長(1～4) ◎		26
141	高坏	残高 3.8	小型品。細沈様文12条。 矢羽根状文と思われるタテ沈線文2条以上。	ヘラミガキ→施文	ナデ	密 ◎		
142	鉢	底径 5.6 残高 6.0	くびれの上げ底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～6) ◎		
143	鉢	底径(6.3) 残高 5.9	くびれの上げ底。	ナデ	ナデ	石・長(1～2) ◎		
144	器台	口径(29.7)	器台ないしは壺と考えられる。 口縁端面に擬凹線文2条。	ハケ(8本/1cm)	ナデ	石・長(1～3) ◎		
145	器台	口径(21.2)	櫛による(4本歯)細かい波状文。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～4) 金 ◎		27
146	支脚	底径 7.6 器高 7.1	器壁厚い。中空。受部2分の1欠損。受部傾斜する。	ナデ	ナデ	石・長(1～3) ○		26
147	ミニチュア	底径 3.5 残高 2.5	甕形土器か。くびれの上げ底。	ナデ	磨滅の為不明	石・長(1～2) 金 ◎		
148	不明	底径 3.1 器高 5.8	器種器形不明。6～7条の刻みを2組もつ。			石・長(1～2) ◎		26

表29　ＳＫ４ 出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
149	甕	口径(18.5)	口縁端部はナデにより下方にわずかに拡張する。	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	石・長 金(1～4) ◎		
150	甕	口径(16.5)	口縁端面はナデにより下方にわずかに拡張する。	(口)ヨコナデ (頸)ヨコナデ	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	石・長 金(1～3) ◎		
151	甕	口径(24.3)	上方に拡張された口縁端面には、4条の擬凹線文が施される。	(口)ヨコナデ→施文 (頸)ナデ	(口)ナデ	長・金(1～2) ○	黒斑	

ＳＫ４ 出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
152	甕	底径(5.7)	わずかに上がる上げ底。	胴ハケ 胴下 指頭圧痕 底ナデ	胴下 ヨコナデ	長(1～2) ○		
153	壺	口径 16.8 器高 33.9 底径 7.6	わずかに拡張された口縁端面には、2条の擬凹線文が施される。	拡ヨコナデ→施文 頸ヨコナデ 胴ハケ	口ヨコナデ 胴ナデ 底ヘラケズリ	石・長 金(1～6) ◎		28
154	壺	口径(10.0)	外反する口縁部は端部が先細りする。	口ヨコナデ 胴ハケ→ナデ	口ヨコナデ 胴ヘラケズリ	石・長 金(1～4) ◎		28
155	壺	口径(10.5)	口縁拡張部は弓状にそる。口縁端部は「コ」字状を呈する。	磨滅のため不明	口ヨコナデ 頸ナデ	石・長 金(1～3) ◎		28
156	壺	口径(16.7)	外反する口縁部をもつ。口縁端面はナデによる凹みをもつ。	口ナデ	口ナデ	石・長 金(1～4) ◎		
157	壺	口径 8.2 器高 8.5 底径 3.7	口縁端部はナデにより凹みをもつ。頸部には円孔2ケ2組を看取する。	口ナデ 頸ナデ 胴磨滅のため調整不明	口ヨコナデ 胴下 ナデ 胴下 指頭圧痕	石・長(1～4) 金 ◎		28
158	高坏	口径 13.7 器高 9.5 底径 7.6	坏部はゆるやかに立ち上り、口縁端部は丸い。	上ミガキ 脚ミガキ	上ミガキ 脚ナデ	石・長(1～8) 金 ◎		28

表30　ＳＸ010 出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
159	甕	口径 11.8 器高 13.7 底径 5.0	くびれの上げ底。稜をもって折れ曲がる口縁部。	口ヨコナデ 胴ハケ 胴下 指頭圧痕→ナデ	口ヨコナデ 胴ヘラケズリ	石・長(1～5) ○	黒斑	29
160	甕	底径 4.0	小さいくびれの上げ底。	胴下 磨滅のため不明 底ヨコナデ	胴下 ハケ 底ナデ	石・長(1～4) ◎		
161	甕	底径 6.4	小さいくびれの上げ底。内面は凹凸が著しい。	胴下 ハケ 底ナデ	胴下 ハケ 指頭圧痕	石・長(1～5) ○		
162	壺	口径 5.4 器高 26.5 底径 2.5	口縁端面は上方にわずかに拡張し、ナデ凹む。	口ヨコナデ 胴上 ハケ 胴下 ヘラミガキ	口ヨコナデ 胴上 ハケ 胴下 ケズリ	石・長 金・多(1～6) ○	黒斑	29
163	壺	口径(30.4)	口縁端面やや拡張。端面に3条の擬凹線文。	口ヨコナデ、ハケ	口ハケ	砂(石・長) (1～3) ◎		
164	壺	口径(13.0)	口縁端部は「コ」字状を呈する。	口ヨコナデ	磨滅のため不明	石・長(1～5) ○		
165	甕	口径(11.2)	口縁端面はナデによりわずかに拡張される。	口ヨコナデ	口ハケ	石・長 金(1～4) ○		
166	壺	残高 3.4	口縁部外面は櫛(4本歯)による斜格子目文を施す。	口ナデ	口ナデ	石・長 金(1～4) ○		

ＳＸ010 出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
167	壺	残高 4.8	胴下半に最大径がある。	胴上ミガキ 胴下ハケ	ナデ	石・長 金(1～5) ◎		
168	壺	底径 5.1	扁平の体部にわずかに突出する平底をもつ。	胴ハケ→ナデ	胴ナデ	石・長(1～5) ◎	黒斑	
169	壺	残高 22.0	頸部下半に沈線文を5条施す。	頸ナデ	胴ナデ	石・長(1～5) ◎		
170	壺	底径 5.8	肩部に沈線文1条とヘラ状工具による「ノ」字状文を施す。	胴ハケ	胴上ハケ 胴下ハケ→ナデ	石・長(1～4) ○		
171	壺	底径(5.4)	丸みがあり、突出する平底をもつ。	胴下ハケ	胴下ハケ 底ナデ	石・長 金(1～4) ○	黒斑	
172	鉢	口径 13.5 器高 10.7 底径 5.8	くびれの上げ底。	口ヨコナデ 胴ハケ 底ヨコナデ	口ヨコナデ 胴ナデ	石・長 金(1～3) ○		29
173	鉢	底径 4.2	くびれの上げ底。	底ヨコナデ	胴下ハケ 底ナデ	石・長(1～6) ○	黒斑	
174	高坏	口径(8.3) 器高 11.2 底径 4.2	坏部はゆるやかに立ち上り、口縁端部は丸い。	坏上ナデ 坏底ナデ 脚ヨコナデ	坏ナデ 脚底ヨコナデ	石・長(1～6) ○	黒斑	29
175	高坏	底径(14.2)	脚端面はナデによる凹み。	脚ハケ 裾ヨコナデ	脚ハケ 裾ヨコナデ	石・長(1～5) ○		
176	高坏	底径 8.1	裾下部に7ケの円孔(4mm大)を擬凹線文4条。	脚ヘラミガキ 裾ナデ	脚ナデ	密 ◎	黒斑	
177	ジョッキ形	底径(12.2)	わずかな上げ底。	胴下ハケ→ミガキ 底ナデ	胴下ミガキ 底ナデ	石・長(1～3) ◎	黒斑	
178	ミニチュア	口径(6.2) 器高 5.8 底径 3.2	厚い上げ底。やや拡張された口縁端部は水平。	口ヨコナデ 胴ナデ 底ナデ	口ヨコナデ 胴ナデ	石・長(1～3) ◎	黒斑	

表31　ＳＫ４ 関連品出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
179	甕	口径 15.6 器高 24.3 底径 5.6	口縁端部はナデにより内面に小さく突出する。	口ヨコナデ 胴上タテハケ	口ヨコナデ	石・長 金(1～4) ○	煤	
180	鉢	口径(19.3)	やや内湾する口縁部。口縁端面はナデにより凹みをもつ。	口ヨコナデ	口ヨコナデ	長(1～2) ○	黒斑	
181	鉢	口径(6.8)	先細りし、直立する口縁部をもつ。	口ナデ→ヨコナデ 胴ハケ	ナデ	石・長 金(1～4) ○	黒斑	

表32　ＳＸ010 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残　存	材　　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
182		ほぼ完形	安　山　岩	12.0	7.35	5.8	831.2		29

表33　ＳＫ13 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形 態・施 文	調　整		胎　土 焼　成	備　考	図版
				外　　面	内　　面			
183	甕	口径(25.0) 残高 5.0	仕上げ丁寧。折り曲げの口縁。頸部内面ゆるやかな稜。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ→ミガキ	(口)ヨコナデ (胴)ヘラミガキ	石・長(1～4) 金 ◎		
184	甕	口径(23.0) 残高 3.0	折り曲げの口縁部。頸部内面にゆるやかな稜。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	密(石・長1) ○		
185	甕	口径(19.4) 残高 4.0	折り曲げの口縁部。頸部内面に稜。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～2) ○		
186	甕	口径(22.0) 残高 2.1	口縁端下部を貼り付けにより拡張。口縁端面に擬凹線文2条。	ヨコナデ	ヨコナデ	密(石・長1) ◎		
187	甕	底径 6.5 残高 14.5	わずかにくびれる上げ底。	ヘラミガキ(縦方向)	ヘラケズリ	石・長(1～4) ◎	黒　斑	
188	甕	底径 6.4 残高 13.2	くびれの上げ底。底部外面はナデ。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～5) 多含 ◎		
189	壺	口径(12.1) 器高 26.3 底径 5.5	丸みのある平底。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ (底)ナデ	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	石・長(1～5) 金 ◎		30
190	壺	口径(19.7) 残高 1.9	口縁端部ナデによる拡張。	ヨコナデ	磨滅の為不明	石・長(1～3) 金 ◎		
191	高坏	口径(9.1) 残高 3.7	内湾する口縁部。口縁端部は欠損するが、拡張はしないものと思われる。	ナデ	ナデ	石・長(1～2) ◎		
192	鉢	口径(13.8) 残高 6.0	折り曲げの口縁部。ヘラ工具による「ノ」字状文。口縁端面ナデ。	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	石・長(1～3) ◎		
193	鉢	口径(14.6) 残高 3.9	折り曲げの口縁。端面ナデによる拡張。頸部内面稜。	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	(口)ヨコナデ (胴)ケズリ	石・長(1～3) ○		
194	ジョッキ形	口径(13.8) 残高 5.5	直口口縁。口縁端面「コ」字状。口縁外面、ナデによる凹み。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ→ヘラミガキ	(口)ヨコナデ (胴)ハケ→ナデ	密(石・長1) 金 ◎		30
195	不明	底径(6.3) 残高 6.0	上げ底。底部外面ナデ。	ナデ	磨滅の為不明(ケズリか)	石・長(1～5) ◎		
196	不明	底径 4.2 残高 3.0	小型品の底部。くびれの上げ底。	ミガキか？	板状の工具痕あり	石・長(1～2) ◎		

表34　ＳＫ13 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残　存	材　質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
197	石　鏃	ほぼ完形	安　山　岩	3.1	1.3	0.48	1.8		30

表35　ＳＫ１ 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土焼成	備考	図版
				外　面	内　面			
198	壺	底径 8.8 残高 7.5	くびれの平底。	(胴)ハケ(6本/1cm、縦方向) (底)ナデ	ナデ	石・長(1～5) ◎		
199	壺	底径(6.4) 残高 2.1	厚めの平底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～3) 金 ◎		
200	壺	底径(8.4) 残高 2.0	平底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～3) ◎		
201	高坏	残高 10.2	柱部中位がわずかにふくらむ。充塡技法か。	磨滅の為不明	ナデ	石・長(1～5) ○		

表36　ＳＫ３ 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土焼成	備考	図版
				外　面	内　面			
202	鉢	口径(33.0) 残高 5.4	折り曲げの口縁。口縁端面ナデ凹む。頸部内面にゆるやかな稜。	ナデ	磨滅の為不明	石・長(1～4) 金 ◎		
203	壺	口径(10.0) 残高 4.4	ナデによる口縁端部拡張。端面に擬凹線文1条以上。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～4) ◎		

表37　ＳＫ６ 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土焼成	備考	図版
				外　面	内　面			
204	甕	口径(21.4) 残高 8.5	折り曲げの口縁。口縁端部丸い。口縁上面強いナデ(やや凹む)。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ(11本/1cm、縦方向)	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	石・長(1～3) ◎		
205	甕	口径(21.6) 残高 4.7	折り曲げの口縁。口縁端面丸みのある「コ」字状。	(口)ヨコナデ (胴)磨滅の為不明	(口)ヨコナデ (胴)磨滅の為不明	石・長(1～2) ◎		
206	壺	口径(23.0) 残高 7.5	口縁は貼り付けによる垂下。頸部凸帯文2本以上。円形浮文2ケ1組で2組以上。	ナデ	(口)ヘラミガキ→ナデ (頸)ヘラミガキ	石・長(1～5) ◎		
207	甕	底径(7.4) 残高 6.0	厚い上げ底。	ナデ	磨滅の為不明	石・長(1～3) ○		
208	甕	底径(5.4) 残高 2.5	上げ底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～4) ◎		

表38　ＳＸ07 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
209	甕	口径(13.6) 残高 3.0	貼り付け口縁。口縁端面にヘラ工具による刻目。	⑪ヨコナデ ㊐ナデ	ナデ	石・長(1～4) 多含 ○		
210	甕	口径(21.7) 残高 3.2	折り曲げの口縁。口縁の折り曲げ強い。端面は丸みのある「コ」字状。	⑪ヨコナデ ㊐ハケ	⑪ヨコナデ ㊐ナデかミガキ(横方向)	密(石・長1) 金 ○		
211	甕	口径(21.7) 残高 5.5	貼り付けによる口縁の可能性あり。頸部に指頭押圧による凸帯文1条。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	密(石・長1) ◎		
212	甕	口径(24.0) 残高 3.4	貼り付けによる口縁の可能性あり。頸部に指頭押圧による凸帯文1条。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～4) ○		
213	甕	口径(31.2) 残高 5.3	折り曲げによる口縁の可能性あり。頸部に指頭押圧による凸帯文1条。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～3) ○		
214	甑	底径(6.4) 残高 3.5	甕形土器焼成後の穿孔。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～3) ◎		
215	壺	口径(13.2) 残高 4.2	貼り付けによる口縁端部拡張。	ヨコナデ (一部ハケあり)	ミガキ(横方向)	石・長(1～3) ◎		
216	壺	口径(13.8) 残高 3.0	口縁下端部拡張。	磨滅の為不明	磨滅の為不明 (ミガキの可能性あり)	石・長(1～2) ○		
217	壺	口径(17.0) 残高 5.5	口縁端下方に貼り付けによる拡張。頸部凸帯文1本以上。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～4) ◎		
218	壺	口径(35.0)	口縁端下方に貼り付けによる拡張。端面にヘラ工具による山形文。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～5) 金 ○		
219	壺	底径(9.5) 残高 5.2	上げ底。	ヘラミガキ(横方向)	ナデ	石・長(1～5) ◎		
220	壺	底径(10.0) 残高 6.8	わずかに上げ底か。	ヘラミガキ(縦方向)	ナデ	石・長(1～4) ◎		
221	壺	底径(7.3) 残高 7.5	丸みのある平底。器壁厚い。	㊐ハケ ㊏磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～5) ○		
222	鉢	口径(14.5) 残高 4.0	折り曲げ口縁。頸部内面の稜弱い。	⑪ヨコナデ ㊐ナデ(一部ハケあり)	⑪ヨコナデ ㊐ナデ	石・長(1～3) ◎		
223	高坏	口径(22.9) 残高 2.6	口縁端部拡張。端面に凹形浮文の欠落痕あり。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～4) ◎		
224	不明	底径(17.9) 残高 2.3	ジョッキ形土器の底部片か。 三角形の貫通孔3ケ以上。	ヨコナデ	ナデ	石・長(1～2) ◎	黒斑	

表39　ＳＸ07 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
225	石斧	½	頁岩性砂岩	10.4	3.9	1.8	131.1		

表40　ＳＸ08 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
226	甕	口径(22.8) 残高 8.0	折り曲げ口縁。上方に湾曲ぎみ。端面丸みのある「コ」字状。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～7) ◎		
227	甕	口径(23.0) 残高 7.0	折り曲げ口縁。端面は丸みのある「コ」字状。	口ヨコナデ 胴ヘラミガキ(縦方向)	口ヨコナデ 胴ナデ	石・長(1～5) ○		
228	甕	底径(7.0) 残高 5.2	くびれの上げ底。	胴磨滅の為不明 底ヨコナデ	磨滅の為不明	密(石・長1) ◎		
229	甕	底径 7.1 残高 5.4	くびれの上げ底。	磨滅の為不明	ナデ	石・長(1～4) ◎		
230	壺	底径(7.2) 残高 5.7	上げ底。	ナデ	磨滅の為不明	石・長(1～4) ◎		
231	甕	口径(19.6) 残高 15.5	内湾する口縁部。頸部内面に明瞭な稜。	口ヨコナデ 胴磨滅の為不明	口ヨコナデ 胴ナデ	石・長(1～3) ◎		
232	甕	口径(21.9) 残高 4.4	折り曲げ口縁。口縁端部擬凹線文2条。	口ヨコナデ 胴ハケ	口ヨコナデ 胴カキ取り	密(石・長1) ◎		
233	甕	底径(6.0) 残高 3.8	鉢形土器の可能性もある。上げ底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～4) ◎		

表41　ＳＸ09 出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
234	甕	口径(23.0) 残高 4.5	折り曲げ口縁。端面小さなナデ凹み。	口ヨコナデ 胴ナデ	口ヨコナデ 胴板ナデ	石・長(2～3) ○		
235	甕	口径(14.6) 残高 3.5	口縁部わずかに拡張。端面ナデ凹み	ヨコナデ	口ヨコナデ 胴ケズリ	石・長(1～4) 金 ○		
236	壺	口径(16.5) 残高 2.5	口縁端面に擬凹線文１条以上。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～3) ○		
237	壺	口径(24.2) 残高 4.0	口縁端面拡張し、端面にヘラ状工具による１条の波状文。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～7) ◎		30
238	壺	口径(14.7) 残高 2.0	口縁端面ナデ凹み。2ケ1組の円形浮文は、浮文上を竹管にて押圧。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～6) ◎		30
239	壺	口径(32.0)	口縁端面は擬凹線文３条。円形浮文２ケ１組。浮文上に刺突文を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～2) ◎	赤色顔料	30
240	壺	口径(13.5) 残高 5.1	口縁外面に5～6条の沈線文。２条の山形文。	ヨコナデ	磨滅の為不明	石・長(1～4) ◎		30

ＳＸ09 出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
241	壺	残高 6.0	頸部に「コ」字状の凸帯文。凸帯上に刻目。凸帯貼り付け後、凸帯下に「ノ」字状文。	ハケ(5本/1cm) (一部ナデ)	ナデ	石・長(1～5) ○		
242	鉢	口径(18.3) 残高 4.2	折り曲げ口縁。口縁端面はナデ凹み。頸部内面はゆるやかな稜。	㊀ハケ→ヨコナデ ㊁ハケ(11本/1cm)	磨滅の為不明	石・長(1～4) ◎		
243	鉢	口径(11.8) 残高 5.0	折り曲げ口縁。頸部内面に稜。	㊀ヨコナデ ㊁磨滅の為不明	㊀ヨコナデ ㊁ナデ	石・長(1～3) ○		
244	ジョッキ形	口径(8.8) 残高	口縁端部丸み。差し込み式	㊀ヨコナデ ㊁ナデ (ミガキの可能性あり)	㊀ヨコナデ ㊁ナデ	石・長(1～3) ◎		30
245	高坏	口径(18.5) 残高 4.1	鋤先状口縁。口縁部上面にやや剥離。	磨滅の為不明	ヨコナデ	石・長(1～5) ◎		30
246	甑	底径(6.4) 残高 3.0	甕形土器。焼成後穿孔。円孔直径7mm。	ナデ	㊥板カキ ㊦ナデ	石・長(1～3) ○		

表42　ＳＸ09 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
247	石庖丁		結晶片岩	10.3	4.2	0.9	55.2	B区 C6	30
248	石庖丁	ほぼ完形	結晶片岩	11.0	3.8	0.7	48.0	B区 C6	30

表43　第Ⅲ層 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
249	壺	口径(23.8) 残高 4.8	口縁端部は貼り付けにより上方に拡張。口縁外面沈線文4条。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～3) ○		
250	壺	底径 8.3 残高 11.7	突出する丸みのある平底。	剥離の為不明	ナデ	石・長(1～4) ◎		
251	高坏	残高 2.5	口縁端部拡張。	ナデ	ナデ	石・長(1～4) ◎		
252	坏	底径(5.9) 残高 1.5	土師器坏。高台「ハ」字状。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	密 ◎		
253	椀	底径(7.0) 残高 1.3	須恵器の椀ないし坏。高台付き。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		

表44　第Ⅳ層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
254	甕	口径(21.0) 残高 3.0	折り曲げ口縁。頸部内面ゆるやかな稜。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～4) ○		
255	甕	底径(8.4) 残高 4.2	くびれの上げ底。脚端面は面取り。	ナデ	ナデ	石・長(1～3) 金 ◎		
256	甕	底径 6.0 残高 3.6	くびれの上げ底。	磨滅の為不明	ナデ	密(石・長1) ○		
257	高坏	底径 6.4 残高 3.8	小型品。組み合せ式。脚端面を面取り	ミガキ(縦方向・アメツ)	ヨコナデ	石・長(1～4) ○		
258	台付鉢	底径 6.5 残高 4.2	器壁厚い。脚端面はわずかに面取り。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～4) ○	黒斑	
259	高坏	残高 5.0	須恵器。脚柱上部に沈線文1条。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		
260	坏身	口径(9.9) 残高 2.2	須恵器。内傾外反するたちあがり。端部は細く丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ○		

表45　第Ⅴ層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
261	壺	口径(21.2)	垂下口縁。口縁上面と端面に櫛描き文(4本歯)。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～3) 金 ◎		
262	壺	底径(8.1) 残高 2.0	丸みのある平底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～3) ◎		

表46　第ⅥA層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
263	壺	口径(25.0)	口縁端拡張。口縁外面凹線文2条以上。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～3) ○		
264	高坏	口径(23.2) 残高 3.5	口縁端部「コ」字状。	磨滅の為不明	ヨコナデ	石・長(1～3) ○		
265	器台	残高 5.7	器台と考える。小円孔(直1.1cm) 2ヶ以上。	磨滅の為不明	ナデ	石・長(1～4) ◎		

表47　第IV層出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
266	磨き石	完形	安山岩	7.5	7.9	7.5	533.4		31
267	石斧	⅔	安山岩	9.3	6.1	4.4	395.5		31
268	石鏃	⅔	安山岩	2.7	1.9	0.59	2.2		

表48　第VI層出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面			
269	壺	口径(16.8)	口縁部拡張。端面に凹線文2条と棒状浮文1ケ。口縁上面に凹線文3条以上。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～3) ◎	搬入品か	
270	壺	口径(18.6)	口縁端面に擬凹線文2条以上。刺突文入り円形浮文4ケ1組。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～4) ○		
271	壺	口径(15.4) 残高 2.3	口縁端面に擬凹線文2条。	ヨコナデ	磨滅の為不明	石・長(1～3) ○		
272	鉢	口径(13.1) 残高 4.5	折り曲げ口縁。器壁はきわめて薄い。	㊀ヨコナデ ㊁磨滅の為不明	㊀磨滅の為不明 ㊁ナデ	密（石・長1) 金 ◎		
273	高坏	残高 8.5	充塡技法。	ハケ（5本/1cm縦ハケ）	ナデ	石・長(1～4) ◎		
274	台付鉢	底径 7.6 残高 4.0	上げ底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～4) ◎		
275	ミニチュア	底径 3.7 残高 2.4	甕形土器か。上げ底。	ヨコナデ	磨滅の為不明	石・長(1～8) ◎		
276	甕	底径 3.9 残高 2.0	小型品。上げ底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～3) ○		
277	坏身	口径(11.5) 残高 2.8	須恵器。内傾やや内湾ぎみのたちあがり。口縁端部細く丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		
278	坏身	口径(9.1) 残高 1.8	須恵器。内傾外反するたちあがり。口縁端部丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		
279	壺	口径(15.6) 残高 1.7	須恵器。短頸壺か。 口縁端面は「コ」字状。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		
280	壺	底径(13.0) 残高 4.6	長頸壺か。「ハ」字状の高台。	ヘラズリ	ヨコナデ	密 ◎		
281	壺	残高 5.0	長頸壺。胴部に凹線文2条。列点文。	ヨコナデ	タタキ→ヨコナデ	密 ◎		

第VI層出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土焼成	備考	図版
282	坏身	底径(10.6)	高台付坏身。「ハ」の字状高台。脚端面凹む。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		
283	椀	口径(16.5) 残高 4.0	瓦器椀。口縁部外反。	ヨコナデ	ヘラミガキ	密 ◎		

表49　第VI層出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
284	磨き石	完形	結晶片岩	8.5	6.5	3.0	271.1		31

表50　第VII層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土焼成	備考	図版
285	甕	口径(22.8) 残高 3.1	口縁端部、わずかに拡張。口縁端面に擬凹線文2条。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～9) ◎		
286	甕	口径(13.4) 残高 5.5	折り曲げ口縁。	磨滅の為不明	ナデ	石・長(1～6) ◎		
287	壺	口径(16.6)	口縁部貼り付けによる垂下。口縁端面ナデ凹み。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～3) ◎		
288	壺	残高 4.0	複合口縁壺。口縁外面に4条の横沈線文と、6条の斜格子目文を施す(櫛)。	ヨコナデ	ハケ→ナデ	石・長(1～2) 金 ◎		
289	高坏	口径(20.0)	口縁外面に凹線文4条。口縁端面はナデ凹み。	ヨコナデ	⑪ヨコナデ ㊙ナデ	石・長(1～4) ◎	黒斑	
290	高坏	底径(10.0) 残高 3.0	裾部凹線文3条。矢羽根透し1ケ以上。脚端面に凹線文1条。	ハケ→施文	ナデ	密 ◎		
291	高坏	残高 6.6	異形。	磨滅の為不明	ナデ	石・長(1～2) ◎		
292	高坏	残高 8.0	シボリ痕、柱上部に7条の沈線文。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～3) ◎		
293	高坏	底径 7.4 残高 7.6	組み合せ式。柱上部に沈線文3条。	ヘラミガキ	ナデ	石・長(1～4) 金 ◎		
294	不明	残高 4.5	器種器形不明。焼成前円孔(直4mm)1ケ。	ナデ	ナデ	石・長(1～3) 金 ◎		31
295	ミニチュア	底径 4.3 残高 2.4	甕形土器か。くびれの上げ底。	ナデ	ナデ	石・長(1～3) ○		

表51　表採及び層不明出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
296	甕	口径(27.6) 残高 5.2	貼り付け口縁の可能性あり。頸部内面わずかに突出する。貼り付け凸帯文1本。	⑪ヨコナデ ⑩ハケ(縦方向)	磨滅の為不明	石・長(1～4) ◎	大ベルト	
297	壺	口径(18.6) 残高 4.2	口縁端部わずかに拡張。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～2) ◎	表採	
298	壺	口径(14.0) 残高 3.0	口縁端部拡張。端面ナデ凹み。	ヨコナデ	ハケ→ナデ	石・長(1～3) ◎	C-8	
299	壺	残高 7.5	頸部に貼り付け凸帯文1条。凸帯上に指頭押圧。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～4) 多含 ◎	C-4	
300	甕	残高 8.0	頸部に貼り付け凸帯文3本以上。2本は欠落。	ハケ(7本/1cm縦方向)	ヨコナデ(ミガキの可能性あり)	石・長(1～3) ◎	西壁トレンチ	
301	甕	口径(27.8) 残高 6.3	口縁端部を上方に拡張。口縁端面に擬凹線文2条。木口による「ノ」字文。	⑪ヨコナデ ⑩ハケ(縦方向)	⑪ヨコナデ ⑩ハケ(縦方向)	石・長(1～4) 金 ○	C-9	
302	甕	口径(19.6) 残高 6.0	口縁端部跳ね上げ状。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	密(石2) ◎	大ベルトII	
303	甕	底径 7.8 残高 8.7	くびれの上げ底。	ミガキ	ナデ	砂粒 ◎	C区 E-8	
304	壺	口径(27.4)	口縁端部垂下。口縁端面に凹線文4条。	ヨコナデ 一部ハケ	磨滅の為不明	石・長(2～5) ◎	C-8	
305	壺	口径(19.2) 残高 3.8	口縁拡張。口縁部端面に凹線文3条。	磨滅の為不明	ナデ	石・長(1～4) ○	B-9	
306	壺	口径(19.4) 残高 4.5	口縁端部をやや拡張。端面に凹線文2条以上。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～3) ○	表採	
307	高坏	口径(12.1) 残高 3.8	口縁端部拡張。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～4) 金 ○	C-7	
308	把手	残高 6.7	ジョッキ形土器の握手部。扁平な台形状を呈す。	ナデ		石・長(1～3) 金 ○	D-8 トレンチ	
309	高坏	残高 1.8	鋤先状口縁。焼成前円孔(直3.5mm)1ケ。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	密(石・長1) ◎	D-8 トレンチ	31
310	高坏	口径(31.2) 残高 2.8	鋤先状口縁。内面は貼り付けによる突出部をもつ。上面は凹む。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石(1～4) 金 ◎	D-8 トレンチ	31
311	ジョッキ	底径 8.8 残高 1.6	底部片。上げ底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～2) ◎	C-6	
312	ミニチュア	底径(4.0) 残高 4.0	甕ないし鉢形土器。指頭痕著しい。	ナデ	ナデ	密(石・長1) ◎	表採	

表採及び層不明出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土焼成	備考	図版
313	鉢	底径(3.7) 残高 6.0	直口口縁。口縁端部は細く丸い。くびれの上げ底。	ハケ（縦方向）	磨滅の為不明	石・長(1～3) ○	B区 C-6	
314	鉢	口径(14.6) 残高 7.4	折り曲げ口縁。口縁端面わずかに拡張。	⑪ヨコナデ ㊞粗いハケ（6本/1cm縦方向）	⑪ヨコナデ ㊞ケズリ	石・長(1～3) 金 ◎	C-9	
315	壺	口径(17.8) 残高 5.0	口縁端部をわずかに拡張。	磨滅の為不明	ヨコナデ	石・長(1～3) ◎	C-6	
316	壺	口径(20.4) 残高 5.4	口縁端部を拡張。端面に擬凹線文5条。口縁端上面丸い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～9) 金 ○	C-5	
317	壺	残高 2.3	複合口縁壺。口縁部外面に4条（櫛）の山形文。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～5) 金 ○	表採	
318	壺	残高 5.5	頸部に指頭押圧の貼り付け凸帯文2本。	縦ハケ	磨滅の為不明	石・長(1～4) ◎	トレンチ	
319	高坏	口径(16.0) 残高 5.0	低脚付鉢か。口縁部外面に凹線文3条。	磨滅の為不明	ナデ	密（石長1） 金 ○	大ベルト東トレンチ	31
320	高坏	口径(20.5) 残高 3.6	口縁端面はナデ凹み。口縁部外面は擬凹線文3条以上。	磨滅の為不明	ヨコナデ	石・長(1～2) 金 ○	B-9	31
321	高坏	残高 8.2	充塡技法。シボリ痕。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～6) ◎	C-6	
322	高坏	残高 10.2	充塡技法。主部はややふくらむ。	ハケ（3本/1cm縦ハケ）	ナデ	石・長(1～3) ◎	表採	
323	器台	底径(20.4) 残高 6.3	脚端部下端を貼り付けにより拡張。端面に擬凹線3条。裾部に浅い擬凹線2条。	ハケ	ナデ	密（1～2） 金 ◎	表採	31
324	深鉢	口径(34.2) 残高 6.0	縄文土器。外面に山形文状の文様。24条の沈線。原体具殻か。	施文	ナデ	石・長(1～6) ○	C-8	
325	坏	底径(6.4)	須恵器・板状高台。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎	C-8	
326	蓋	口径(17.2)	須恵器。内傾する口縁部。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎	西壁トレンチ	
327	椀	口径(20.4) 残高 3.5	高台付椀ないし坏の口縁部片。口縁部外面はナデ凹む。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎	表採	

表52　表採及び層不明出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
328	石庖丁	ほぼ完形	結晶片岩	9.7	4.8	0.8	57.6	表採	32
329	石鏃	完形	安山岩	2.6	1.75	0.32	1.5	B区 表採	32
330	石鏃	完形	赤色頁岩	2.45	1.8	0.255	1.1	C-5	32
331	石鏃	ほぼ完形	安山岩	2.4	2.05	0.40	1.3	D-7 表採	32
332	石鏃	完形	安山岩	3.0	1.4	0.43	1.3	D-6	32
333	石鏃	ほぼ完形	安山岩	2.55	0.9	0.32	0.9	B区	32
334	石斧	ほぼ完形	結晶片岩	6.3	3.0	0.9	30.3	表採	32
335	石斧	ほぼ完形	結晶片岩	14.0	4.1	2.6	322.5	C区 D-9	32
336	くぼみ石	完形	安山岩	8.0	9.7	4.2	532.6	表採	32

図　　版

図版例言

1．遺構の撮影は、大西朋子・梅木謙一・武正良浩が行った。

使用機材：

カ メ ラ　アサヒペンタックス67　　レンズ　ペンタックス67　55㎜Ｆ４　他

　　ニコンニューＦＭ２　他　　ズームニッコール28～85㎜　他

フィルム　ネオパンＳＳ

2．遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カ メ ラ　トヨ／ビュー45G　　レンズ　ジンマーＳ240㎜Ｆ5.6　他

ストロボ　コメット／CA-32 2灯・CB2400 2灯（バンク使用）

スタンド他　トヨ／無影撮影台・ウエイトスタンド101

フィルム　白　黒　プラスＸパン4_x5

　　カラー　エクタクロームEPP4_x5

3．遺構写真の焼き付け及び遺物写真のフイルム現像・焼き付けは、大西が行った。（白黒に限る。）

使用機材：

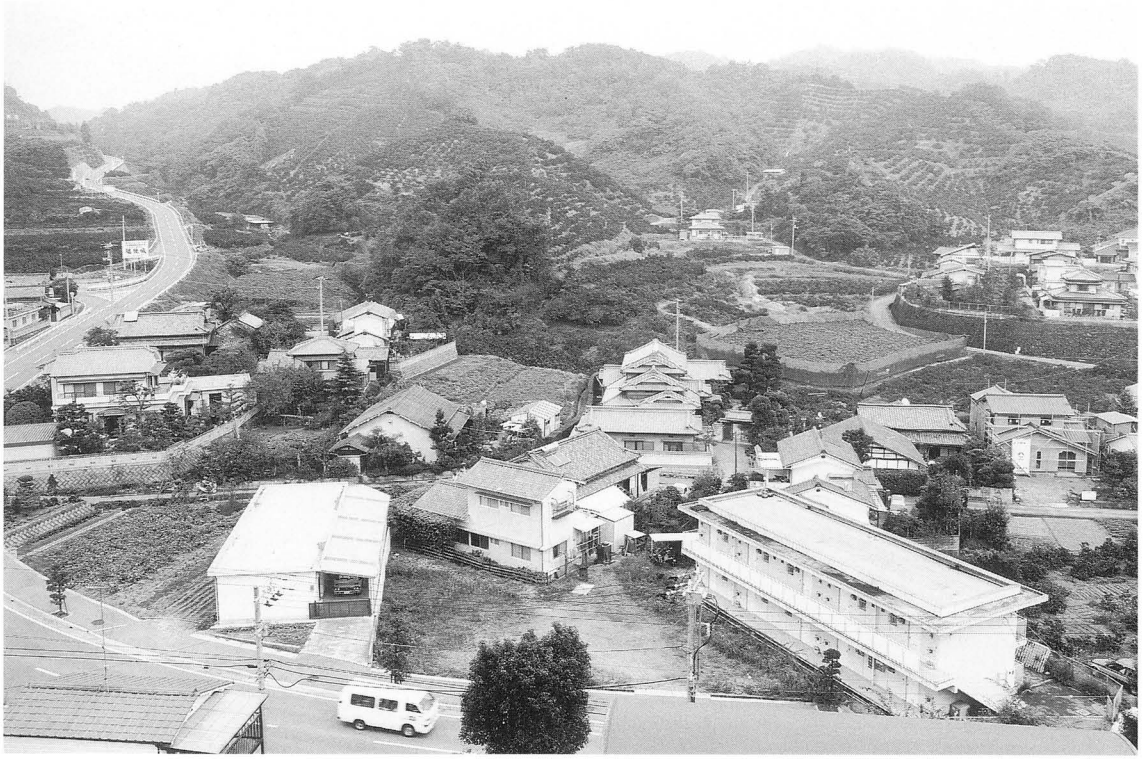
引 伸 機　ラッキー450MD　　レンズ　エル・ニッコール135㎜Ｆ5.6Ａ

　　ラッキー90MS　　エル・ニッコール50㎜Ｆ2.8Ｎ

印 画 紙　イルフォードマルチグレードⅢＲＣ

【参考】　『埋文写真研究』Vol. 1 1990　Vol. 2 1991

〔大西朋子〕

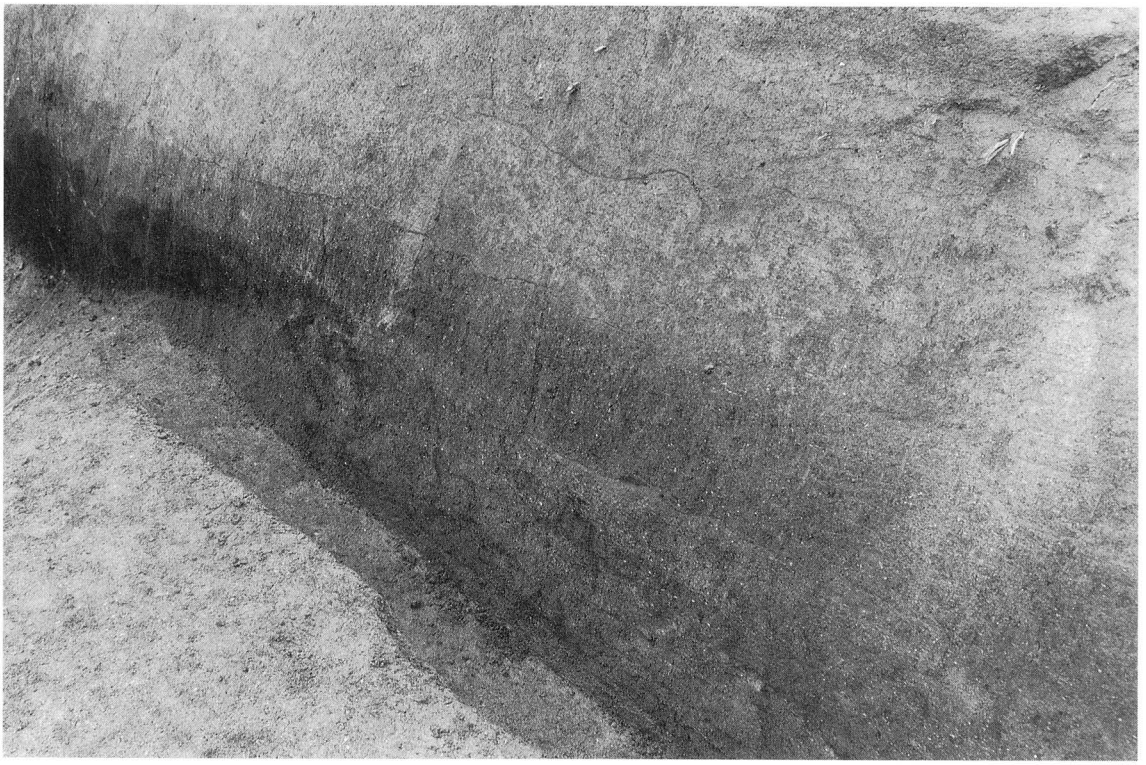


1．祝谷アイリ遺跡遠景（西より）

2．祝谷アイリ遺跡近景（西より）

図版二

1．南壁土層（北より）



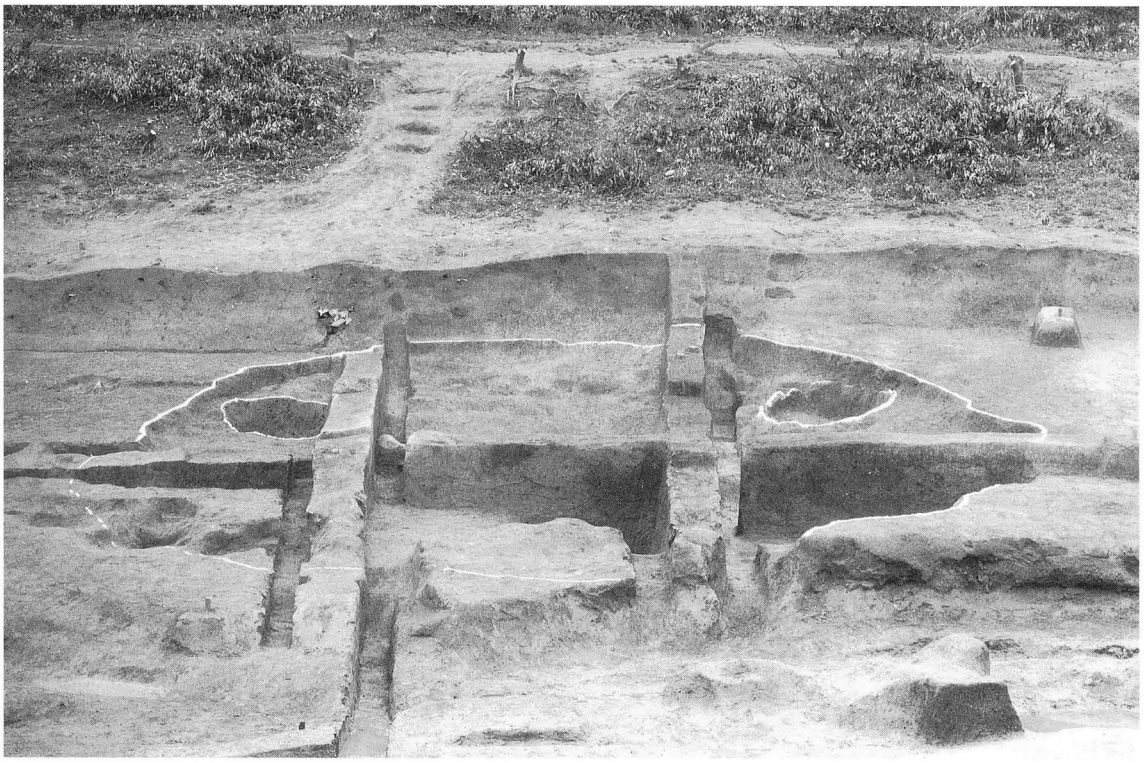
2．西壁土層（北東より）

1．遺構検出状況〔全景〕（南東より）

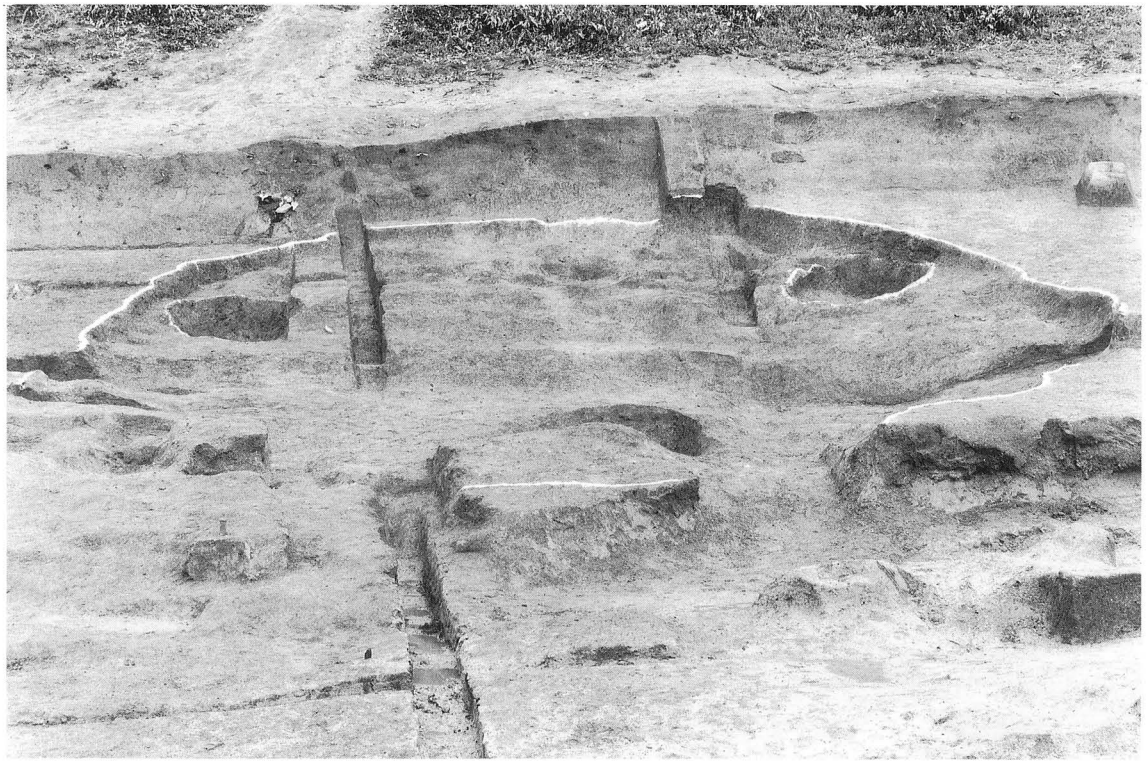
2．遺構検出状況〔北部〕（南より）

1．完掘状況〔北部〕（南より）

2．完掘状況〔北西部〕（南東より）

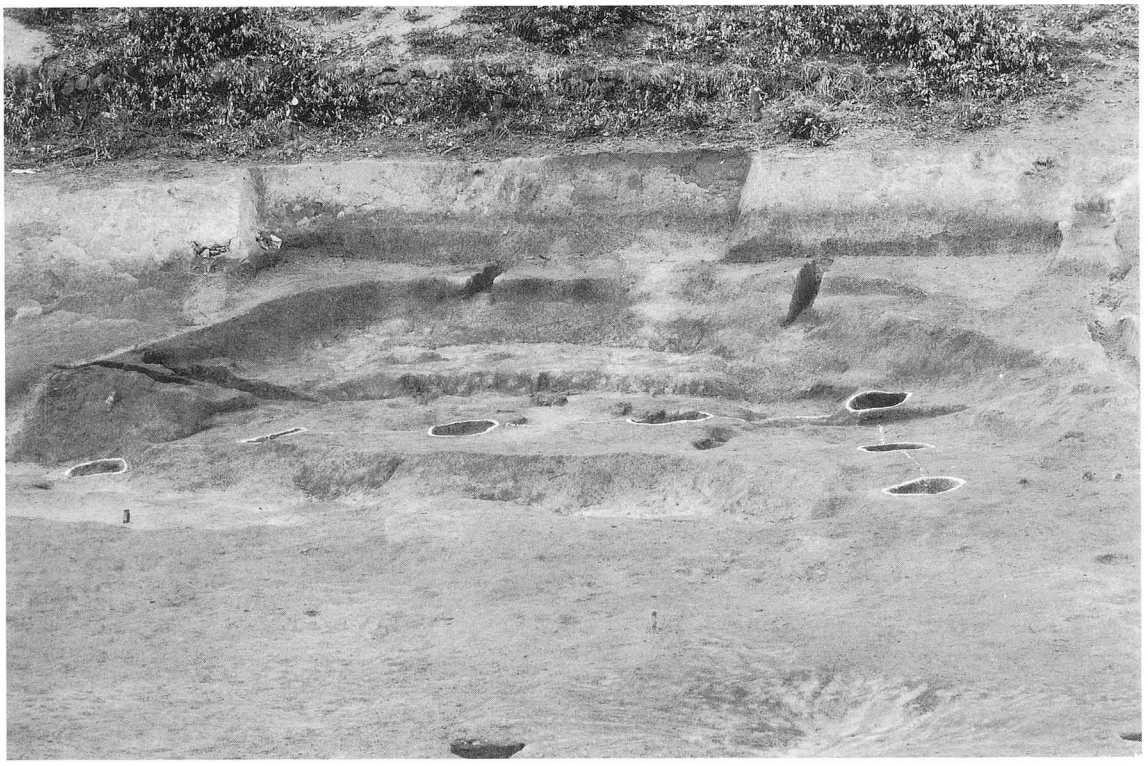


1．ＳＢ５断面（南より）



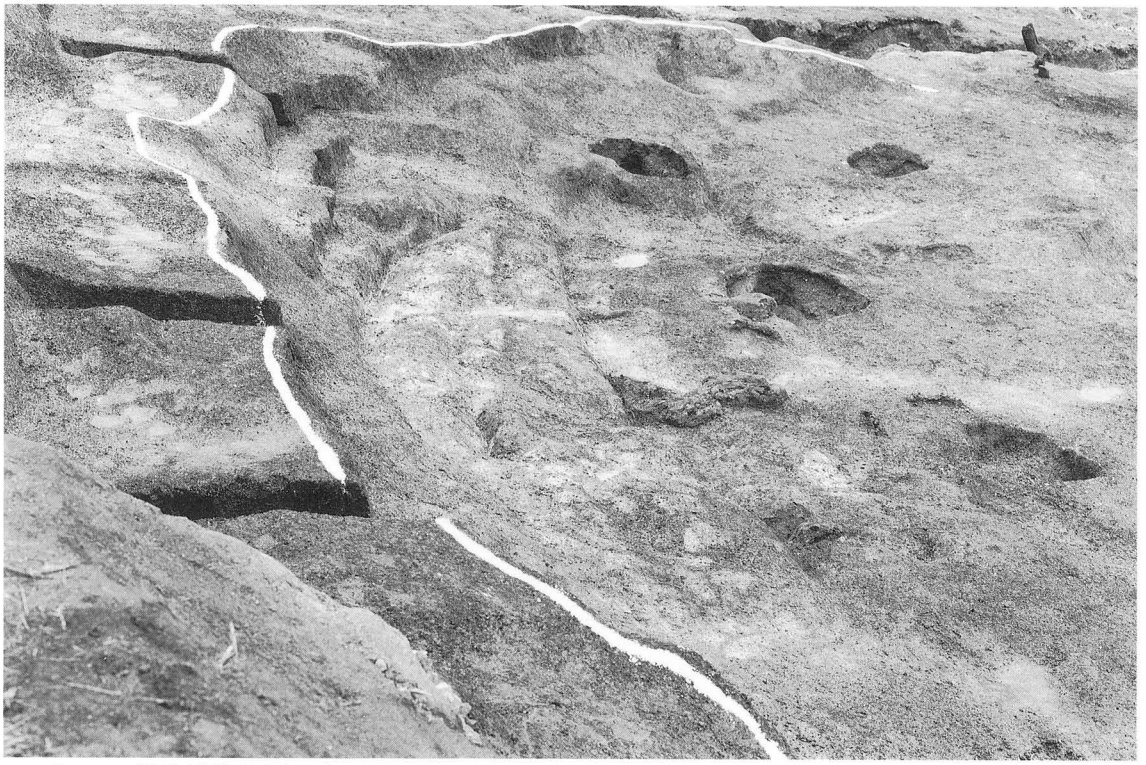
2．ＳＢ５（南より）

図版六



1．ＳＢ２①（南より）

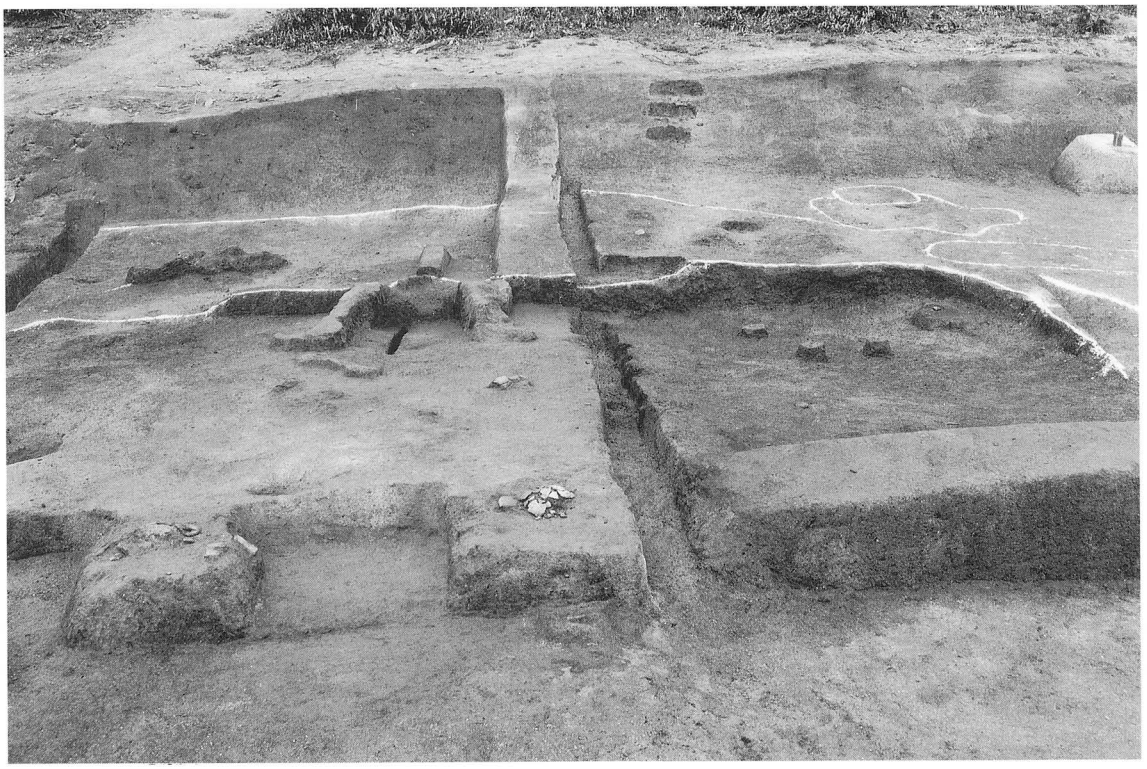
2．ＳＢ２②（南東より）



1．ＳＢ２ 炭化材検出状況（北西より）

2．ＳＢ２ 炭化材検出状況（南東より）

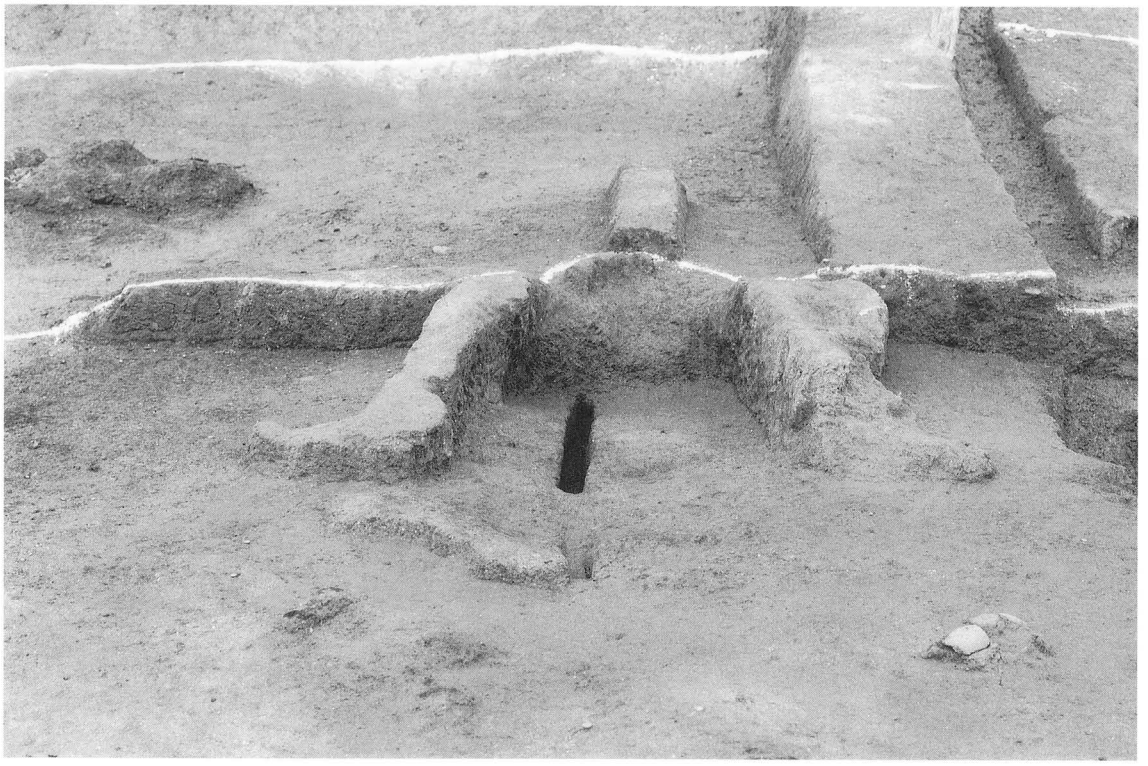
図版八



1．ＳＢ１（南より）

2．ＳＢ１ カマド内遺物出土状況〔遠景〕（南より）

1．ＳＢ１ カマド内遺物出土状況〔近景〕（南より）



2．ＳＢ１ カマド（南より）

1．ＳＢ３①（南東より）

2．ＳＢ３②（北西より）

1．ＳＫ15 礫群検出状況（北東より）

2．ＳＫ15断面（東より）

1．ＳＫ15 遺物出土状況①（東より）

2．ＳＫ15 遺物出土状況②（東より）

1．ＳＫ15 遺物出土状況③（東より）

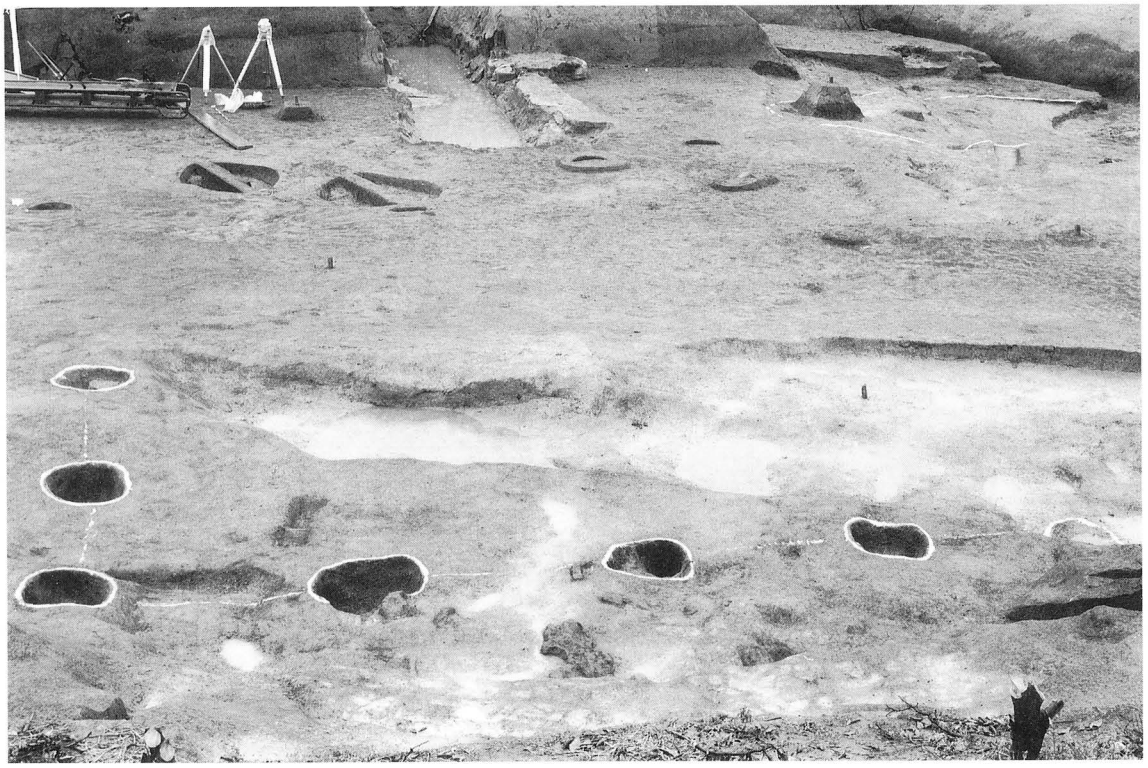
2．ＳＫ15（東より）

1．ＳＫ４〔左下〕ＳＸ010〔下〕ＳＢ４〔上〕（南東より）

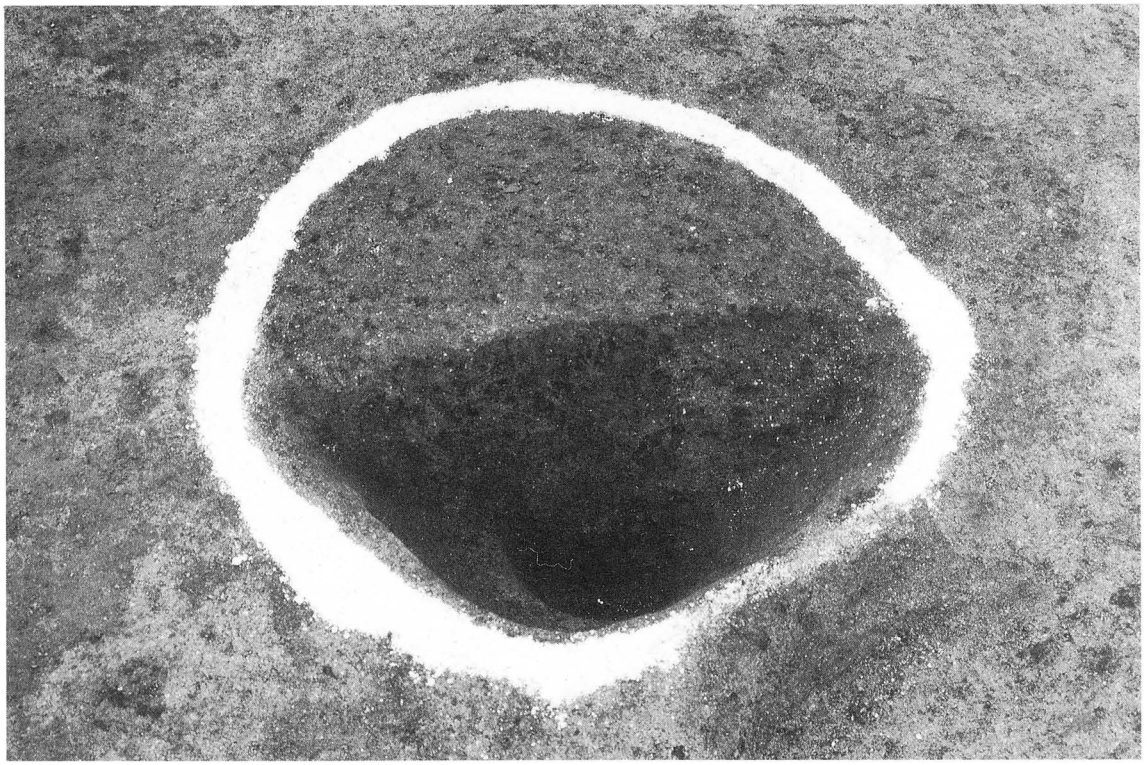
2．ＳＫ４ 遺物出土状況（東より）

1．ＳＫ13 遺物出土状況（北より）

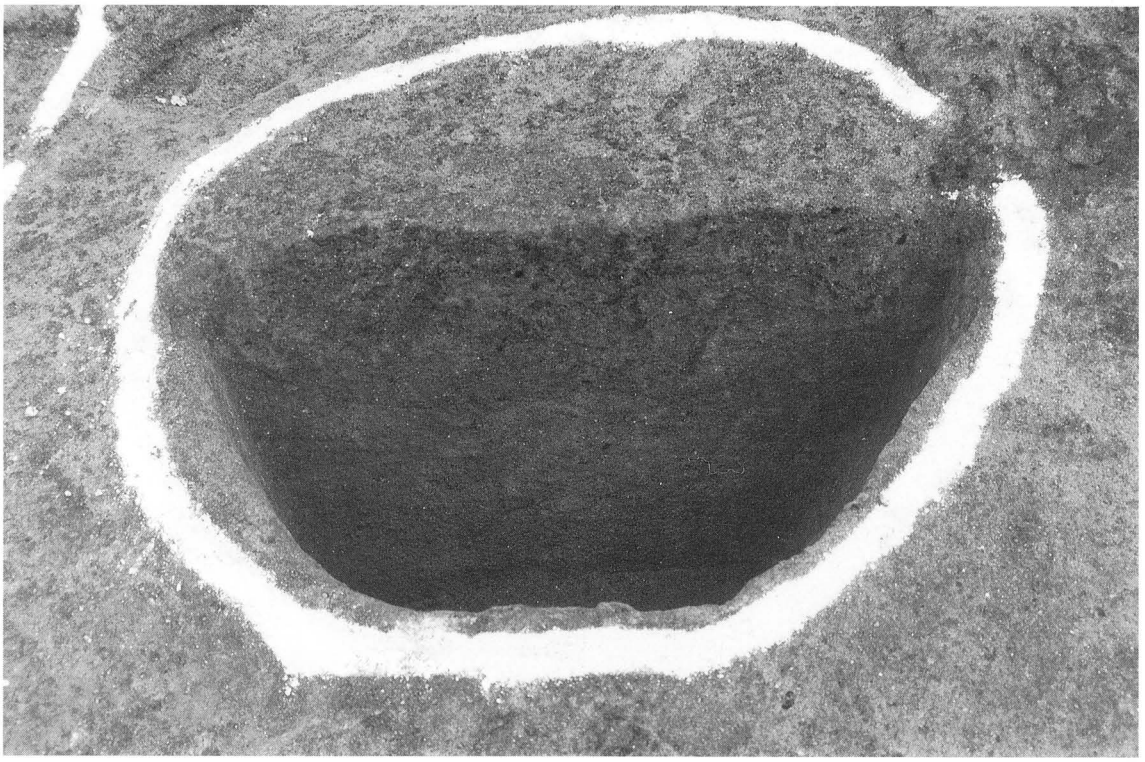
2．ＳＫ13（南より）



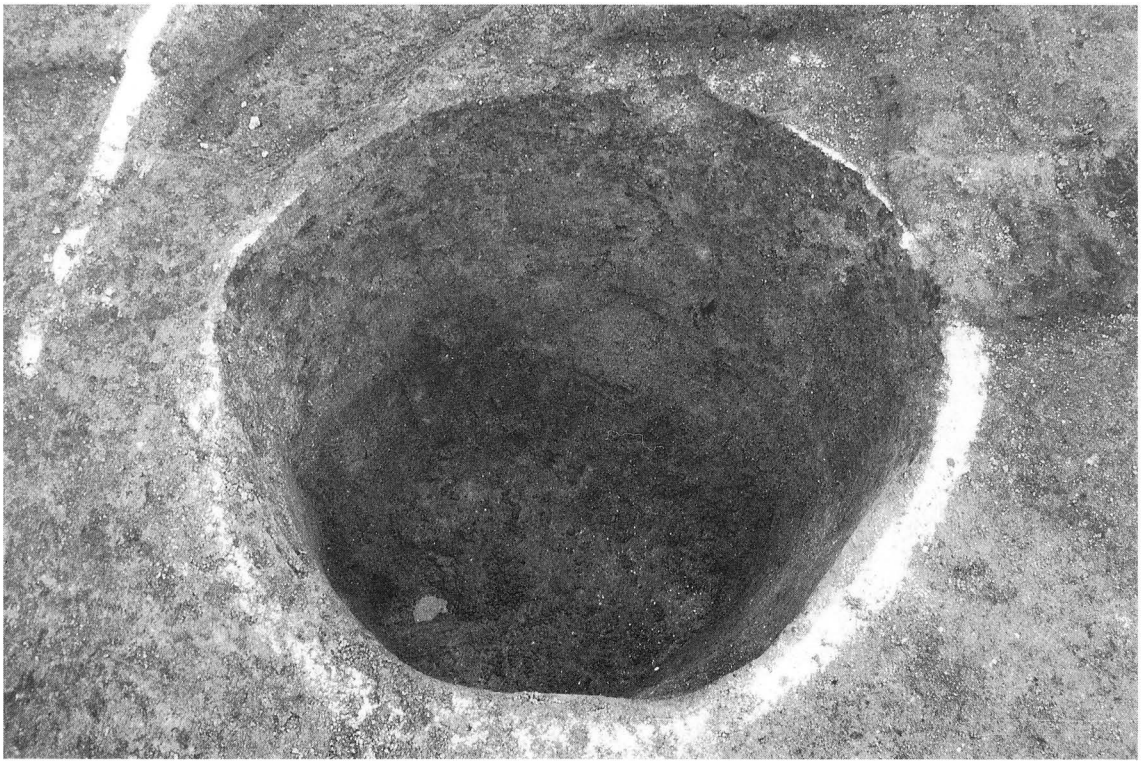
1．掘立１（北より）



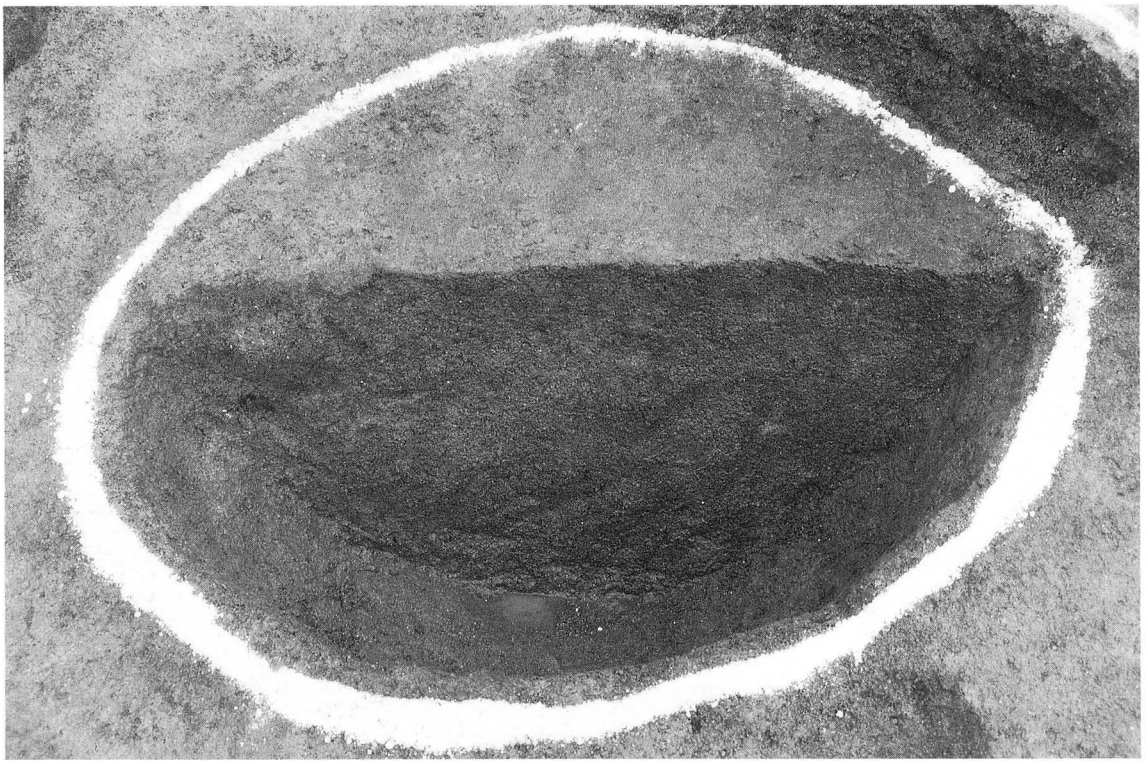
2．掘立１　ＳＰ12 断面（北より）



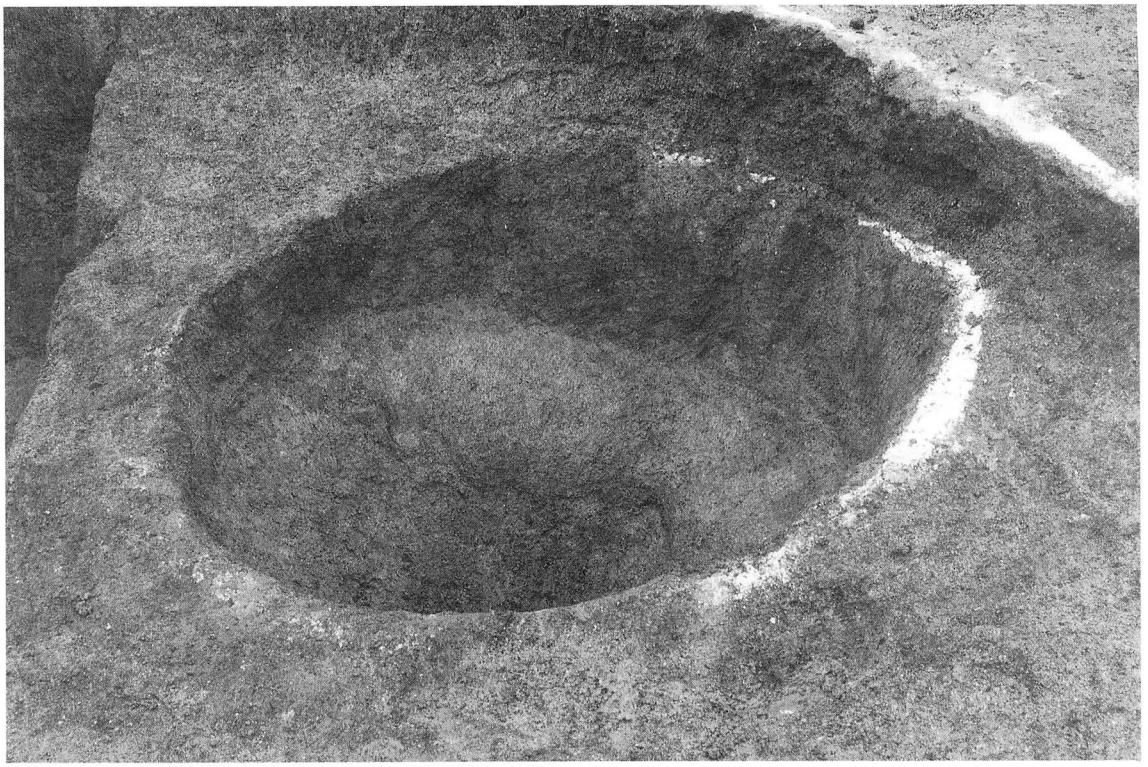
1．ＳＫ２ 断面（南より）



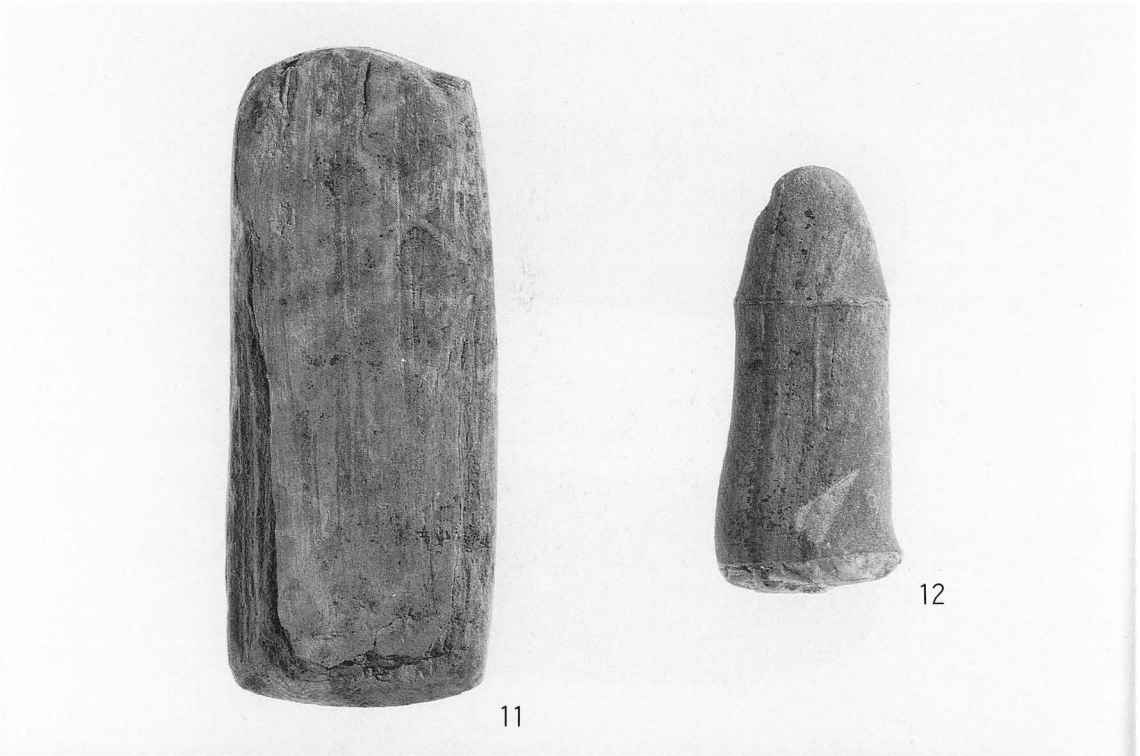
2．ＳＫ２（南より）



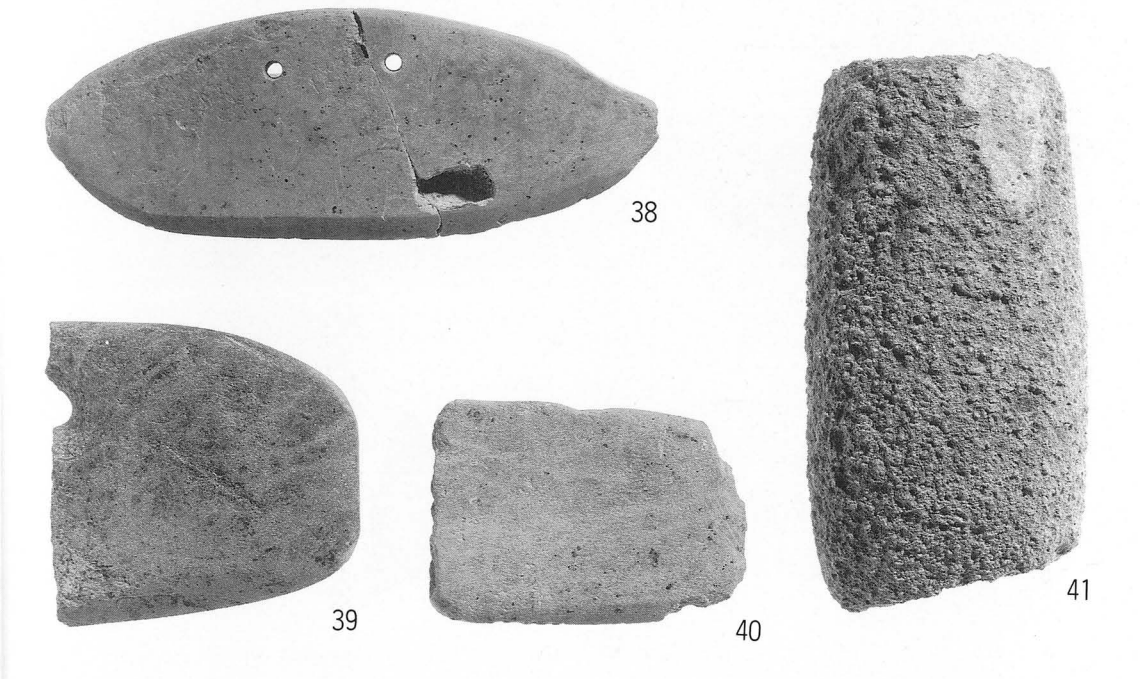
1．ＳＫ３ 断面（南より）



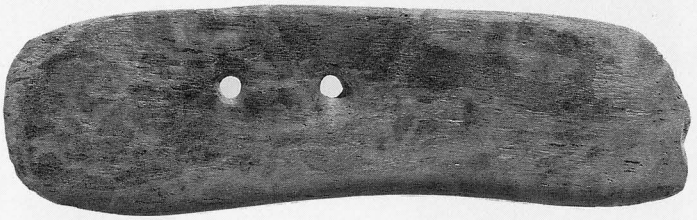
2．ＳＫ３（南より）



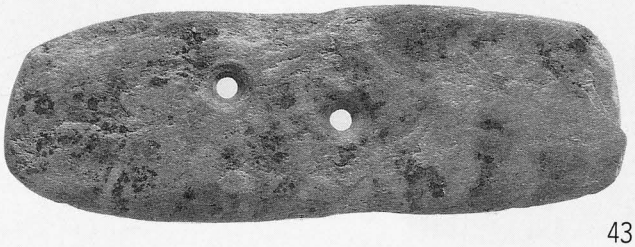
1．ＳＢ５ 出土遺物



2．ＳＢ２ 出土遺物

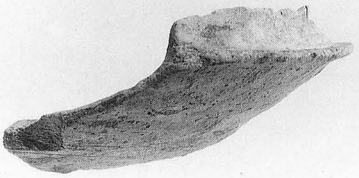


42



43

46



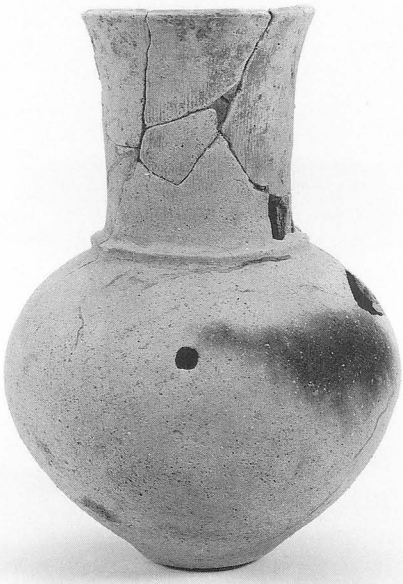
47

48

1．ＳＢ７ 出土遺物

56

57



58

59

1．ＳＫ15 最下部出土遺物

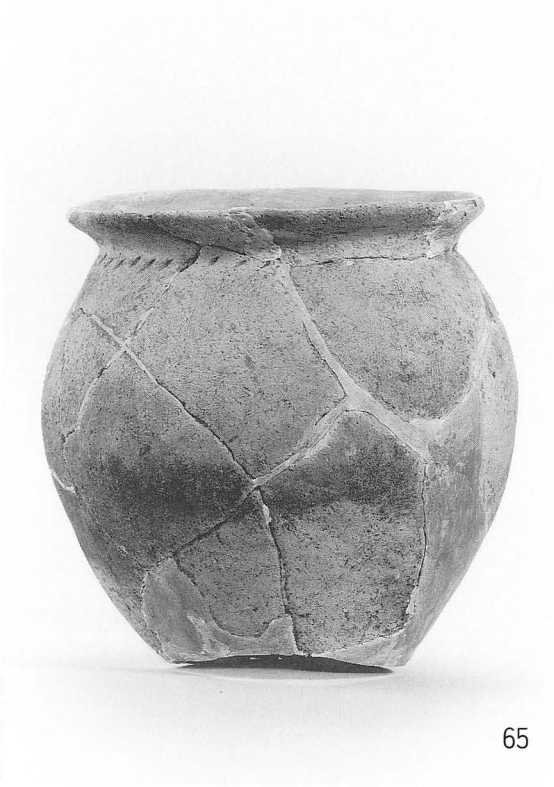
60

61

62

63

1．ＳＫ15 最下部他出土遺物


65

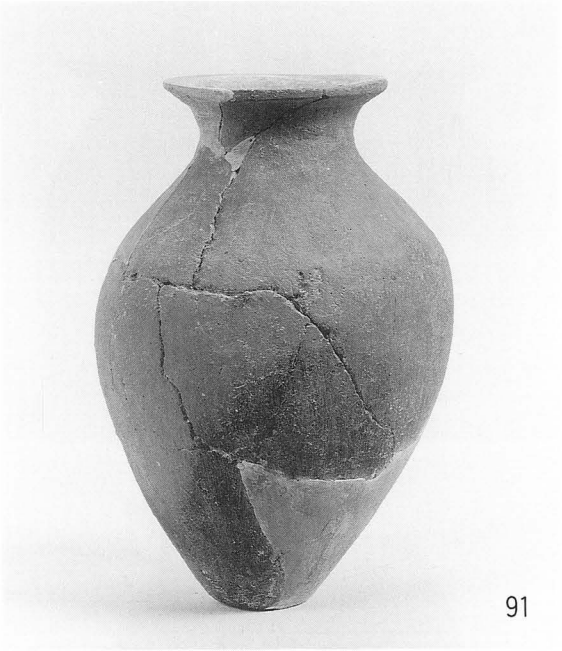
64

70

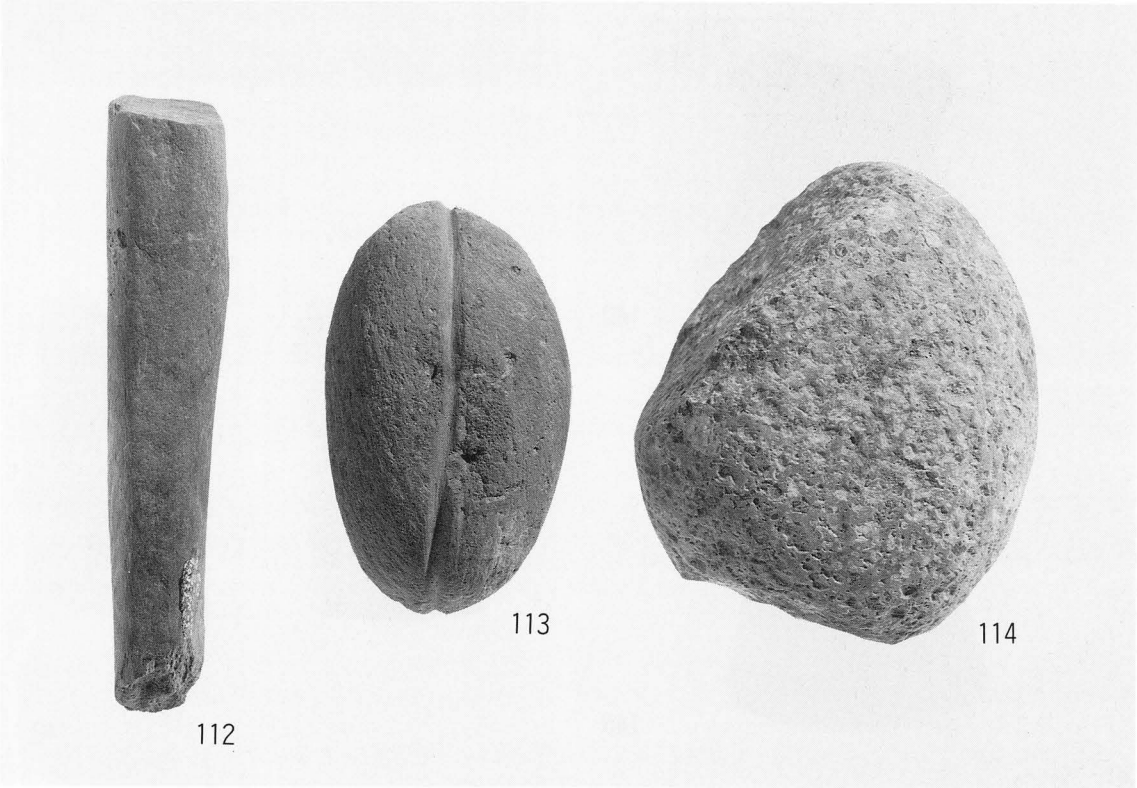
76

80

1．ＳＫ15 Ⅲ層出土遺物 ①



1．ＳＫ15 Ⅲ層出土遺物 ②



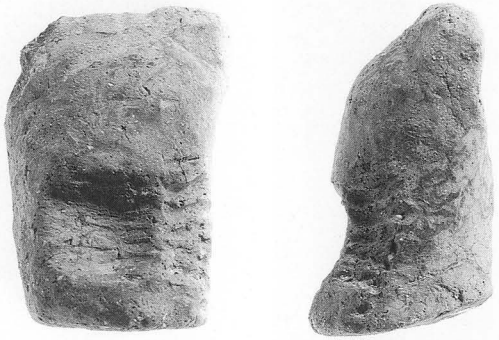
1．ＳＫ15 Ⅲ層出土遺物 ③

124

136

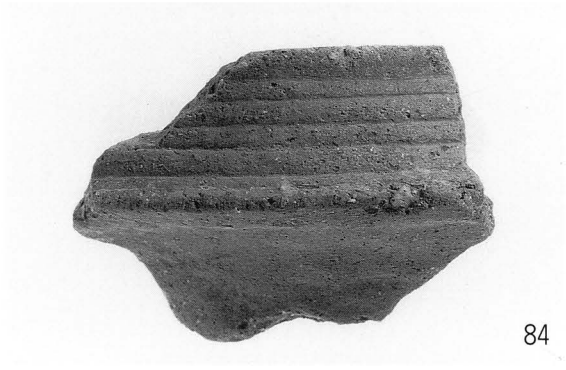
140

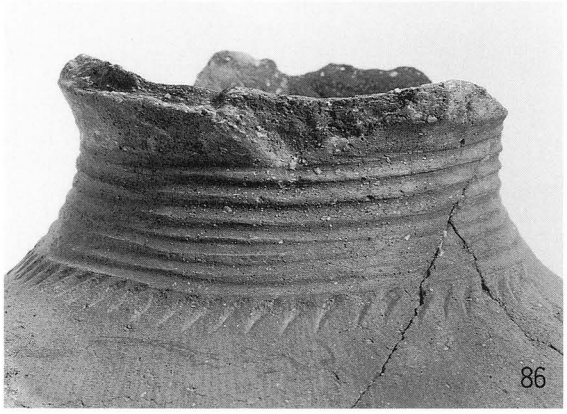
146

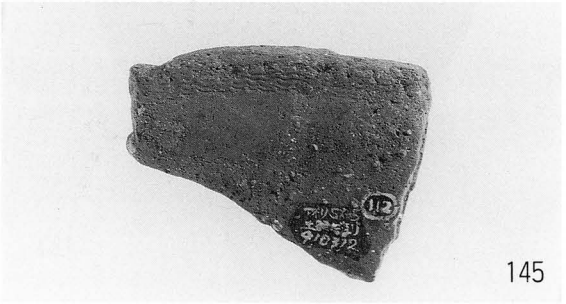


148

1．ＳＫ15 Ⅱ層出土遺物







1．ＳＫ15 最下部他出土遺物(59・63)　ＳＫ15 II層出土遺物(124・126・145)
ＳＫ15 III層出土遺物(84・86・105)

153

154

155

157

158

1．ＳＫ４ 出土遺物